山梨県埋蔵文化財センター調査報告　第29集

山梨県東八代郡中道町

上の平遺跡

UENODAIRA　　SITE

第4次・第5次発掘調査報告書

1987. 3

山梨県教育委員会

山梨県東八代郡中道町

上の平遺跡

UENODAIRA SITE

第4次・第5次発掘調査報告書

1987. 3

山梨県教育委員会

序

本報告書は、曽根丘陵公園整備事業及び町道上の平道路改良事業に伴い、1985・86両年度に発掘調査された山梨県東八代郡中道町上の平遺跡について、その成果をまとめたものであります。

現在山梨県は、約40haの地を「山梨県甲斐風土記の丘・曽根丘陵公園」に選定し、その整備を進めておりますが、それに先立つ事前発掘調査の一環として行なわれましたこのたびの調査は、町道分を含め総面積7,500㎡に及びました。検出された遺構は、縄文時代の住居址23軒・土坑202基・集石2基、弥生時代の方形周溝墓20基（内13基は過去に確認済）・住居址17軒、平安時代の住居址2軒等であります。先土器時代の遺構は確認できませんでしたが、火山灰層の分析を専門機関に委嘱し、遺跡と堆積土との関係を明確にする手懸りを得るよう試みました。

縄文時代につきましては、前期末の十三菩提式から集落が営まれ、続く中期の五領ヶ台式期に規模が一層拡大する様相が遺構数から推定されましたが、本調査では人為的遺構・遺物の外に花粉・炭化種子・植物遺体などの自然遺物について、専門家に調査を委嘱し、植生を含めた環境復元のための貴重な資料が得られました。次に弥生時代では、丘陵くびれ部に集中する後期後半の住居址群と、その北側に展開する今回の発見を含め総計124基を数える大方形周溝墓群の存在が確認され、集落と生産活動の場ないし墓域との関係、さらにこの地に花開く前期古墳文化との関係などについて重要な課題を提供いたしました。

上の平遺跡は、従前の調査に加えこのたびの調査によって、曽根丘陵大遺跡群を構成する貴重な遺跡であることが再確認されました。風土記の丘・曽根丘陵公園の整備事業の推進に当たりましては、今回の調査の成果が十分に考慮され、かつ活用されますよう念願してやみません。

末筆ながら、ご協力を賜わった関係機関各位、貴重な調査結果をお寄せいただいた方々、並びに直接調査に当たられた皆様方に改めて厚く御礼申し上げます。

1987年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長　磯貝正義

例　　言

1．本報告書は、昭和60年度、61年度の曽根丘陵公園整備事業及び町道上の平線道路改良事業に伴って発掘調査された山梨県東八代郡中道町上の平遺跡の発掘調査報告書である。

2．道路改良事業区域の発掘調査は、山梨県教育委員会が中道町の委託を受けて実施した。

3．発掘調査及び出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターが行ない、同機関文化財主事中山誠二が担当した。

4．本報告書は中山が編集を行ない、執筆は第Ⅲ章第2節を保坂康夫、その他については中山が行なった。

5．本遺跡遺構内出土の炭化種子については岡山大学農業生物研究所教授笠原安夫先生に、また植物遺体については名古屋大学助教授渡辺誠先生にその同定を依頼した。遺跡内の火山灰分析は山梨文化財研究所に依頼し、同研究所第4研究室長河西学氏よりその分析結果の報告を戴いた。以上3篇の報告の内、炭化種子については『研究紀要3』（山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター）に、他の2篇については本報告書の第Ⅴ章に掲載した。

6．写真撮影は遺構・遺物ともに中山が行なった。

7．遺構及び遺物のトレースは、新津重子、中山千恵が行なった。

8．本報告書にかかわる出土品及び記録図面、写真等は一括して山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

9．出土品整理参加者

長田久美子、宮川治子、佐野生子、田中正江、桜井里子、中楯由美、長田純子、五味信子、志村秋子、功刀真司、榎本勝、横沢浩、原節郎、今福利恵、千野とよみ、福沢準子、梅林はなの、長田可祝、矢崎喜美江、小林美津代、中楯賢二、矢崎よ志子、出月遊亀子、芹沢元枝、渡辺礼子、石原はつ子、出月満寿江、長田久江、矢崎ます子、矢崎悦子、小林弘子、小林澄子、中村桃子、池谷美恵子　　（順不同）

10．発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の方々からご教示、ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。（敬称略）

渡辺　誠、石野博信、岩崎卓也、小出義治、鈴木敏則、笠原安夫、藤沢　浅

凡　　例

1．本書の遺構・遺物の挿図縮尺は原則として次の通りである。

遺跡位置図1／50,000、調査区域図1／4,000、住居址1／60、炉址1／30、土坑1／60、土坑微細図1／30、竪穴状遺構1／60、集石1／30、方形周溝墓平面及び縦方向エレベーション1／100、方形周溝墓横方向セクション1／50、縄文土器実測図1／6、弥生土器実測図1／4、土器拓影1／3、土偶1／3、土製円盤1／3、先土器時代石器1／3、

2．竪穴住居址等の記述・挿図について

(1) 遺構挿図内の水糸レベルは海抜高を示す。セクションとエレベーションの水糸レベルが異なる場合は、それぞれに標高を記す。

(2) 平面図中──‥──は炭化材分布範囲、──・──は床面範囲、----------は推定線を示す。

(3) スクリーントーンは、焼土範囲を示す。

3．遺物の記述・挿図について

(1) 土器実測図のスクリーントーンは赤色塗彩部分を示す。

4．表の記述について

(1) 遺構の計測値は長軸方向と短軸方向の最長部分の距離である。

（　　）内の数値は推定値を表す。

(2) 遺物

遺構別石器数量一覧表の数値は出土点数を表し、（　　）内の数値は重量ｇを示す。

目　　次

序
例　言
凡　例
第　Ⅰ　章　　調　査　状　況 …… 1
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　調査組織 …… 1
第　Ⅱ　章　　遺　跡　概　況 …… 2
　第１節　遺跡の位置と周辺の環境 …… 2
　第２節　調査区域の設定と調査方法 …… 2
　第３節　基本層序 …… 4
第　Ⅲ　章　　第４次調査 …… 9
　第１節　遺構検出状況 …… 9
　第２節　先土器時代の遺物 …… 9
　第３節　縄文時代の遺構と遺物 …… 10
　　１．住居址と出土遺物 …… 10
　　２．土坑と出土遺物 …… 37
　　３．集石遺構 …… 47
　　４．その他の遺物 …… 48
　第４節　弥生時代の遺構と遺物 …… 53
　　１．住居址と出土遺物 …… 53
　　２．方形周溝墓 …… 74
　　３．溝状遺構 …… 77
　　４．掘立柱建物遺構 …… 77
　　５．竪穴状遺構 …… 78
第　Ⅳ　章　　第５次調査 …… 79
　第１節　遺構検出状況 …… 79
　第２節　縄文時代の遺構 …… 79
　　１．住居址 …… 79
　　２．土　坑 …… 91
　第３節　弥生時代の遺構 …… 95
　　１．方形周溝墓 …… 95
　第４節　平安時代の遺構 …… 112
　　１．住居址と出土遺物 …… 112
第　Ⅴ　章　　各　　説 …… 115
　　１．山梨県上の平遺跡の植物遺体 …… 115
　　２．上の平遺跡のテフラ …… 121
第　Ⅵ　章　　ま　と　め …… 125

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図…… 3
第２図　上の平遺跡調査区域図…… 4
第３図　第４次・第５次調査グリッド設定図…… 5
第４図　基本層序…… 6
第５図　第４次調査区内遺構配置図…… ７～８
第６図　先土器時代石器…… 10
第７図　12号住居址…… 11
第８図　12号住居址出土土器(1)…… 12
第９図　12号住居址出土土器(2)…… 13
第10図　13号住居址出土土器…… 14
第11図　13号住居址…… 15
第12図　14号住居址…… 16
第13図　14号住居址出土土器…… 17
第14図　16号住居址…… 18
第15図　16号住居址出土土器(1)…… 19
第16図　16号住居址出土土器(2)…… 20
第17図　17号住居址…… 21
第18図　17号住居址出土土器…… 22
第19図　18号住居址出土土器…… 22
第20図　18号住居址…… 23
第21図　19号住居址…… 24
第22図　19号住居址出土土器…… 25
第23図　20号住居址…… 26
第24図　20号住居址出土土器…… 27
第25図　21号住居址…… 28
第26図　21号住居址出土土器…… 29
第27図　22号住居址…… 30
第28図　22号住居址出土土器…… 31
第29図　23号住居址出土土器…… 31
第30図　23号住居址…… 32
第31図　24号住居址…… 33
第32図　24号住居址出土土器…… 34
第33図　25号・27号住居址……35
第34図　25号住居址出土土器……35
第35図　29号住居址……36
第36図　29号住居址出土土器……37
第37図　土坑(1)……40
第38図　土坑(2)……41
第39図　土坑(3)……42
第40図　土坑(4)……43
第41図　土坑(5)……44
第42図　土坑内出土土器(1)……45
第43図　土坑内出土土器(2)……46
第44図　集石遺構……47
第45図　土製円盤……48
第46図　土偶……49
第47図　１号住居址炉……53
第48図　１号住居址……54
第49図　２号住居址……55
第50図　３号住居址……56
第51図　４号住居址……57
第52図　４号住居址出土土器……57
第53図　５号住居址……58
第54図　６号住居址……59
第55図　７号住居址……60
第56図　７号住居址炉……61
第57図　７号住居址出土土器及び磨製石鏃……61
第58図　８号住居址……62
第59号　８号住居址出土土器……63
第60図　９号住居址出土土器……63
第61図　９号住居址……64
第62図　10号住居址……65
第63図　10号住居址出土土器……65
第64図　11号住居址……66

第65図　11号住居址出土土器…… 67
第66図　15号住居址…… 68
第67図　15号住居址出土土器…… 69
第68図　26号住居址焼土及び炭化材
分布図…… 69
第69図　26号住居址炉…… 69
第70図　26号住居址…… 70
第71図　26号住居址出土土器…… 71
第72図　27号住居址出土土器…… 71
第73図　28号住居址…… 72
第74図　30号住居址…… 72
第75図　31号住居址…… 73
第76図　117号方形周溝墓 …… 74
第77図　117号・118号方形周溝墓内
出土土器…… 75
第78図　118号方形周溝墓……76
第79図　1号溝…… 77
第80図　1号掘立柱建物遺構…… 78
第81図　A区北側及びB区遺構配置図…… 80
第82図　D区・E区遺構配置図…… 80
第83図　32号・35号住居址…… 81～82
第84図　33号住居址…… 83
第85図　34号住居址…… 84
第86図　34号住居址出土土器…… 85
第87図　36号住居址…… 86
第88図　37号住居址…… 87
第89図　38号住居址…… 88
第90図　41号住居址…… 89
第91図　42号住居址…… 90
第92図　53号・124号方形周溝墓 …… 96
第93図　74号・100号方形周溝墓 …… 97
第94図　78号方形周溝墓…… 98
第95図　79号方形周溝墓…… 99
第96図　80号方形周溝墓……100
第97図　81号方形周溝墓…… 101～102
第98図　81号方形周溝墓溝セクション図
……103
第99図　81号方形周溝墓
合せ口壺棺出土状況 …… 103
第100図　103号方形周溝墓……104
第101図　82号方形周溝墓……105～106
第102図　119号・121号・122号
方形周溝墓 …… 107
第103図　120号方形周溝墓……108
第104図　76号・123号方形周溝墓……109
第105図　方形周溝墓内出土土器(1)……110
第106図　方形周溝墓内出土土器(2)……111
第107図　39号住居址…… 112
第108図　40号住居址…… 113
第109図　40号住居址出土土器…… 114
第110図　上の平遺跡K※13グリッドテフラ試料1／4－1／16㎜粒砂分鉱物組成…… 122
第111図　弥生時代後期遺構配置概略図
……129～130

表目次

表1　土坑一覧（1号～88号）…… 37～39
表2　土偶一覧……50
表3　遺構別石器数量一覧…… 51・52
表4　縄文時代住居址一覧…… 79・80
表5　土坑一覧（89号～203号）……91～94
表6　方形周溝墓一覧……95

図　版　目　次

図版 1　基本土層　作業風景　12号住居址及び遺物出土状況　13号住居址及び同址炉址

図版 2　14号住居址　16号住居址　17号住居址及び同址炉址　18号住居址　29号住居址

図版 3　19号住居址及び同址炉址　22号住居址及び同址炉址　24号住居址及び同址炉址

図版 4　32号・35号住居址　33号住居址　34号住居址及び同址貯蔵穴　36号住居址　37号住居址

図版 5　1 号住居址と同址炉址　3 号住居址　5 号住居址　7 号住居址及び同址炉址

図版 6　8 号住居址　31号住居址　9 号住居址及び遺物出土状況　10号住居址　11号住居址

図版 7　15号住居址及び同址貯蔵穴　26号住居址及び同址炉址　30号住居址　1 号堀立柱建物跡

図版 8　53号方形周溝墓　78号方形周溝墓　81号方形周溝墓及び同址合せ口壺棺出土状況　82号方形周溝墓　103号方形周溝墓

図版 9　117号方形周溝墓及び同址壺出土状況　118号方形周溝墓及び同址壺出土状況　119号方形周溝墓　120号方形周溝墓

図版10　121号方形周溝墓　123号方形周溝墓　124号方形周溝墓　39号住居址　40号住居址及び同址カマド

図版11　住居址内出土縄文土器

図版12　住居址内出土縄文土器

図版13　住居址内出土縄文土器

図版14　住居址内出土縄文土器

図版15　住居址及び土坑内出土縄文土器

図版16　住居址及び方形周溝墓内出土弥生土器

図版17　土偶・顔面把手　土製円盤・土錘

第Ⅰ章　調査状況

第1節　調査に至る経過

昭和60年5月20日　文化庁に第4次調査の発掘通知を提出する。
昭和60年6月15日　第4次発掘調査を開始する。
昭和60年7月1日　町道上の平線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査委託契約を中道町と県教委の間で締結。
昭和60年12月6日　第4次発掘調査を終了する。
昭和60年12月23日　甲府南警察署に遺物の発見通知を提出する。
昭和61年1月23日　町道部分の発掘調査実績報告を中道町に提出する。
昭和61年4月19日　文化庁に第5次調査の発掘通知を提出する。
昭和61年4月25日　第5次発掘調査を開始する。
昭和61年8月30日　発掘調査を終了する。
昭和61年9月2日　甲府南警察署に遺物の発見通知を提出する。

第2節　調査組織

調査主体　山梨県教育委員会
調査機関　山梨県埋蔵文化財センター
調査担当者　中山誠二（文化財主事）
調　査　員　新津重子、日向千恵、宮沢公雄
作　業　員　出月満寿江、梅林はなの、石田春子、渡辺梅子、出月美矢子、矢崎一美、田中正江、長田久江、千野とよみ、矢崎悦子、矢崎未子、芹沢元枝、桜井里子、小林美津代、石原はつ子、長田久美子、矢崎喜美江、小林澄子、出月多枝美、宇野和子、横沢浩、功刀真司、原節郎、渡辺礼子、宇野文子、佐野生子、志村秋子、榎本勝、矢崎よ志子、矢崎ます子、田中弘子、宮川治子、小林恵子、新井麻美、中楯由美、石原良美、小沢和、西名博恵、小林早由里、小沢健次郎
調査協力　石和土木事務所、中道町教育委員会

第Ⅱ章　遺跡概況

第１節　遺跡の位置と周辺の環境

上の平遺跡は、山梨県東八代郡中道町下向山地内に所在する。甲府盆地南縁に東西15㎞にわたって横たわる曽根丘陵の一角に位置し、標高330ｍ前後を測る東山に立地する。遺跡を載せる東山は東部を間門川、西部を滝戸川によって開析され、甲府盆地に舌状にせりだしている。

本遺跡の所在する中道町は、丘陵部とその北側を西流する笛吹川の氾濫原に地形的に２分されるが、この丘陵地帯には数多くの遺跡の存在が知られている。本遺跡周辺の丘陵先端部だけを見ても、岩清水遺跡、米倉山Ａ、Ｂ遺跡、女沢遺跡、宮の上遺跡、立石遺跡など先土器時代から古墳時代にかけての遺跡群が連なり、さらに小平沢古墳、銚子塚古墳、丸山塚古墳、大丸山古墳などの前期古墳が集中する。一方、丘陵最上部においても上野原遺跡、村上遺跡、城越遺跡などの縄文時代を中心とした集落跡が認められ、後背地にある御坂山塊と遺跡周辺の丘陵上の豊富な動植物資源を基盤とした原始、古代人の営みが看取できる。

本遺跡では、昭和54年から56年にかけての３次にわたる発掘調査と確認調査によって弥生時代末の方形周溝墓116基が発見されている。周辺は甲府盆地でもいちはやく古墳が築造される地域であることから、この発見は古墳出現前段階の墓制と社会様相を知る上で重要な意味を持つものであった。また、上の平遺跡南側に存在する立石遺跡では同時代の集落跡が確認されており、居住地と墓域の構造を知ることができる。

参考文献

中道町史編纂委員会『中道町史』上　1975

山梨県教育委員会『昭和52年度（笛吹川沿岸土地改良事業地内）埋蔵文化財分布調査報告書』1978

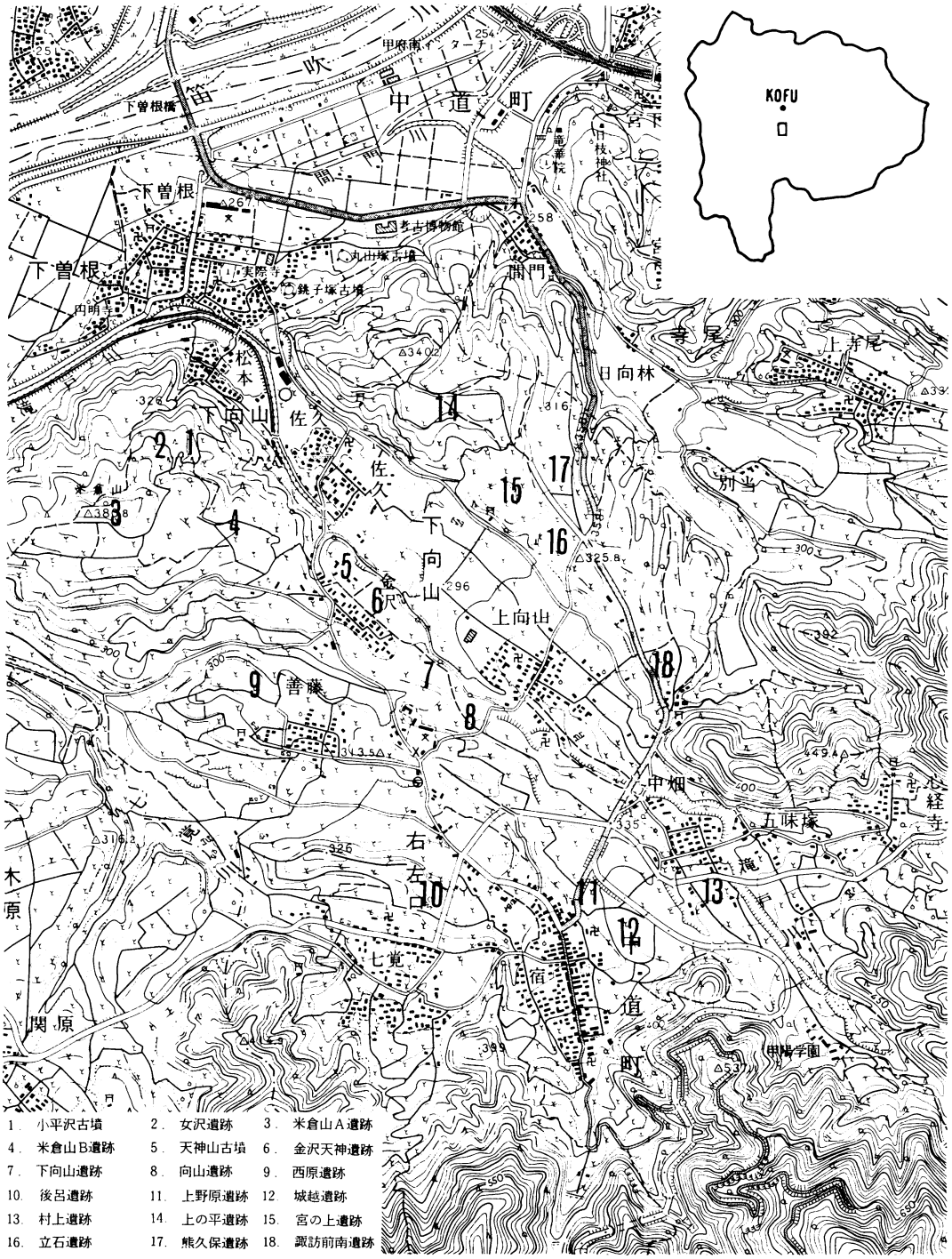
磯貝正義ほか『角川日本地名大辞典19　山梨県』1984　角川書店

中山誠二「山梨県の方形周溝墓」『歴史手帖』13巻１号　1985　名著出版

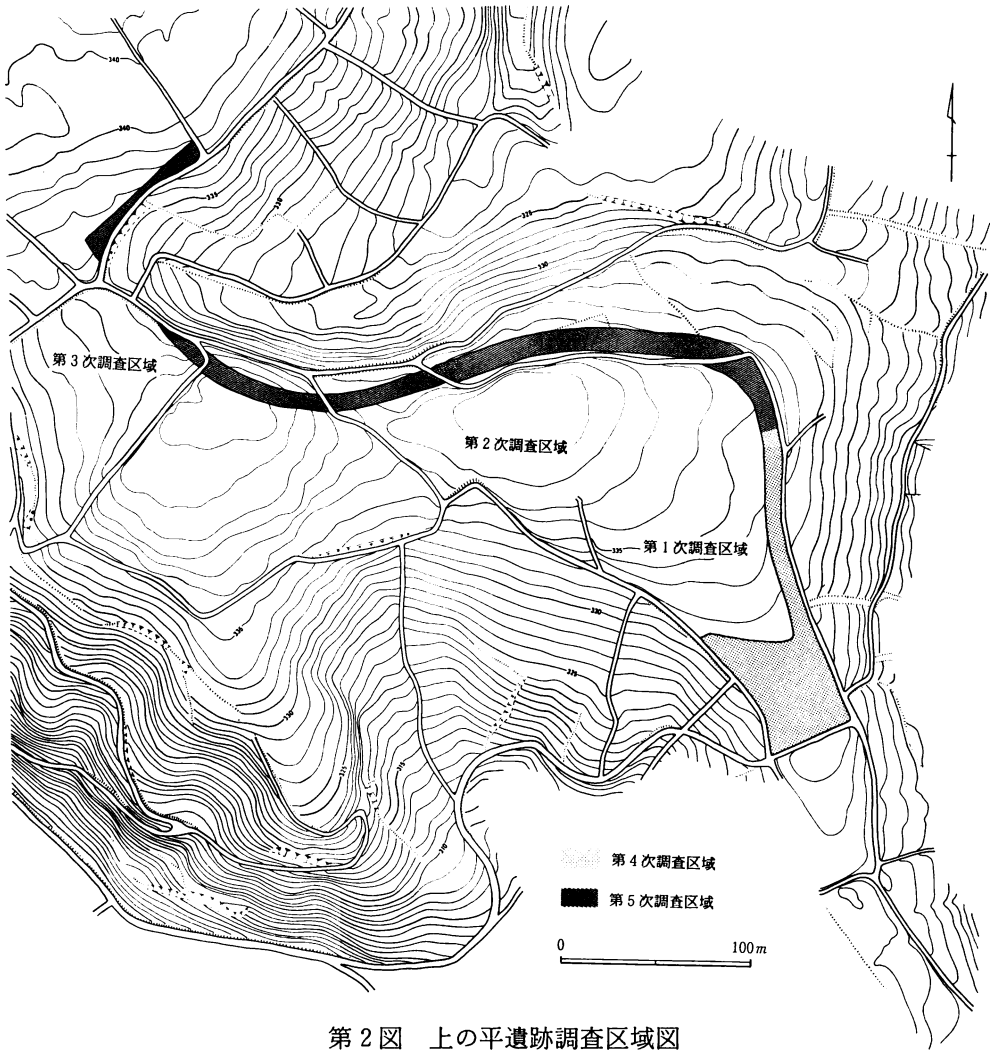
第２節　調査区域の設定と調査方法

第４次調査の調査範囲は55基の方形周溝墓群が発見された第１次調査区域の南側と東側に沿った3000㎡の地域で、第５次調査は遺跡北辺に沿った幅10ｍ、長さ450ｍの範囲である。調査範囲が細長く、屈曲しているため、便宜上各調査地区を横断する現道をもって、Ａ区～Ｆ区を設定した。さらに、この調査範囲全体に４ｍ×４ｍを単位とするメッシュをかけ、グリッドを設定した。グリッドの表記方法は、第４次と第５次で異なるためここで簡単に説明しておきたい。

第４次調査区域では、調査区南西端を基点に西から東へ向けて（Ｘ軸）をアルファベットＡ～Ｚ、南から北へ向けて（Ｙ軸）を算用数字１～50の杭番号を設定した。第５次調査区は、第４


KOFU
1. 小平沢古墳
2. 女沢遺跡
3. 米倉山A遺跡
4. 米倉山B遺跡
5. 天神山古墳
6. 金沢天神遺跡
7. 下向山遺跡
8. 向山遺跡
9. 西原遺跡
10. 後呂遺跡
11. 上野原遺跡
12. 城越遺跡
13. 村上遺跡
14. 上の平遺跡
15. 宮の上遺跡
16. 立石遺跡
17. 熊久保遺跡
18. 諏訪前南遺跡

第1図　遺跡位置図



第２図　上の平遺跡調査区域図

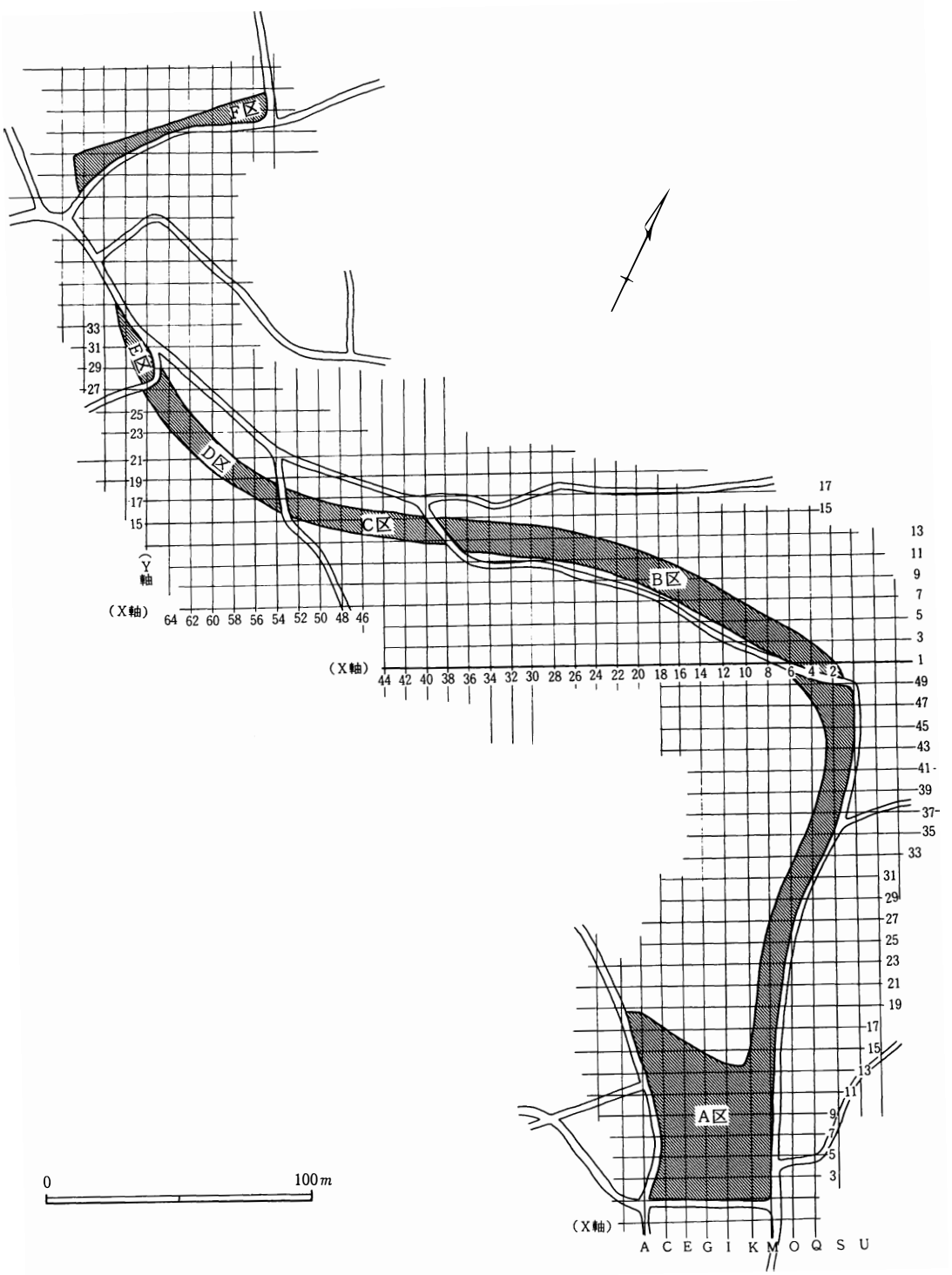
次調査時におけるＴ※５１の杭を新たに１※１の杭とし、Ｘ軸を東から西に１・２・３・・・、Ｙ軸を南から北へ１・２・３・・・とＸＹ両軸を算用数字で表した。グリッドの表し方はいずれもグリッド南西杭を基点とし、Ｘ※Ｙグリッドと表記する。

調査はまず対象地域全体の表土を削除し、遺構確認のための精査を行なった後、遺構の発掘を行なった。表土下30㎝程に有る遺構確認面では縄文時代、弥生時代の遺構の重複が激しいため、まず弥生時代の遺構を調査し、次に縄文時代の遺構調査を行なった。さらにその後で先土器時代の文化層の調査を実施した。

第３節　基本層序

上の平遺跡全体における基本層序を明らかにしておきたい。

遺跡は、多少の起伏を持つものの全体的にはほぼ平坦な地形で基本層序に大きな変化は認められない。層序は第４図のようにⅠ層からⅨ層に分けられるが、Ⅰ層上面に耕作土がのる。Ⅰ



第3図　第4次・第5次調査ブロック設定図

層からⅨ層までの堆積は、約３ｍに及ぶ。

第Ⅰ層：暗黄褐色ローム層。Ⅲ層下のローム層と比べやや軟弱で、色調に赤味をおびる。

第Ⅱ層：黒褐色土。１㎜大の白色粒子を含む。

第Ⅲ層：黄褐色ローム層。Ⅳ層下のローム層に比べ粘性、しまりが弱い。

第Ⅳ層：黄褐色ローム層。ブロック状に剥離するやや軟弱なローム層。

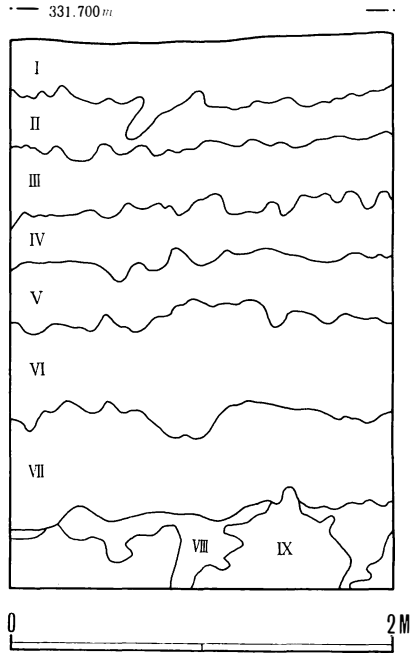
第Ⅴ層：黄褐色ローム層。赤色スコリヤを多く含む硬質のローム層。

第Ⅵ層：黄褐色ローム層。１㎜大の白色粒子を多く含む。ローム粒子は極めて緻密である。

第Ⅶ層：黄褐色ローム層。赤色、青色スコリヤを若干含む。

第Ⅷ層：灰褐色粘質土。

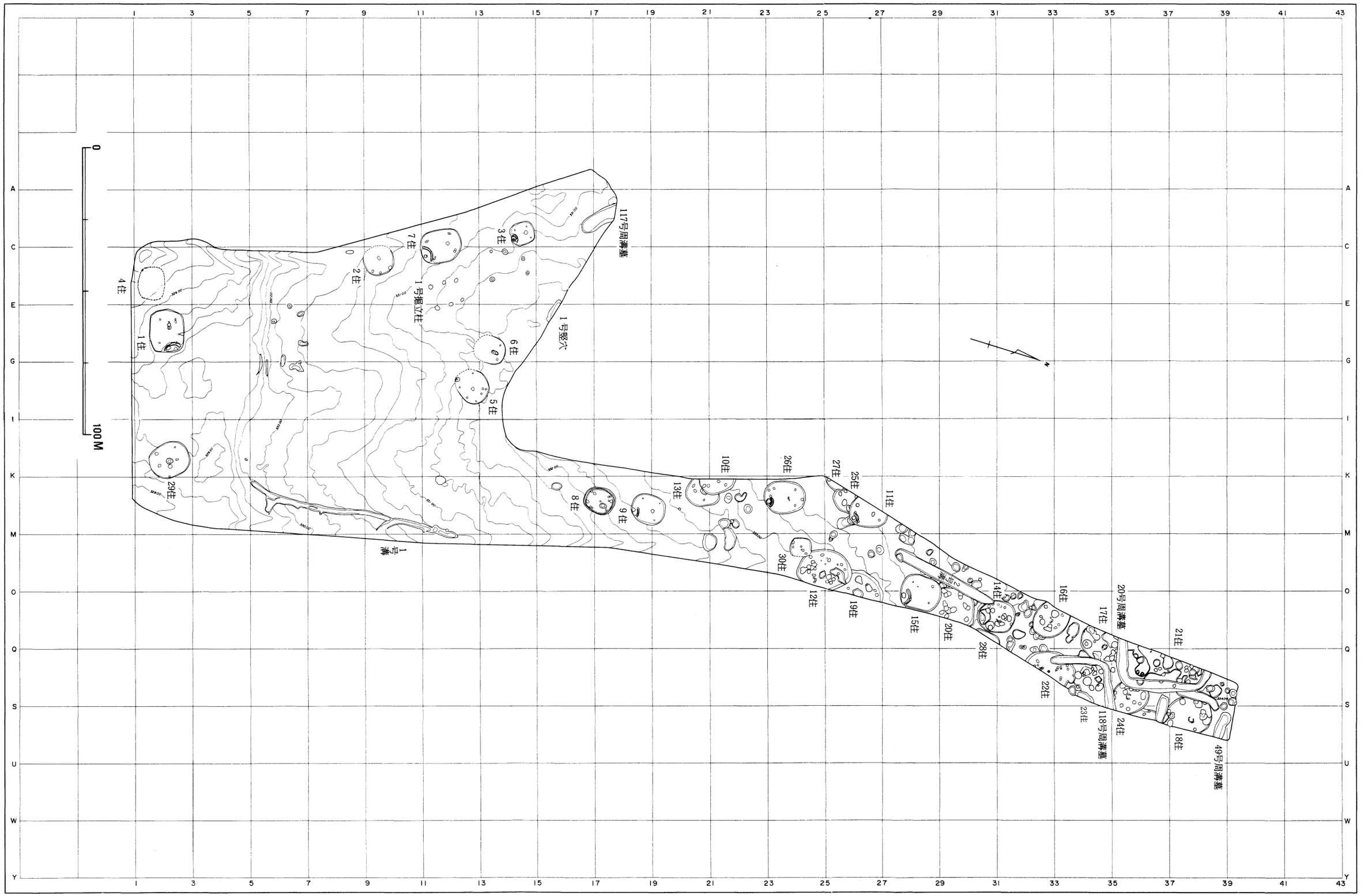
第Ⅸ層：橙褐色軽石層。（ＰｍⅠ）



第４図　基本層序

遺構の確認される層位は第Ⅰ層の上面で、基本的にはこの層を遺構確認面として捉えることができる。この確認面では弥生時代および縄文時代の遺構がほぼ同一レベルで検出される。縄文時代の遺構は遺構確認面においてすでに壁のほとんどが削平され、炉だけが露出した状態で検出されるものも存在することから、この確認面がすでに当時の生活面より相当削られていることが推定される。

遺跡の存在する曽根丘陵上の表面を覆う堆積土のほとんどは、火山灰の降下に起因する風成堆積物であることが同町内に存在する上野原遺跡で実証されている（河西学1987「上野原遺跡の火山灰層」）。本遺跡においても第Ⅰ層から第Ⅸ層の火山灰を採取し分析を行なったので、その結果を付節において詳しく記述することにする。



第5図　第4次調査区域内遺構配置図

第Ⅲ章　第４次調査

第１節　遺構検出状況

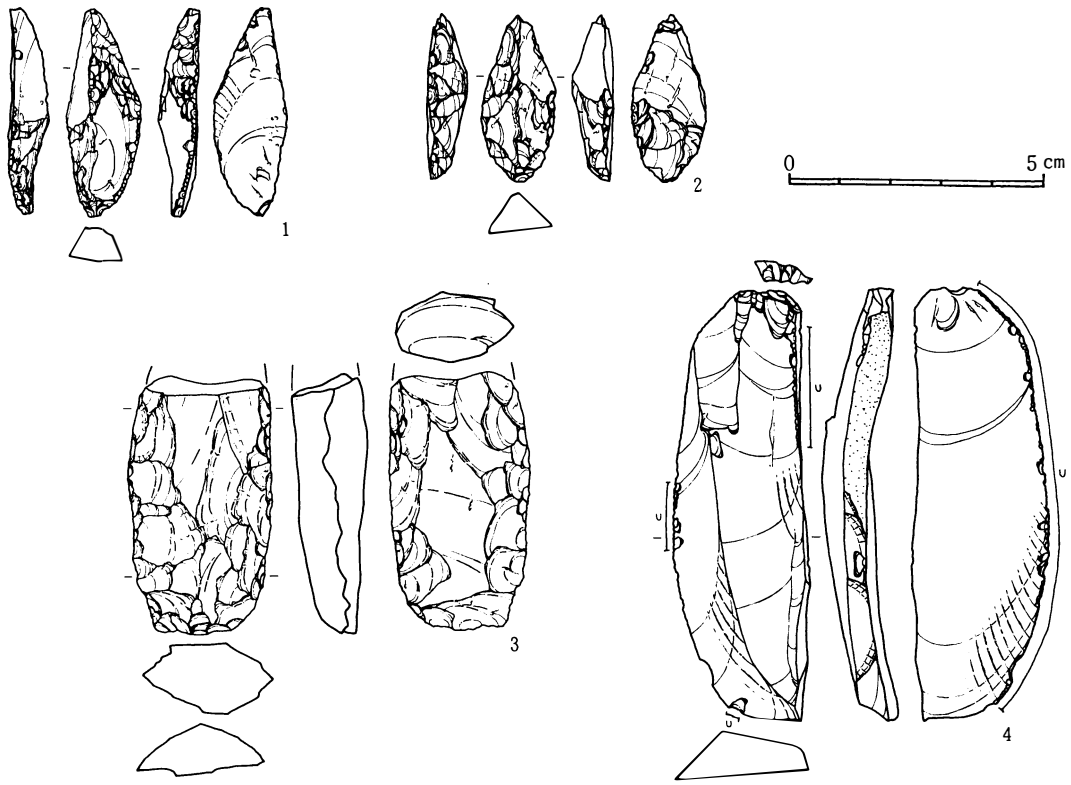
第４次調査区は、昭和54年に55基の方形周溝墓が発見された第１次調査区の南と東側に位置し、当初から同時代の墓域の展開が予測されていた。しかし、弥生時代末から古墳時代初頭の方形周溝墓は一部で確認されたのみで、実際には弥生時代後期後半の住居群が集落を形成していたことが今回の調査で明らかにされた。調査区は北から南に向って緩やかに下る斜面で、杭ナンバー５付近を境に南側が段をなして低くなるが、同時代の住居址はこの小さな段を境に北側に15軒、南側に２軒確認されている。南北の住居群の間で主軸方向が異なることから、住居址群は２つのグループに大きく分けられる。

一方、縄文時代の遺構は調査区の北側に集中し、上の平遺跡全体から見ても台地北東に集落の形成が認められる。第４次調査で確認された該期の遺構は住居址14軒、土坑88基である。住居址の中には表土下50㎝程の遺構確認面で炉と柱穴だけが残存している状態で発見される例もあり、当時の生活面がこれより高かったことが考えられる。

第２節　先土器時代の遺物

本遺跡から、ナイフ形石器２点、使用痕ある剝片１点が出土した。また、縄文時代の石槍の可能性が強いと思われる石器１点が出土したが、これも本項で扱う（第６図）。

１は、いわゆる二側縁加工のナイフ形石器である。素材は縦長剝片と思われる。正面には、主剝離面の剝離方向とほぼ直交する方向の剝離が２枚みられる。この２枚の剝離は、本素材の打面からみると、剝離方向がほぼ直交し、稜を形成している。両者は規模が違い、正面左側縁の剝離面を打面として、右側縁側の剝離がなされたものと思われる。おそらく、石核腹面になされた稜形勢のための調整剝離と思われる。二次加工は、正面右側縁全体と、左側縁下半部になされている。右側縁下半部の加工は非常に小規模であるが、素材をある程度変形し、縁部を整形している状況なので、調整剝離と判断した。先端側には、正面側から裏面にむかって稜上加撃がなされている。黒曜石製。17住出土。２も、二側縁加工のナイフ形石器である。正面下半部の二次加工はかなり平坦である。正面の加工の後に裏面下半部の平坦な加工がなされている。素材はおそらく縦長剝片で、正面には主剝離面とほぼ同一方向の剝離が１枚みられる。先端部裏面の剝離は破損によるものと思われる。黒曜石製。発掘区内表採資料。３は、石槍と思われる。両面加工であるが、正面に２枚、裏面に１枚、両面のほぼ中央に素材の剝離面が残存する。正面の二次加工は、中小規模の剝離を交えながら、剝離角がほぼ同一の剝離が連続的に一様になされていると思われる。裏面の剝離は、先端側半分と基部側は平坦で細かな剝離がなく、断面が半円形になっている。周辺の剝離より新しい。なお、裏面先端側の先端方向からの剝離は、折れに伴うもの。ホルンフェルス製。12住出土。４は、黒曜石製。土坑内出土。



第6図　先土器時代石器

第3節　縄文時代の遺構と遺物

1．住居址と出土遺物

(1) 12号住居址（　第7～9図、図版1）

（位置）　遺跡東辺のM・N※24・25グリッドに位置する。19号、30号住居址と重複する。

（形状・規模）　住居址東側が調査区外に伸びるが、長軸7ｍ20㎝、短軸約5ｍ50㎝の楕円形を呈すると考えられる。

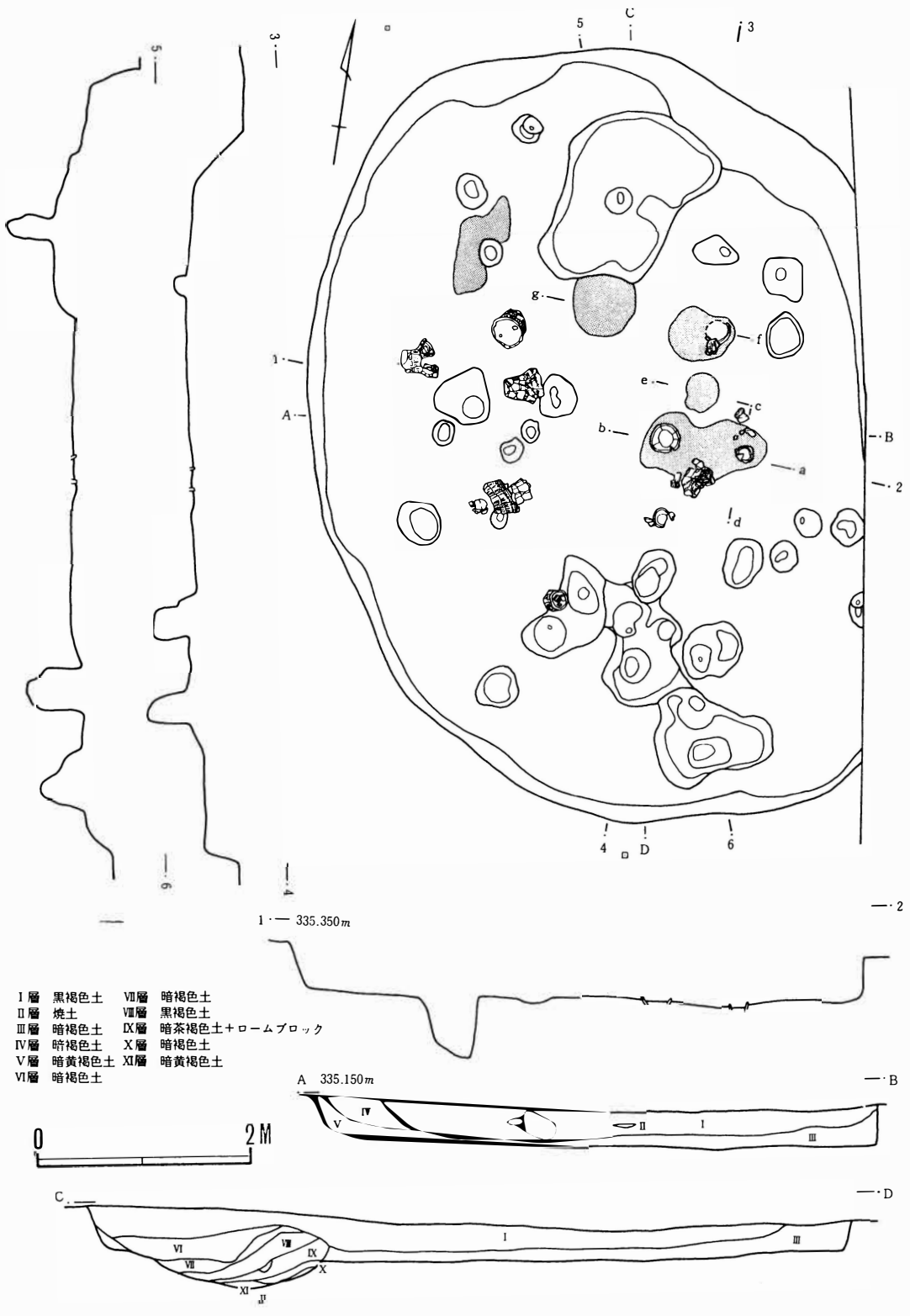
（床面・壁）　床面は中央部が硬く踏み締められており、ほぼ平坦である。壁は外側に向けて斜めに立ち上がり、壁高30～50㎝を測る。

（炉）　燃焼部と考えられる焼土を伴った掘り込みは計5ケ所検出され、この内炉体土器を伴うものが3つ存在する。これらの炉は、住居址中央からその北側にかけて点在している。

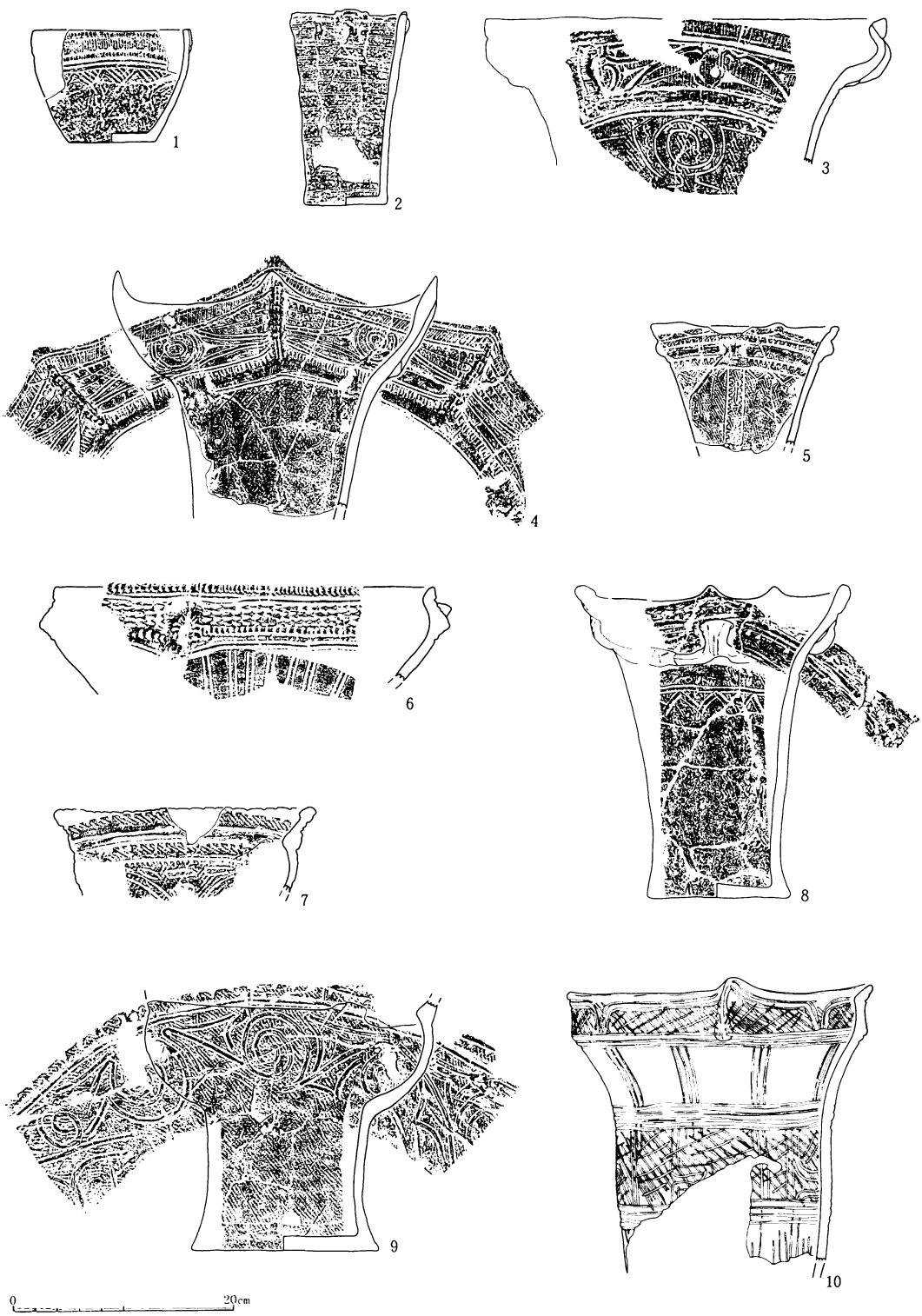
（その他の施設）　ピットは大小合わせて28ケ所検出されている。ピットどおしの切り合いが激しく主柱穴は確定しがたいが、おそらく何回かの建て替えがあったものと推定される。

（出土遺物）　第8図、第9図が本住居址の伴出土器である。

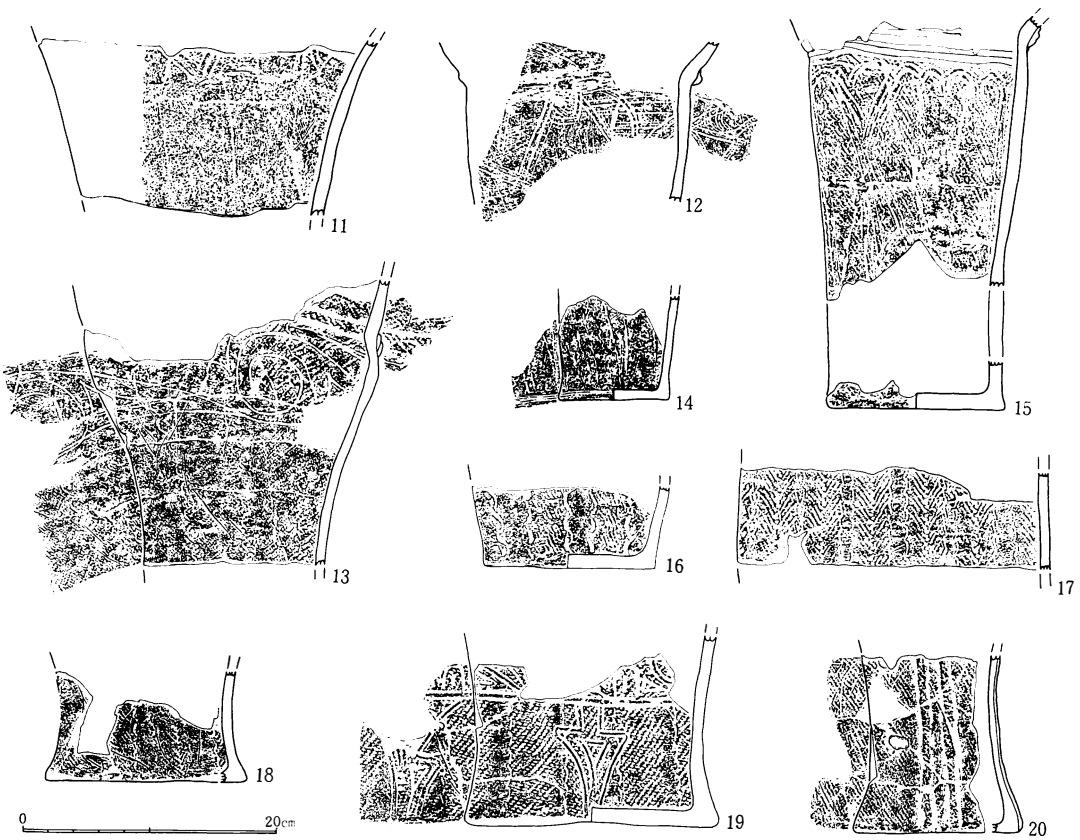
1．鉢形土器。口縁部に細線文と細かい鋸歯状文が施され、胴部には連続の三角文と結節縄文が施文される。口径14㎝、器高10㎝を測る。　2．円筒形の深鉢形土器。口縁部に4単位の小突起が付加され、胴部は沈線によって13段に分離される。その区画内には棒状工具によって


1 — 335.350m
A 335.150m
I層 黒褐色土
II層 焼土
III層 暗褐色土
IV層 暗褐色土
V層 暗黄褐色土
VI層 暗褐色土
VII層 暗褐色土
VIII層 黒褐色土
IX層 暗茶褐色土＋ロームブロック
X層 暗褐色土
XI層 暗黄褐色土
0
2M

第7図　12号住居址



第８図　12号住居址出土土器　(1)



第９図　12号住居址出土土器　(2)

列点文が施される。口径 10.5*cm*、器高 17.5*cm*を測る。　３．深鉢形土器上胴部。口縁部に橋状把手をもち細線文、玉抱き三叉文を施す。胴部は渦巻き沈線、結節縄文が施文される。　４．４単位の山形突起を有する深鉢形土器。口縁部には細線文、玉抱き三叉文、鋸歯状文、胴部には結節縄文が認められる。口径 30*cm*、現存高 24*cm*を測る。　５．ロート状に外反する深鉢形土器。結節縄文を地文として鋸歯状文をそのうえから施文する。口縁部に小突起、頸部に橋状把手を付加する。　６．くの字状に屈折する深鉢口縁部。半截竹管押し引を主文様とする。　７．深鉢形土器。口唇部に刻み目を巡らし、地文に縄文を持つ。　８．口縁に山形突起、口縁部下に橋状把手をもつ深鉢形土器。口縁部文様は鋸歯状文を巡らし、胴部下に結節縄文と鋸歯状沈線を施文する。　９．内湾した口縁部をもつ深鉢形土器。全体を縄文が覆い、内湾部に半截竹管による渦巻き文と三叉文が施される。　10．深鉢形土器。口縁部に山形小突起をもち、胴部はへら先状工具による格子文を主文様とする。口径 27*cm*、現存高 25*cm*を測る。11および13～20は、いずれも結節縄文を地文とする深鉢形土器である。これらの中には地文の上から沈線による三角文、渦巻き文、三叉文を施したものも存在する。また、地文の結節縄文は条が単一方向に走るものと縦位の羽状縄文となる２者が認められる。１から20の土器中11、17は炉体土器として使用されている。

以上の土器群は縄文時代中期初頭の五領ケ台式に比定される。

(2) 13号住居址（第10・11図、図版１）

（位置） K※20・21グリッドに位置し、10号住居址によって切られる。

（形状・規模） 西側は調査区外に伸びるが、最長径４ｍ80㎝程の不整五角形を呈すると考えられる。

（床面・壁） 壁はほぼ直立し、壁高40㎝を測る。床面は中央部が硬く、周囲に行くほど締まりが弱い。

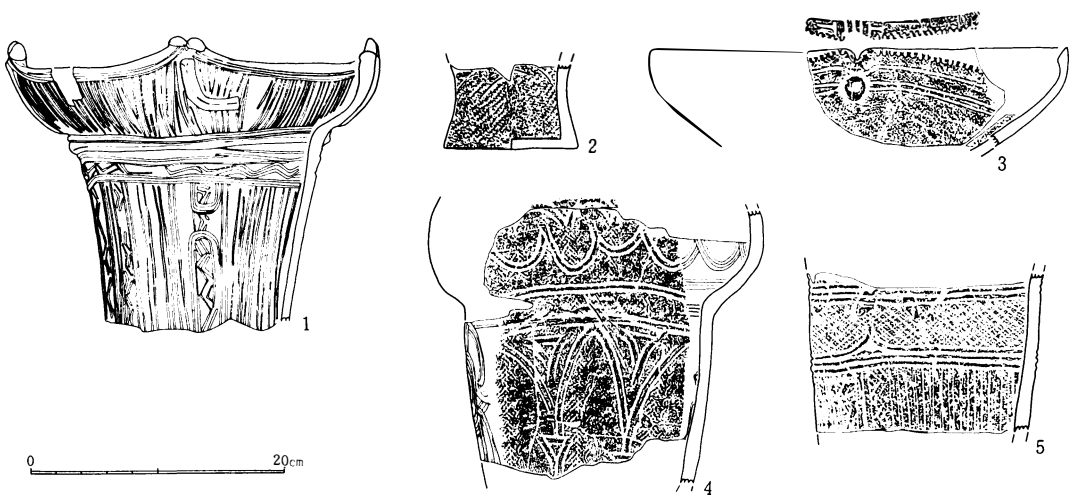
（炉） 住居址の中央に設けられた埋甕炉である。炉の堀り込みは100×70㎝の楕円形を呈し、南半分に３つの土器が埋設されていた。

（その他の施設） ピットは７ケ所で検出され、この内ピット１～５が主柱穴と考えられる。直径30～50㎝の円形乃至楕円形を呈し、深さ35～60㎝を測る。床面直上には炭化材、焼土が堆積し、火災住居址と考えられる。

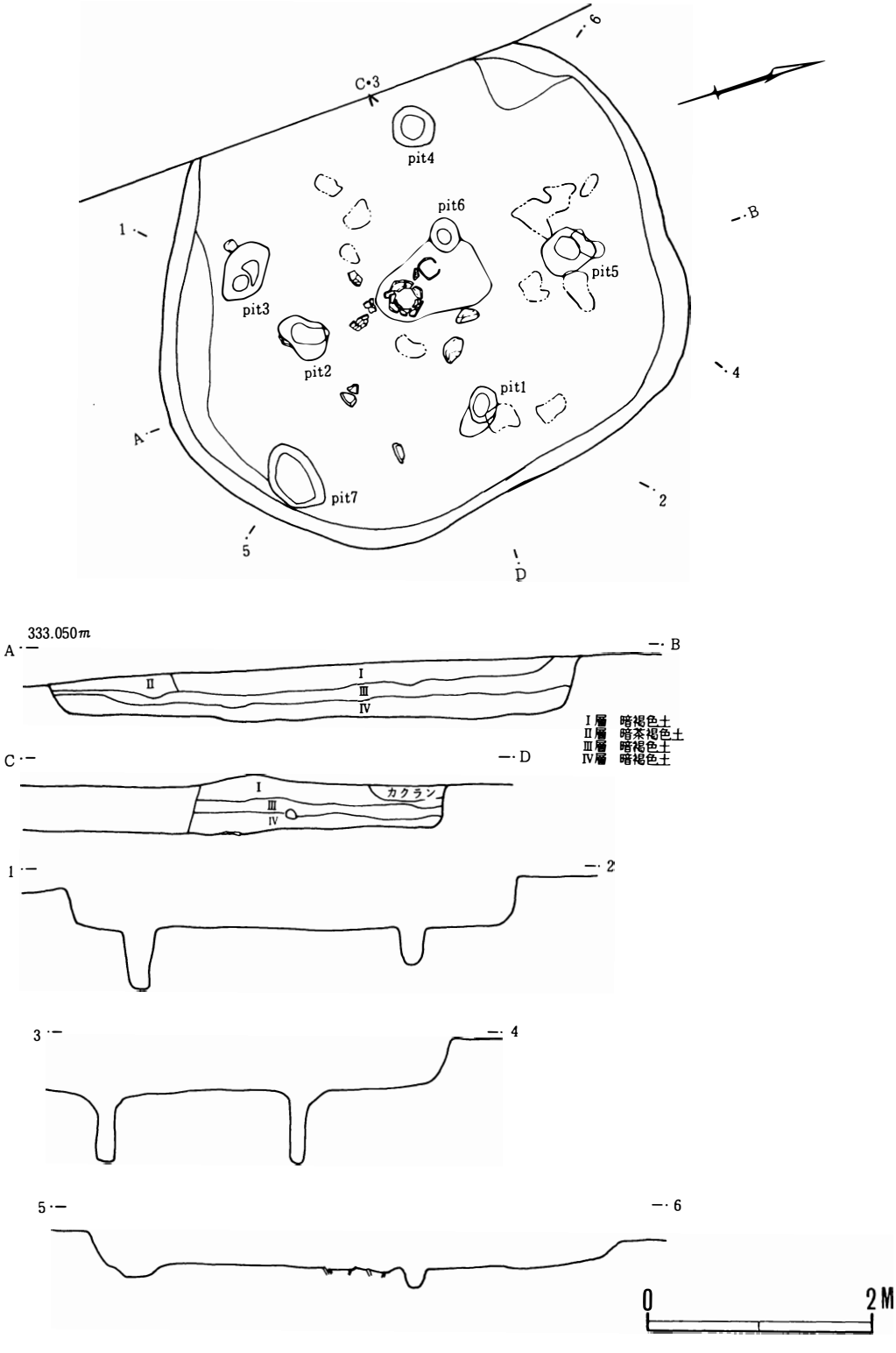
（出土遺物） 第10図が本住居址出土土器である。１、４、５は埋甕炉として使用されていた。

１．口縁部が内湾する深鉢形土器で、４単位の山形突起をもつ。縦位の沈線を基調としているが、頸部と山形突起の真下にあたる胴部にはジグザグの鋸歯状沈線が施される。口径29㎝、現存高23㎝を測る。　２．小型の深鉢形土器胴下半部。器面全体にRL縄文を転がす。底径10.7㎝、現存高6.5㎝を測る。　３．内湾する口縁部をもつ深鉢形土器。口唇部に刻みを巡らし、口唇内面に三叉文を施す。外面は縄文を地文とし、口縁下に３本の平行沈線とドーナッツ状貼付文をもつ。口径は約32㎝と推定される。　４．内湾口縁を有する深鉢形土器。地文の結節縄文が全体を覆い、そのうえから半截竹管による連続弧状文と三角文が刻まれる。頸部屈曲部分を境に口縁部は住居址覆土、胴部は炉体として使用されていた。最大径26.5㎝、現存高22㎝を測る。

５．円筒状の胴部をもつ深鉢形土器胴部。上半をヘラ先による格子目文、下半を平行沈線と鋸歯状文によって施文する。



第10図　13号住居址出土土器


C•3
6
pit4
pit6
B
1
pit5
pit3
pit2
4
pit1
A
pit7
2
5
D
333.050m
A
B
II
I
III
IV
I層 暗褐色土
II層 暗茶褐色土
III層 暗褐色土
IV層 暗褐色土
C
D
I
カクラン
III
IV
1
2
3
4
5
6
0
2M

第11図 13号住居址

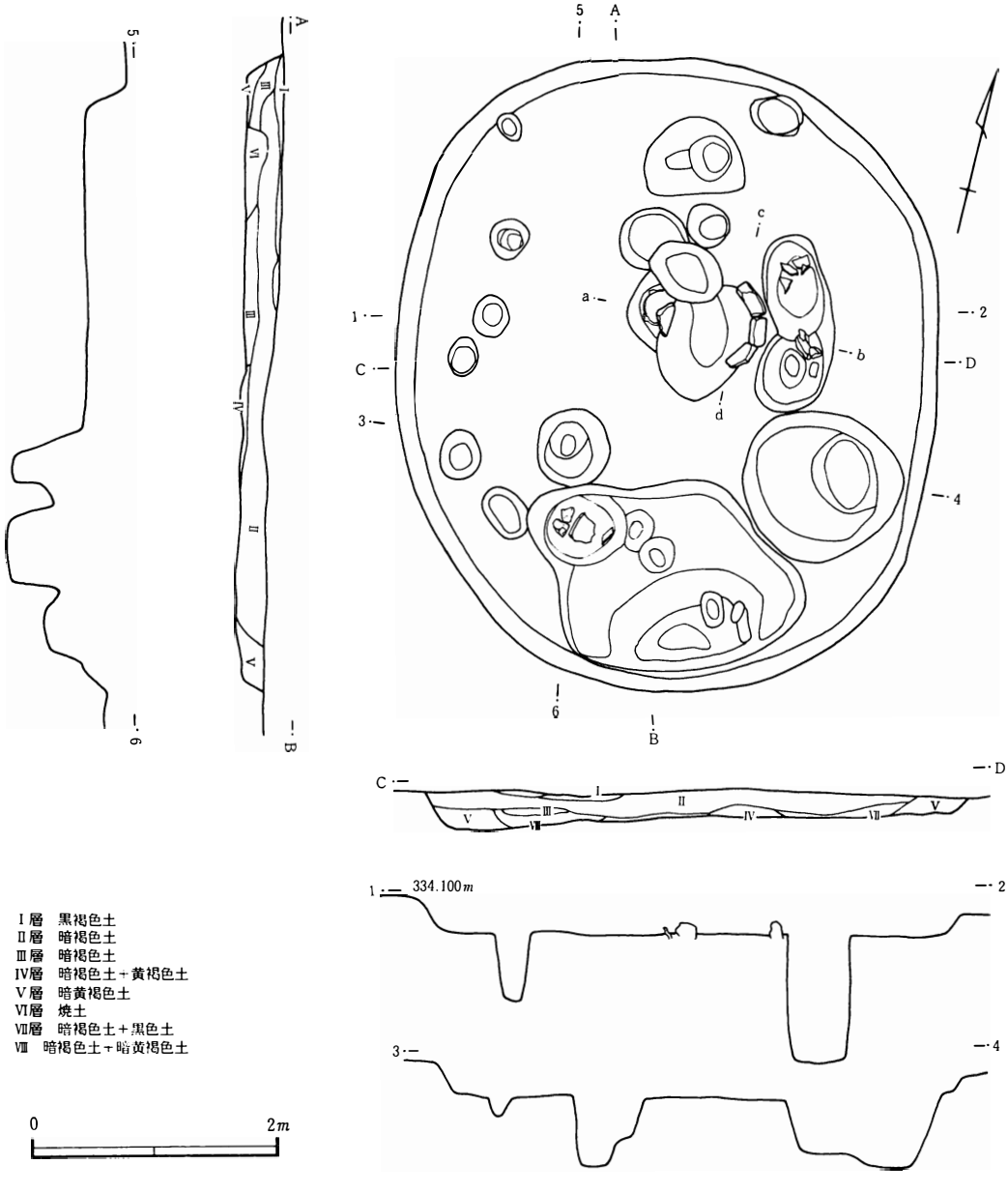
⑶ 14号住居址（第12・13図、図版２）

（位置） Ｏ・Ｐ※30・31グリッドに位置する。

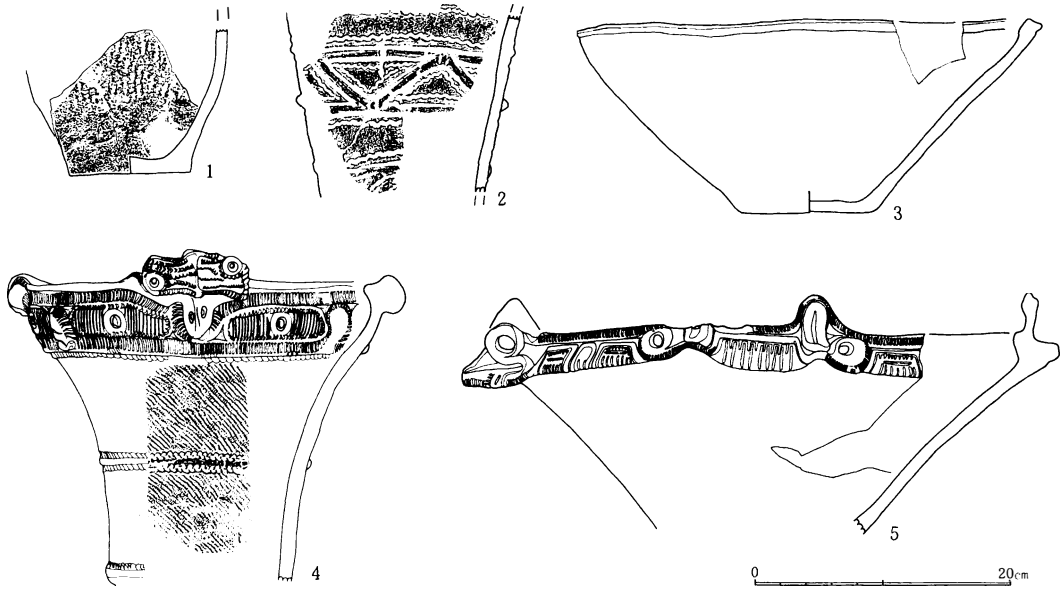
（形状・規模） 長軸５ｍ10㎝、短軸４ｍ50㎝の楕円形プランを呈する。長軸方向を主軸とするとＮ－14°－Ｗを指す。

（炉） 住居址中央よりやや北側に位置する。石囲い炉の西側に土器が埋設されており、当初は埋甕炉を使用していたものと思われる。炉石は15×30㎝程の礫を配するが、南北の石は抜き取られている。

（その他の施設） ピットは18ケ所検出されているが、主柱穴は判断しがたい。住居址南側に２



第12図　14号 住 居 址



第13図　14号住居址出土土器

m × 1 m50cmの大きな落ち込みが認められたが、使用目的は不明である。

（出土遺物）　第13図が本住居址出土土器である。

1．縄文を地文とする深鉢形土器。　2．深鉢形土器胴部。胴部中程に三角形と逆三角形を組み合わせた隆帯区画をもつ。その区画内および上下にジグザグ沈線文を施文する。　4．口縁部に把手をもつ深鉢形土器。口縁部に竹管背面による押し引文を施し、胴部に縄文を施文する。この土器は炉体土器として使用されていた。3、5は浅鉢形土器である。3は無文であるが、5の口縁部には竹管の押し引を主とする文様帯が存在する。

16号住居址（第14～16図、図版2）

（位置）　O・P※32・33グリッドに位置し、西側がわずかに調査区外に伸びる。

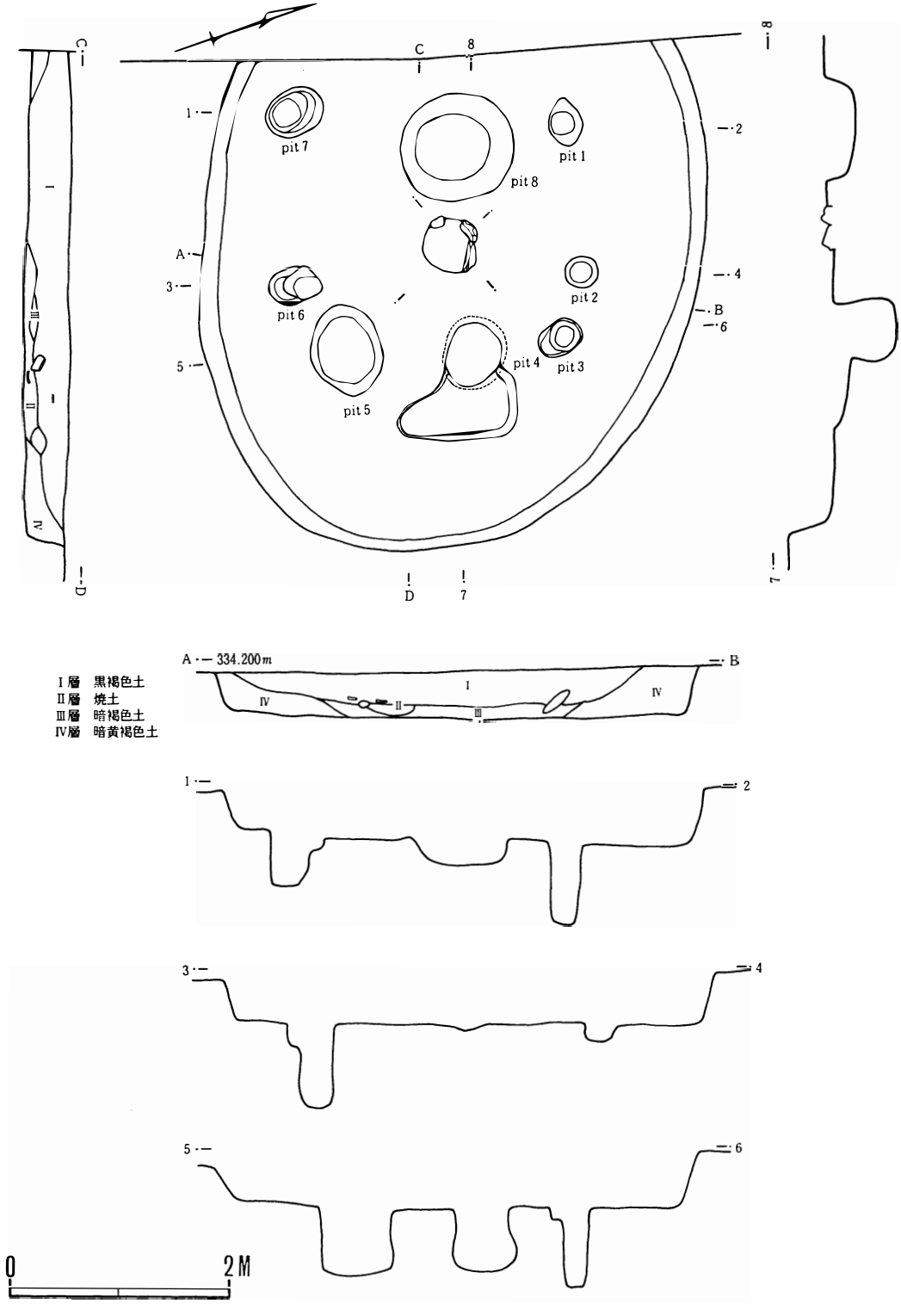
（形状・規模）　長軸およそ5 m50cm、短軸4 m50cmの楕円形を呈すると考えられる。長軸を主軸とするとN－70°－Wの方向を指す。

（床面・壁）　床面は全体的に良く踏み固められている。壁は直壁にちかく、壁高約50cmを測る。

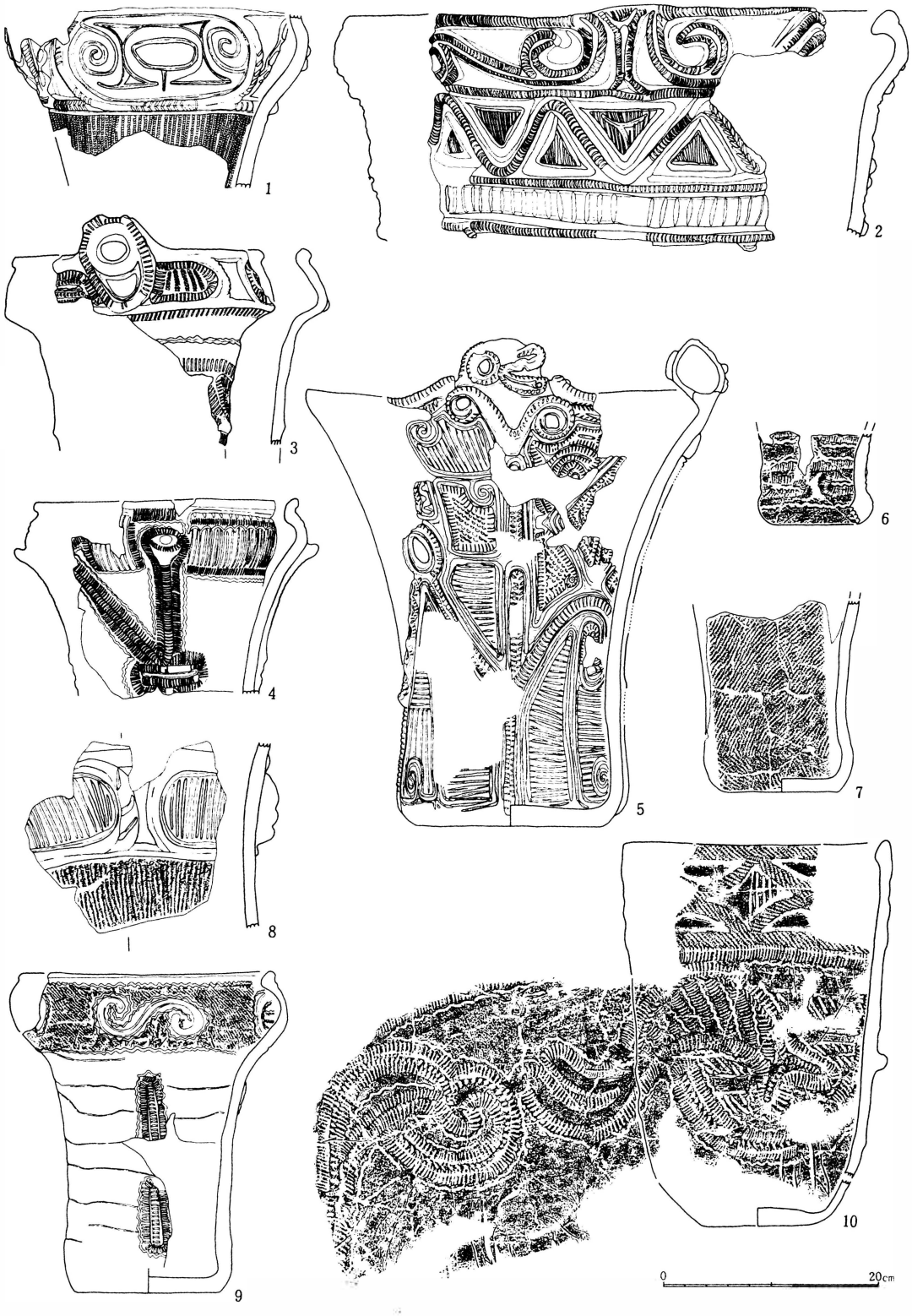
（炉）　炉は住居址ほぼ中央部に設置され、形態は石囲い炉である。炉石は北側を除いてほとんどがすでに抜き取られていた。

（その他の施設）　ピットは8ケ所確認されており、ピット1～3・6・7が主柱穴と考えられる。柱穴は直径30～50cmの円形乃至楕円形を呈し、70～80cmの深さを測る。ピット4・5・8はこれらより大型の掘り込みであるが、断面形態は袋状、円筒状、皿状とそれぞれ異なっている。

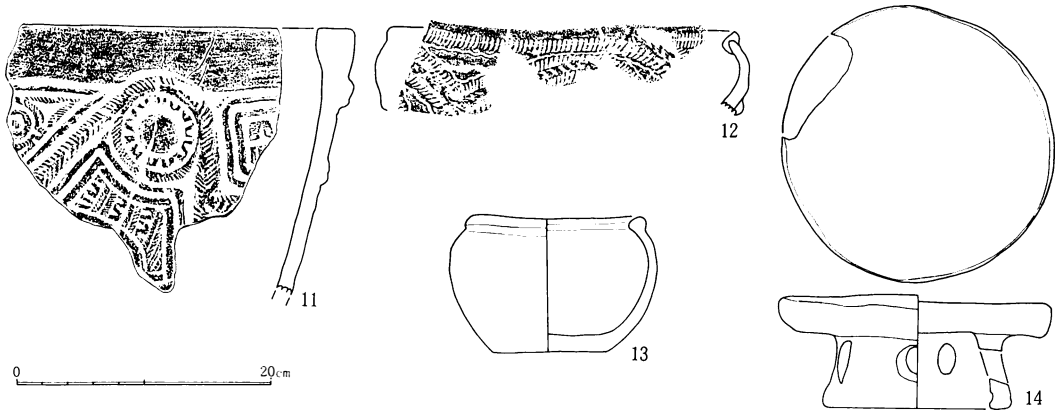
（出土遺物）　第15図、第16図が本住居址出土土器である。　1．深鉢形土器胴部。口縁部がやや内湾する。口縁部には隆帯によって楕円区画が巡り、内部を沈線による三叉文、渦巻き文、


C
8
1
2
3
4
5
6
7
A
B
D
pit 1
pit 2
pit 3
pit 4
pit 5
pit 6
pit 7
pit 8
I
II
III
IV
A — 334.200m — B
I層 黒褐色土
II層 焼土
III層 暗褐色土
IV層 暗黄褐色土
0
2M

第14図　16号住居址



第15図　16号住居址出土土器　(1)



第16図　16号住居址出土土器 (2)

楕円文で充填する。胴部にはＲＬ縄文が施される。胴部最大径 27㎝、現存高 17㎝を測る。　2．口縁部が内湾する深鉢形土器胴上部。押し引による刻みをもつ隆帯によって渦巻き文や三角形の区画がなされ、内部を三叉文、平行沈線で埋める。　3．1ケ所に山形突起をもつ深鉢形土器。口縁部が内湾し、そこに隆帯による楕円区画帯を巡らす。胴部は隆帯と押し引文によるいわゆるキャタピラ文によって主文様が構成される。口径 23㎝、現存高21㎝を測る。　4．口縁部が内湾する深鉢形土器。口縁部文様帯には鋸歯状文、弧状文、押し引文が施され、胴部には隆帯とキャタピラ文による抽象文が見られる。　5．口縁部に山形突起を有する深鉢形土器。隆帯と半截竹管によって縦長の区画を設定し、内部を平行沈線で埋める。把手の内部は空洞で、内側に2つの貫通孔がみみずく状にあいている。口径約 39㎝、器高 45㎝を測る。　6．小型の深鉢形土器胴下半部。低い隆帯によって横位の楕円区画がなされ内部を竹管の押し引文とジグザグ文で充填する。底径 8㎝、現存高 9㎝を測る。　7．深鉢形土器。外面全体を縄文が覆う。底径 10㎝、現存高 18㎝を測る。　8．深鉢形土器胴部破片。隆帯による楕円区画内を平行沈線で埋める。下部は縄文が施される。　9．口縁部が内湾する深鉢形土器。口縁部文様帯は沈線による横Ｓ字文や楕円区画と共に地文に縄文をもつ。胴部は輪積痕が残され、所々に押し引文と隆帯による毛虫状の文様帯が認められる。口径 24㎝、器高 30㎝を測る。　10．円筒形の深鉢形土器。口縁部に縄文を転がした低隆帯によって弧状文と菱形の区画をなし、胴部には押し引による動物状の抽象文が施される。口径 25㎝、器高 35.5㎝を測る。　11．深鉢形土器口縁部破片。口縁部下を無文で残し、その下部を隆帯と半截竹管によって区画する。区画内には鋸歯状文、玉抱き三叉文などが施される。　12．内湾する深鉢形土器口縁部。隆帯による三角区画が巡り、内部を押し引文と蛇行沈線で埋める。口径 27㎝、現存高 7㎝を測る。　13．椀形土器。口縁部下に沈線が巡る以外は文様はないが、所々に赤色塗彩されていた形跡が残る。口径 13.5㎝、器高 10.5㎝を測る。　14．ほぼ完形の器台形土器。脚部に5ケの円形の貫通孔を有し、脚底面は磨り減っている。器台部の直径は約 21㎝で器高 8㎝を測る。以上の土器は縄文時代中期中葉の藤内式に比定される。

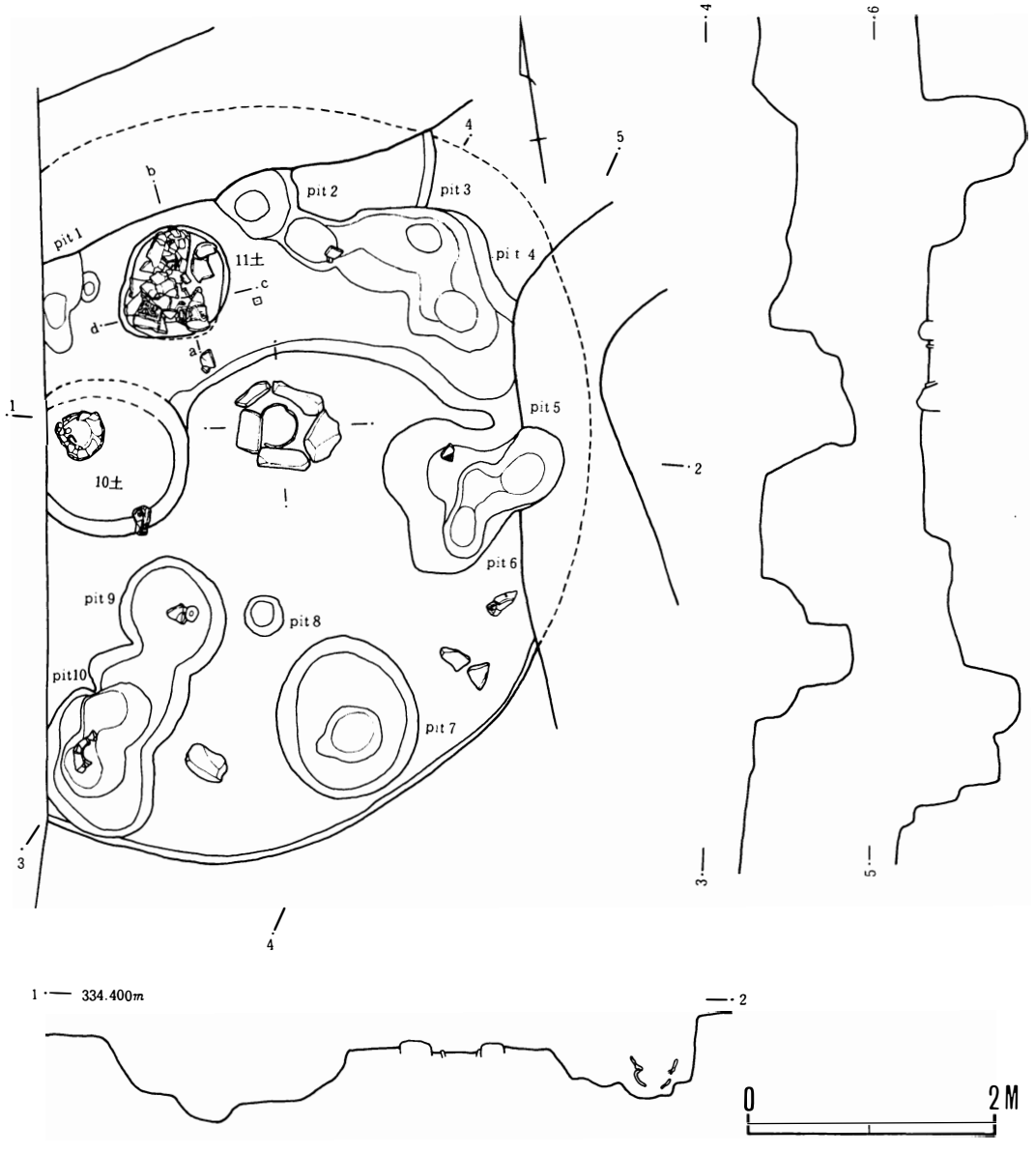
(5) 17号住居址（第17・18図、図版２）

（位置）　Ｐ・Ｑ※34・35グリッドに位置する。20号・118号方形周溝墓によって東側、北側のほとんどが破壊されている。

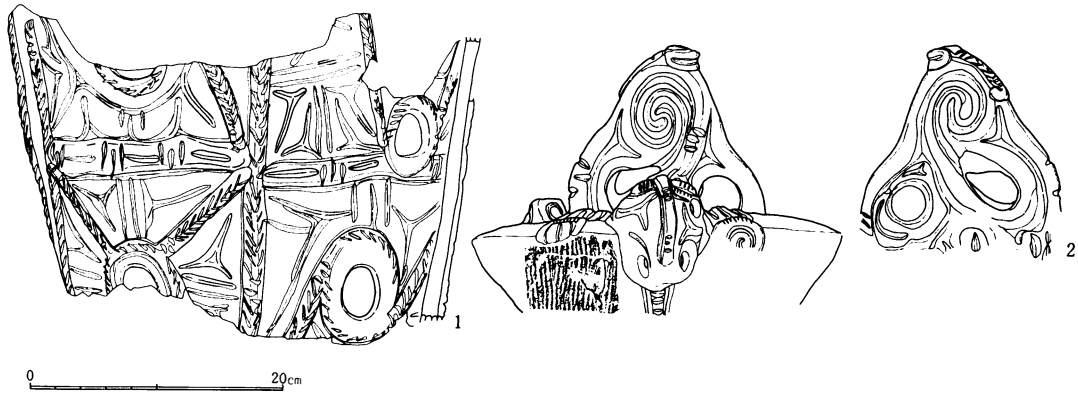
（形状・規模）　ピットの配列からおよそ直径６㎝の円形プランを呈すると考えられる。

（床面・壁）　床面は炉周辺がわずかに残存し、壁も住居址南で認められるのみである。

（炉）　長さ40㎝程の石を５個使った石囲い埋甕炉である。炉体土器は深鉢形土器の胴部を使用している。



第17図　17号住居址



第18図　17号住居址出土土器

（その他の施設）　柱穴と考えられるピットが炉を中心に半径１ｍ～１ｍ50㎝の距離で巡っている。柱穴は柱の立て替えによる重複が激しく、掘り込み上面にテラスを持つものもあるが、基本的には直径50㎝、深さ80㎝程のピットと考えられる。

炉の西と北には10号、11号土坑が床面を切って構築されている。

（出土遺物）　第18図が本住居址出土土器である。

１．深鉢形土器胴部。石囲い埋甕炉の炉体土器として使用されていた。ヘラ状工具による刻みをもつ隆帯によって区画をなし、その内部を三叉状沈線で充填する。　２．蛇体装飾を施した把手をもつ深鉢形土器。いずれも井戸尻式に対比される。

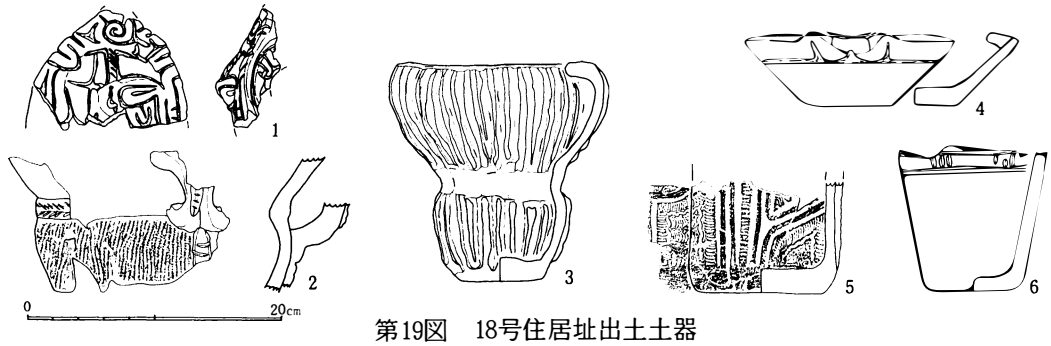
(6)　18号住居址（第19・20図、図版２）

（位置）　第４次調査区北端に位置し、49号方形周溝墓によって切られる。

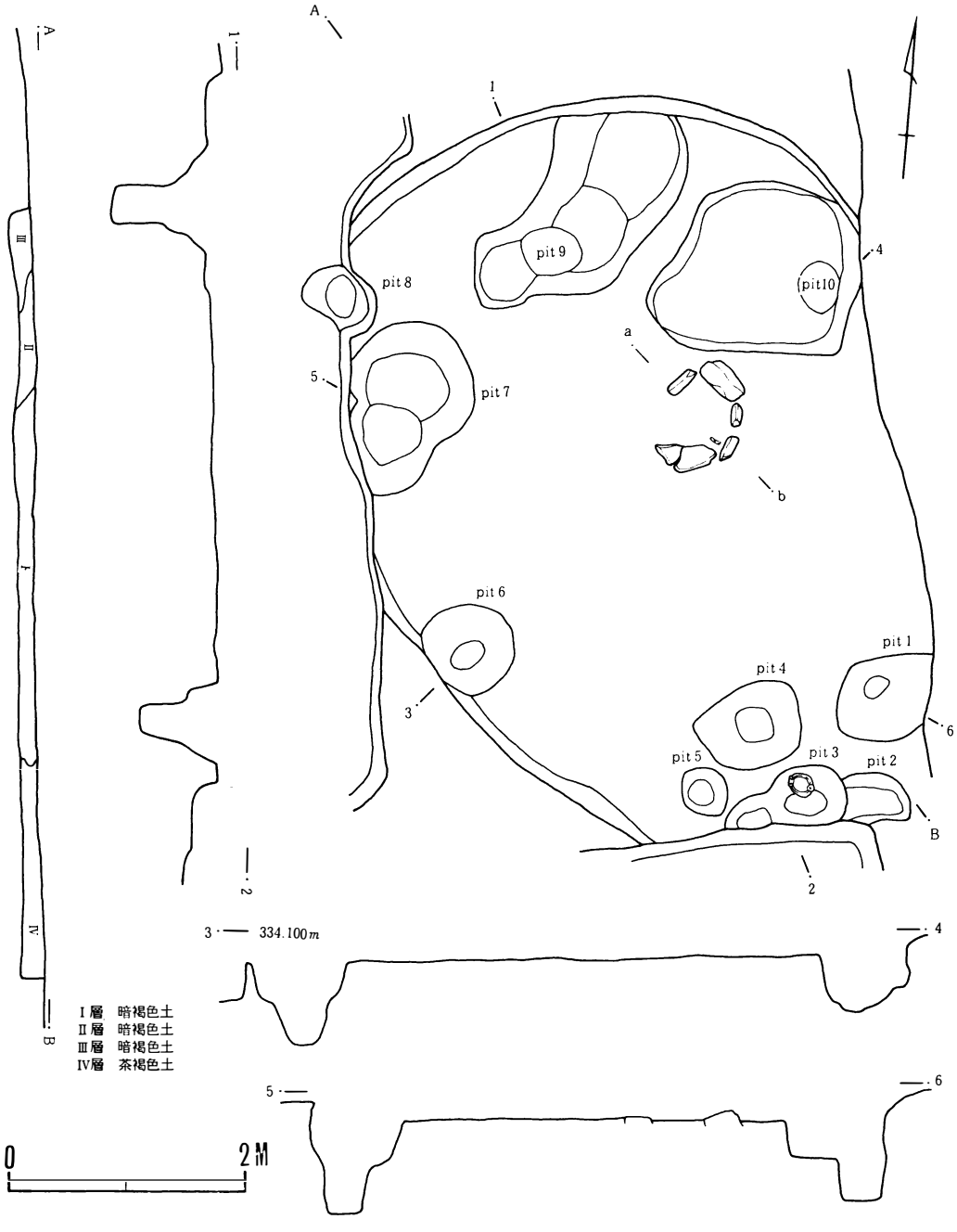
（形状・規模）　遺構の切り合いのため全体のプランは明らかではないが、長軸７ｍほどの楕円形をなすと思われる。

（床面・壁）　炉周辺の床面は良く踏み締められている。壁は北側と南西部で10㎝程の立ち上がりが認められたのみである。

（炉）　長さ25～40㎝の扁平な礫を配した石囲い炉である。炉の掘り方は長軸１ｍ50㎝、短軸１



第19図　18号住居址出土土器



第20図　18号 住 居 址

m 20cmのすり鉢状をなす。

（その他の施設）　ピットは10ケ所で検出され、ピット１、４、６～10が柱穴と考えられる。柱穴は単一では50～80cmのピットで深さ約80cmを測る。

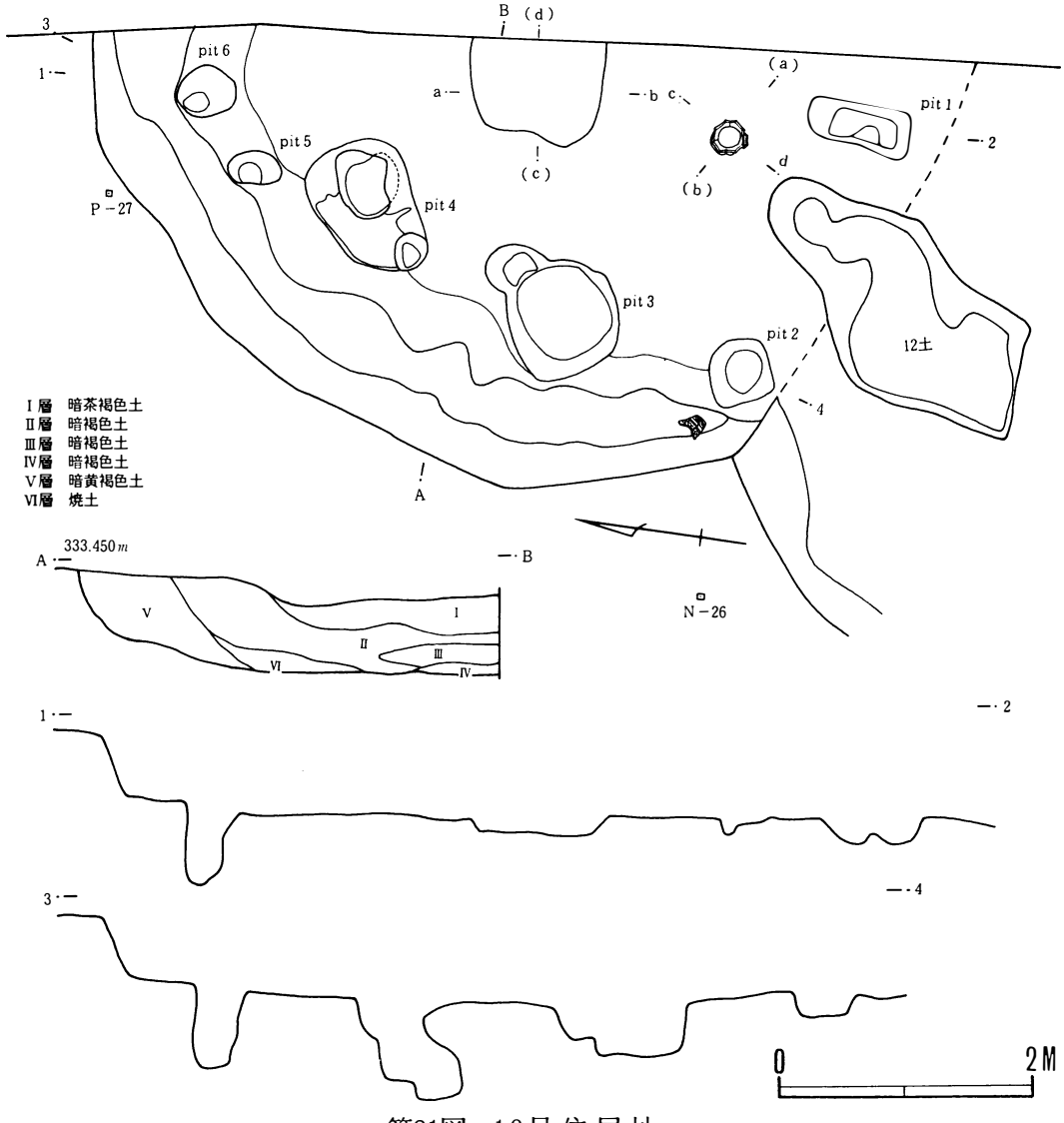
（出土遺物）　第19図が本住居址出土土器である。

１．把手破片。ヘラによる沈線と切り込みによって人面を表現する。頭部は渦巻き文と三叉

文が多用され、右目は十文字に切り込まれる。裏側は欠損しているが橋状となって内部が空洞であったと思われる。　2．深鉢胴部。頸部に橋状把手がつき、口縁部を無文で残す。胴部には縄文が全体を覆う。　3．胴部中程がくびれ、口縁部が内曲する深鉢形土器。胴部くびれ部を無文で残すがその上下は断面三角形の隆帯が縦方向に付加される。口径11cm、胴部最大径17cm、器高17cmを測る。　4．小型の浅鉢形土器。口縁部が内側に屈折し、山形の小突起を2個もつ。口縁部上部には三叉文や円文が沈線で描かれ、口縁部直下には三叉状沈線が巡る。口径11cm、底径7cm、器高6cmを測る。　5．深鉢胴下半部。蛇行沈線と押し引文を充填した区画文を施す。　6．深鉢胴下半部。刻みを有する隆帯が胴部を巡る。

5は藤内式、1～4、6は井戸尻式に比定される。

(7)　19号住居址（第21・22図、図版3）



第21図　19号住居址

（位置）　N・O※25・26グリッドに位置し、12号住居址によって切られる。

（形状・規模）　東半分が調査区外に伸びるため全体プランは不明であるが、半径７ｍ程の円形をなすと推定される。

（床面・壁）　炉周辺部が硬く踏み締められているが、壁際の締まりは弱い。床面は壁際がテラス状に若干高くなり、壁に連なる。壁は外方へ斜めに立ち上がり、40㎝程の高さを測る。

（炉）　深さ15㎝程の浅い地床炉である。

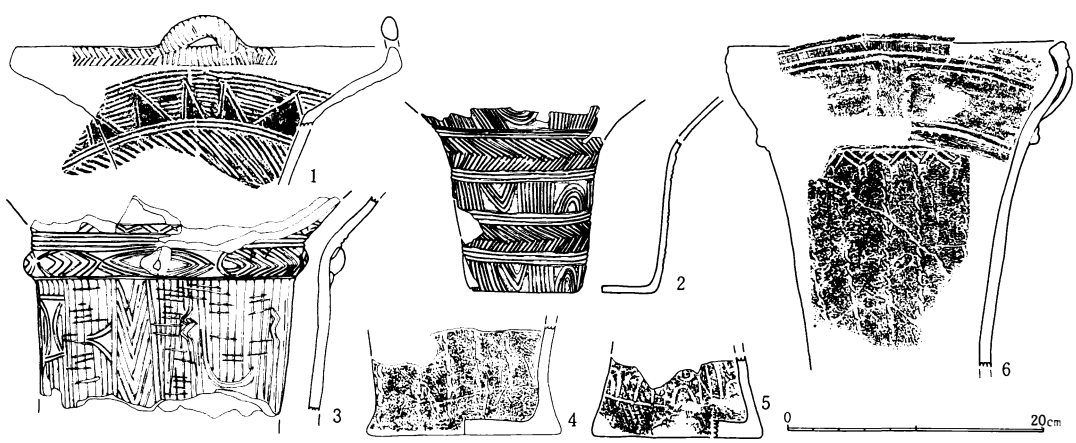
（その他の施設）　炉より1ｍ50㎝程南に埋甕が設置されていた。埋甕は深鉢で、口縁部および胴下半部を欠いている。

ピットは６ケ所で確認されている。ピット１～３は掘り込みが浅いが、これに対しピット４～６は50～60㎝程のしっかりとした掘り込みをもつ。

（出土遺物）　第22図が本住居址出土土器である。

１．深鉢形土器口縁部。口縁部が屈曲し、頸部から上部が急激に開く。口縁部に耳状の突起を有し、半截竹管による羽状文が巡る。その下部は同一工具による平行沈線を交互に配した鋸歯状文が施される。　２．深鉢形土器。胴部は円筒状で口縁部に向かって外反する。半截竹管による平行沈線によって４段の横位文様帯を作り出し内部を羽状文、弧状文、縦の平行沈線で充填したいわゆる集合沈線文土器である。現存高14.5㎝、底径8.5㎝を測る。　３．深鉢形土器胴部。埋甕。頸部に太い隆帯を巡らし、全体に半截竹管によって羽状文や平行沈線を施す。口縁部には鋸歯状沈線が認められる。現存高18㎝を測る。　４．深鉢形土器胴下半部。器面を結節縄文が覆う。底径15㎝、現存高8.5㎝を測る。　５．深鉢形土器胴下半部。地文に縄文が覆い、そのうえから竹管背面による弧状文などが描かれる。底径13㎝、現存高６㎝を測る。　６．口縁部が緩やかに内湾する深鉢形土器。口縁部に橋状把手を付加する。口縁部直下と橋状把手の部分に細かいクシ状工具による細線文と鋸歯状文を施し、胴上部に半截竹管によるＹ字文を巡らす。胴部全体には結節縄文が施文される。

以上の土器は縄文時代中期初頭の五領ケ台式に比定される。



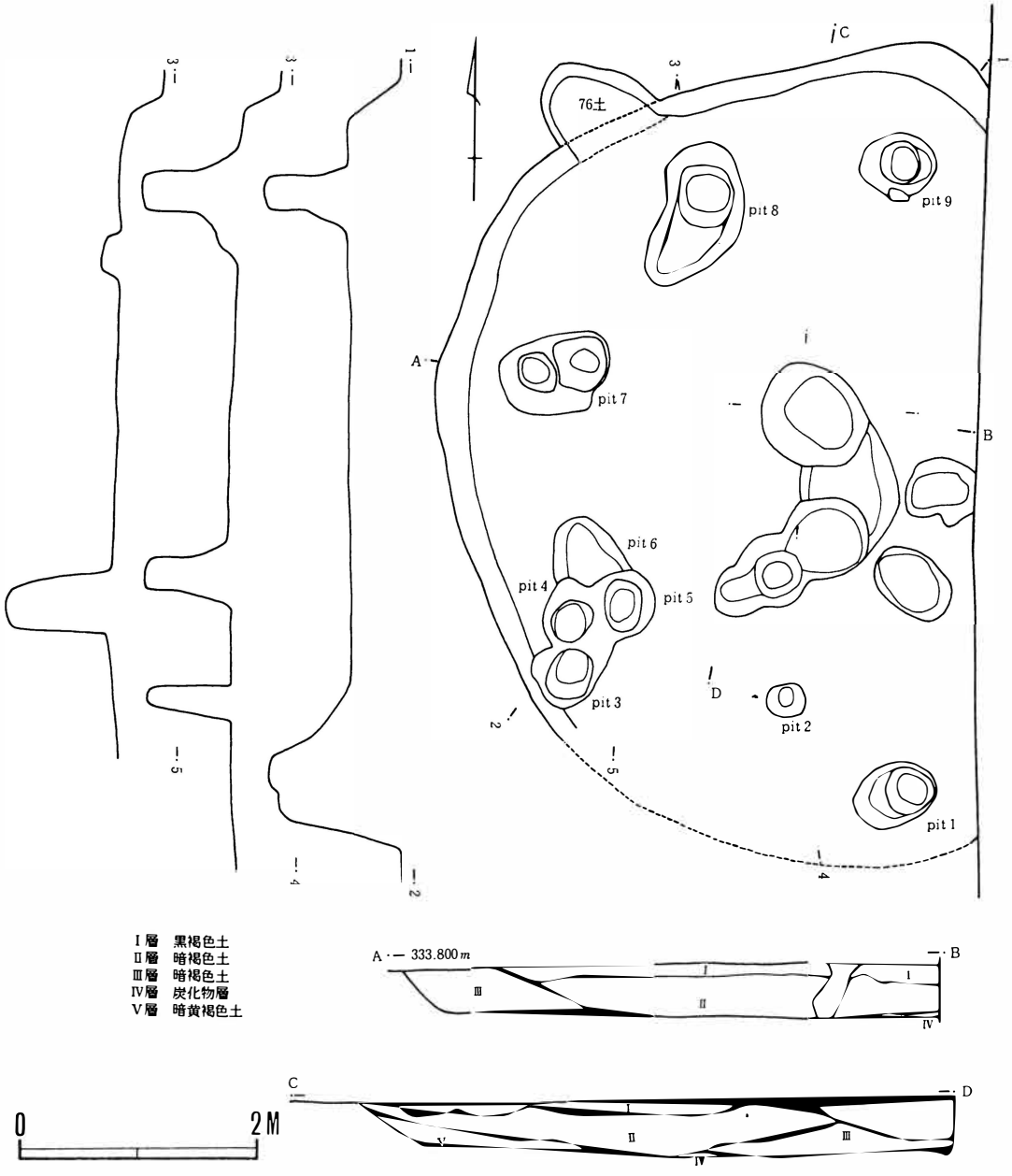
第22図　19号住居址出土土器

(8) 20号住居址（第23・24図）

（位置） N・O※29・30グリッドに位置し、15号住居址によって切られる。

（形状・規模） 住居址東側3分の1が調査区外にあるため全体プランは明らかではないが、直径7ｍ程の円形を呈すると考えられる。

（床面・壁） 床面は全体的に踏み固められており、ほぼ平坦である。壁は南側が15号住居址によって切られるが、残存部では30～50㎝位の立ち上がりをなす。



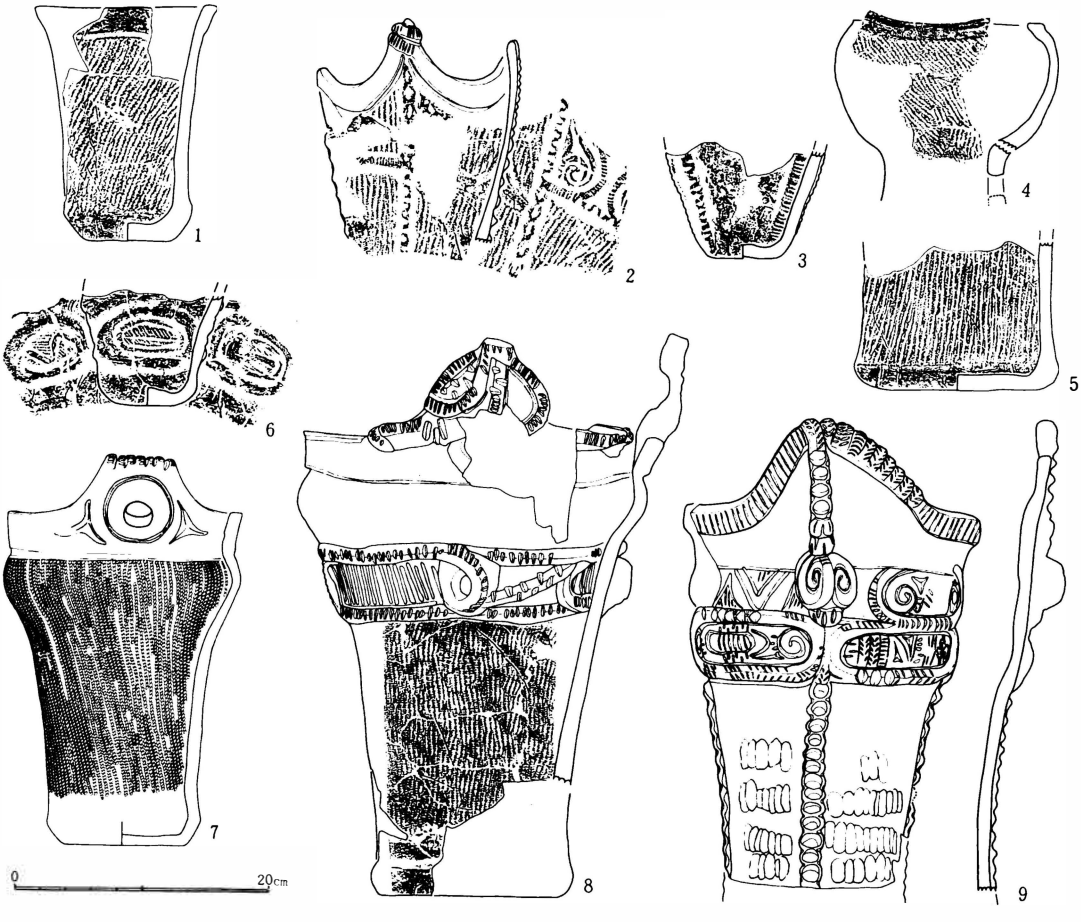
第23図 20号住居址

（炉）　炉は住居址のほぼ中央にあると推定され、直径約１ｍの不整円形の地床炉である。深さは床面から15㎝を測る。

（その他の施設）　ピットは14ケ所で確認されているが、主柱穴と考えられるピット１、３～９は炉を中心に半径２～３ｍの距離を巡る。柱穴は１ケ所に複数の切り合いが認められるものもあり、何回かの柱の立て替えがあったと思われる。単一の柱穴は50㎝前後の円形ピットで、深さ70～90㎝を測る。

（出土遺物）　１．深鉢形土器。口縁部を無文帯とし、その下部全体を縄文が覆う。　２．波状口縁の深鉢形土器。突起の下部に連鎖状隆帯が垂下し、胴部には三叉文と渦巻き文をもつ区画と縄文が施される。　４．内湾口縁部を有する土器で、胴下半部に円形の透かしの痕跡が認められる。胴部を縄文が覆う。　７．円形の貫通孔を有する山形突起をもつ深鉢形土器。胴部は全縄文で、突起部に玉抱き三叉文が表現される。　８．山形突起をもつ深鉢形土器。頸部を楕円区画帯が巡り、胴部を縄文で覆う。　９．山形突起を有する深鉢形土器。胴上部に隆帯による楕円区画帯が巡り、四方に連鎖状隆帯が垂下する。胴部に指頭圧痕が残る。

以上の土器は縄文時代中期中葉の井戸尻式に比定される。



第24図　20号住居址出土土器

⑼ 21号住居址（第25・26図）

（位置） Q・R※35～37グリッドに位置し、20号方形周溝墓によって切られる。

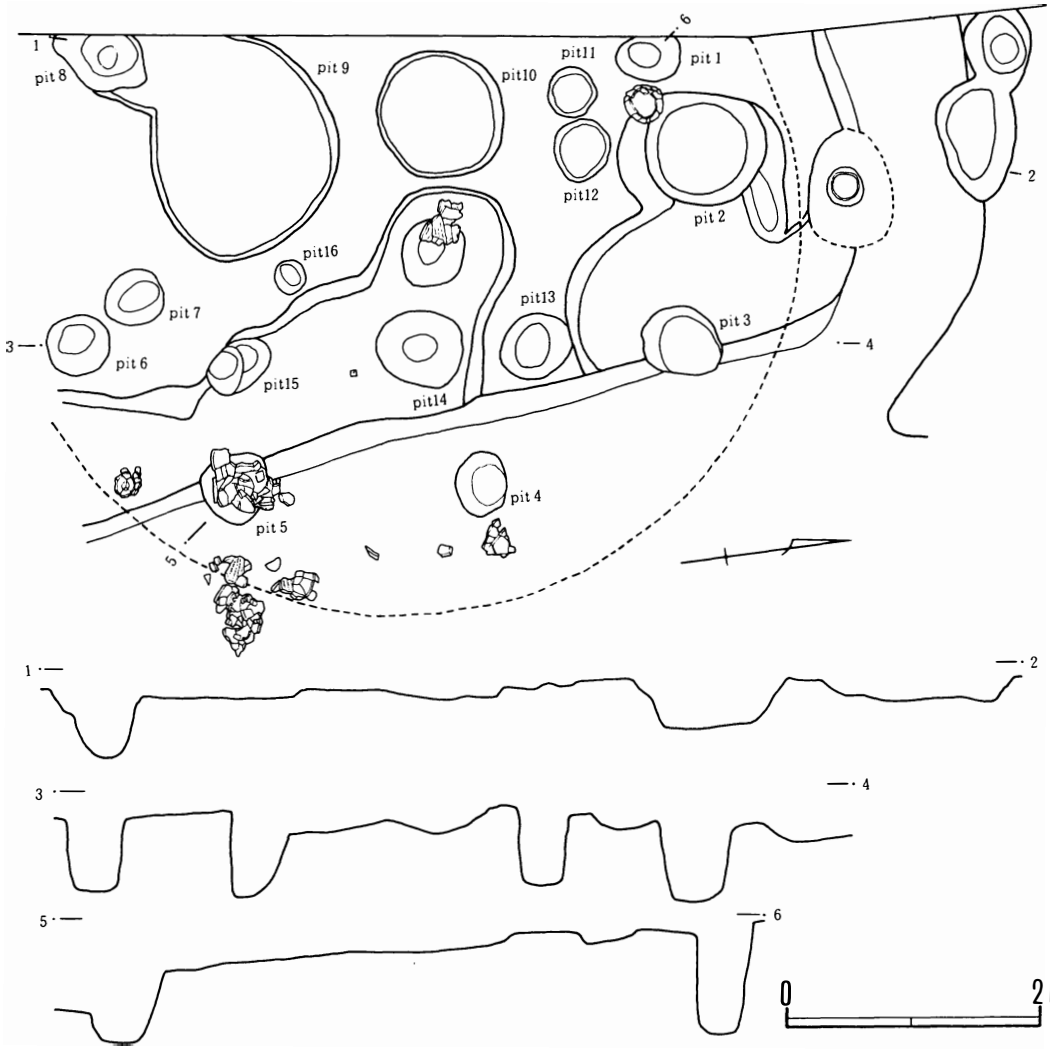
（形状・規模） ピットの配置から直径６ｍ程の円形プランをなすと思われるが、詳細は不明である。

（床面・壁） 遺構確認面で既に床面と壁が削平された状態で検出された。

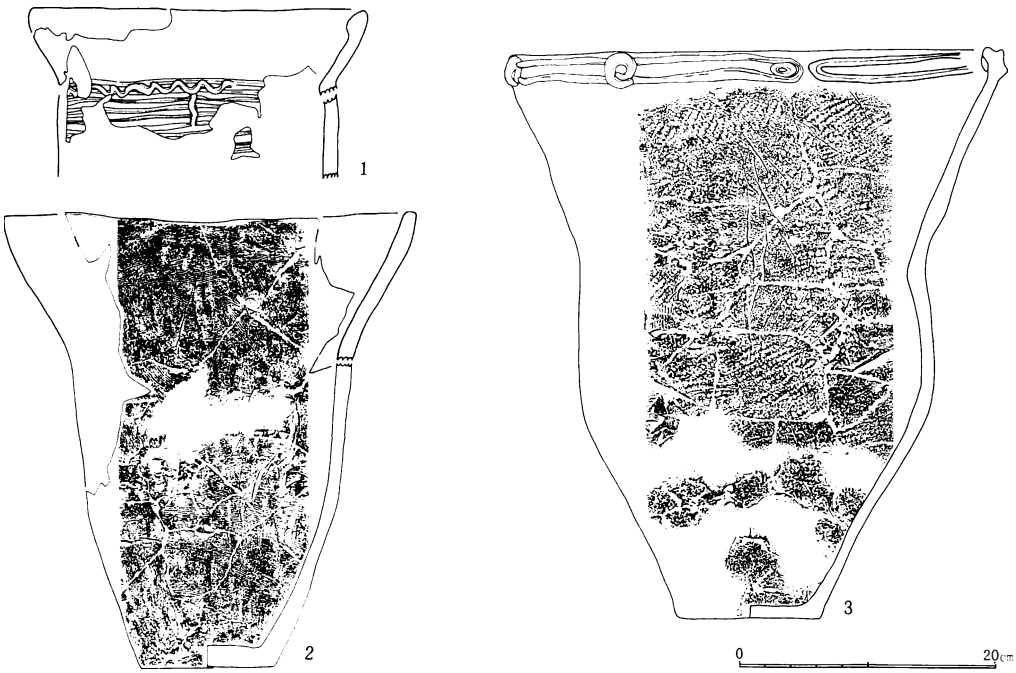
（炉） 既に炉上面が無くなっているが、埋甕炉であったと推定される。掘り方は直径１ｍ程で周囲にテラスをもつ。

（その他の施設） ピットは16ケ所で確認され、柱穴と考えられる深い掘り込み部が炉を中心に半径２～３ｍの距離で巡る。柱穴と考えられるものはピット１、３～８で、いずれも直径約50㎝、深さ50～80㎝を測る。

（出土遺物） １．深鉢形土器胴上部。口縁部を無文で残し、頸に蛇行隆帯による懸垂文を施



第25図　21号住居址



第26図　21号住居址出土土器

している。　2．口縁部が外方へ開く深鉢形土器。器面全体をきめの細かい撚糸文が覆う。胴部中程に結節縄文が横走する。色調は赤褐色である。口径30㎝、器高35㎝を測る。　3．2よりやや大型の深鉢形土器。口縁部に隆帯による文様帯、胴部に縄文が施される。口径39㎝、器高45㎝を測る。いずれも曽利Ⅱ式に対比されよう。

⑽　22号住居址（第27・28図、図版3）

（位置）　Q・R※32・33グリッドに位置し、118号方形周溝墓に切られる。

（形状・規模）　住居址東半分が調査区外へ伸びるが、直径7ｍ程の円形乃至楕円形を呈すると考えられる。

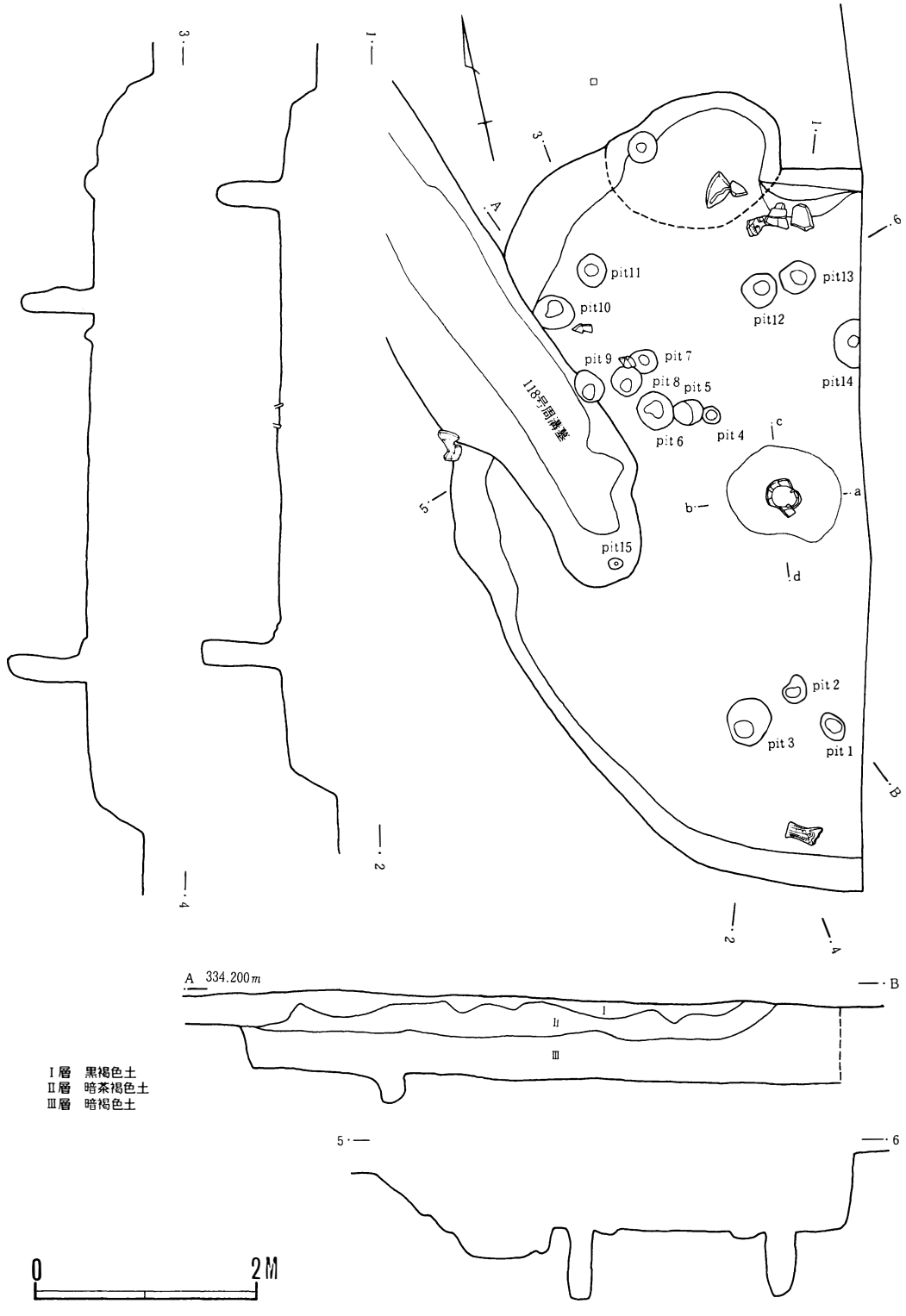
（床面・壁）　床面は良く踏み固められており、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりはなだらかで、高さ50㎝を測る。

（炉）　炉の形態は埋甕炉である。掘り方は90×110㎝の不整楕円形を呈し、深さ20㎝を測る。

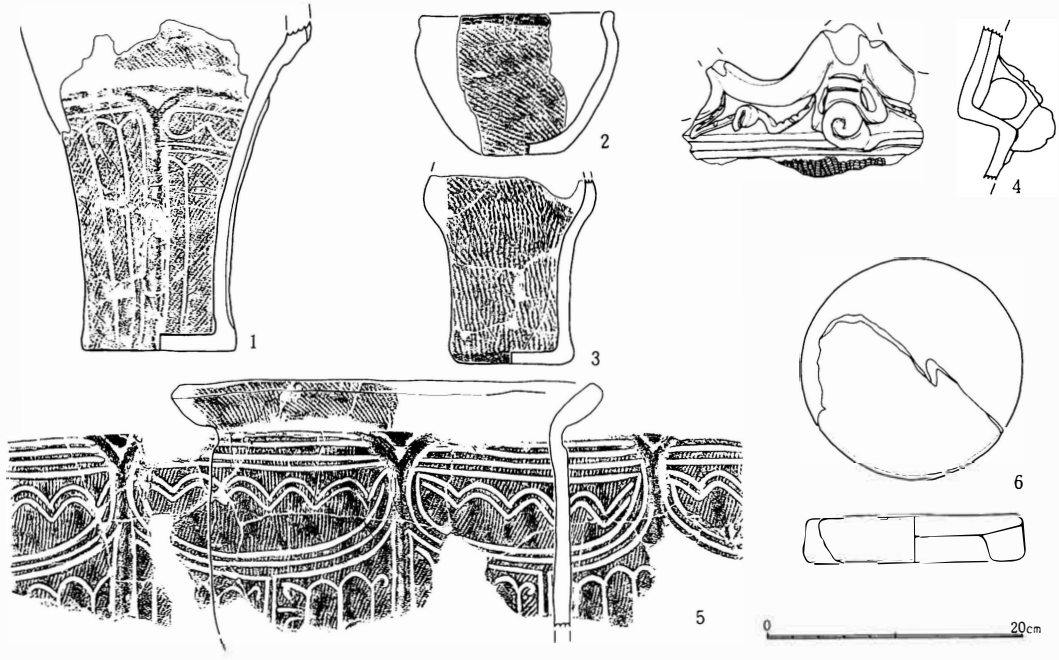
（その他の施設）　ピットは15ケ所検出され、この内ピット3・8・9・12・13・15が主柱穴と考えられる。柱穴は直径25～40㎝の小ピットであるが、深さは70㎝前後と深い。

（出土遺物）　第28図が本住居址出土土器である。

1．深鉢形土器。口縁部に向かって外反する。地文に縄文をもち、胴部に隆帯によるＹ字状文が垂下する。また胴部には沈線による弧状文やＹ字状文が地文の上から描かれる。　2．縄文を施した塊状の鉢形土器。　3．全縄文を施した深鉢形土器。　4．口縁部が屈曲し、内部空洞の把手をもつ山形突起を有する深鉢形土器口縁部。胴部には縄文が認められる。　5．炉


pit11
pit13
pit10
pit12
pit14
pit 9
pit 7
pit 8
pit 5
pit 6
pit 4
pit15
pit 2
pit 3
pit 1
118号周溝墓
A 334.200m
B
Ⅰ層 黒褐色土
Ⅱ層 暗茶褐色土
Ⅲ層 暗褐色土
0
2M

第27図　22号住居址



第28図　22号住居址出土土器

に使用されていた深鉢形土器。口縁部が肥厚し、外反する。口縁部から胴部を地文の縄文が覆い、胴部にＹ字状隆帯と沈線による弧状文、楕円区画文などを施す。口径 32㎝、現存高 20㎝を測る。　6．器台形土器。半壊するが直径 17㎝、器高 4 ㎝を測る。

1、5が五領ヶ台式、2～4、6は井戸尻式に対比される。

⑾　23号住居址（第29・30図）

（位置）　22号住居址の北Ｑ・Ｒ※33・34グリッドに位置し、118号方形周溝墓に切られる。

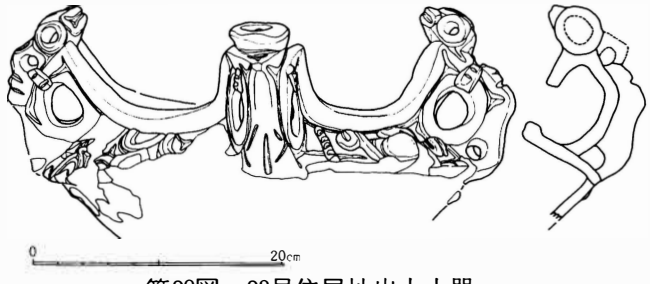
（形状・規模）　壁が既に削平されているため、全体の形状・規模は不明である。

（床面・壁）　床面は炉周辺でわずかに認められ、壁は削平されている。

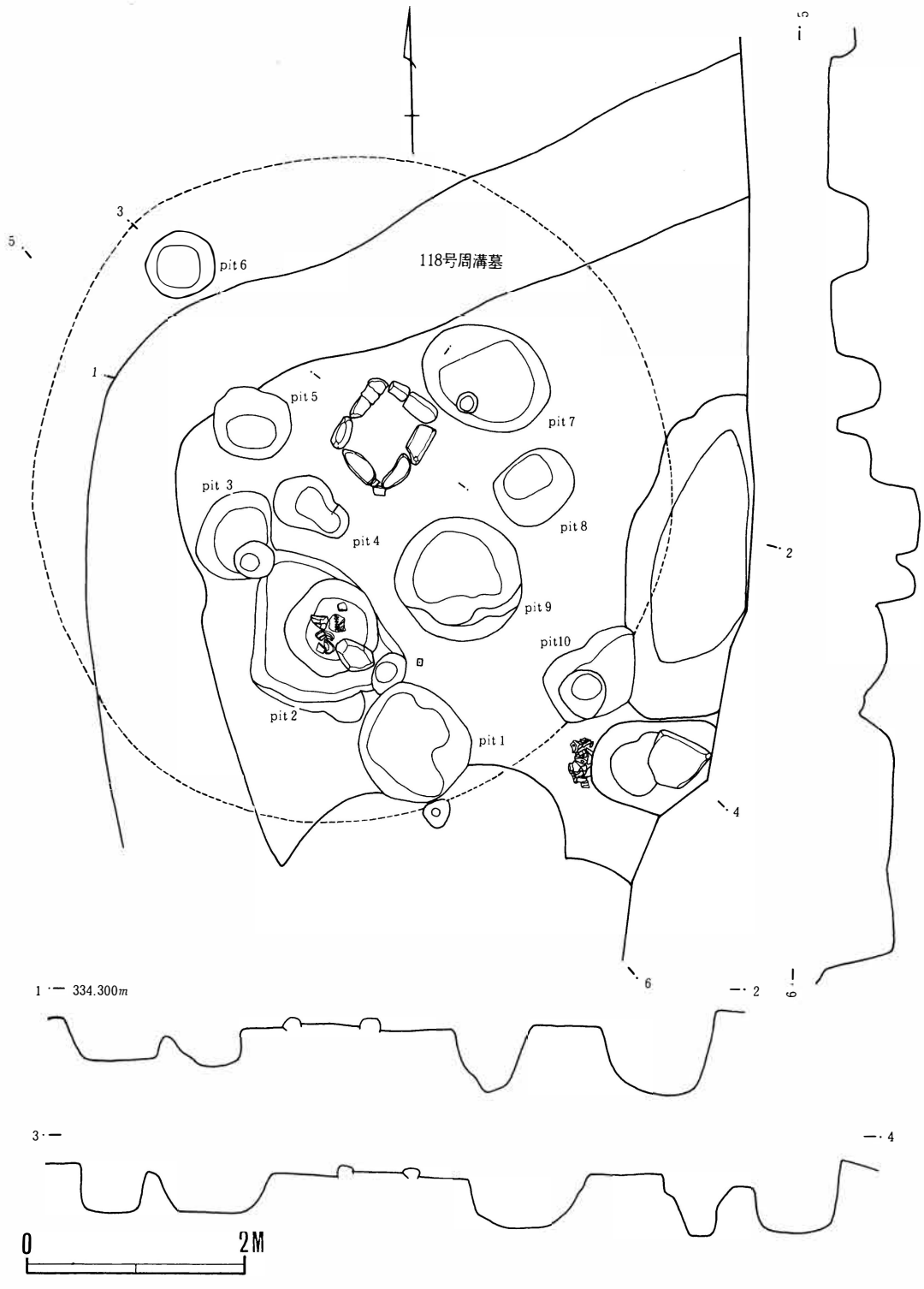
（炉）　長さ 30～50㎝の礫を長方形に配列した石囲い炉である。炉の 1 辺は長辺 1 ｍ、短辺 80 ㎝を測る。

（その他の施設）　ピットは10ケ所で確認されているが、ピット6、10以外は柱穴かどうか判断しがたい。ピットの直径は小さいもので 50㎝、大きいもので 150㎝を測る。

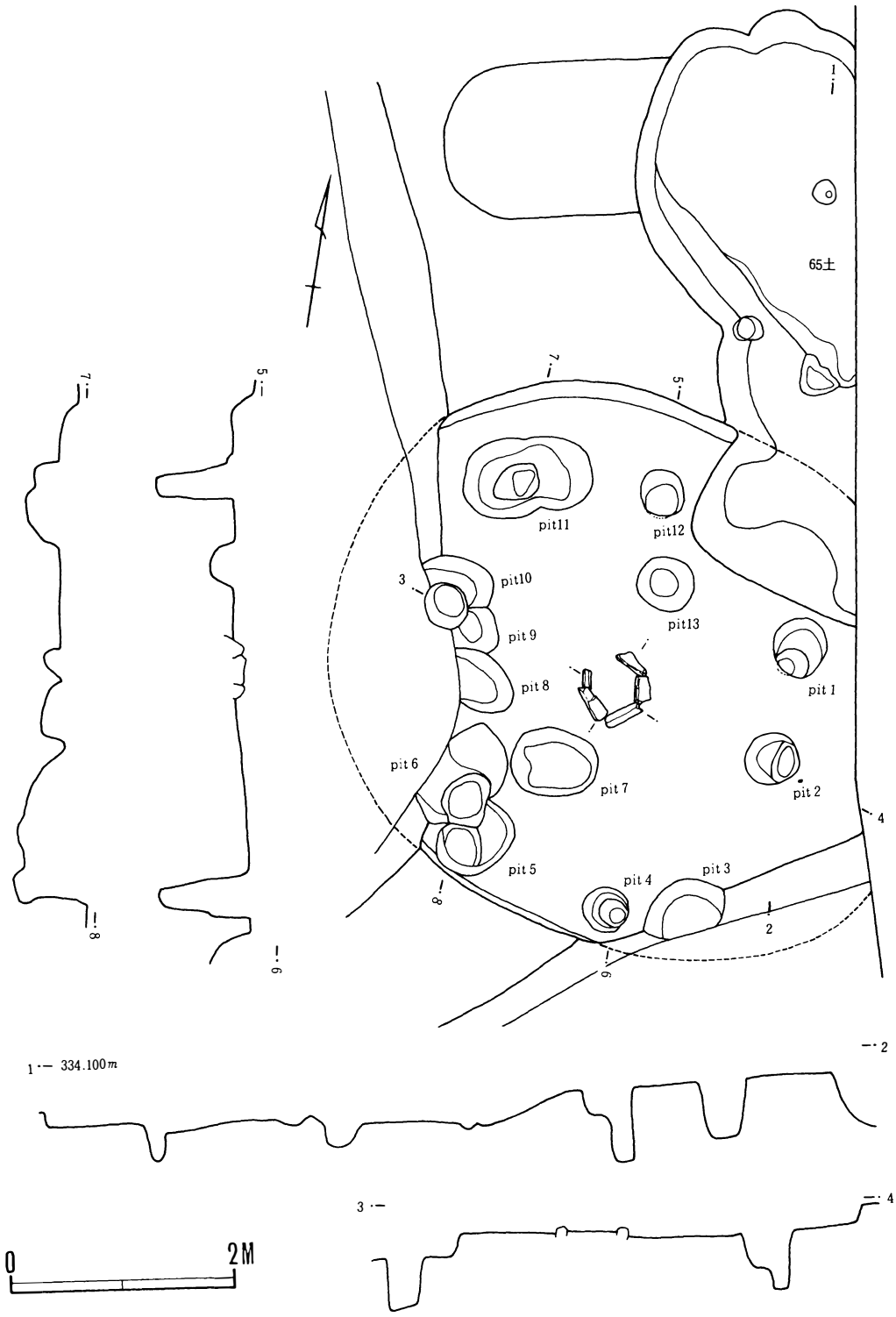
（出土遺物）　第29図が本住居址出土土器である。口縁部がくの字状に屈曲し、4 単位の把手を有する深鉢形土器である。把手の内部は空洞で外側に 2 つ、内側に 1 孔を有する。2 つの把手の頭部には動物の顔面が表現されている。井戸尻式土器に比定されるが、22号住覆土中の同時期土器も本住居からの混入と推定される。



第29図　23号住居址出土土器


118号周溝墓
pit 1
pit 2
pit 3
pit 4
pit 5
pit 6
pit 7
pit 8
pit 9
pit10
1
2
3
4
5
6
334.300m
0
2M

第30図　23号 住 居 址


65土
pit11
pit12
pit10
pit13
pit 9
pit 8
pit 1
pit 6
pit 7
pit 2
pit 5
pit 4
pit 3
1
2
3
4
5
6
7
8
1— 334.100m
0
2M

第31図　24号住居址

⑿ **24号住居址**（第31・32図、図版３）

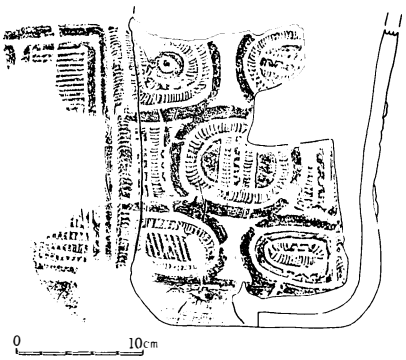
（位置） Ｒ・Ｓ※35・36グリッドに位置し、20号、118号方形周溝墓に切られる。

（形状・規模） 残存する南北の壁の距離は４ｍ75㎝を測るが、全体プランは不明である。

（床面・壁） 床面は炉周辺が良く踏み固められている。壁は住居址南北で15㎝程の立ち上がりが認められるのみである。

（炉） 長さ30㎝前後の礫を配した石囲い炉である。炉の掘り方は直径70㎝程の円形プランで、深さ25㎝を測る。

（その他の施設） ピットは13ケ所で検出された。柱穴と考えられる落ち込みはピット１・２・４・５・１４・12で、炉を中心に１ｍ～１ｍ50㎝の距離で円形に巡る。柱穴はいずれも直径50㎝の円形ピットで深さ60～80㎝を測る。



第32図　24号住居址出土土器

（出土遺物） 第32図が本住居址出土土器である。円筒状の深鉢形土器胴下半部である。隆帯によって楕円形や長方形の区画をなし、その内部を押し引文や円文、三叉文、平行沈線などで充填する。底径15㎝、現存高25㎝を測る。

中期中葉の藤内式に対比される。

⒀ **25号住居址**（第33・34図）

（位置） Ｋ・Ｌ※25・26グリッドに位置し、25号・26号住居址に切られる。

（形状・規模） 遺構の切り合いと調査区の関係で全体のプランは不明であるが、残存部の最大径は５ｍ30㎝程である。

（床面・壁） 床面はわずかに残存する。壁はなだらかに立ち上がり、壁高35㎝を測る。

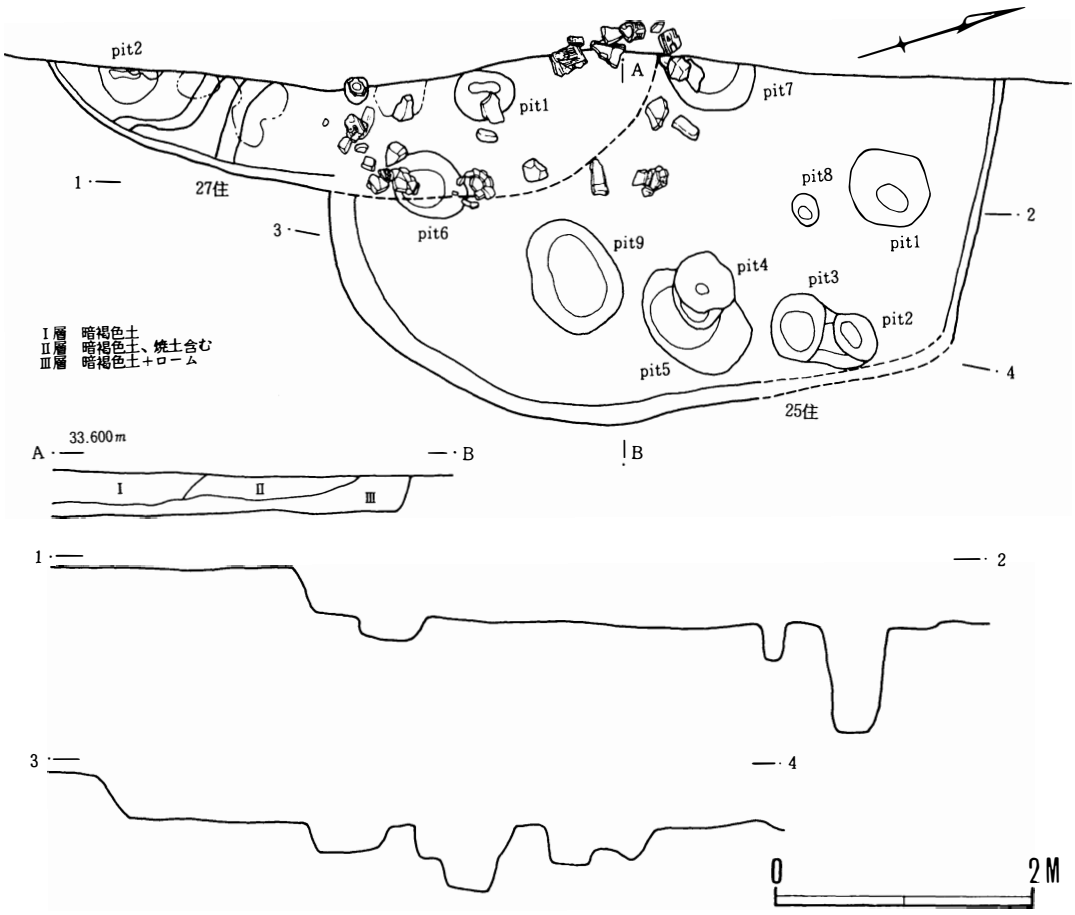
（炉） 炉は調査区内では確認されなかった。

（その他の施設） ピットは８ケ所で確認されているが、壁際を巡るピット１～６が柱穴と考えられる。

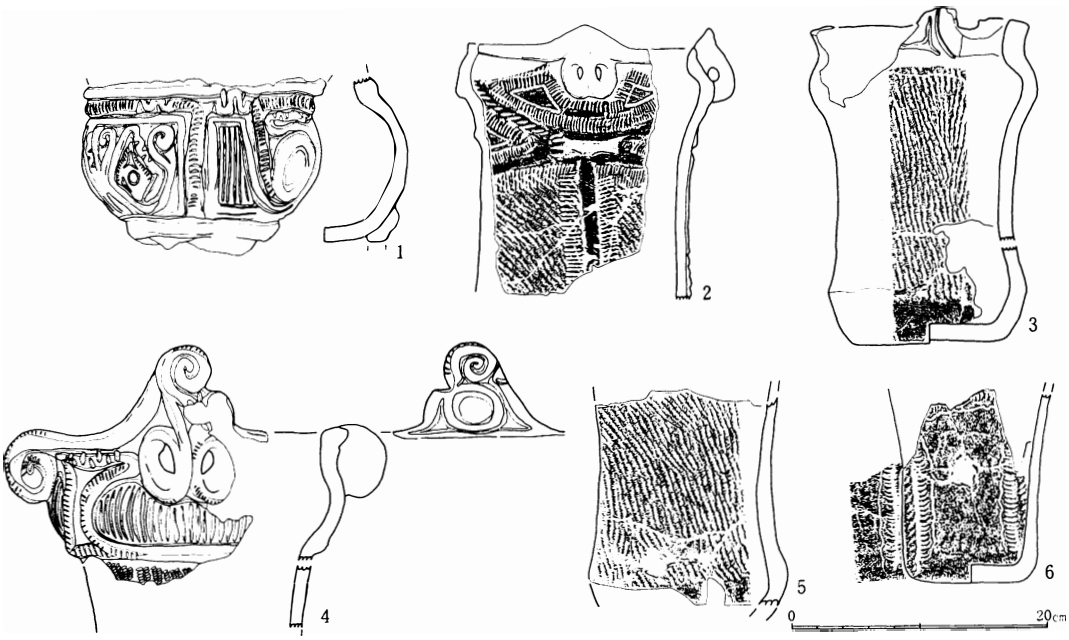
（出土遺物） 第34図が本住居址出土土器である。

１．透かしを持つ高台付きの鉢形土器。胴部が内湾し、口縁部が広がる。胴部は隆帯によって区画され、内部を三叉文や渦巻文、平行沈線で埋める。高台の透かしは曲線的で４ケ所に存在した形跡がある。　２．内湾口縁部を有する深鉢形土器。口縁部に双孔把手をもち、口縁部文様帯には隆帯による三角形と船底形の区画が巡る。この区画内と胴部隆帯に沿って連続の押し引文が施され、胴部には縄文が施文される。　３．やや屈折した底部を持つ深鉢形土器。口縁部に把手の形跡が認められ、胴部を縄文が覆う。　４．山形突起をもつ深鉢形土器。口縁部に隆帯による楕円区画を巡らし、４ケ所に把手を付加する。区画内は平行沈線で埋められ、胴部は縄文が施される。　５．３と同様屈折底をもつ深鉢形土器。胴部は縄文が覆う。　６．深鉢胴下半部。隆帯とキャタピラ文による抽象文を施文する。

以上の土器はいずれも藤内式に対比される。



第33図　25号・27号住居址



第34図　25号住居址出土土器

⑭ **29号住居址**（第35・36図、図版２）

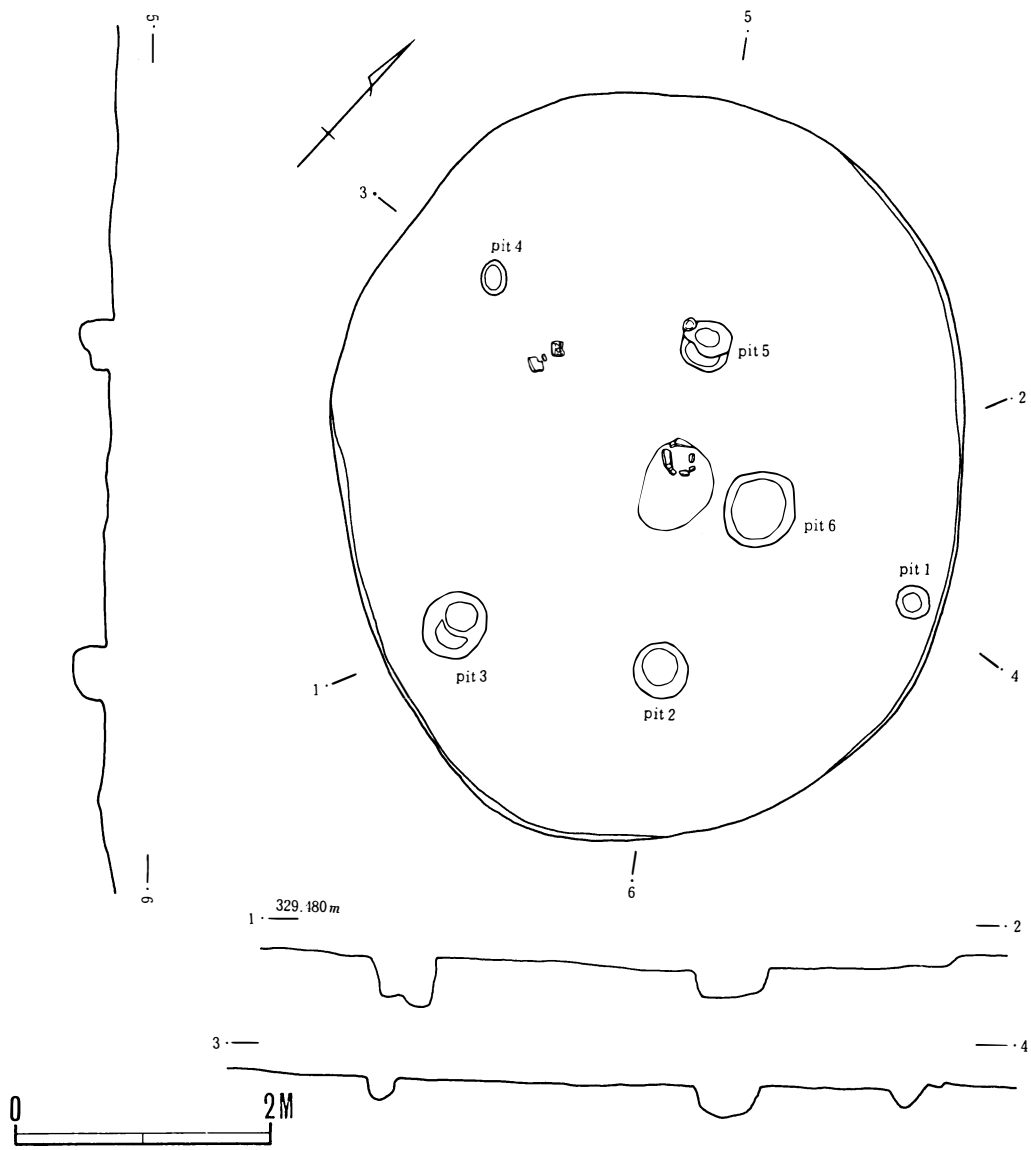
（位置） 調査区南端のＪ※２・３グリッドに位置する。

（形状・規模） 長軸６ｍ、短軸５ｍの楕円形を呈する。

（床面・壁） 床面は炉周辺で認められ、周囲は軟弱である。壁は既にほとんど削平され、残存部で高さ10㎝程である。

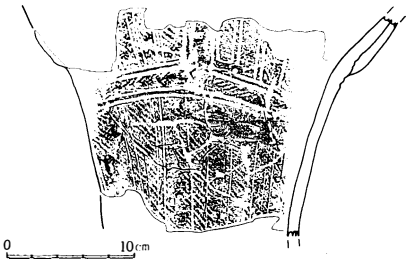
（炉） 住居址中央に位置した埋甕炉である。掘り方は90×75－25㎝の楕円形で、炉北寄りに土器を埋設する。

（その他の施設） ピットは６ケ所で確認されたが、その配列は散在的である。ピットの大きさも25㎝～60㎝とばらつきがある。



第35図　29号住居址

（出土遺物）　第36図が本住居址出土土器で炉体土器として使用されていた土器である。口縁部および胴下半部を欠損しているが、口縁部方向に外反する器形と考えられる。頸部及び口縁部の一部に隆帯を付加し、器面全体に縄文を転がす。地文の上から半截竹管による平行沈線を縦走させる。中期初頭の五領ヶ台式に比定される。



第36図　29号住居址出土土器

2．土坑と出土遺物

土坑は調査区北側の縄文時代の住居址群と激しく切り合い関係をもちながら集中して分布し、調査区南側ではむしろ例外的な存在となる傾向を示している。

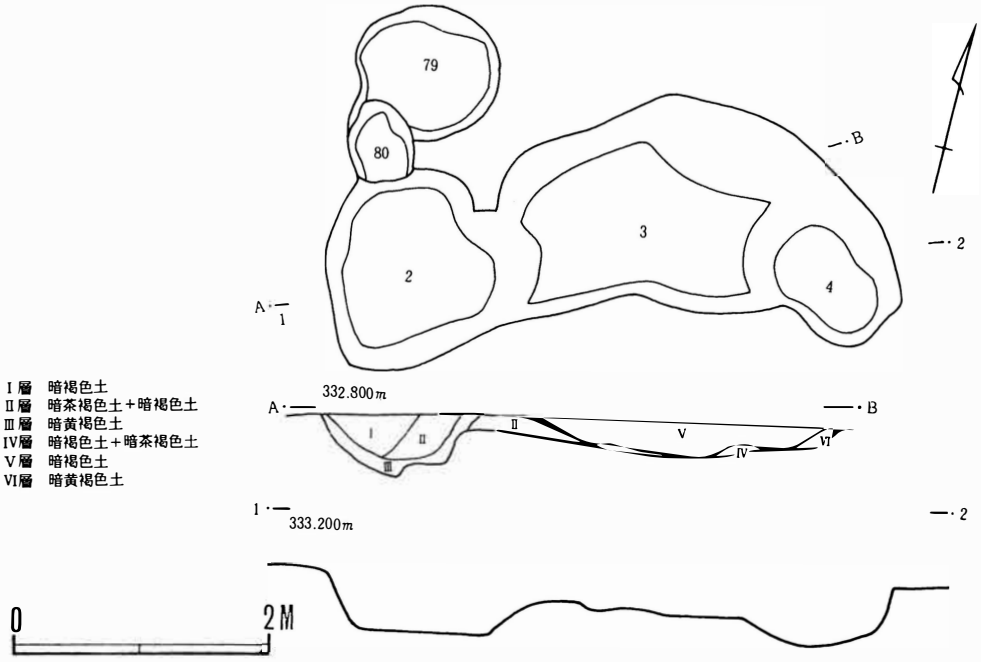
表1　土　坑　一　覧

番号	位　置	形　態		規　模			坑底	時　期	備　考
		平面図	断面形	長軸	短軸	深さ			
1	M※20.21	不整円形	鍋底状	240	200	65	平　坦	五領ヶ台式	
2	L※21	不　整　形	鍋底状	170	160	60	テラス有	五領ヶ台式	3土、80土と重複
3	L.M※21	（楕円形）	皿　状	(300)	160	40	平　坦	五領ヶ台式	2土、4土と重複
4	L※21	楕　円　形	皿　状	130	100	50	平　坦	五領ヶ台式	3土と重複
6	K※15	楕　円　形	皿　状	140	100	?	平　坦	井戸尻式	
7	G※6	不整楕円形	鍋底状	220	160	60	テラス有		
8	F※6	楕　円　形	円筒状	140	60	80	丸　底		
9	E※6	楕　円　形	皿　状	100	70	30	平　坦	井戸尻式	
10	P※35	（円　形）	皿　状	(140)		25	平　坦	井戸尻式	17住と重複
11	P※35	楕　円　形	鍋底状	90	80	55	平　坦	井戸尻式	17住と重複
12	N※25	不　整　形	皿　状	270	120	15	平　坦	五領ヶ台式	12住と重複
13	R※35.36	円　形	円筒状	95	95	86	平　坦		118周溝墓に切られる
14	R※38	楕　円　形	鍋底状	125	100	50	平　坦	五領ヶ台式	19土と重複
16	Q※35.36	楕　円　形	皿　状	100	85	30	平　坦	曽利式	
17	P※35	不　明	皿　状	?	?	10	平　坦		118周溝墓に切られる
18	Q※36	円　形	皿　状	95	95	11	平　坦	狢沢式	
19	R※38	楕　円　形	皿　状			10	平　坦	五領ヶ台式	14土と重複
20	R※38	楕　円　形	鍋底状	110	90	60	平　坦	井戸尻式	
21	R※36	不　明	皿　状	?	?	20	平　坦	五領ヶ台式	118周溝墓に切られる
22	Q.R※36.37	不　整　形	皿　状	?	?	20	平　坦		21住と重複
23	R※33	楕　円　形	鍋底状	(130)	80	50	平　坦	井戸尻式	

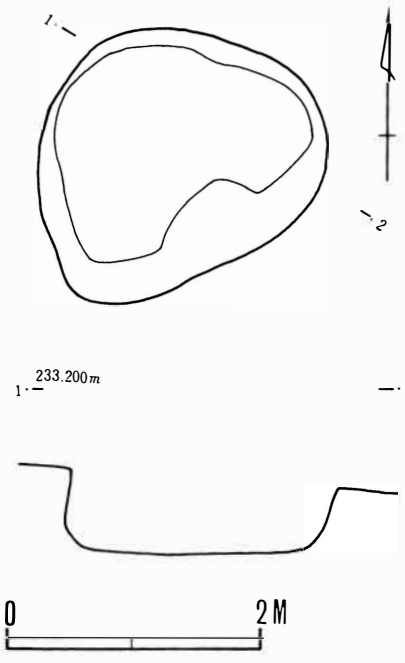
番号	位置	形態		規模			坑底	時期	備考
		平面図	断面形	長軸	短軸	深さ			
25	R※37	不明	皿状	?	?	20	平坦		21住と重複
26	Q※36.37	(円形)	皿状	160	150	10	平坦		
27	Q※37	円形	皿状	100		10	平坦		
28	Q※38	楕円形	皿状	100	65	18	平坦		20周溝墓に切られる
29	Q※38	円形	円筒状	60	60	53	テラス有		
30	R※38	円形	円筒状	60	50		テラス有		
31	P※33	楕円形	すり鉢状	220	180	60	平坦	藤内式	34土と重複
32	P※33	楕円形	すり鉢状	145	110	70	テラス有	井戸尻式	16住と重複
33	Q※33	楕円形	皿状	(120)	(100)	40	平坦	井戸尻式	
34	P※33	楕円形	皿状	160	120	25	平坦	五領ケ台式	31土と重複
35	Q※37	円形	鍋底状	90		30	平坦		25土と重複
36	Q※37	不明	皿状	?	?	20	平坦	曽利Ⅲ式	20周溝墓に切られる
37	S※38	不整形	鍋底状	270	(200)	53	平坦 小穴1		18住と重複
38	R.S※38	円形	鍋底状	100	100	40	平坦	曽利式	
39	R※39	楕円形	皿状	115	100	22	テラス有		
40	Q.R※33	(楕円形)	鍋底状	?	120	50	平坦		22住と重複
41	Q※34	不整円形	すり鉢状	105	(105)	70	小穴1	藤内式	
42	L※27	楕円形	鍋底状	(160)	110	95	平坦	藤内式	クリ、クルミ出土
43	M※27	楕円形	鍋底状	?	105	65	凹凸有	新道式	51土と重複
44	L※27	不明	鍋底状	?	100	60	平坦	新道式	51土と重複
45	M※28	楕円形	皿状	85	70	10	ほぼ平坦		
46	N※28	不整円形	皿状	55	45	25	ほぼ平坦		
47	N※29	隅丸五角形	鍋底状	120	100	48	平坦		
48	N※29	楕円形	皿状	170	120	30	やや凹凸有	藤内式	81土と重複
49	N※29	楕円形	袋状	100	70	50	丸底		
50	N※29	円形	円筒状	60	60	80	テラス有		
51	M※27	楕円形		130	100	55	テラス有		
52	O※30	円形	鍋底状	65	65	40	小穴1		
53	N※30	不整形	皿状	140	120	30	やや凹凸有		54土と重複
54	N※30	円形	袋状	50	50	40	丸底		
55	P※32	楕円形	皿状	140	130	36	平坦	五領ケ台式	
56	P※31	不整楕円形	皿状	(200)	110	40	テラス有		
57	P※31	不整楕円形	皿状	170	130	15	平坦		
58	P※32	不整形	皿状	150	100	58	凹凸有		16住と重複

番号	位置	形態		規模			坑底	時期	備考
		平面図	断面形	長軸	短軸	深さ			
59	O※31.32	楕円形	皿状	90	85	45	平坦	五領ケ台式	69土と重複
60	O※32	方形	皿状	85	80	50	凹凸有	五領ケ台式	
61	Q※32	楕円形	皿状	(150)	85	35	平坦		22住と重複
62	O※31	楕円形	鍋底状	(80)	75	45	平坦	井戸尻式	
63	P※31	楕円形	すり鉢状	60	50	27	丸底	五領ケ台式	
64	P※31	楕円形	皿状	50	40	20	平坦		
65	S※35.36	不整形	皿状	?	?	45		五領ケ台式	コナラ属種子出土
66	O※31	不整楕円形	鍋底状	130	90	40	平坦1 小穴1		
67	P※32	楕円形	皿状	110	75	40	テラス有 小穴1		16住と重複
68	O※31	三角形	皿状	50	50	15	平坦	新道式	
69	O※31	楕円形	皿状	170	110	40	テラス有	井戸尻式	59土と重複
70	O※31	楕円形	皿状	90	75	24	ほぼ平坦		
71	P※32	不整円形	皿状	?	60	20	平坦		16住と重複
72	N※28	楕円形	鍋底状	150	130	50	平坦	藤内式	
73	N※28～2	楕円形	鍋底状	215	145	60	平坦	藤内式	83土と重複
74	L※25	楕円形	鍋底状	?	160	55	平坦		82土に切られる
75	M※25	円形	円筒状	90	90	60	平坦		78土と重複
77	L※22	楕円形	皿状	130	110	27	平坦		
78	M※25	円形	皿状	60	60	20	平坦		75土と重複
79	L※21	円形	皿状	110	110	20	平坦		80土と重複
80	L※21	楕円形	円筒状	60	50	50	テラス有		
81	N※29	楕円形		80	70				
82	L※26	楕円形	皿状	150	140	50	平坦	藤内式	74土と重複
83	N※29	(円形)					平坦		73土と重複
84	K※21	楕円形	すり鉢状	135	100	40	テラス有		
85	K※21～22	楕円形	皿状	115	90	10	平坦		86土と重複
86	K※22	楕円形	皿状	90	65	20	平坦		
87	M※26	円形	皿状	100	100	56	平坦		
88	M※26	円形	皿状	110	110	38	平坦	五領ケ台式	

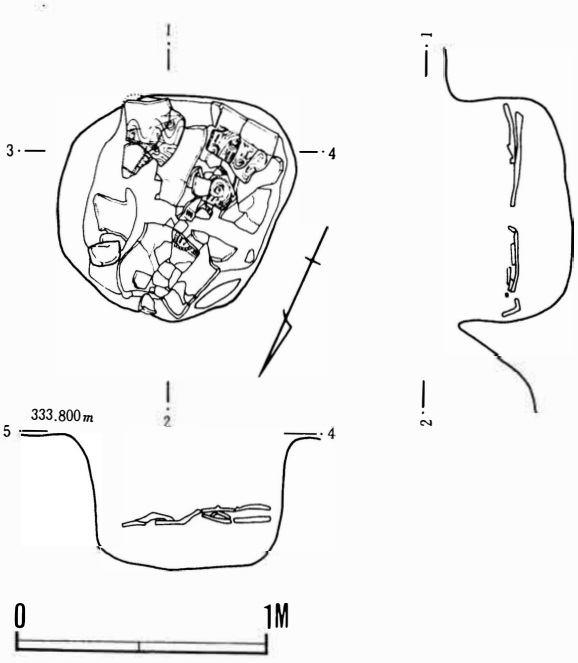
2～4号・79・80号土坑



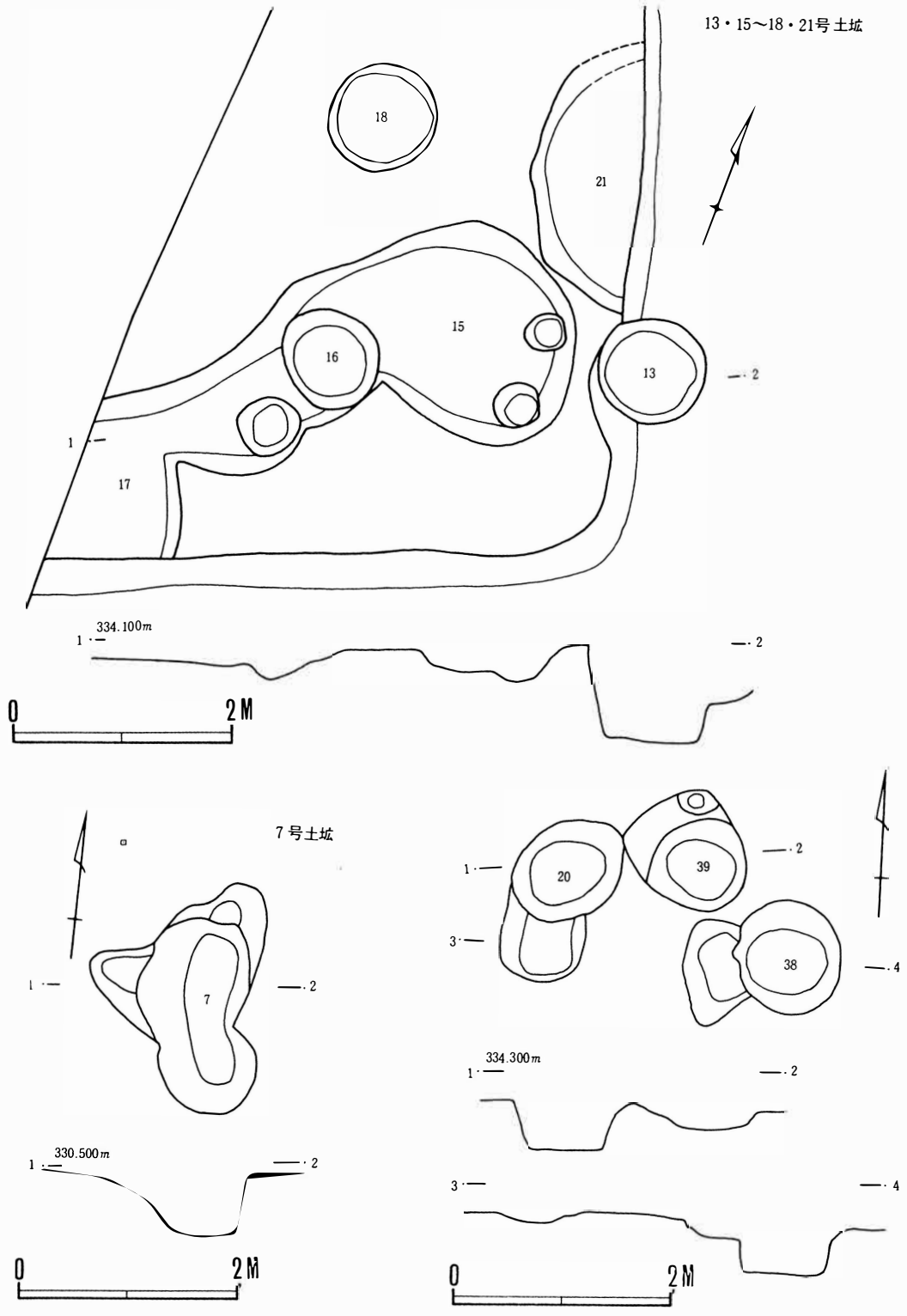
1号土坑



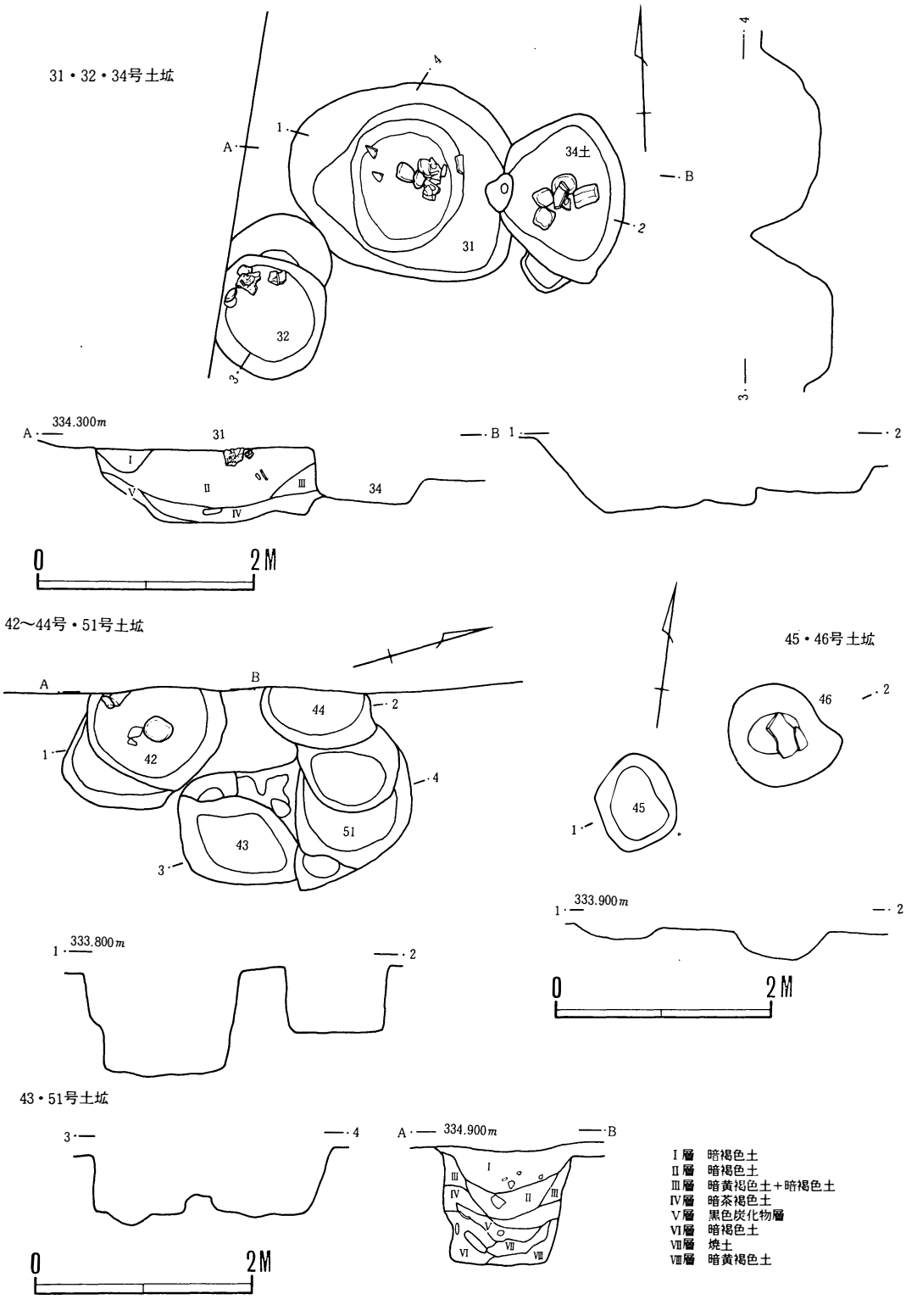
11号土坑



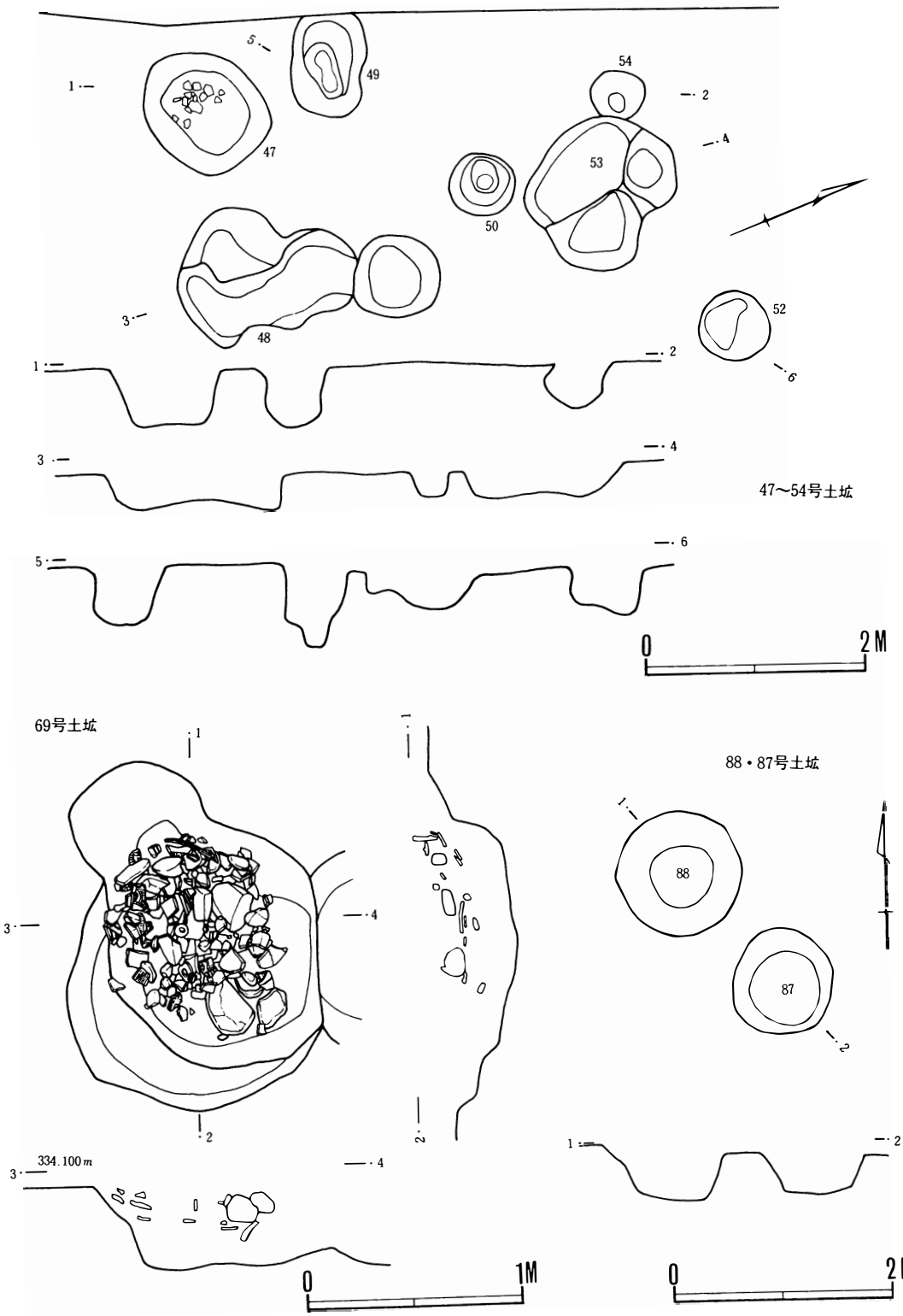
第37図　土　坑　(1)


13・15～18・21号土坑
18
21
15
16
13
2
1
17
334.100m
1
2
0
2M
7号土坑
1
7
2
330.500m
1
2
0
2M
1
20
39
2
3
38
4
334.300m
1
2
3
4
0
2M

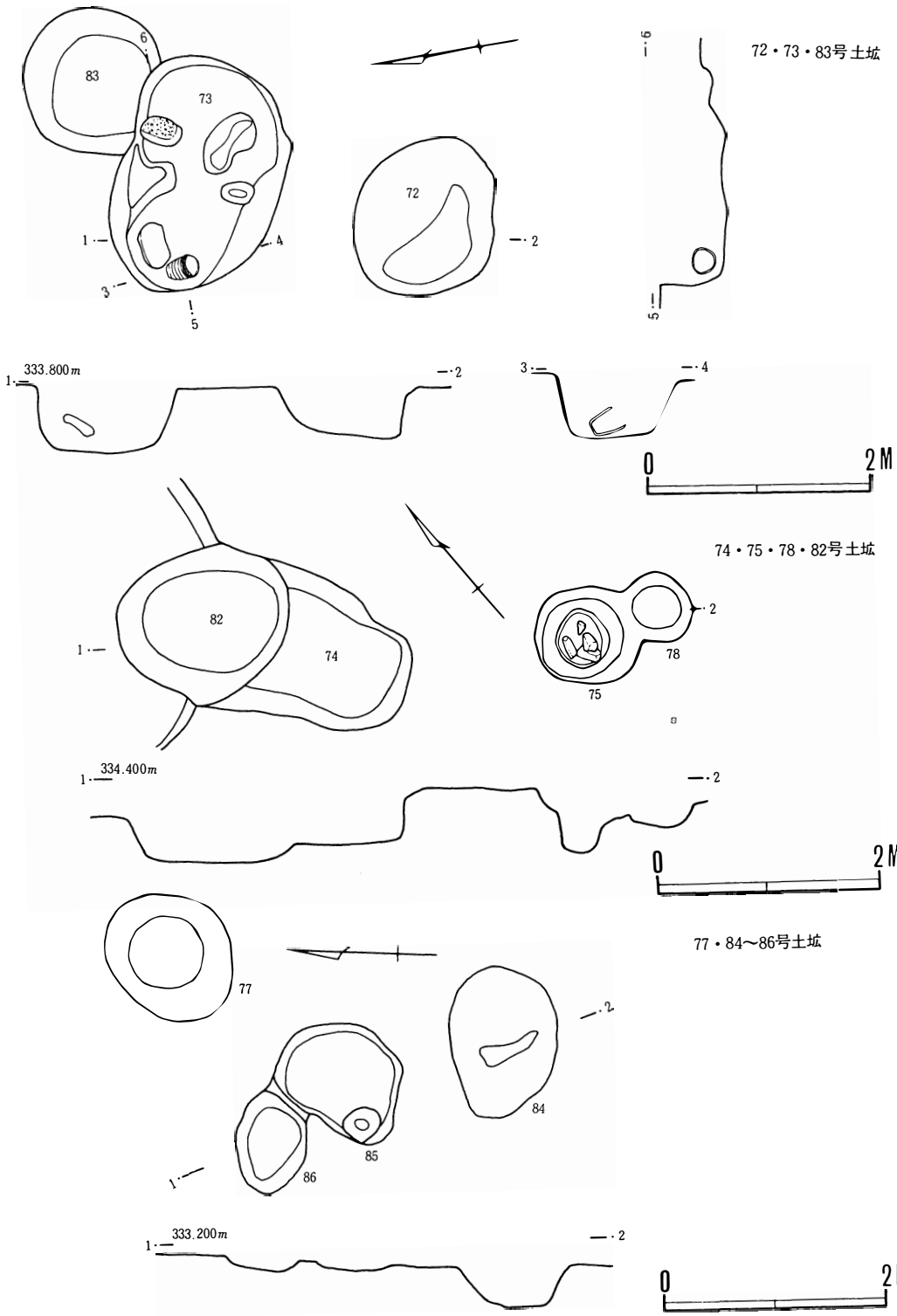
第38図　土　坑　(2)


31・32・34号土坑
A
B
1
2
3
4
31
32
34土
334.300m
I
II
III
IV
V
VI
34
0
2M
42～44号・51号土坑
42
43
44
51
333.800m
45・46号土坑
45
46
333.900m
43・51号土坑
334.900m
I層　暗褐色土
II層　暗褐色土
III層　暗黄褐色土＋暗褐色土
IV層　暗茶褐色土
V層　黒色炭化物層
VI層　暗褐色土
VII層　焼土
VIII層　暗黄褐色土

第39図　土　坑　(3)

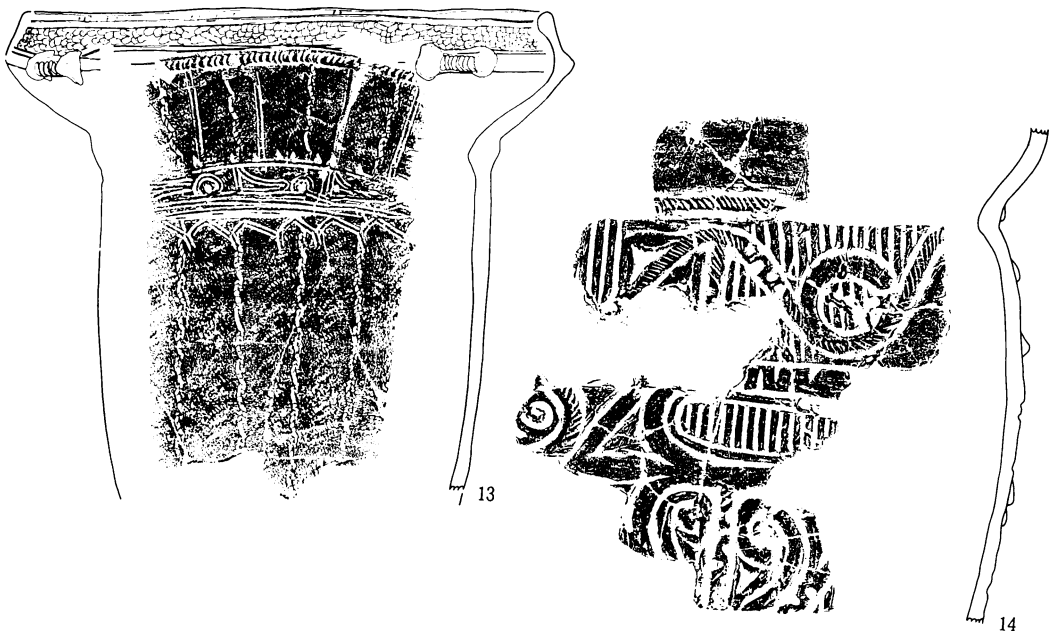


第40図　土　坑　(4)


72・73・83号土坑
83
73
72
333.800m
74・75・78・82号土坑
82
74
78
75
334.400m
77・84～86号土坑
77
84
85
86
333.200m
0
2M

第41図　土　坑　(5)

第42図　土坑内出土土器 (1)



第43図　土坑内出土土器 (2)

土坑内出土土器（第42図、43図）

1．10号土坑。頸部がくびれ、内湾口縁部を有する深鉢形土器。口縁部は無文帯で、胴部を有刻の隆帯によって曲線的に区画する。区画内は三叉文や渦巻文で充填される。

2・4～6．31号土坑。2は波状口縁の深鉢形土器で、胴上部に楕円区画帯・胴下半部に縄文を転がす。4は樽形の深鉢形土器である。6は胴下半部に楕円区画が巡り、胴部に沈線の文様を施す。

3．11号土坑。円筒状の深鉢形土器。波状口縁部の頂部より連鎖状隆帯が垂下し、4単位の文様帯に区切られる。蛇行する隆帯が巡り沈線による三叉文や渦巻文などが施される。

7・8・42号土坑。7は深鉢形土器底部で、隆帯と沈線による文様が認められる。8は円筒状の無文土器である。

9．62号土坑。深鉢胴下半部。ハの字の刻みをもつ隆帯が垂下し、地文に縄文が覆う。

10．69号土坑。深鉢形土器胴下半部。隆帯による楕円区画が巡り、内部を縦位の平行沈線で埋める。

11．73号土坑。深鉢形土器。口縁部に押し引文をもつ隆帯が巡り、胴部は平行する沈線によって5段に分かれる。

12．49号土坑。地文に縄文を転がし、有刻の隆帯を口縁部と胴部に施す。

13．65号土坑。屈折した口縁部をもつ深鉢形土器。口縁部に半截竹管による押し引文が巡り、頸部から胴部にかけて結節縄文が地文となる。

14．69号土坑。頸部にくびれをもつ樽形の深鉢形土器。隆帯によって曲線的な区画をなし、内部を三叉文や平行沈線で充填する。

3. 集石遺構

(1) 1号集石（第44図）

（位置） J※12グリッドに位置する。

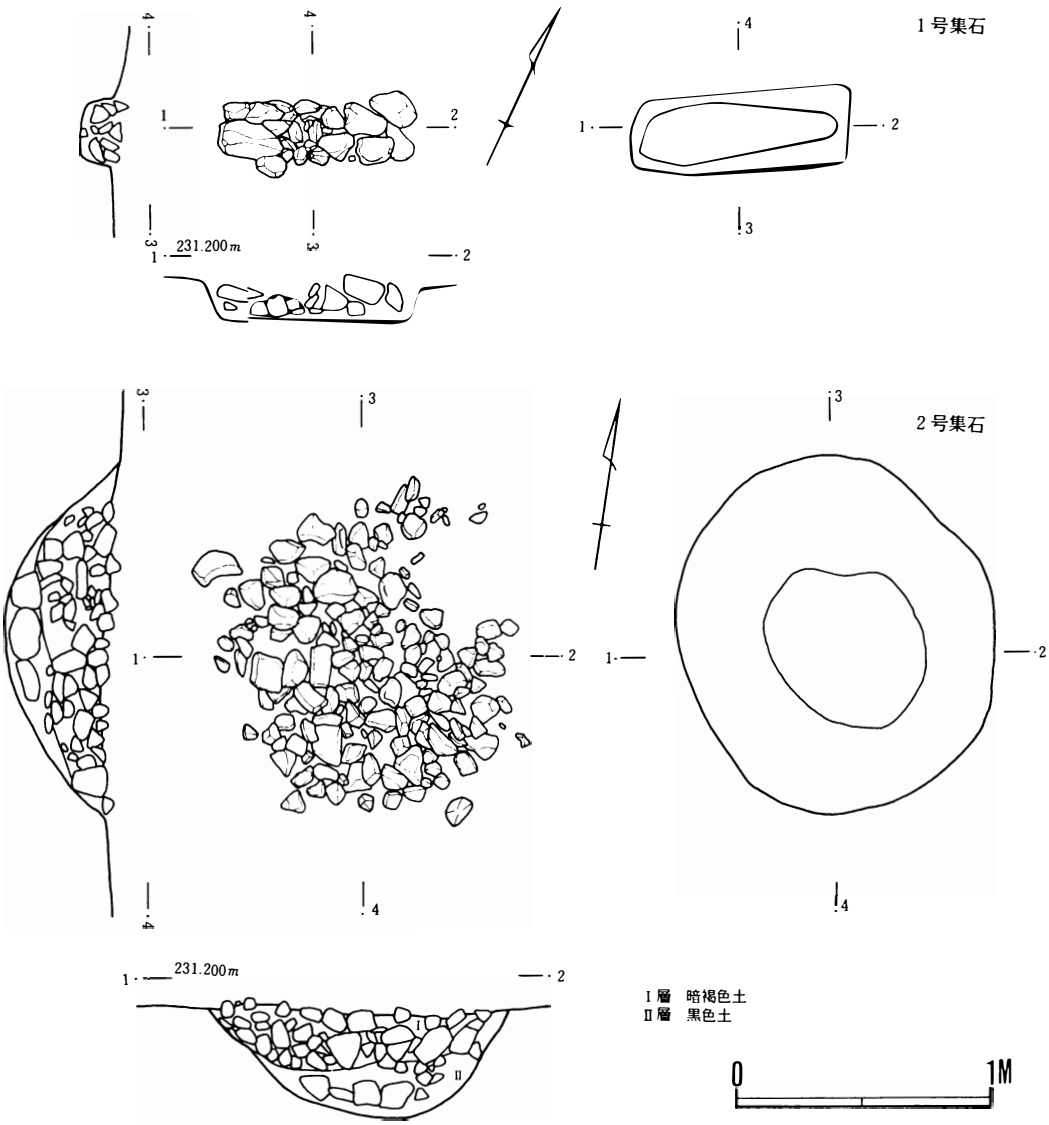
（形状・規模） 85×30㎝の長方形を呈する。坑底はほぼ平坦で、確認面から15㎝を測る。

（集石） 10㎝前後の礫が坑内に隙間なく詰められている。時期決定が可能な出土遺物は存在しない。

(2) 2号集石（第44図）

（位置） K※11グリッドに位置する。

（形状・規模） 掘り込みの形状は楕円形で140㎝×125㎝を測る。坑底は鍋底状を呈する。



第44図 集 石 遺 構

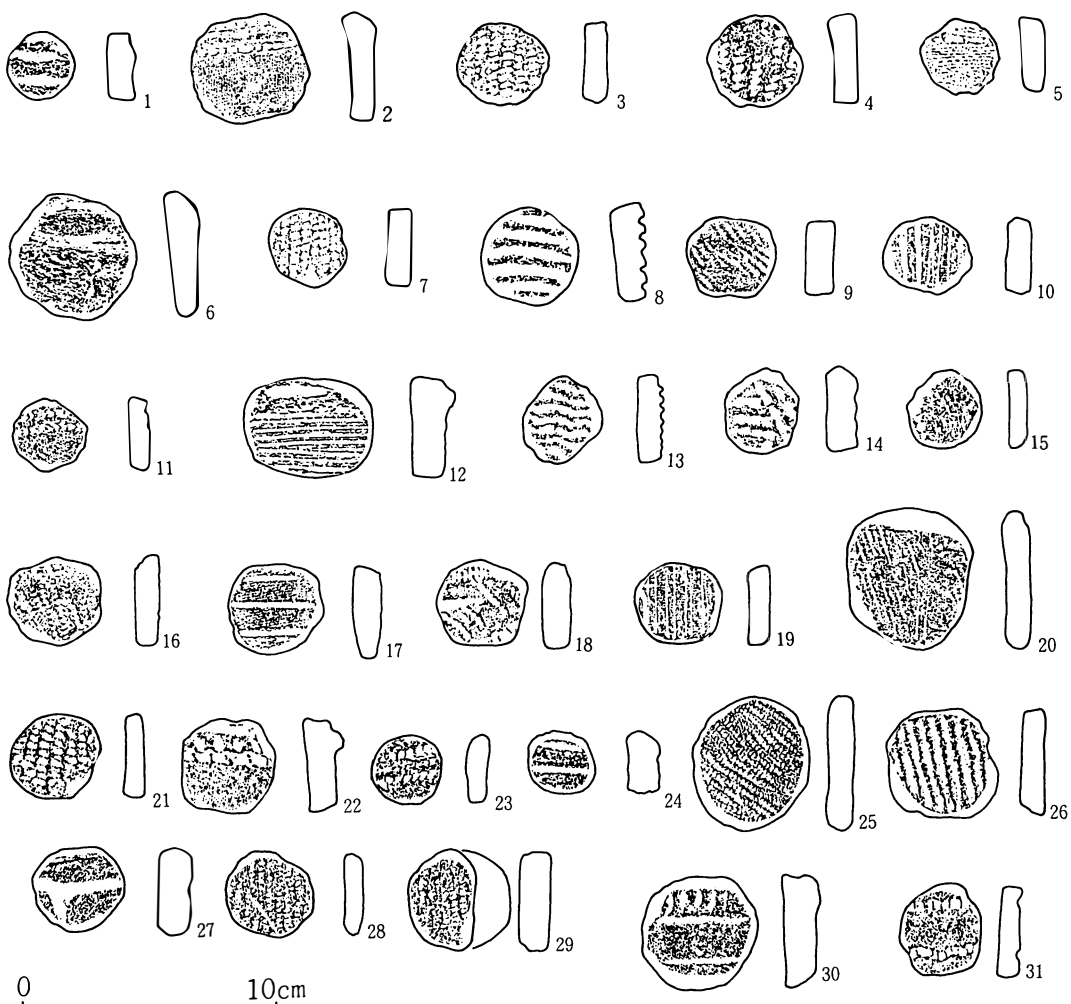
（集石）　集石は上下２層に分離される。上層は拳大の大きさの小礫が多く、下層には長さ20cm程の人頭大の礫が集められている。１号集石同様に時期決定できる遺物は検出されなかった。

４．その他の遺物

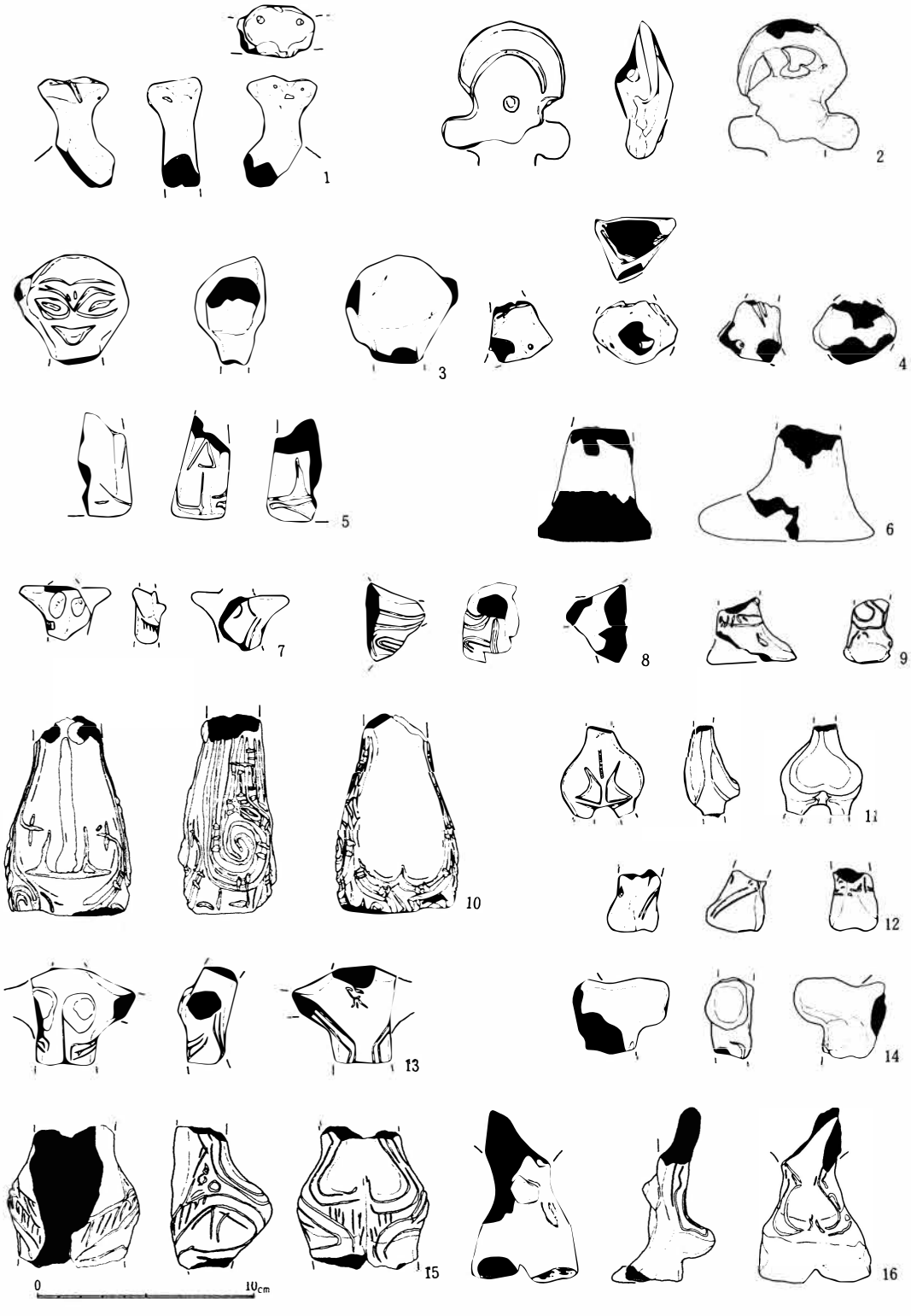
(1) 土製円盤（第45図）

第４次調査で発見された土製円盤は80点にのぼるが、その内の有文の31点について第45図に図示した。直径2.5cm～５cmの範囲に含まれ、円形ないし楕円形の形状をなす。これらの土製円盤はすべて土器片再利用のもので、当初から土製円盤として製作されたと考えられるものはない。以下に出土位置、直径、厚さを記述する。

１；12住・2.5cm・１cm、２；14住・4.5cm・0.8cm、３；15住・3.5cm・0.9cm、４；17住・3.7cm・１cm、５；20住・３cm・0.9cm、６；20住・５cm・0.9cm、７；20住・３cm・0.9cm、８；21住・４cm・1.3cm、９；21住・3.5cm・１cm、10；21住・3.5cm・0.9cm、11；22住・３cm・0.8cm、12；23住・



第45図　土　製　円　盤



第46図　土　　偶

3.8cm×5cm・1.2cm、13；24住・3cm・1cm、14；25住・2.8cm・1.1cm、15；26住・3cm・0.8cm、16；12土坑・3.6cm・0.9cm、17；16土坑・3.7cm・1.2cm、18；16土坑・4.5cm・1.2cm、19；23土坑・3.5cm・0.8cm、20；65土坑・4.5×5.5cm・1cm、21；L※25グリッド・3.5cm・0.8cm、22；118周溝・3.6cm・1cm、23；表土・2.8cm・0.9cm、24；表土・2.6cm・1.2cm、25；表土・4.5cm×5.5cm・1cm、26；表土・4.2cm・0.9cm、27；表土・3.5cm・0.8cm、28；表土・3.5cm・0.7cm、29；表土・4cm・1.3cm、30；表土・4.5cm・1.3cm、31；表土・3×3.8cm・0.7cm。

(2) 土　偶（第46図）

第4次調査で出土した土偶は16点存在する。これらの部位は頭部が3点、胴部が10点、脚部が2点、不明1点である。1は頭部が平坦で、後頭部に2つの貫通孔があく。2は沈線と刺突によって顔面が表現されているが、目と鼻の表現はない。3は顔面がほぼ平坦で、後頭部が半球状となる。4は上部からみると三角形をなし、所々に貫通孔があく。部位不明。7・13は両腕を広げた胴上部で胸部以外は扁平となる。10は隆帯による正中線が表現され、腹部と脇腹の部分に沈線文様を施す。11はやはり正中線をもち、腹部に対称弧刻文を陰刻する。15・16は臀部が張り出し強調される土偶で、背面及び側面に沈線文を施す。

表2　土偶一覧

番号	出土位置	部位	内部	木芯痕	色調	胎土	焼成	幅(cm)	高(cm)	厚(cm)
1	10住pit－2	頭部	中実	無	褐色	精選されている	良好	2.5	5.0	3.5
2	15住	頭部	中実	無	暗褐色	砂粒含む	良好	5.5	6.0	2.6
3	16住	頭部	中実	無	黄褐色	砂粒含む	良好	5.2	5.0	3.2
4	16住	不明	中実	無	褐色	精選されている	良好	3.8	2.9	2.9
5	17住pit 9	胴部	中実	無	暗褐色	精選されている	良好	2.5	4.8	2.6
6	20住	左足	中実	無	褐色	精選されている	良好	5.8	5.3	5.2
7	21住	胸部	中実	無	赤褐色	精選されている	良好	3.2	2.6	1.5
8	21住	右胸部	中実	無	暗褐色	精選されている	良好	2.7	3.6	2.6
9	24住	右足	中実	無	褐色 暗褐色	砂粒、雲母含む	良好	3.7	3.0	2.1
10	26住	胴部	中実	無	薄茶褐色	精選されている	良好	5.7	9.2	4.5
11	25住	胴部	中実	無	暗褐色	砂粒含む	良好	3.8	4.3	2.5
12	2号周溝墓	胴部	中実	無	褐色	砂粒、雲母含む	良好	2.4	2.9	2.7
13	117号周溝墓	胸部	中実	無	褐色	精選されている	良好	4.8	4.5	2.7
14	31土	左手	中実	有	暗褐色	砂粒、雲母含む	良好	4.4	3.7	2.2
15	83土	胴部	中実	無	薄褐色	精選されている	良好	6.1	6.6	4.6
16	表土	胴部	中実	無	褐色	砂粒、雲母含む	良好	5.0	8.0	4.0

(3) 石　器

表3　遺構別石器数量一覧表

（　）は重量gを表す

遺構	石鏃	打石斧	磨石斧	石匙	磨石 凹石	石皿	多孔石	礫器	その他	石器総数
10住		18 (1000)	1		5 (1920)					24 (2920)
11住		7 (500)			4 (1650)			3 (500)		14 (2650)
12住	2 (2.29)	33 (6300)	1 (370)	1 (3.64)	34 (15750)	5 (4250)		1 (170)		77 (26845.9)
14住	6 (7.13)	16 (160)		1 (72.65)	15 (7750)			2 (6300)		40 (15729.8)
15住	3 (2.8)	8 (1100)		1 (31)	6 (1400)					18 (2533.8)
16住	3 (1.3)	34 (5130)	1	2 (82)	12 (8580)			2 (600)		54 (1439.3)
17住	2 (2.55)	11 (1700)			4 (1300)		1 (1200)	1 (340)		19 (4542.6)
18住	1 (0.57)	15 (2100)	1 (500)		13 (5730)	1 (2280)		4 (540)		35 (11150.6)
19住		9 (920)			14 (6900)	1 (1900)				24 (9720)
20住	2 (2.2)	13 (1700)		1 (5)	1 (100)					17 (1807.2)
21住	1 (0.73)	15 (1900)	1 (440)		12 (5800)		1 (1500)	3 (600)		33 (10240.8)
22住	5 (5.6)	23 (3100)	1 (290)		16 (9900)	1 (2600)	2 (5750)	1 (130)		49 (21775.6)
23住		12 (700)	1	2 (76)	11 (5850)					26
24住	2 (2.6)	11 (1400)	1 (40)	1 (10)	6 (2900)	1 (1700)		1 (100)		23 (6152.6)
25住		19 (2050)		2 (60)	21 (10550)		1 (800)	2 (210)		45 (13670)
26住	1 (0.5)	6 (610)			2 (900)			1 (100)		10 (1610.5)
27住		1 (40)								1 (40)
29住		1 (20)			1 (800)					2 (820)
31住		3 (100)			1 (620)					4 (720)
1土		2 (150)								2 (150)
2土		1 (20)								1 (20)
3土		2 (100)								2 (100)
12土		3 (250)								3 (250)
15土		1 (60)								1 (60)
16土					1 (450)					1 (450)
17土	1 (0.3)			1 (8)	1 (80)					3 (88.3)
18土					1 (500)					1 (500)

遺構	石鏃	打石斧	磨石斧	石匙	磨石 凹石	石皿	多孔石	礫器	その他	石器総数
23土	1 (0.9)	2 (80)			1 (1950)					4 (2030.)
28土		1 (150)								1 (150)
30土		2 (70)								2 (70)
31土		5 (540)		1 (24)	1 (700)			1 (200)		8 (1464)
32土		1 (100)			3 (2640)					4 (2740)
33土		2 (190)								2 (190)
34土		1 (60)								1 (60)
35土					3 (1510)					3 (1510)
38土		1 (60)			1 (310)					2 (370)
41土		1 (160)								1 (160)
42土		8 (1070)			7 (2880)		1 (4710)			16 (8660)
43土					1 (1760)		1 (2420)			2 (4180)
44土		2 (140)				1 (3340)				3 (3480)
46土		1 (100)								1 (100)
47土		1 (100)			1 (1200)					2 (1300)
53土					1 (400)					1 (400)
56土		1 (40)								1 (40)
59土		1 (80)			1 (570)					2 (650)
61土		1 (60)								1 (60)
62土		1 (70)			2 (800)					3 (870)
65土	3 (3.4)	5 (500)	1 (500)		1 (1780)					10 (2783.3)
69土		6 (540)			4 (2860)					10 (3400)
70土	1 (1.1)				1 (1830)					2 (1831.1)
71土			1 (230)							1 (230)
73土		2 (80)				1 (7030)				3 (7110)
74土		2 (100)								2 (100)
80土					1 (660)					1 (660)
82土					1 (540)		1 (1800)			2 (2340)
83土		1 (130)								1 (130)
87土		1 (40)			1 (820)					2 (860)

第４節　弥生時代の遺構と遺物

１．住居址と出土遺物

(1)　１号住居址（第47・48図、図版５）

（位置）　調査区南側のＥ・Ｆ※１・２グリッドに位置する。

（形状・規模）　長軸５ｍ90㎝、短軸４ｍ80㎝の隅丸長方形を呈する。主軸方向はＮ－106°－Ｗを指す。

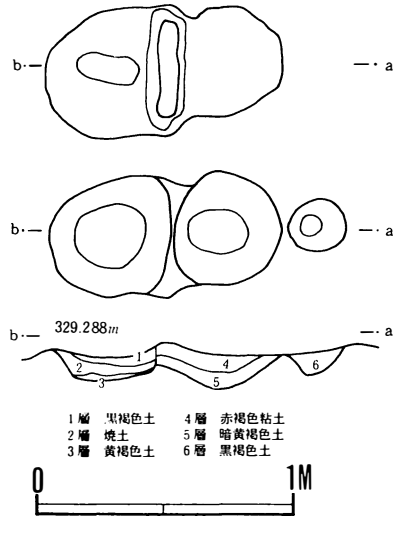
（床面・壁）　床面は非常に堅緻な貼床で、ほぼ平坦である。周辺の削平が著しく、壁高は確認面からわずか10㎝程にすぎない。

（炉）　住居址中央部よりやや奥壁（西側）に扁して存在する。90㎝×50㎝の楕円形を呈し、ほぼ中央部分を粘土によって枕状に盛り上げ、その西側を粘土で貼り平坦面を作る。炉東側半分は浅い掘り込みとなり、焼土が堆積している。炉の奥壁側には、直径25㎝程の小ピットをもつがこれも炉に付属した施設である可能性が高い。

（その他の施設）　本住居址は、床面直上には炭化材、焼土等が堆積し、焼失家屋であったと考えられる。

ピットは９ケ所検出されているが、その内ピット１～４が主柱穴、５は貯蔵穴、６は梯子受け等の入口部施設の痕跡と考えられる。柱穴は、直径25㎝程の円形プランを呈し、深さ40㎝～60㎝としっかりとした掘り込みである。ピット５は60㎝×40㎝程の不整楕円形を呈し、深さ35㎝を測る。ピット５内には焼土層が認められるが、これは家屋焼失時のものと判断される。ピット５・６のまわりには、幅50㎝程の土堤状の盛り上がりが半円状に巡る。ピット６は住居址東側中央部に位置し、60㎝×40㎝の楕円形プランを呈する。深さは床面より30㎝を測るが、最深部が西側に扁していることから、入口部からの梯子を受けるためのピットと推定される。

（出土遺物）　ピット５内から打製石斧が検出されたのみで、土器などの出土遺物はない。



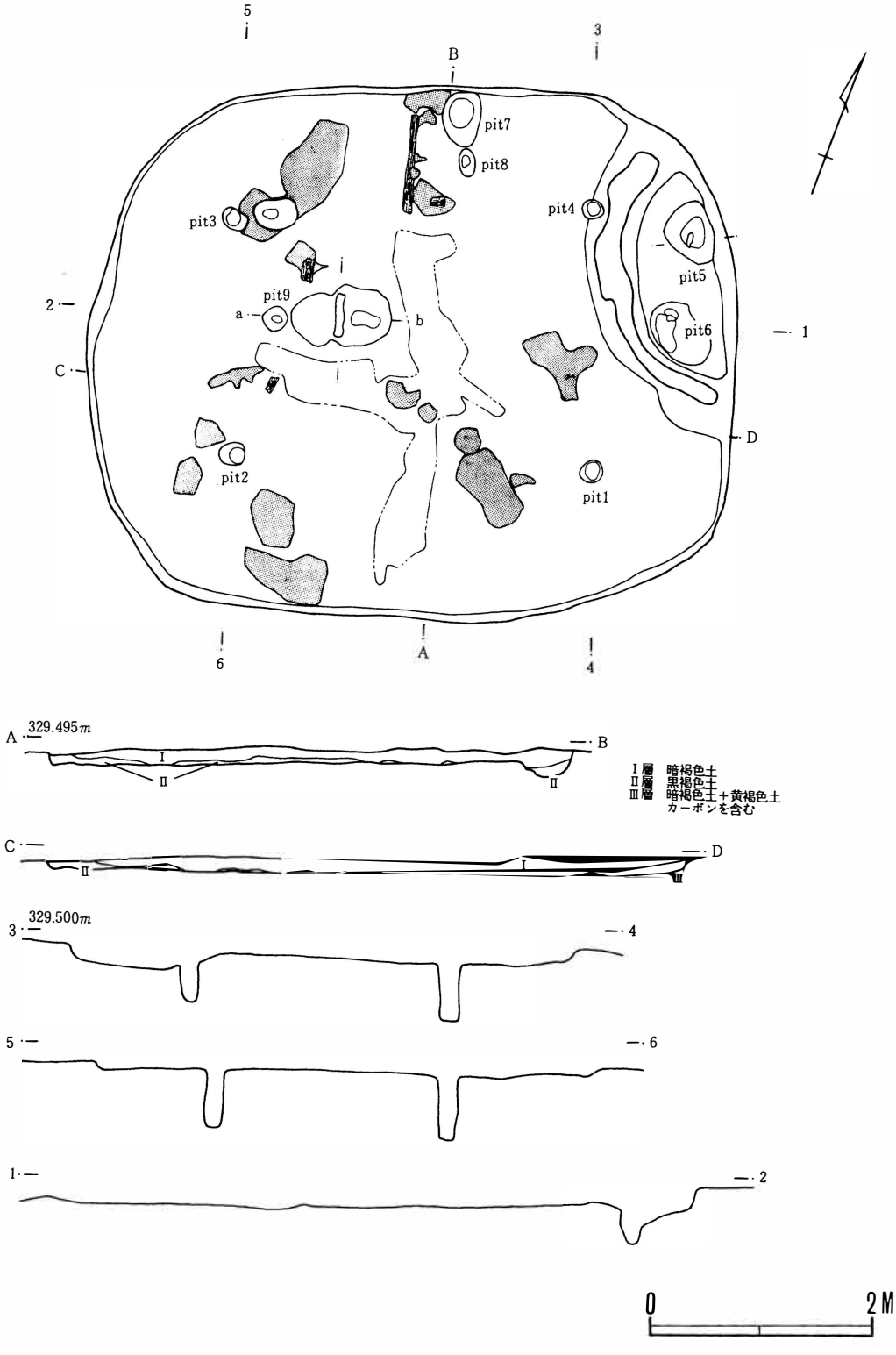
第47図　１号住居址炉

（２）２号住居址（第49図）

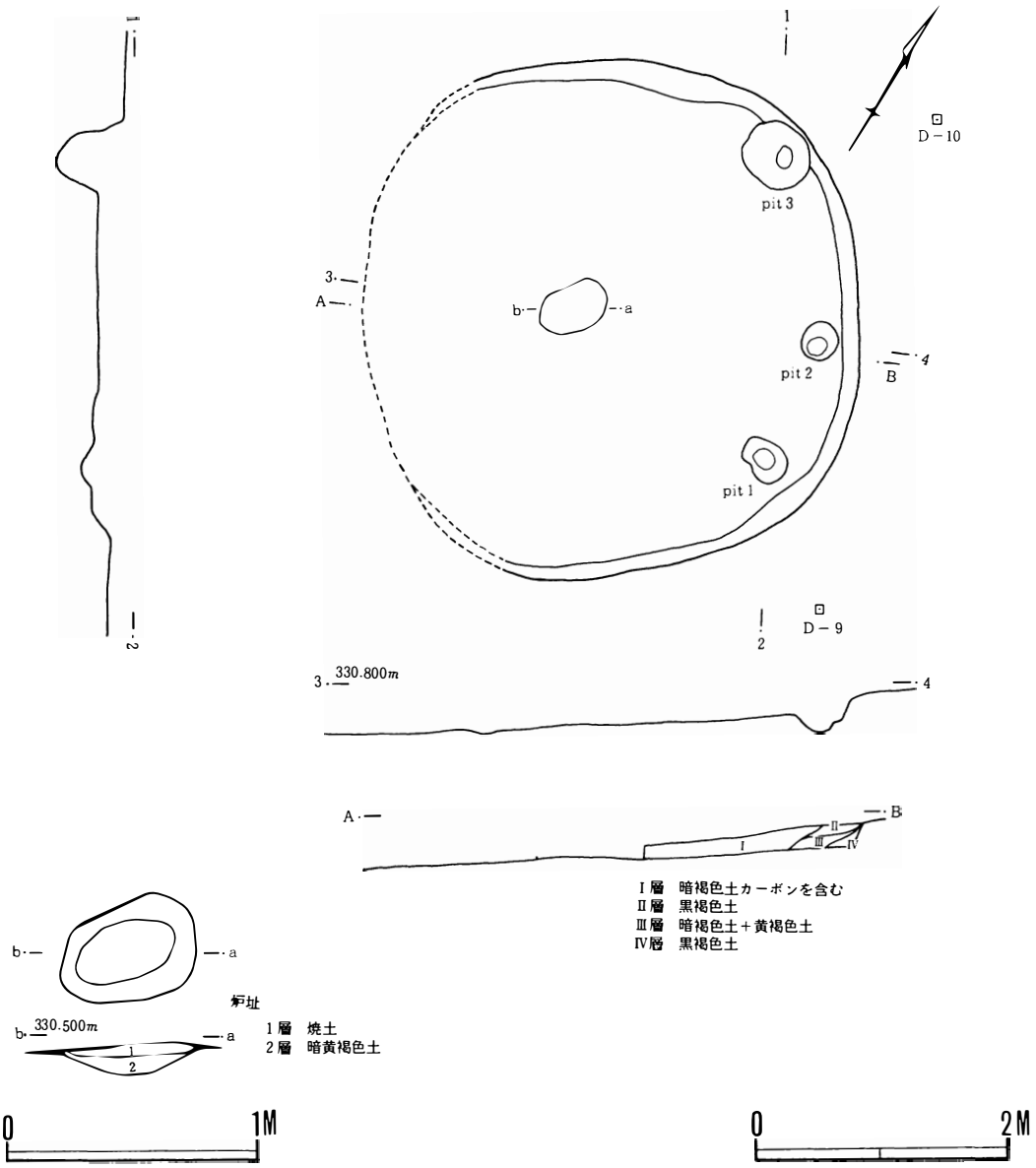
（位置）　調査区西側のＣ※９グリッドに位置する。

（形状・規模）　長軸４ｍ10㎝、短軸およそ４ｍ程の楕円形プランを呈する。主軸方向は、Ｎ－31°－Ｗ。

（床面・壁）　床面は堅緻な貼床である。壁は西側がすでに削平されていたが、他の部分では20㎝程の立ち上がりが検出された。


5
B
3
pit7
pit8
pit3
pit4
pit5
pit9
a
b
2
1
C
D
pit6
pit2
pit1
6
A
4
A 329.495m
B
I
II
II
I層 暗褐色土
II層 黒褐色土
III層 暗褐色土＋黄褐色土
カーボンを含む
C
D
II
I
III
3 329.500m
4
5
6
1
2
0
2M

第48図　1 号 住 居 址



第49図　2 号 住 居 址

（炉）　住居址は、ほぼ中央部に位置する。50㎝×40㎝の不整楕円形を呈し、深さ約10㎝と浅い。炉上層には焼土が堆積する。

（その他の施設）　ピットは、住居東側で3ケ所検出されているが、西側では削平のため確認できなかった。

（出土遺物）　なし。

（３）３号住居址（第50図、図版５）

（位置）　調査区西側のＢ※14グリッドに位置する。

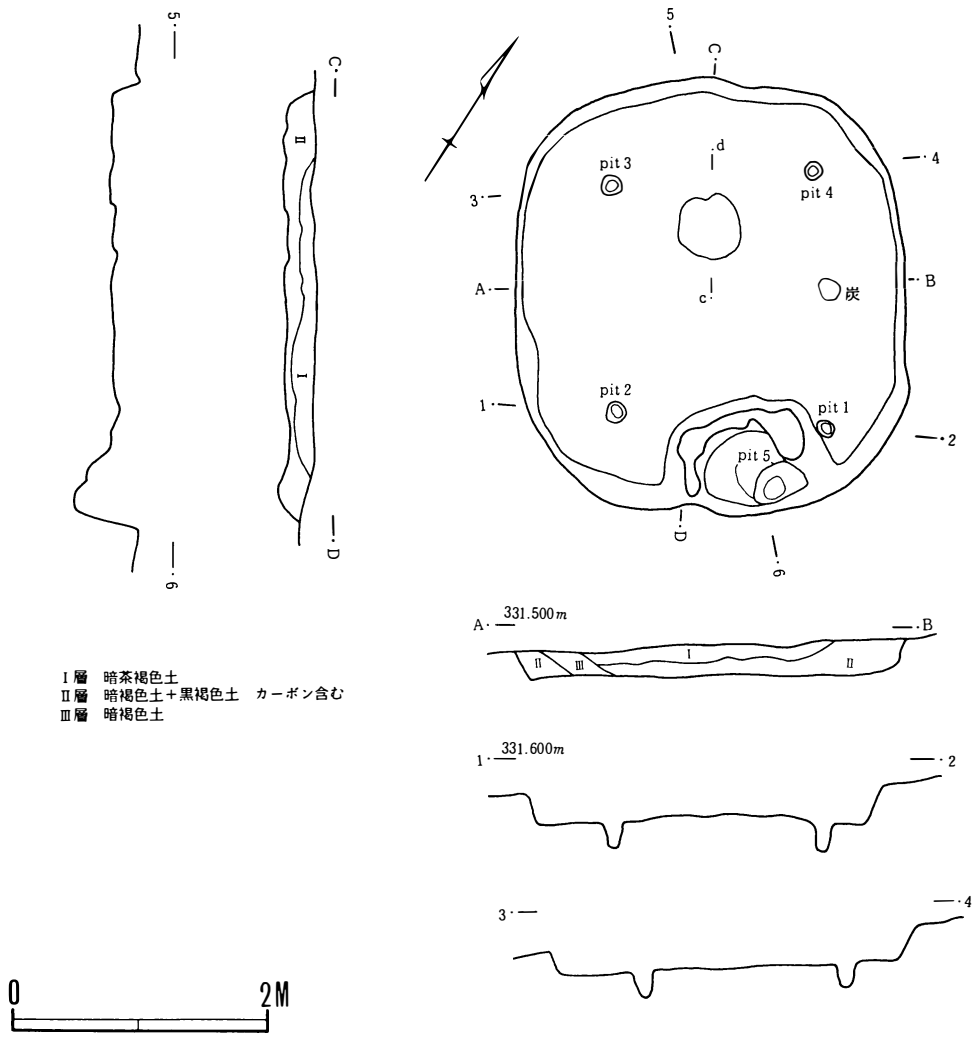
（形状・規模）　長軸３ｍ50㎝、短軸３ｍ10㎝の隅丸方形を呈する。主軸方向は、Ｎ－34°－Ｗ。

（床面・壁）　床面は堅緻な貼床でやや凹凸をもつ。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高約25㎝を測る。

（炉）　炉は粘土貼りで、住居址中央より奥壁側に扁して存在する。直径45㎝程の不整円形を呈し、深さ15㎝を測る。炉上面は粘土が敷かれ、平坦面をつくりだしている。

（その他の施設）　ピットは５ケ所検出されたが、ピット１～４は主柱穴、ピット５は貯蔵穴と考えられる。柱穴は、いずれも直径15㎝程の円形を呈し、深さは20㎝～25㎝を測る。ピット５は40㎝×30㎝の楕円形を呈し、深さ30㎝を測る。ピット５の周囲には、幅40㎝程の土堤状の盛り上がりが半円状に巡る。

（出土遺物）　なし。



第50図　３号住居址

（４）４号住居址（第51・52図）

（位置）　１号住居址の西側、D※２グリッドに位置する。

（形状・規模）　壁が全て削平されており、形状・規模については不明である。

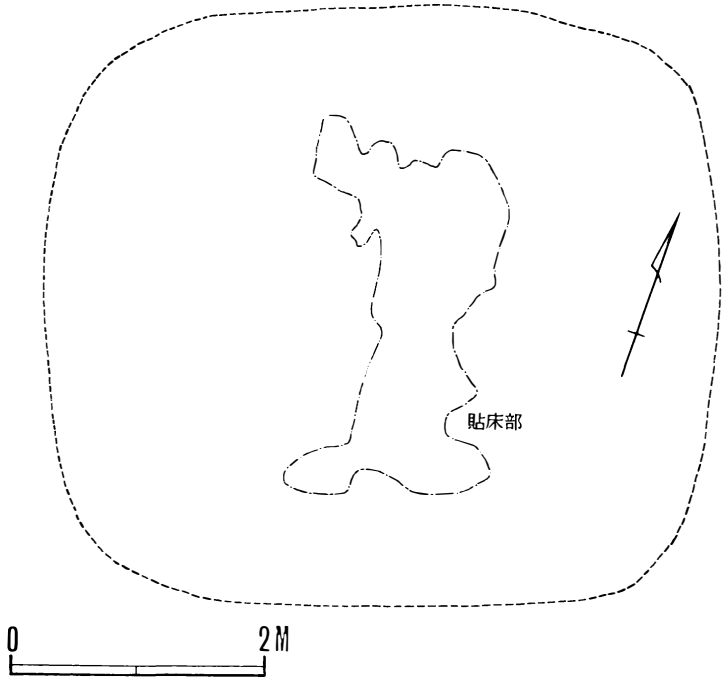
（床面・壁）　幅１ｍ、長さ３ｍほどの範囲に貼床部分の残存が認められただけで、壁・炉その他の施設は確認されなかった。

（出土遺物）　第52図が本住居址出土土器である。

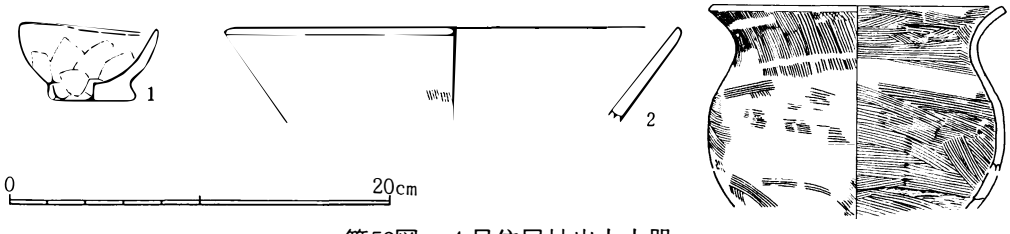
１．小型手捏土器。外面にヘラ削りを残す。口径７㎝、器高４㎝。

２．平縁の壺形土器口縁部。外面にハケ目調整痕を若干残す。

３．素縁の甕形土器胴部。内外面にハケ目調整を行なっている。口径および胴部最大径部がほぼ同じく15㎝を測り、頸部はゆるやかにくびれる。現存高11㎝。



第51図　４号住居址



第52図　４号住居址出土土器

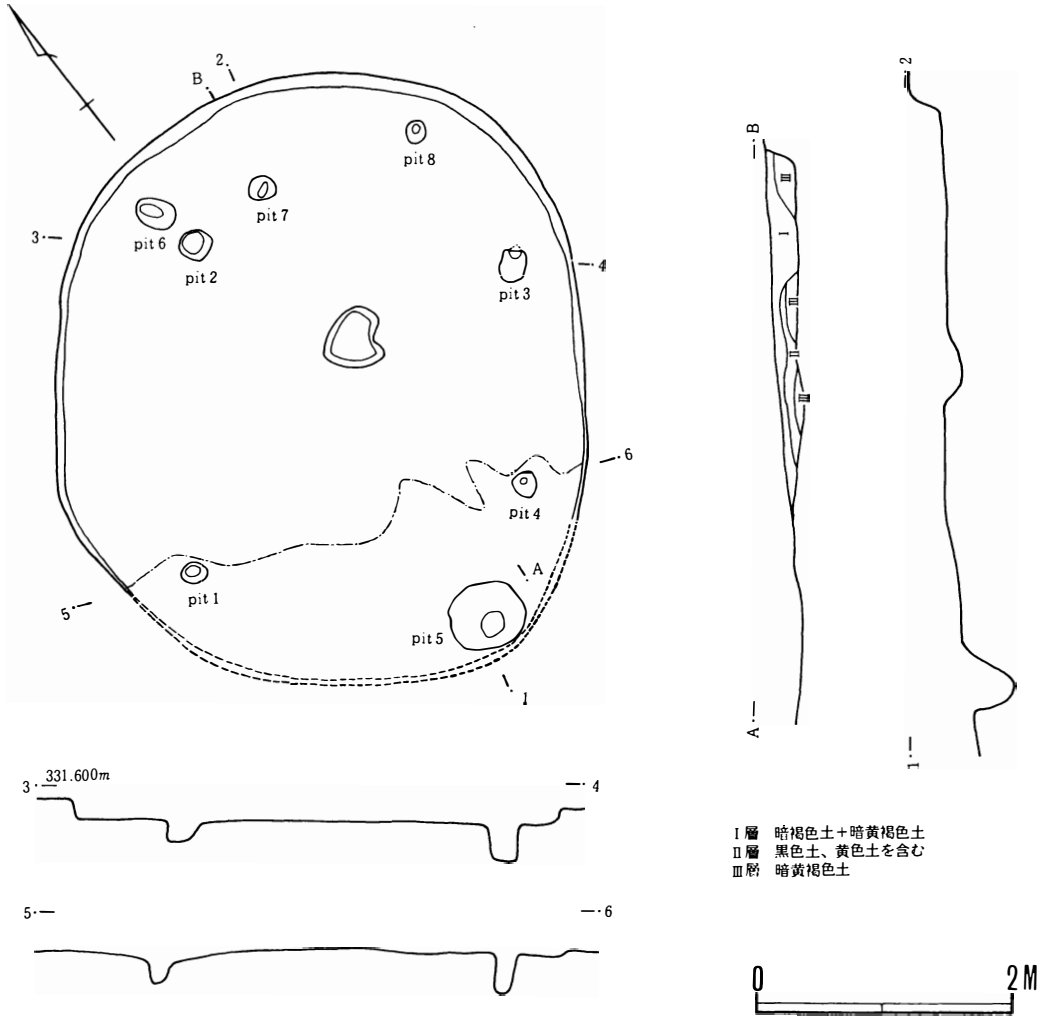
(5)　５号住居址（第53図、図版５）

（位置）　G・H※12・13グリッドに位置し、６号住居址東側に存在する。

（形状・規模）　長軸約４ｍ80㎝、短軸約４ｍ20㎝の楕円形を呈する。主軸方向はＮ－38°－Ｅである。

（床面・壁）　南壁がすでに削平されているが残存部分では壁高約20㎝を測る。床面は、堅緻な貼床である。

（炉）　住居址中央より若干奥壁寄りに位置する。50㎝×40㎝程の不整形を呈する地床炉で、深



第53図　5 号 住 居 址

さ15㎝の皿状の掘り込みをなす。

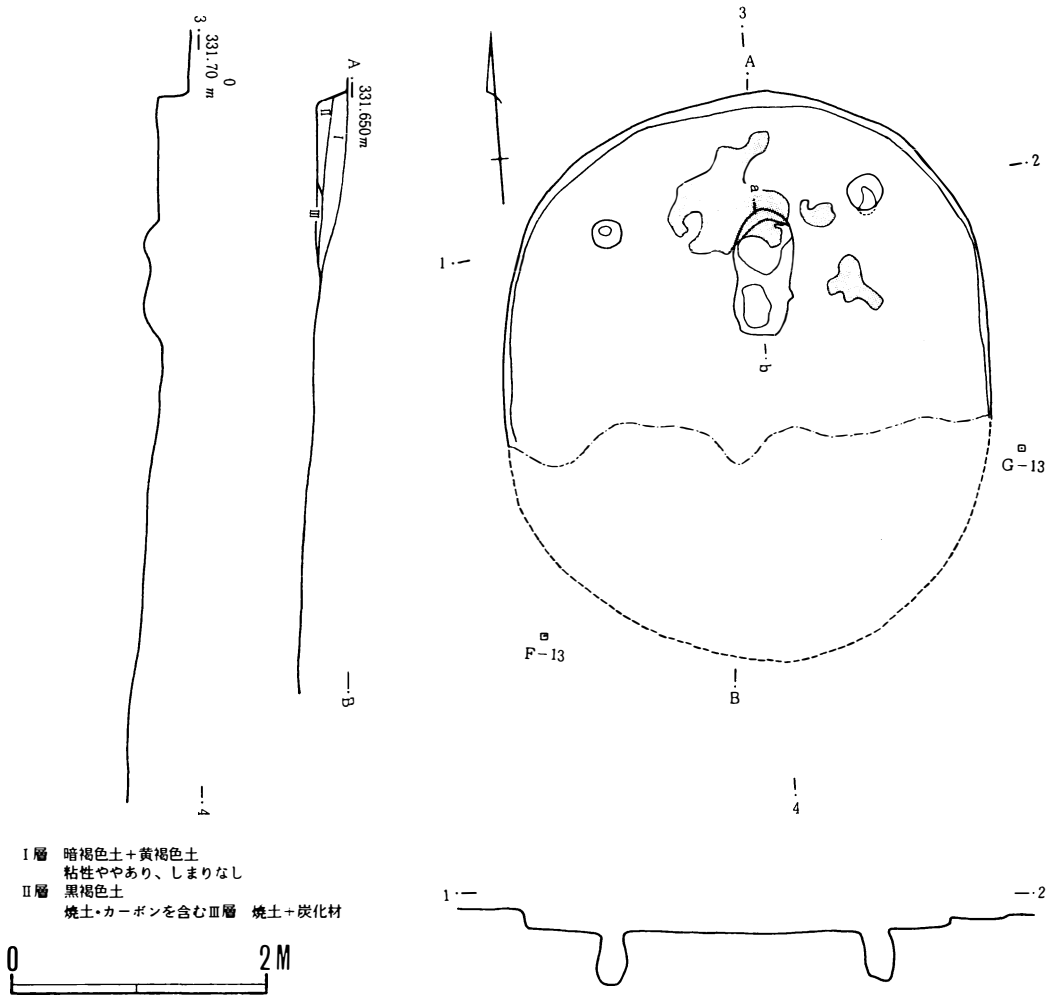
（その他の施設）　ピットは８ケ所検出された。このうちピット１～４は主柱穴と考えられ、直径20㎝、深さ15㎝～30㎝を測る。住居址南東のコーナーには、直径60㎝ほどの円形ピット（pit５）が存在するが、本来はこの周囲を土堤状の盛り上がりが巡っていたものと推定される。入口部施設と考えられるものは検出されなかった。

（出土遺物）　北壁部より甕形土器が出土している。

(6)　6号住居址（第54図）

（位置）　５号住居址西側Ｆ※13グリッドに存在する。

（形状・規模）　南側３分の１が削平されているが、長軸約４ｍ50㎝、短軸３ｍ80㎝の楕円形プランを呈すると思われる。主軸方向はＮ－５°－Ｅである。



第54図　6 号 住 居 址

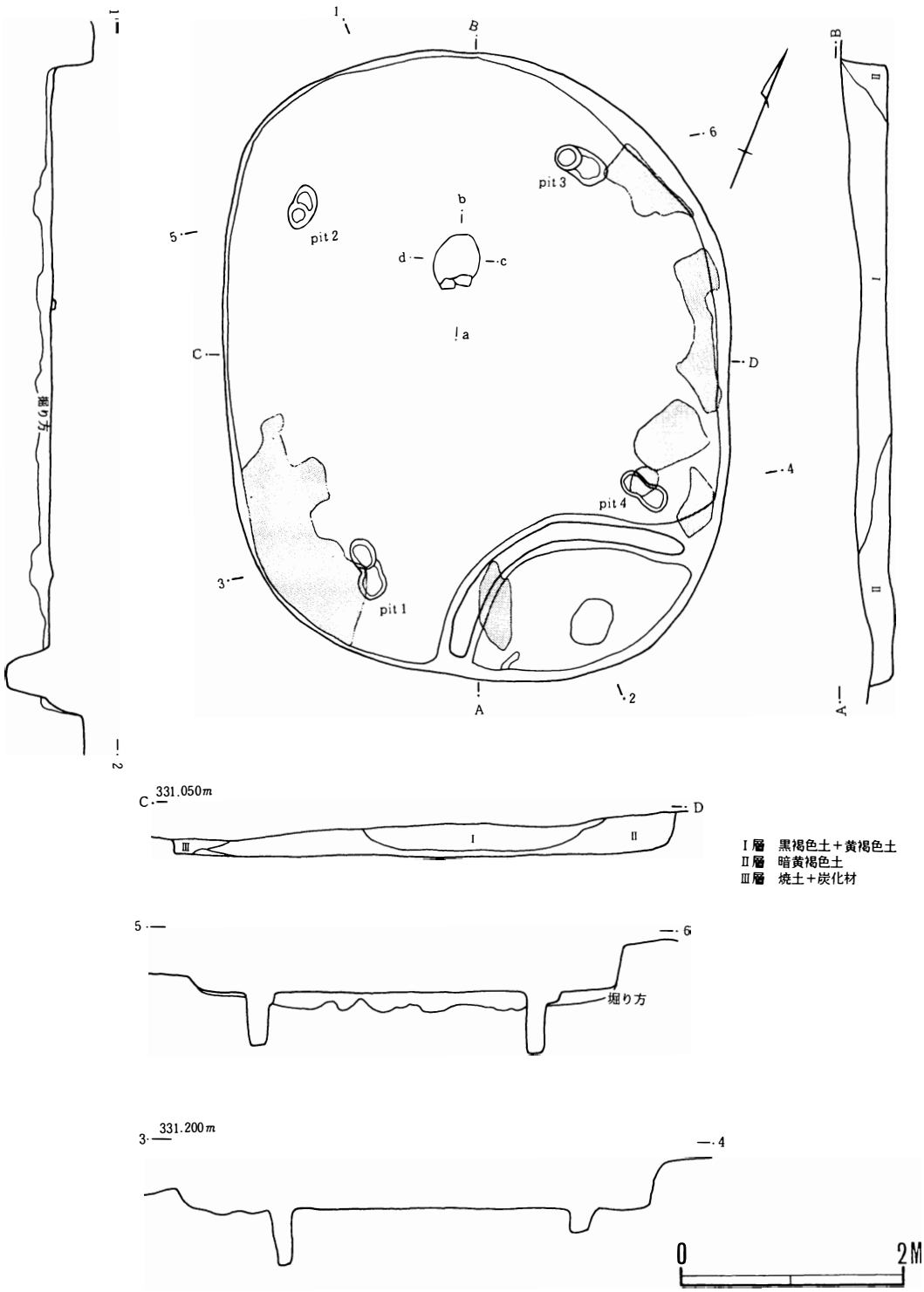
（床面・壁）　壁は南側が削平されているが北側の最も高い個所で25cmを測る。床面は堅緻な貼床である。

（炉）　住居址中央部より奥壁寄りに扁して存在する。100cm×50cmの長方形を呈し、深さ15cm程の凹部をもつ。炉の南側半分には最上部に粘土を貼り平坦面をなしている。粘土は赤色に熱変しており、この部分を燃焼部としていたことがうかがえる。

（その他の施設）　住居址北側には、焼土と炭化材などが床面直上に堆積しており、焼失家屋と考えられる。

ピットは、北側の２ケ所のみが検出され、直径25cm、深さ40cmを測る。

（出土遺物）　なし。


掘り方
pit 1
pit 2
pit 3
pit 4
a
b
c
d
A
B
C
D
1
2
3
4
5
6
331.050m
331.200m
I層　黒褐色土＋黄褐色土
II層　暗黄褐色土
III層　焼土＋炭化材
0
2M

第55図　7 号 住 居 址

(7) 7号住居址（第55～57図、図版５）

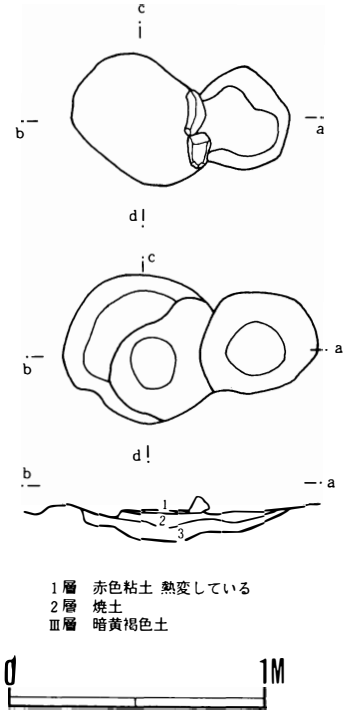
（位置） 調査区西側のＢ・Ｃ※11・12グリッドに位置する。

（形状・規模） 長軸５ｍ60㎝、短軸４ｍ60㎝の隅丸の長方形を呈する。北東コーナー部分の張り出しが若干弱い。主軸方向はＮ－35°－Ｗである。

（床面・壁） 壁は直壁で、壁高北側の最高部で50㎝、南側で15㎝を測る。壁面は堅緻な貼床である。掘り方は床下全体におよび、凹凸が激しい。貼床部から掘り方までの厚さは厚いところで20㎝を測る。

（炉） 住居址中央より奥壁寄りに位置する。長さ85㎝、幅80㎝の瓢形を呈し、中央には小礫を２個使って、枕状に配置している。この石より北側には粘土が貼られ、平坦面をなす。小礫南側は直径50㎝の浅い掘り込みとなる。

（その他の施設） ピットは５ケ所確認されたが、ピット１～４は各々２つの掘り込みがみられ、柱の建て替えが行なわれたものと思われる。ピット５は、45㎝×35㎝の楕円形ピットで貯蔵穴と考えられる。この周囲には幅30㎝程の土堤状の盛り上がりが巡る。



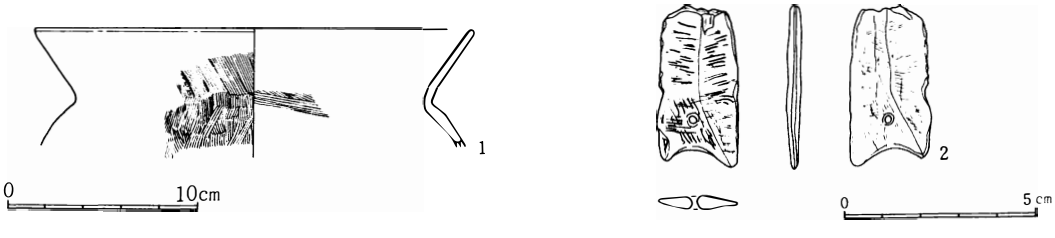
第56図　７号住居址炉

東壁と南西コーナー付近に焼土と炭化物が床面直上に認められ、焼失家屋と考えられる。南西コーナーでは家屋に葺かれたカヤ状の植物炭化物が面的に検出され、この上に焼土が薄く堆積していた。炭化材上層の焼土については、消火時に投下された土が焼土化したものと推定される。

（出土遺物） 第57図が本住居址出土遺物である。

１は素縁の甕形土器口縁部である。頸部は屈折し、口縁部が広がる。外面には縦方向のハケ目痕が残り、内面には頸部にハケ目が認められる。口径23㎝、現存高７㎝を測る。

２は、貼床下部から出土した磨製石鏃である。先端部は欠損しているが、無茎で基部付近に１孔を穿つ。厚さが3.5㎜と薄いが両面にわずかに稜をもつほか製作時の擦痕が残存している。石材は粘板岩製で、器幅２㎝、推定長５㎝を測る。



第57図　７号住居址出土土器及び磨製石鏃

(8)　**8号住居址**（第58•59図、図版6）

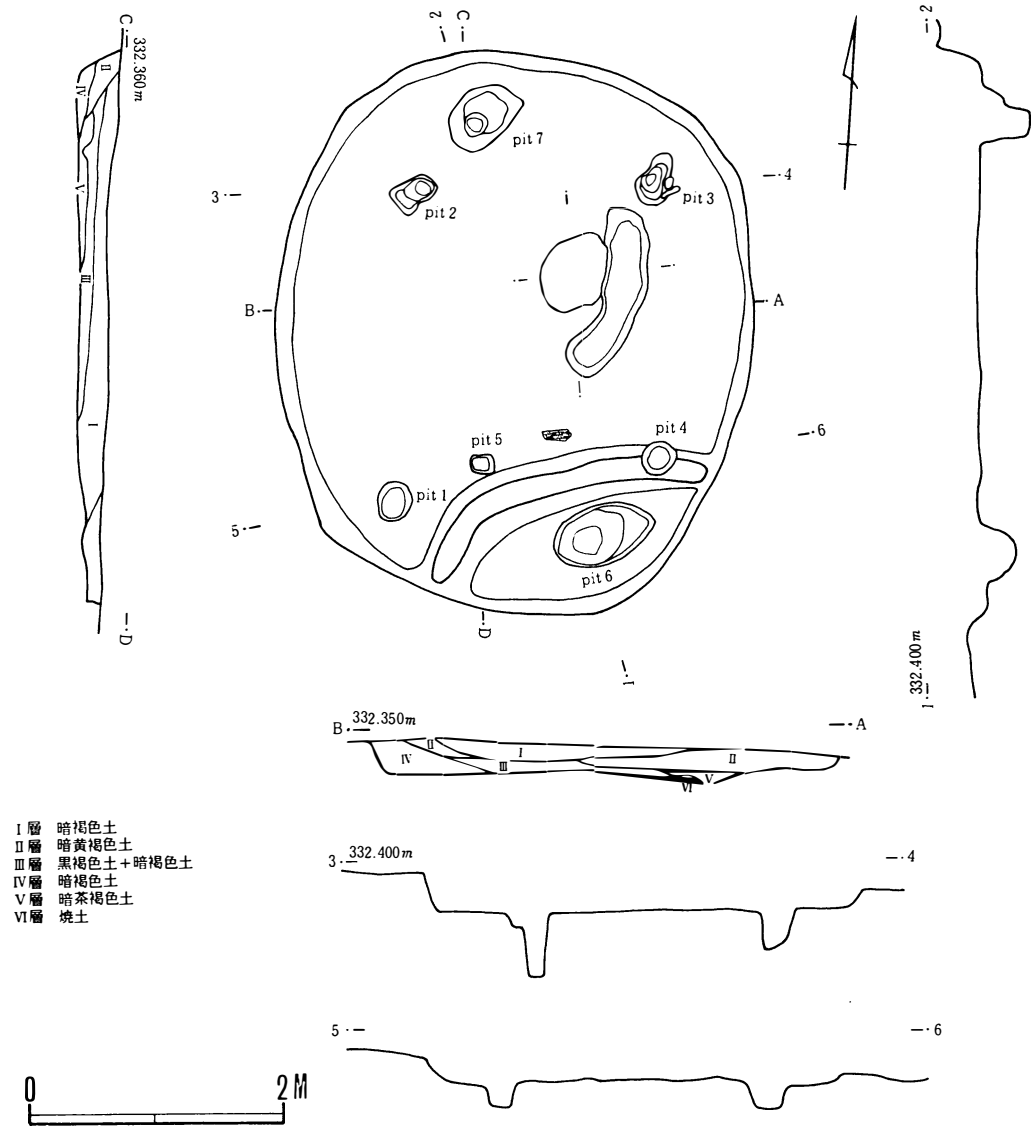
（**位置**）　L・M※16・17グリッドに位置する。

（**形状・規模**）　長軸4ｍ30㎝、短軸3ｍ80㎝の楕円形を呈する。主軸方向はほぼ南北を指す。床面下には、8号住居址より一周り小さい31号住居址が存在するが、これは同一居住者による住居の拡復と考えられる。

（**床面・壁**）　床面は、堅緻な貼床である。壁はほぼ直壁で、壁高約21㎝を測る。

（**炉**）　住居址中央部より北東に扁して存在する。形態は地床炉であるが、炉の東側を弧状に浅い掘り込みが巡る。

（**その他の施設**）　ピットは7ケ所検出されたが、ピット1～4は主柱穴、ピット6は貯蔵穴、



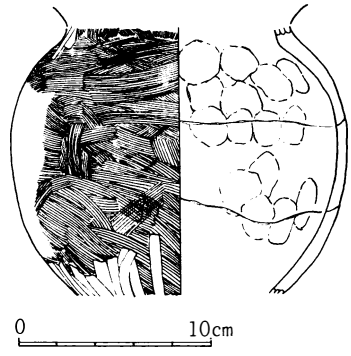
第58図　8号住居址

ピット５は入口部施設に関わるものと考えられる。柱穴は直径20㎝～30㎝の楕円形及び円形で、深さは20㎝～50㎝を測る。ピット１がピット４より北側に寄っているのは、ピット６の貯蔵施設との関係と思われる。ピット６は80㎝×45㎝の楕円形を呈し、この周りに土堤状の盛り上がりが半円状に巡る。

本住居址は、覆土堆積状況から火災住居と考えられる。

（出土遺物） 第59図が本住居址伴出土器である。

台付甕形土器の胴部であるが、口縁部および底部、脚部を欠損している。外面は全体をハケ目が覆い、胴下半部でヘラ削り痕が認められる。内面は整形時の指頭痕が残り、輪積痕が存在する。現存高 14㎝、胴部最大径 17.5㎝を測る。



第59図　８号住居址出土土器

⑼　９号住居址（第60・61図、図版６）

（位置） 遺跡東方８号住居址の北側に位置しＫ・Ｌ※18・19グリッドに存在する。

（形状・規模） 長軸４ｍ80㎝、短軸４ｍの楕円形を呈する。主軸方向はＮ－５°－Ｅを指す。

（床面・壁） 床面は堅緻な貼床である。壁はほぼ直壁で、壁高は20㎝を測る。

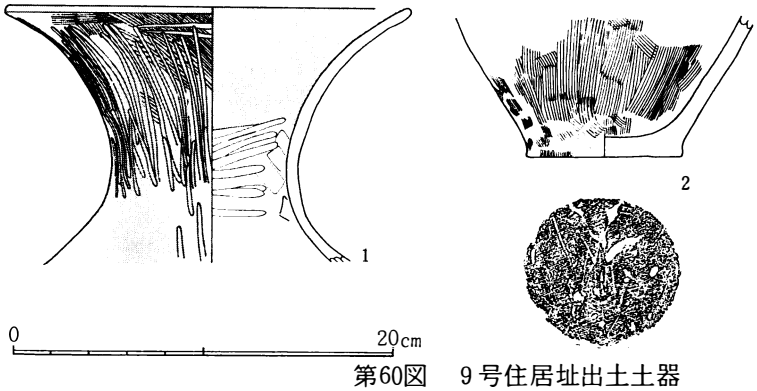
（炉） 住居址中央よりやや北に扁して存在する。上面に粘土を貼り、平坦面をつくり出す。

（その他の施設） ピットは５ケ所で認められた。ピット１～４は主柱穴と考えられ、直径20㎝～30㎝の円形を呈し、深さ50㎝～65㎝を測る。ピット２のみテラスを有する。ピット５は南東コーナーに位置し、直径50㎝程の不整円形を呈し、深さは25㎝程である。ピット５の北側には幅30㎝の土堤状の盛り上がりが弧状に走る。

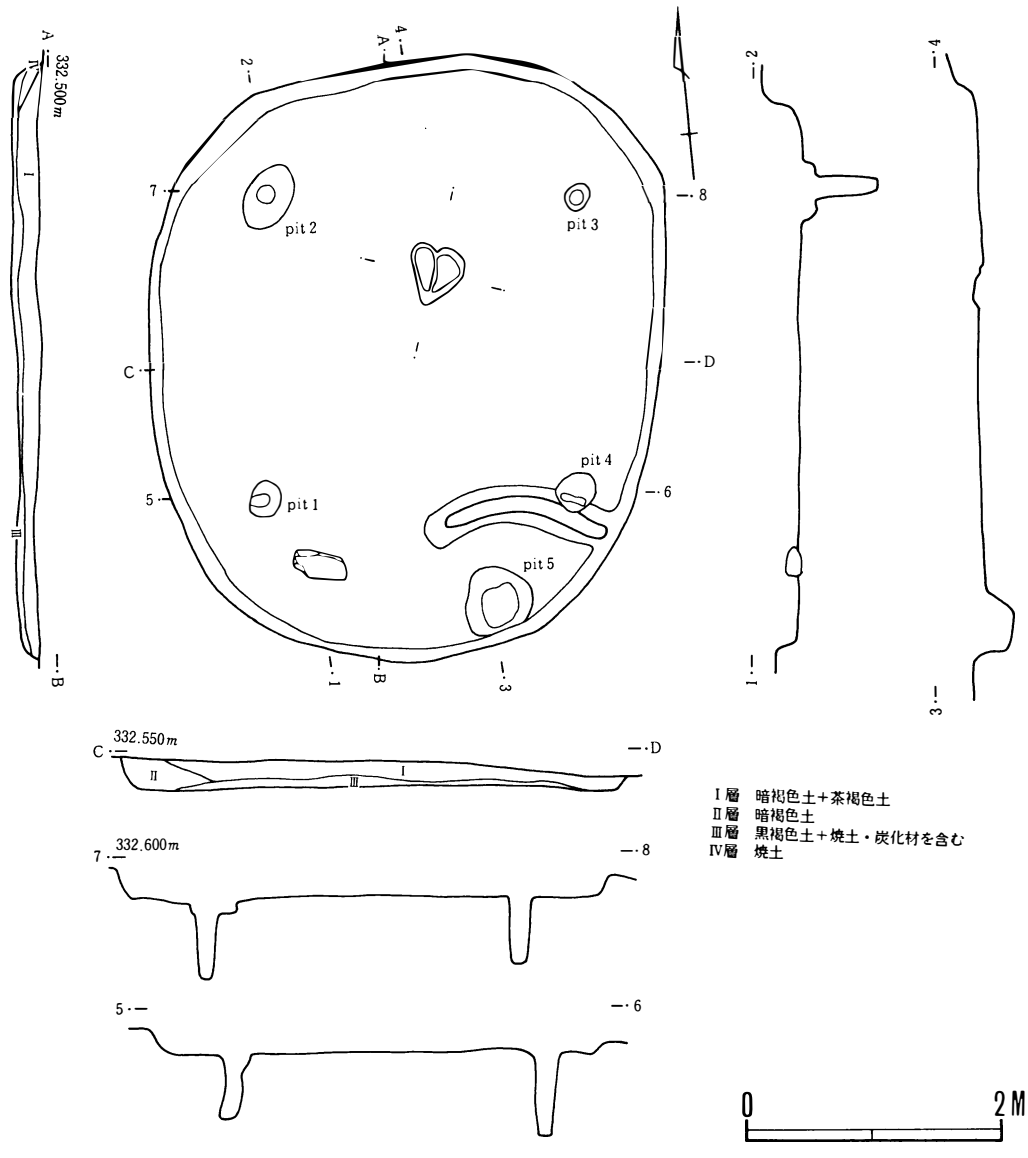
床面直上には、焼土、炭化材が住居址全体に堆積しており、火災住居と考えられる。

（出土遺物） 第60図が本住居址出土土器である。

１．平縁の壺形土器口縁部。外面および内面口縁部に赤色塗彩され、器面にはハケ目調整の後非常に細かいミガキが施される。口径 21.5㎝、現存高 13.5㎝を測る。　２．壺形土器胴下半部。外面にハケ目調整がなされ、底部には籾圧痕が認められる。　３．小型の壺形土器で、口縁部を欠く。器面にハケ目が残る。現存高 11.5㎝、胴部最大径 13.5㎝を測る。　４．台付甕脚部。内外面にハケ目調整がなされる。



第60図　９号住居址出土土器



第61図　9号住居址

⑽ 10号住居址（第62・63図、図版6）

（位置） K※20・21グリッドに位置し、住居址西半分は調査区外へ伸びる。

（形状・規模） 長軸約5mの楕円形を呈すると考えられる。主軸方向はN－15°－Wを指す。

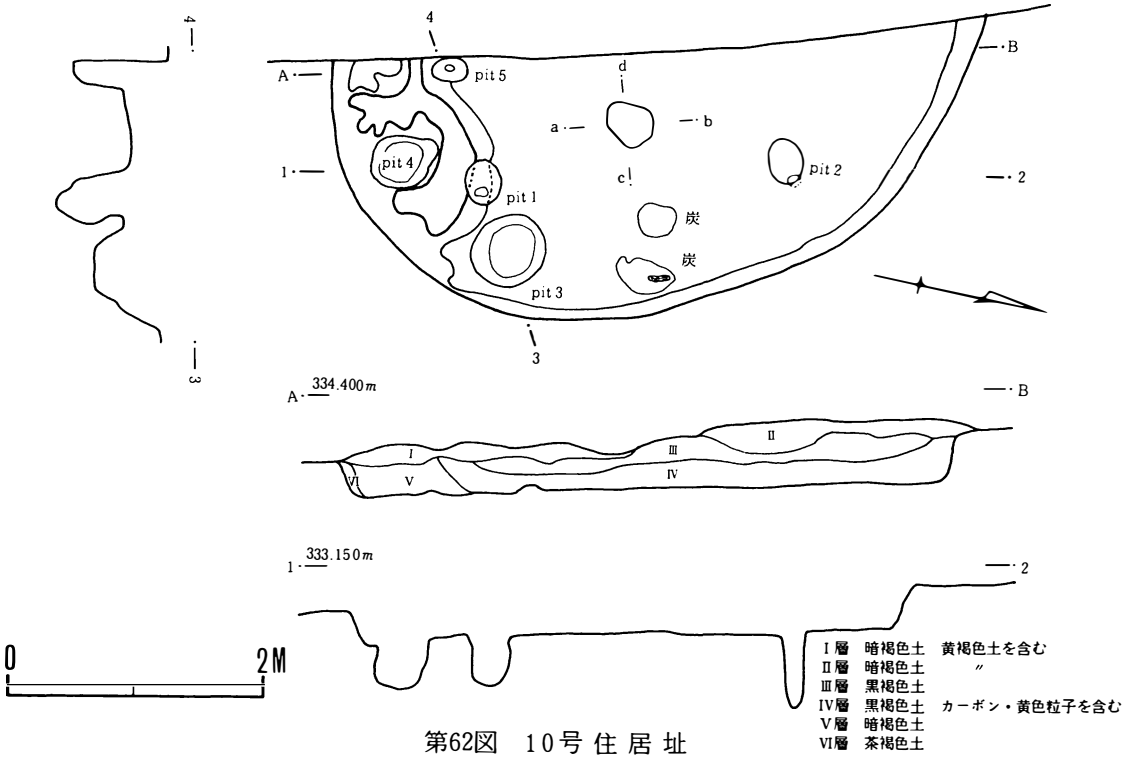
（床面・壁） 床面は堅緻な貼床でほぼ平坦である。壁高は40cmでやや斜めに立ち上がる。

（炉） 住居址平面形が不明のため全体における炉の位置関係は明らかではないが、柱穴の位置から判断して住居址中央よりやや東に設置されているようである。炉形態は上面に粘土を敷くもので、直径35cm程の不整円形を呈する。

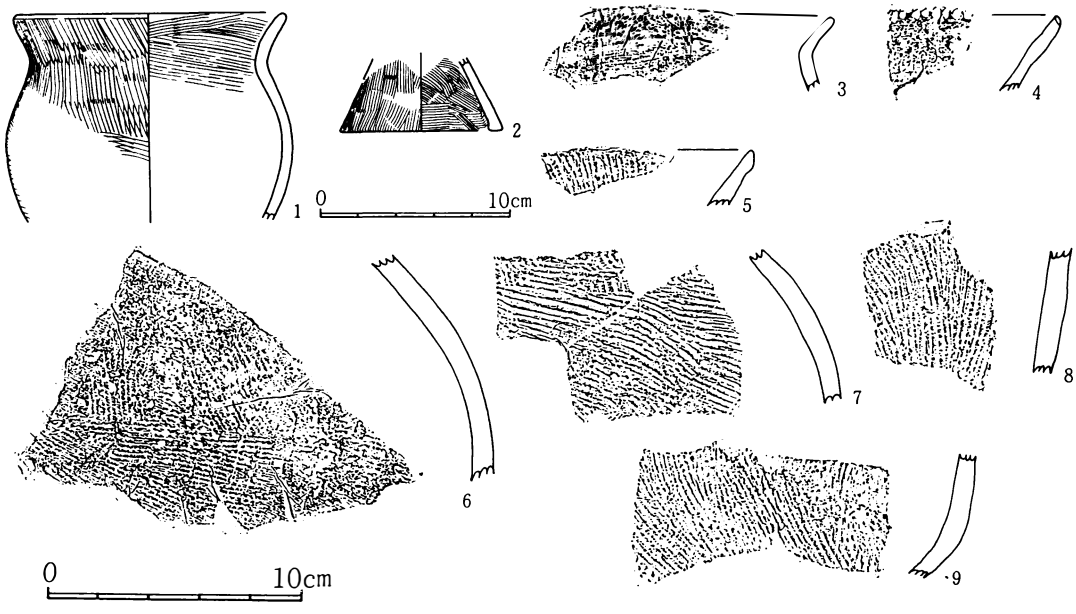
（その他の施設） ピットは5ケ所で検出された。ピット1・2は柱穴、ピット4は貯蔵穴、ピッ

ト５は入口施設に伴うものと考えられる。ピットは25～35㎝の楕円形プランを呈し、深さ45～60㎝を測る。ピット４の周囲には幅60㎝程の土堤状の盛り上がりが半円状に巡る。

（**出土遺物**）　第63図が本住居址伴出土器で、全てが台付甕形土器破片である。　１．素縁の甕形土器胴上半。頸部がゆるやかにくびれ、口径に比べて胴部最大径がやや大きい。外面に粗



第62図　10号住居址

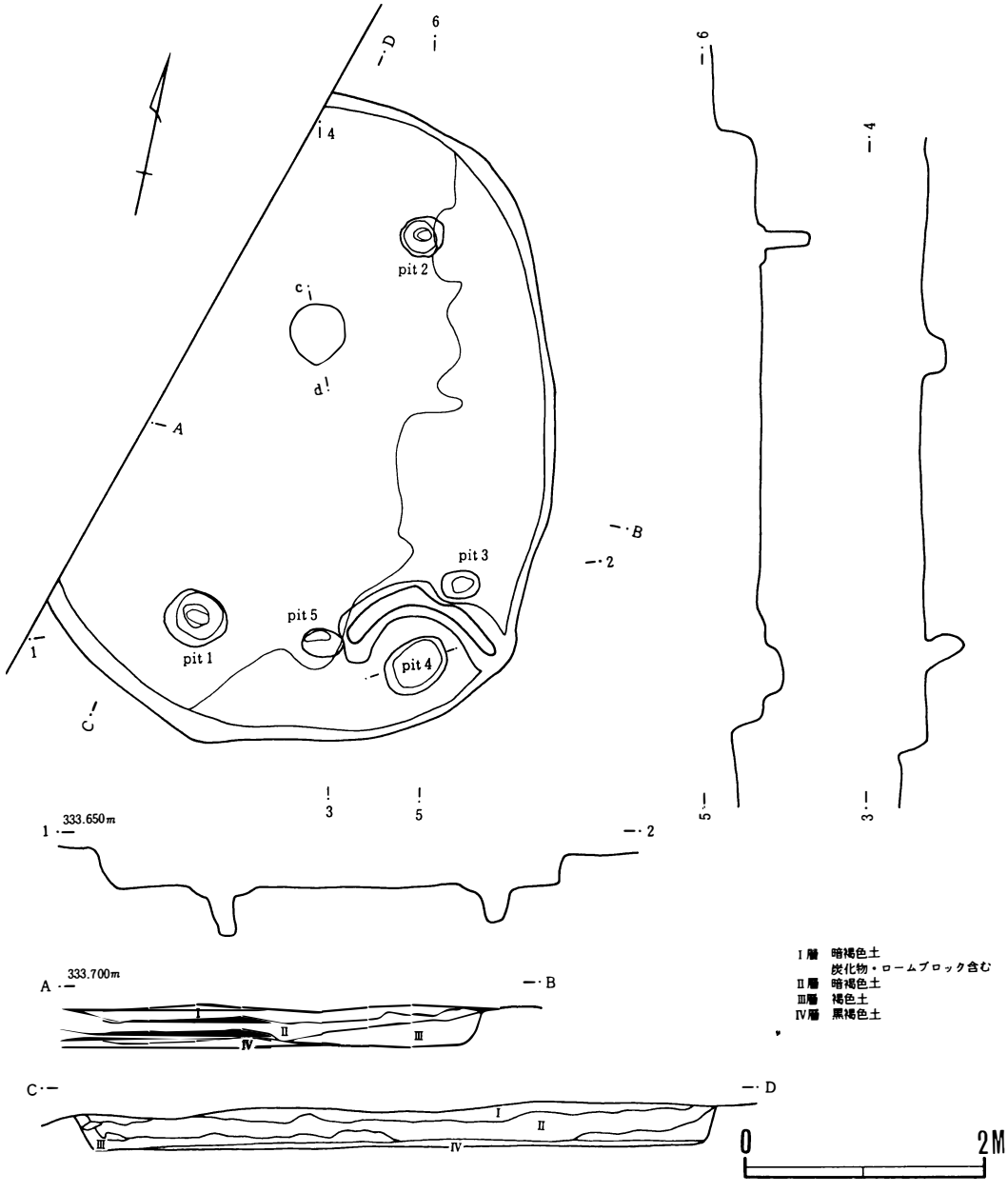


第63図 10号住居址出土土器

いハケ目、口縁内面にやや細かいハケ目による調整がなされる。口径14.3㎝、現存高11㎝を測る。3～5は甕形土器口縁部であるが、3・5は素縁、4は口唇に刻み目をもつ。2は台付甕脚部、6・7は甕形土器肩部、8・9は胴下半部と考えられいずれも外面にハケによる調整が認められる。

⑾ 11号住居址（第64・65図、図版6）

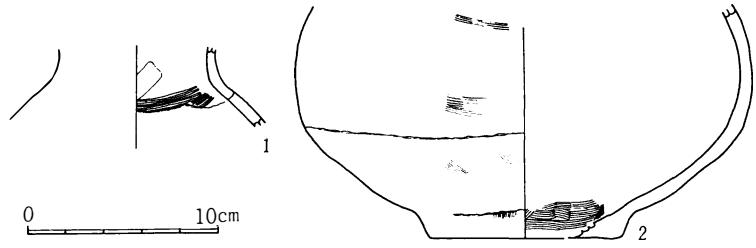
（位置） K・L※25～27グリッドに位置し、北東コーナーが調査区外へ伸びる。25号住居址と



第64図 11号住居址

重複する。

（形状・規模） 長軸５ｍ40㎝、短軸４ｍ50㎝の楕円形プランを呈し、住居址北西部が調査区外となる。主軸方向は、Ｎ－20°－Ｗである。



第65図　11号住居址出土土器

（床面・壁） 床面は堅い貼床が全体を覆い、平坦である。壁はほぼ直立し、壁高は25～35㎝を測る。

（炉） 住居址中央よりやや北東に偏して位置する。炉形態は単純な地床炉で、40㎝×60㎝の楕円形を呈する。炉上面に焼土が薄く堆積する。

（その他の施設） ピットは５ケ所で検出された。この内、ピット１～３は主柱穴と考えられ、直径30～50㎝の円形の掘り込みとなる。ピット４は住居址南東コーナーに設置された貯蔵穴と考えられ、60×40㎝の楕円形プランを呈す。この北側には土堤状の盛り上がり部が存在する。住居址南側中央部には入口の梯子受けと考えられるピット５が設けられる。このピットは住居外側に向けて60度の角度で掘り込まれていることから、当時の住居外の生活面は現在よりおよそ100㎝程高かったものと推定される。

（出土遺物） 第65図が本住居址出土土器である。

１．壺形土器肩部。内面にハケ目および輪積痕が残る。　２．壺形土器胴下部。胴下半部に最大径部をもち、わずかに稜をもって屈折する。胴部最大径 23.5㎝、現存高 12㎝を測る。

⑿ 15号住居址（第66・67図、図版７）

（位置） Ｎ・Ｏ※27・28グリッドに位置し、20号住居址を切る。

（形状・規模） 長軸５ｍ60㎝、短軸４ｍ80㎝の隅丸長方形を呈する。主軸方向は、Ｎ－５°－Ｗである。

（床面・壁） 床面は堅緻な貼床で、ほぼ平坦である。壁高は30～40㎝でやや斜めに立ち上がる。

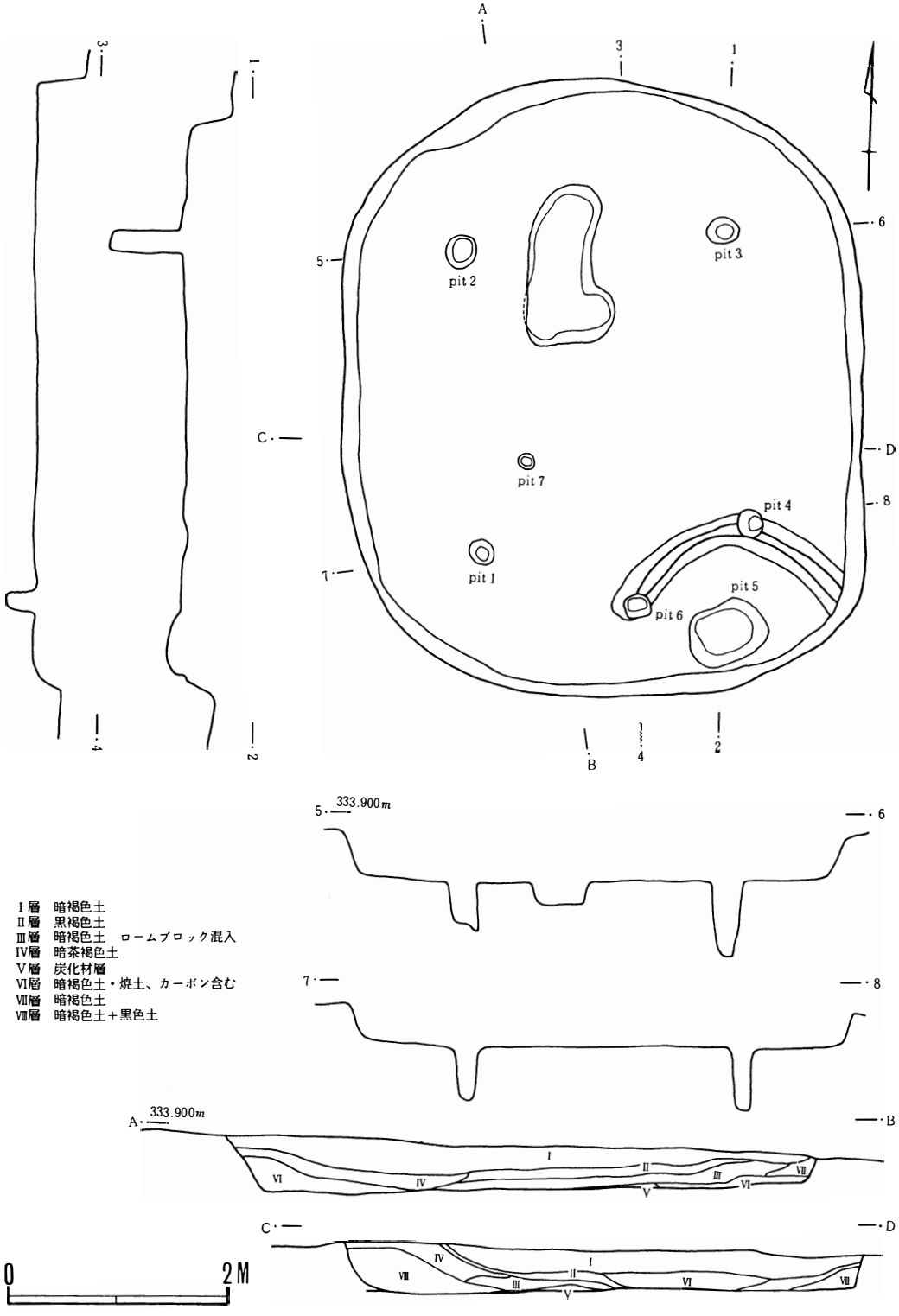
（炉） 炉は住居中央よりやや北側に偏して存在したと思われるが、この部分に後世の攪乱がはいり検出されなかった。

（その他の施設） ピットは７ケ所確認された。この内ピット１～４が主柱穴、５が貯蔵穴、６が入口施設に伴うピットと考えられる。ピット５の北側には土堤状の盛り上がり部が弧状に認められる。ピット４・６はこの盛り上がり部を切って掘り込まれる。

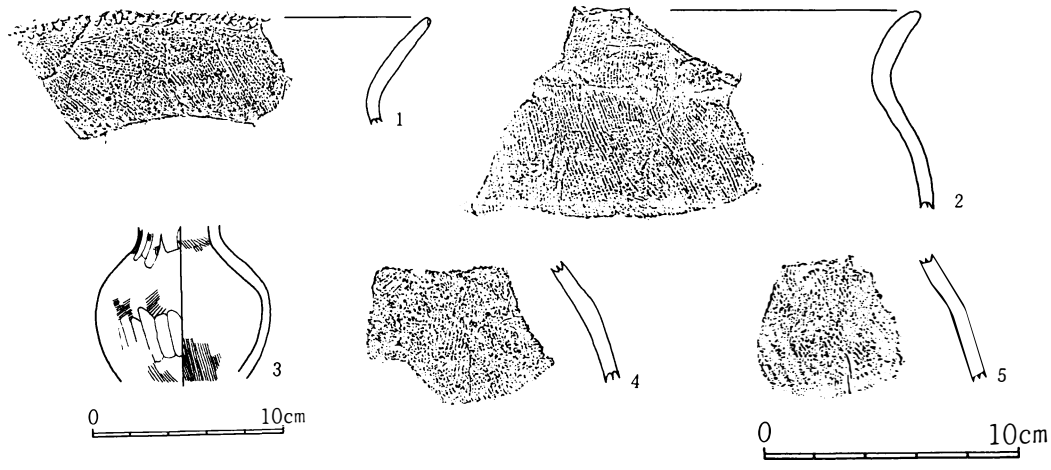
床面直上に焼土、カーボンを多く含む暗褐色土層が薄く堆積することから、火災住居址の可能性もあろう。

（出土遺物） 第67図が本住居址伴出土器である。

１．甕形土器口縁部。口唇に刻みを巡らし、外面にハケ目を斜方向に施す。　２．甕形土器口縁部。素縁で口縁部がわずかに肥厚する。頸部くびれはゆるやかで、胴部が口径に比べて若


A
3
1
6
5
pit 2
pit 3
C
D
pit 7
pit 4
8
7
pit 1
pit 5
pit 6
B
4
2
333.900m
I層　暗褐色土
II層　黒褐色土
III層　暗褐色土　ロームブロック混入
IV層　暗茶褐色土
V層　炭化材層
VI層　暗褐色土・焼土、カーボン含む
VII層　暗褐色土
VIII層　暗褐色土＋黒色土
0
2M

第66図　15号住居址



第67図　15号住居址出土土器

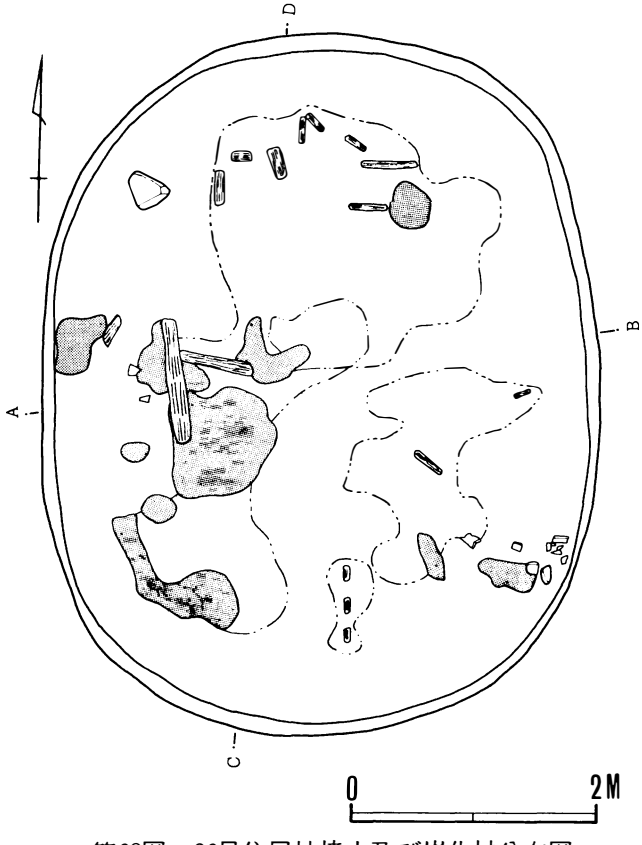
千大きくなるものと思われる。　3．小型壺形土器。口縁部と底部を欠損する。外面にはハケ目の上からヘラ削りの調整がなされる。最大径９㎝、現存高8.5㎝を測る。

⑬　26号住居址（第68～71図、図版７）

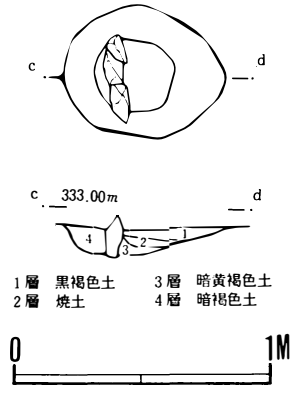
（位置）　K・L※23・24グリッドに位置する。主軸方向はほぼ南北を指す。

（形状・規模）　長軸５ｍ70㎝、短軸４ｍ50㎝の楕円形を呈する。

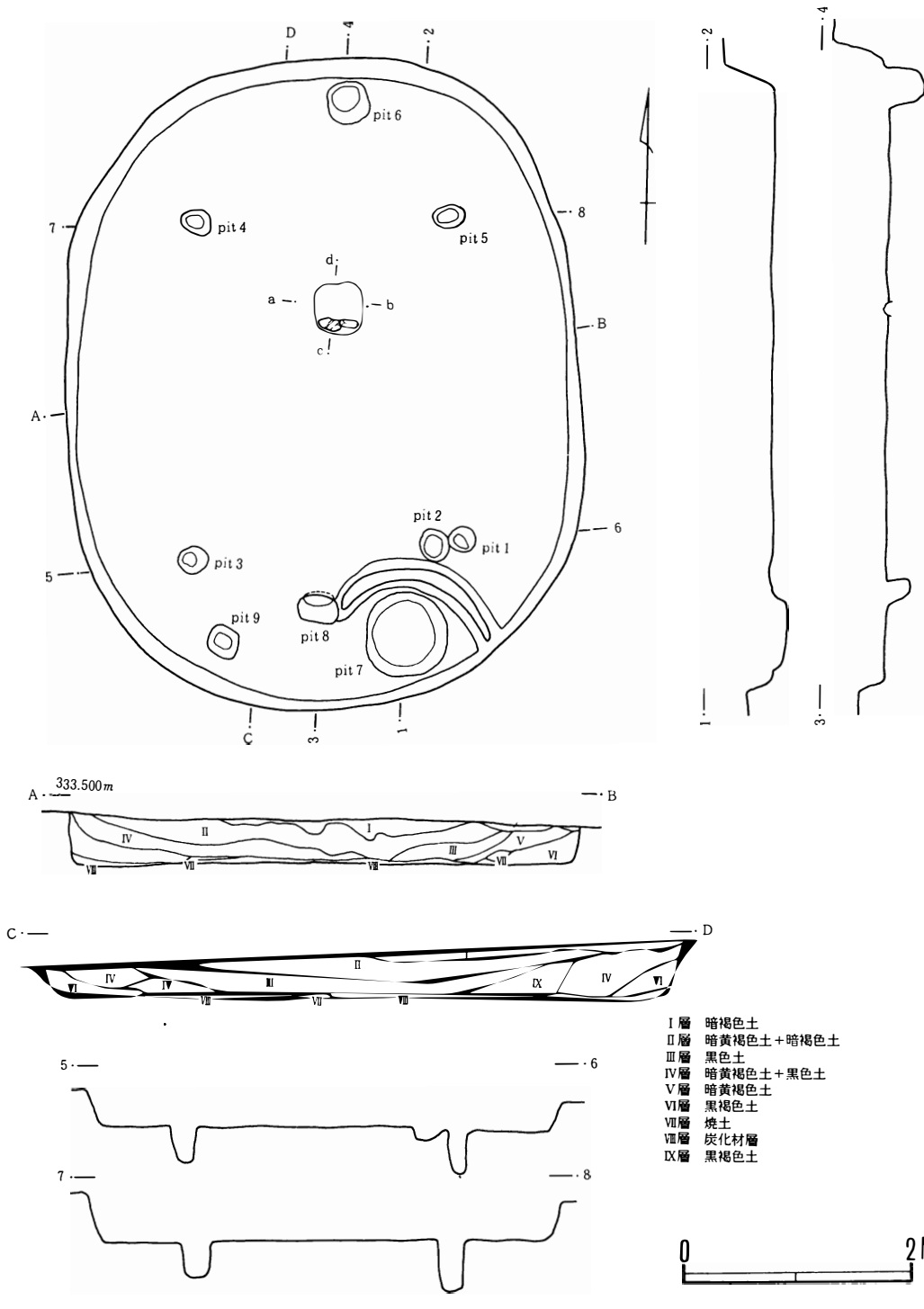
（床面・壁）　床面は堅緻な貼床である。壁はほぼ直壁にちかく、



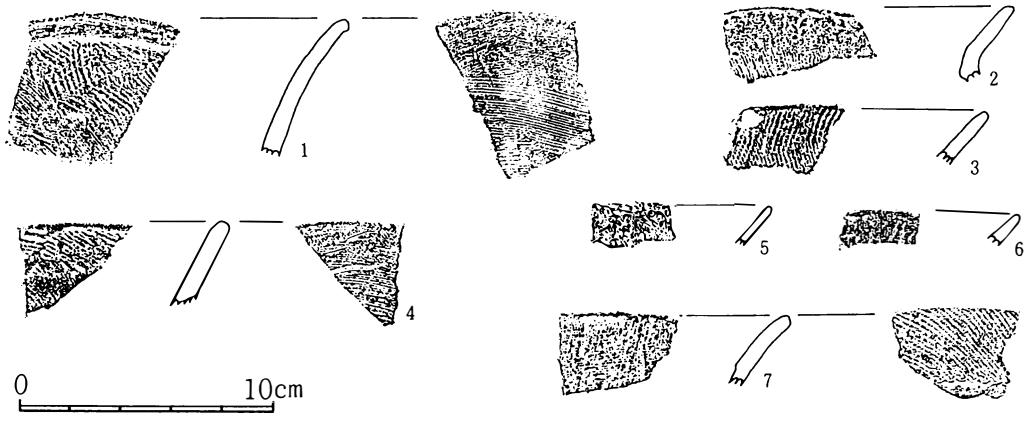
第68図　26号住居址焼土及び炭化材分布図



第69図　26号住居址炉


D
4
2
pit 6
7
pit 4
pit 5
8
d
a
b
c
B
A
pit 2
pit 1
6
pit 3
5
pit 9
pit 8
pit 7
C
3
1
333.500m
A
B
II
I
IV
III
V
VI
VII
VIII
C
D
IX
5
6
7
8
I層 暗褐色土
II層 暗黄褐色土＋暗褐色土
III層 黒色土
IV層 暗黄褐色土＋黒色土
V層 暗黄褐色土
VI層 黒褐色土
VII層 焼土
VIII層 炭化材層
IX層 黒褐色土
0
2M

第70図　26号住居址



第71図　26号住居址出土土器

壁高30～50㎝を測る。

（炉）　炉は住居址中央より北側に偏して設置されている。形態は７号住居址と同じく、燃焼部を粘土で固め平坦面を造り、南側に小礫を枕状に配する。大きさは１辺45㎝程の四角形に近い。

（その他の施設）　ピットは９つ確認されているが、ピット１、３～５が主柱穴、７が貯蔵穴、８が梯子受けと考えられる。ピット６、９については用途不明である。柱穴は直径20㎝程の円形が多いが、５のみは扁平となる。深さは30㎝前後を測る。ピット７は直径80㎝の円形ピットで深さは20㎝と浅い。ピット８は35㎝×25㎝の楕円形ピットでその掘り込みは住居址外側に向って65度の角度で立ち上がる。一木を利用した梯子とすると、当時の生活面は確認面より約１ｍ程高くなり、2000年近い間に地表面がかなり削平されてきたことが窺える。

床面直上には焼土と炭化材が全面に堆積することから、火災住居址と考えられる。

（出土遺物）　第71図が本住居址出土土器である。

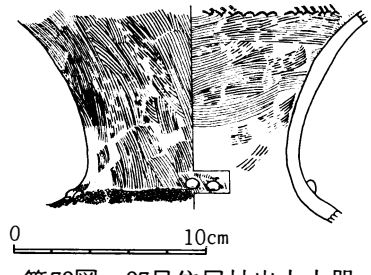
１．壺形土器口縁部。口縁はわずかに折り返しをもち内外面にハケ目調整がなされている。　２．甕形土器口縁部。素縁で頸部にハケ目が縦方向に認められる。　３．甕形土器口縁部。素縁で、口縁からハケ目調整される。　４．甕形土器口縁部。素縁で、内外面にハケ目が施される。内面のハケ目は外面に比べ細かい。　５・６．素縁の甕形土器口縁部。　７．壺形土器口縁部。外面はハケ目が縦走し、内面には結節の細かい縄文が口縁部に施される。

⑭　27号住居址（第33・72図）

（位置）　K※25グリッドに位置し、25号住居址と重複する。大半が調査区外に存在する。

（形状・規模）　長軸５ｍ程の楕円形をなすと思われるが、詳細は不明である。

（床面・壁）　南側の残存部で貼床が若干確認されている。



第72図　27号住居址出土土器

壁高は40㎝程を測る。

（炉） 確認されていない。

（その他の施設） ピットは２ケ所確認され、ピット１が住穴、２が貯蔵穴と考えられる。ピット２の北側には土堤状の盛り上がりが認められる。

床面直上に焼土と炭化材が堆積し、火災住居址と考えられる。

（出土遺物） 第72図が本住居址出土土器である。壺形土器の頸部で、口縁および胴部以下を欠損する。口縁内面に結節縄文､肩部外面にボタン状貼付文と縄文を施す。

⑮ 28号住居址（第73図）

（位置） P※30グリッドに位置し、大半が調査区外に伸びる。

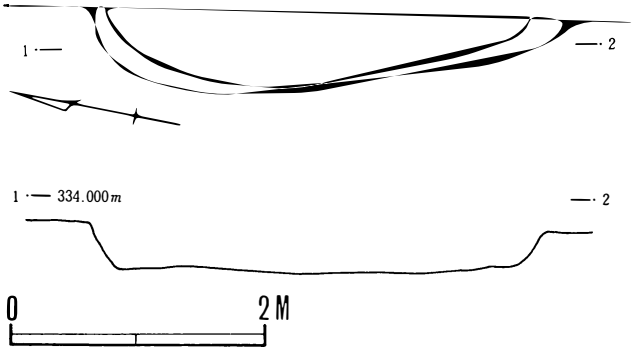
（形状・規模） 南北３ｍ70㎝を測り、コーナー部分が隅丸となる。

（床面・壁） 床面は貼床で、壁高約40㎝を測る。

（炉） 確認されていない。

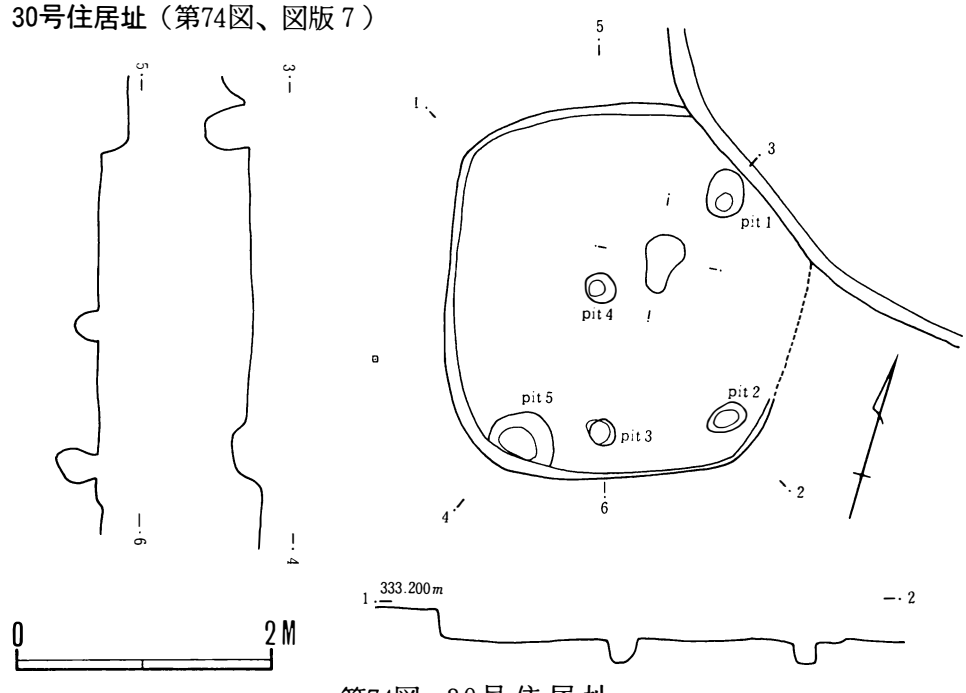
（その他の施設） 調査範囲が壁際に限られることから、ピット等は確認されなった。

（出土遺物） なし。



第73図　28号住居址

⑯ 30号住居址（第74図、図版７）



第74図　30号住居址

（位置） M※24・25グリッドに位置し、12号住居址と若干重複する。

（形状・規模） 1辺3ｍ程の隅丸方形を呈する小型住居址である。主軸方向はＮ－14°－Ｗである。

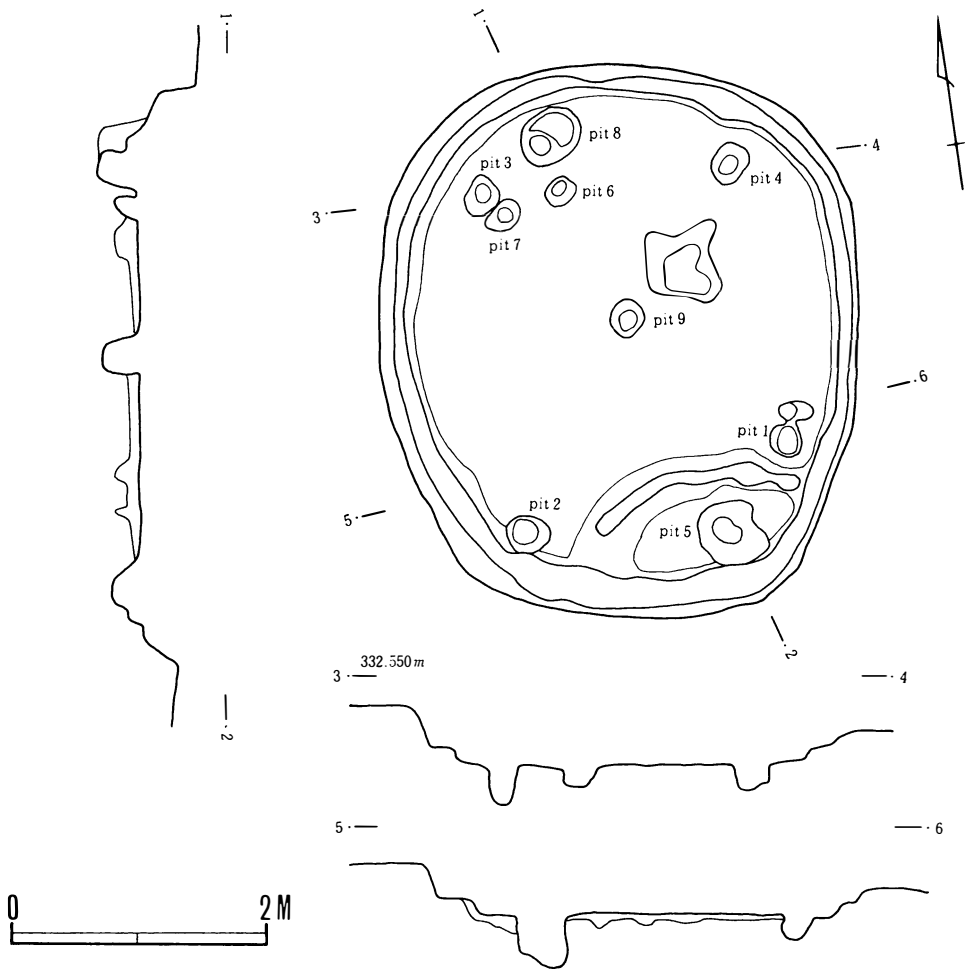
（床面・壁） 床面は堅緻な貼床で、壁高は20㎝を測る。

（炉） 住居址中央部よりやや北東に位置する。50㎝×25㎝の楕円形を呈した地床炉である。

（その他の施設） ピットは5本確認されている。ピット1、2は位置的に柱穴と考えられるが、これに対応する西側のピットは確認できなかった。ピット5は住居址南東コーナーに位置し、深さ20㎝程の浅い掘り込みである。

（出土遺物） なし。

⑰ 31号住居址（第75図、図版6）



第75図 31号住居址

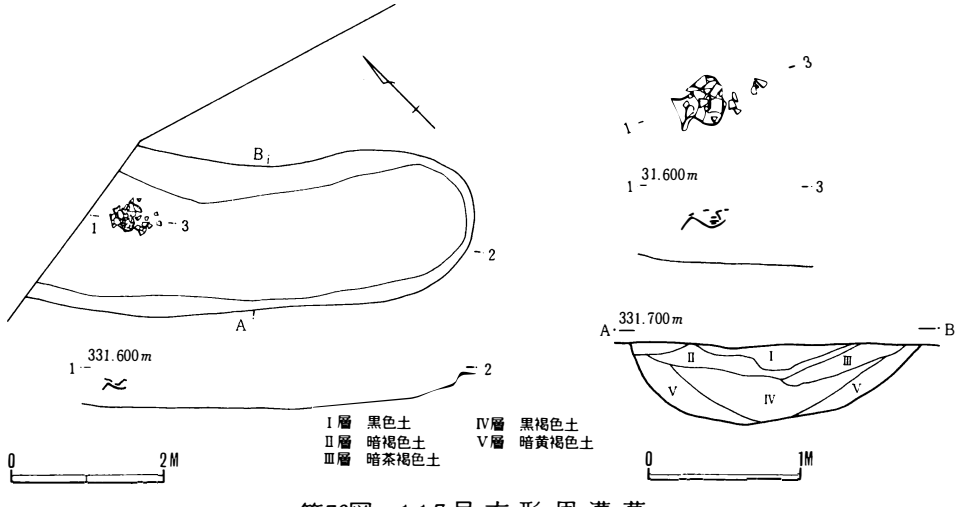
（位置） K・L※16・17グリッドに位置する。8号住居址の拡張以前の住居と考えられる。
（形状・規模） 8号住居址よりひとまわり小さく、3 m80cm×3 m40cmの楕円形を呈する。
（床面・壁）床面は貼床で、壁高は8号住居址床面まで10cmを測る。掘り方は床下全体を覆い、凹凸が激しい。
（炉） 住居址中央より北東に位置し、形態は地床炉である。1辺50cm余りの不整四角形を呈する。
（その他の施設） ピットは9ケ所検出されたが、この中には8号住居址から掘り抜かれたものも存在する。本住居址柱穴はピット1～4と考えられ、深さ20～30cmを測る。ピット5は貯蔵穴と考えられ、この北側を幅30cm程の土堤状の盛り上がりが巡る。
（出土遺物） なし。

2. 方形周溝墓

今回の調査で確認された方形周溝墓は4基でこの内20号、49号方形周溝墓は第1次調査において調査されたものである。したがってここでは新たに発見された117号、118号方形周溝墓について記述する。

(1) 117号方形周溝墓（第76・77図、図版9）

（位置） 調査区北西のA・B※16・17グリッドに位置する。
（形状・規模） 調査区で確認されている部分はごく僅かで全体の形状・規模は不明である。確認された部分は長さ5 m40cm、幅2 mの周溝で周溝墓コーナーと考えられる。
（溝底・立ち上がり） 溝底はほぼ平坦をなし、やや湾曲したなだらかな立ち上がりをなす。溝の深さは50cmを測る。
溝内の堆積土層は5層に分けられ、レンズ状に自然堆積する。
（出土遺物） 第77図1、2が溝内から出土している。1は溝底部の20cm程上から壺形土器が横たわった状態で出土している。
壺1の大きさは高さ43.5cm、口径23.5cm、胴部最大径31.5cm、底径7 cmを測る。口縁部形態は



第76図 117号方形周溝墓

折返し口縁で外側に指頭圧痕が認められる。胴部の最大部分は胴部中程で、頸部から口縁部にかけて朝顔状に開く。器面は刷毛によって調整した後ヘラミガキが施される。内面は口縁部にヘラミガキ、胴部下半部に刷毛が残り、底部には焼成後の穿孔が行なわれている。弥生時代後期末の所産と考えられる。

(2) 118号方形周溝墓（第77・78図、図版９）

（位置） Ｑ・Ｒ※33・34グリッドに位置する。この北側には20号、49号方形周溝墓が存在している。

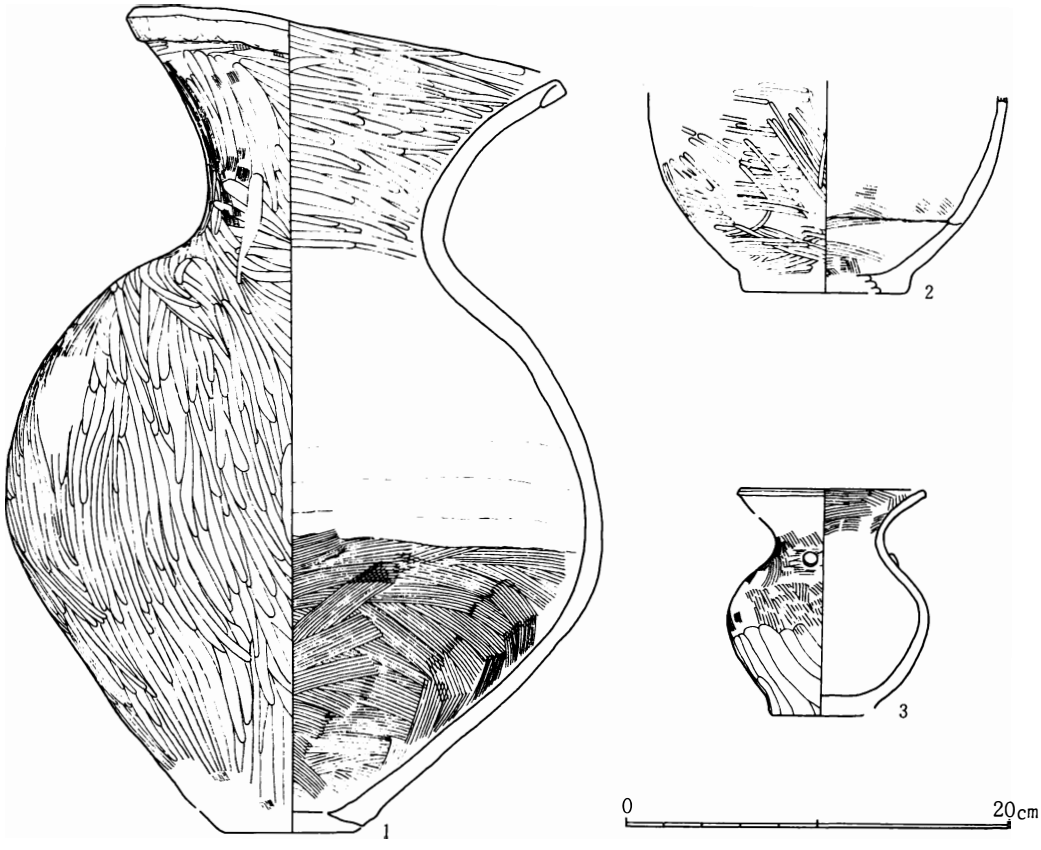
（形状・規模） 周溝西側と北側が確認されたが、溝は更に調査区東へと続く。西側溝の長さは約９ｍで、南西コーナーがブリッジとなる。溝の幅は１ｍ～１ｍ60㎝を測る。

（溝底・立ち上がり） 溝底はコーナー付近で浅くなる傾向をもち、最深部で約１ｍを測る。溝の立がりは内面が直壁に近く、外側がなだらかとなる。

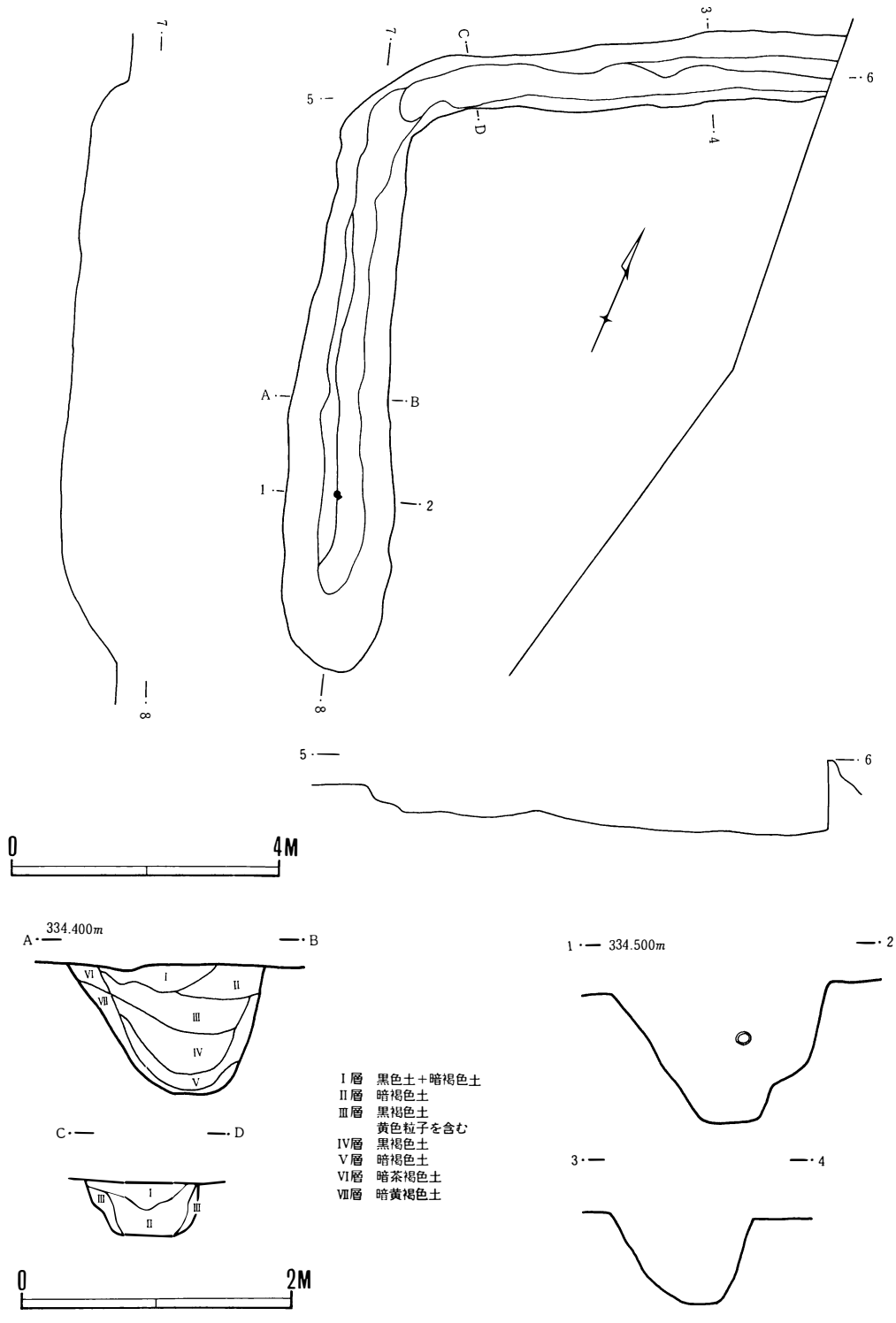
溝内の土層はいずれもレンズ状をなし自然堆積と考えられる。

（出土遺物） 南西コーナーの溝内より小型の壺形土器が出土している（第77図３）。

壺の大きさは高さ12㎝、口径10㎝、最大径10.5㎝、底径５㎝を測る。口縁部は平縁で、肩部にボタン状貼付文が付加される。器面は上半が刷毛調整され、胴下半にヘラ削りを施す。



第77図　117号・118号方形周溝墓内出土土器



第78図　118号方形周溝墓

3．溝状遺構

(1)　1号溝（第79図）

遺跡南東のＫ・Ｌ※５～12グリッドに位置する。溝の幅は１ｍ程で南北方向に約30ｍの長さで伸びている。付近の削平が著しく溝が南北にどのように伸びていたものか不明であるが、何ケ所かで溝が分岐し遺跡東側の斜面に伸びる形跡が認められた。確認面からの溝の深さは30㎝程であるが、住居址梯子受けの角度から推定したとおり当時の生活面が１ｍ程削平されたとすると構築時にはしっかりとした溝であったと考えられる。覆土中の出土遺物は弥生時代後期後葉のものであるが、この溝が住居址群を隔てる境界であったのか、あるいはある時期の墓域と居住区を分離する機能を持っていたものかは不明である。

(2)　2号溝（第５図）

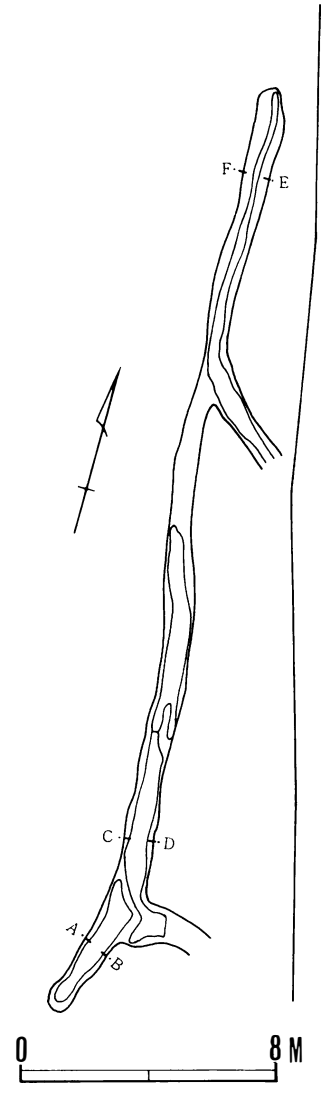
Ｍ～Ｏ※27～30グリッドに位置する。南北方向に幅１ｍ50㎝の浅い溝が15ｍにわたってのびる。溝の深さは10㎝程で覆土中に遺物は含まれていない。覆土の性質から弥生時代の溝と考えられるが、その機能については不明である。

4．掘立柱建物遺構

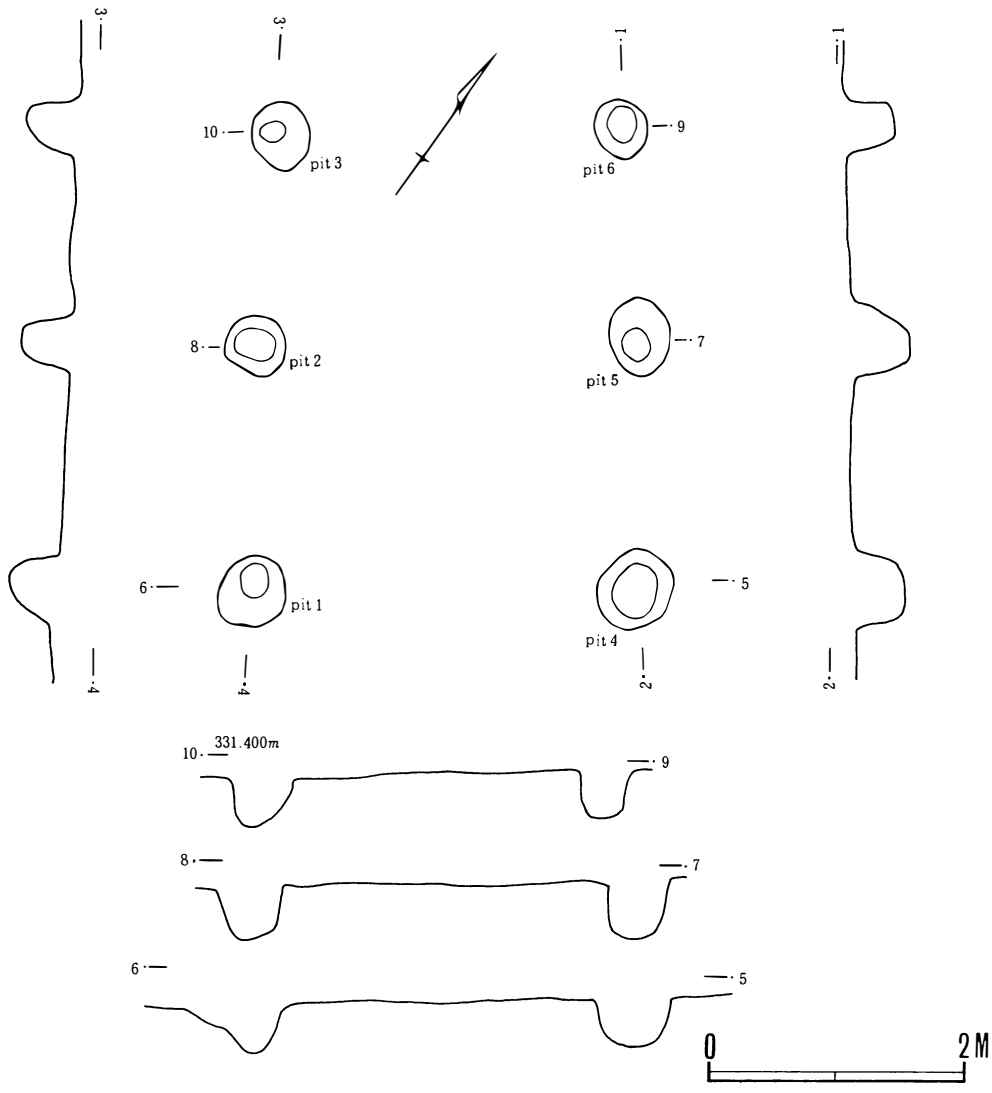
１号掘立柱建物遺構（第80図、図版７）

７号住居址東２ｍ50㎝の距離に位置する。主軸はＮ－30°－Ｗの方向で、ほぼ７号住居址と一致する。規模は２間（約３ｍ60㎝）×１間（約３ｍ）の建物である。柱穴間の距離は東列（P_4～P_6）で２ｍ・１ｍ70㎝、西列（P_1～P_3）で１ｍ90㎝・１ｍ70㎝、北列２ｍ80㎝、南列３ｍを測る。柱穴はいずれも直径50㎝程の円形ピットで深さ50㎝前後を測る。

遺物はピット５覆土から弥生時代後期の土器片が出土している。



第79図　１号溝



第80図　1号掘立柱建物遺構

5．竪穴状遺構

1号竪穴（第5図）

（位置） D・E※15グリッドに位置する。

（形状・規模） 遺構の大半が調査区外に伸びるため全体の形状は不明である。南側コーナーは隅丸を呈し、東西3 m35cmを測る。

（床面・壁） 立ち上がり中段にテラスをもち階段状の断面をなす。壁高はテラスまで約30cm、底面まで80cm前後を測る。床面はやや軟弱である。

（出土遺物） なし。

調査範囲が狭く遺構の性格は明らかにできないが覆土の特徴から弥生時代の遺構と考えられる。

第Ⅳ章　第 5 次 調 査

第 1 節　遺構検出状況

第 5 次調査の調査範囲は第 4 次調査の北側に連続する10m ×450mの区域で、遺跡を載せる台地の北辺に沿っている。調査区全体をＡ区北側およびＢ区、Ｃ区、Ｄ区、Ｅ区、Ｆ区に便宜的に区分けしたが、この内遺構の検出されたのはＡ区、Ｂ区、Ｄ区、Ｅ区の 4 区である。Ｃ区にもかつて遺構の存在した可能性があるが、第 1 次調査以前に 1 m以上の削平を受けている事実が明らかにされている。　今回の調査で検出された遺構は縄文時代の住居址 9 軒、土坑115基、埋甕 4 基、ピット群 3 基、弥生時代の方形周溝墓17基（内10基は過去確認済）、平安時代の住居址 2 軒である。

縄文時代の遺構は第 4 次調査区の北側及び北西にかけて集中し、Ｂ区の中程以西にはほとんど存在しない。したがって、該期の集落はＡ区北側からＢ区東側の遺跡北東部分に展開したことが窺える。集落規模は直径約160mにおよぶと推定される。

弥生時代の遺構はＡ区南に集落が存在していたのに対し、遺跡北側では方形周構墓だけが展開し居住区と墓域が意識的に分離されていたことが窺える。

平安時代の住居址はＥ区に存在している。

以上の他に先土器時代の石器が一点縄文時代の土坑に混入して検出されたが、同時代の遺構は発見されなかった。

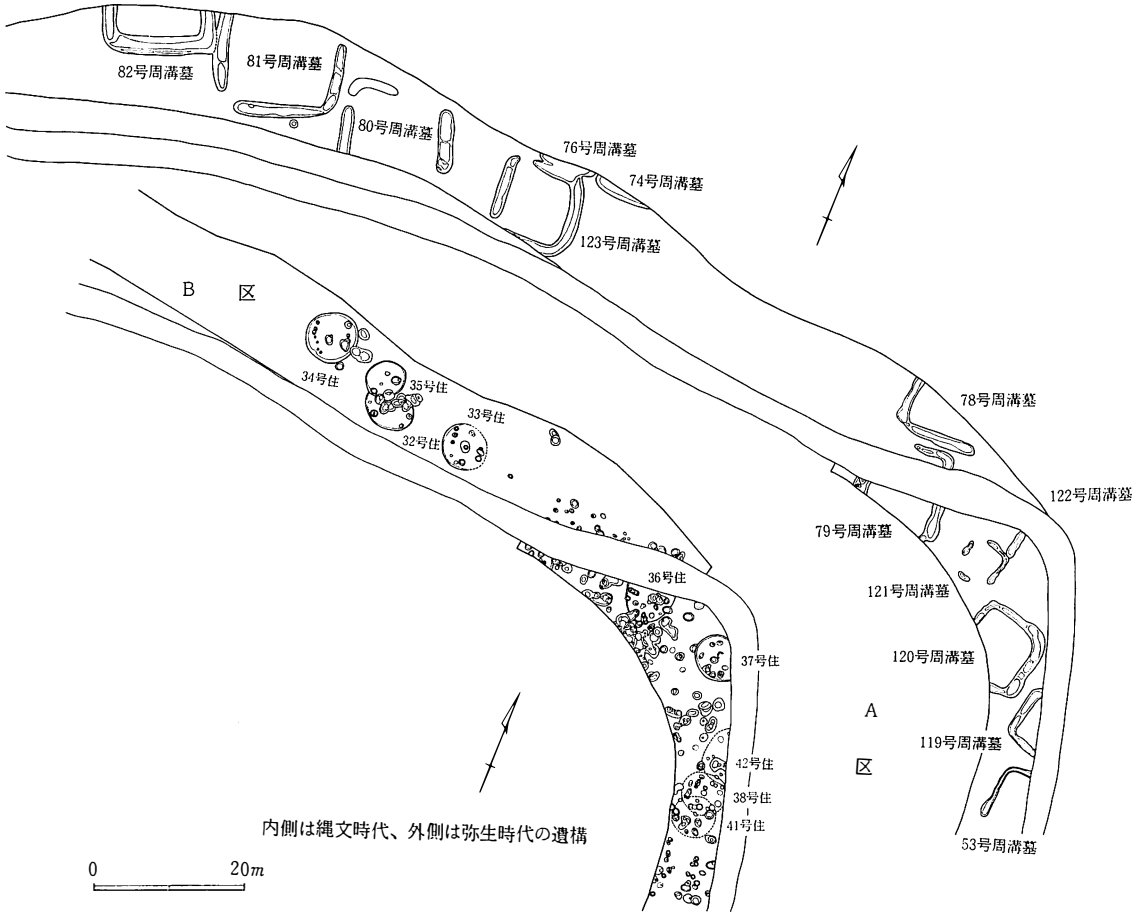
第 2 節　縄文時代の遺構

1．住居址

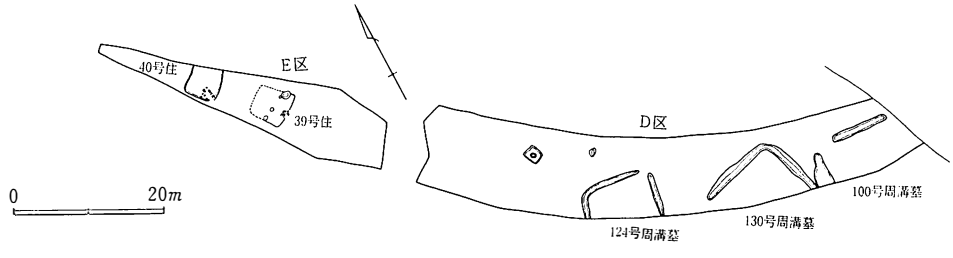
表 4　縄文時代住居址一覧表

住居番号	位置	プラン		炉	柱穴	施　設	時　代	その他
		形	規模（cm）					
32住	11.12※5.6	（円形）	（直径620）	石囲い炉	7		縄文時代中期	藤内式
33住	9.10※4.5	不整円形	620×580	地床炉	12	貯蔵穴 1 （フラスコ状）	縄文時代中期	藤内式 貯蔵穴底部より有孔鍔付土器出土
34住	13.14※8.9	円　形	直径680	埋甕炉	12	貯蔵穴 1 （袋状）	縄文時代前期	十三菩提式 貯蔵穴より完形土器出土
35住	12※7	円　形	直径480	不　明	不明		縄文時代中期	藤内式
36住	R.S※48.49	楕円形	短軸680	不　明	16		縄文時代中期	藤内式 袋状土坑 1
37住	T※46.47	楕円形	短　軸	石囲い炉	12		縄文時代中期	井戸尻式

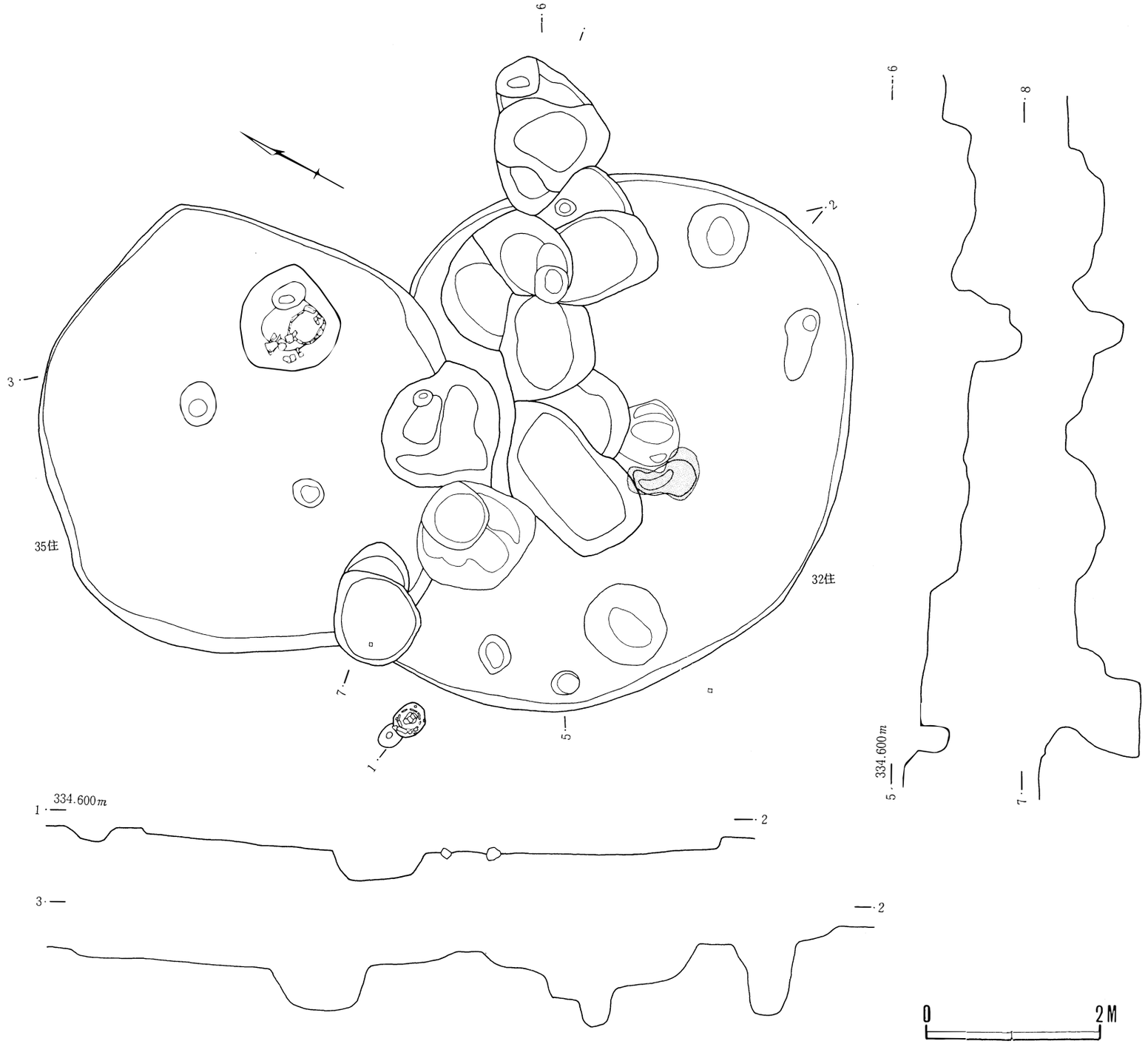
住居番号	位置	プラン		炉	柱穴	施設	時代	その他
		形	規模（cm）					
38住	S.T※42.43	（円形）	（直径600）	埋甕炉	11		縄文時代前期	十三菩提式
41住	S.T※41.42	（円形）	（直径600）	埋甕炉	10		縄文時代前期	十三菩提式
42住	T※43.44	（楕円形）	長軸700	不明	11		縄文時代中期	五領ヶ台式



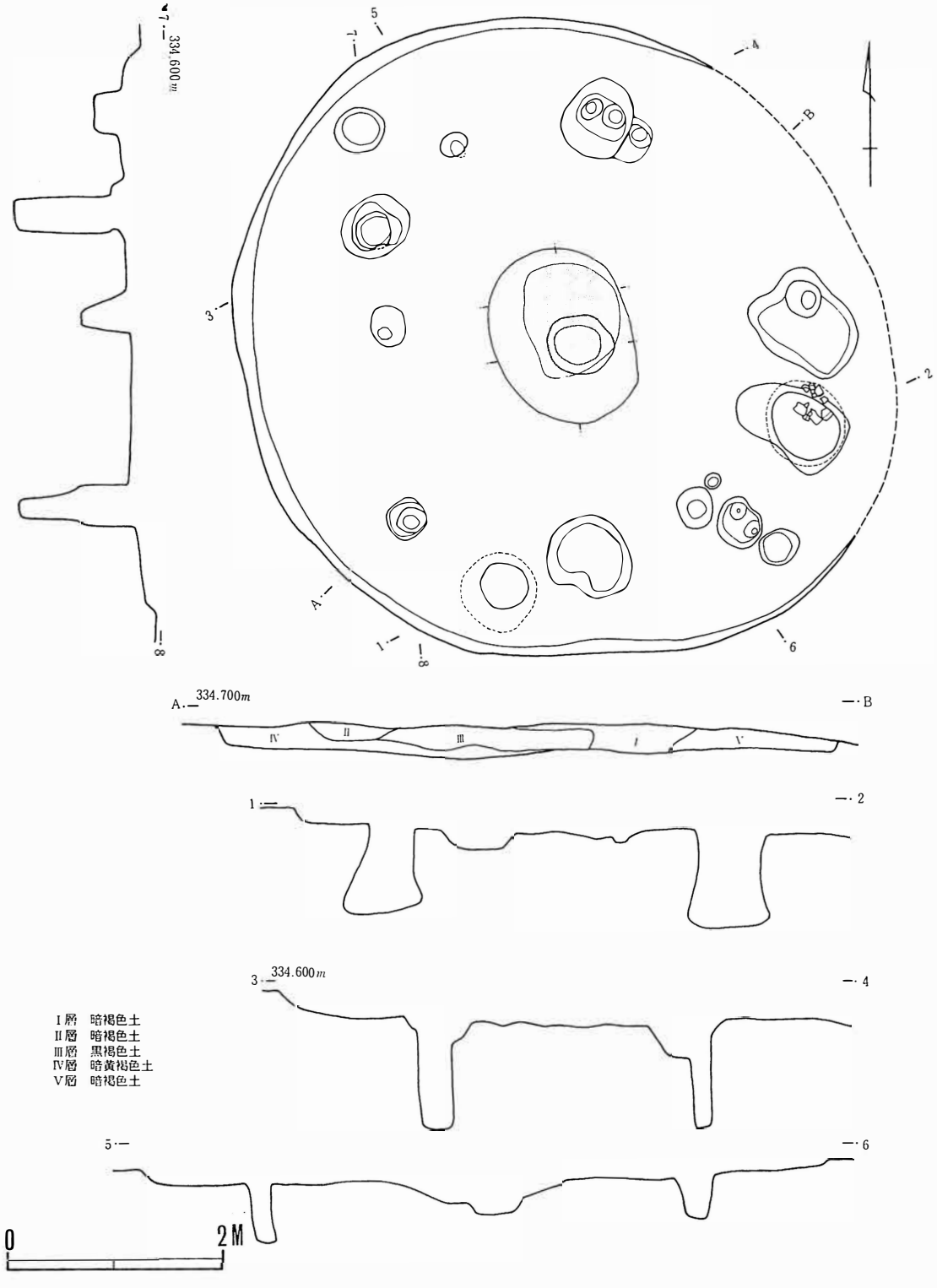
第81図　A区北側及びB区遺構配置図



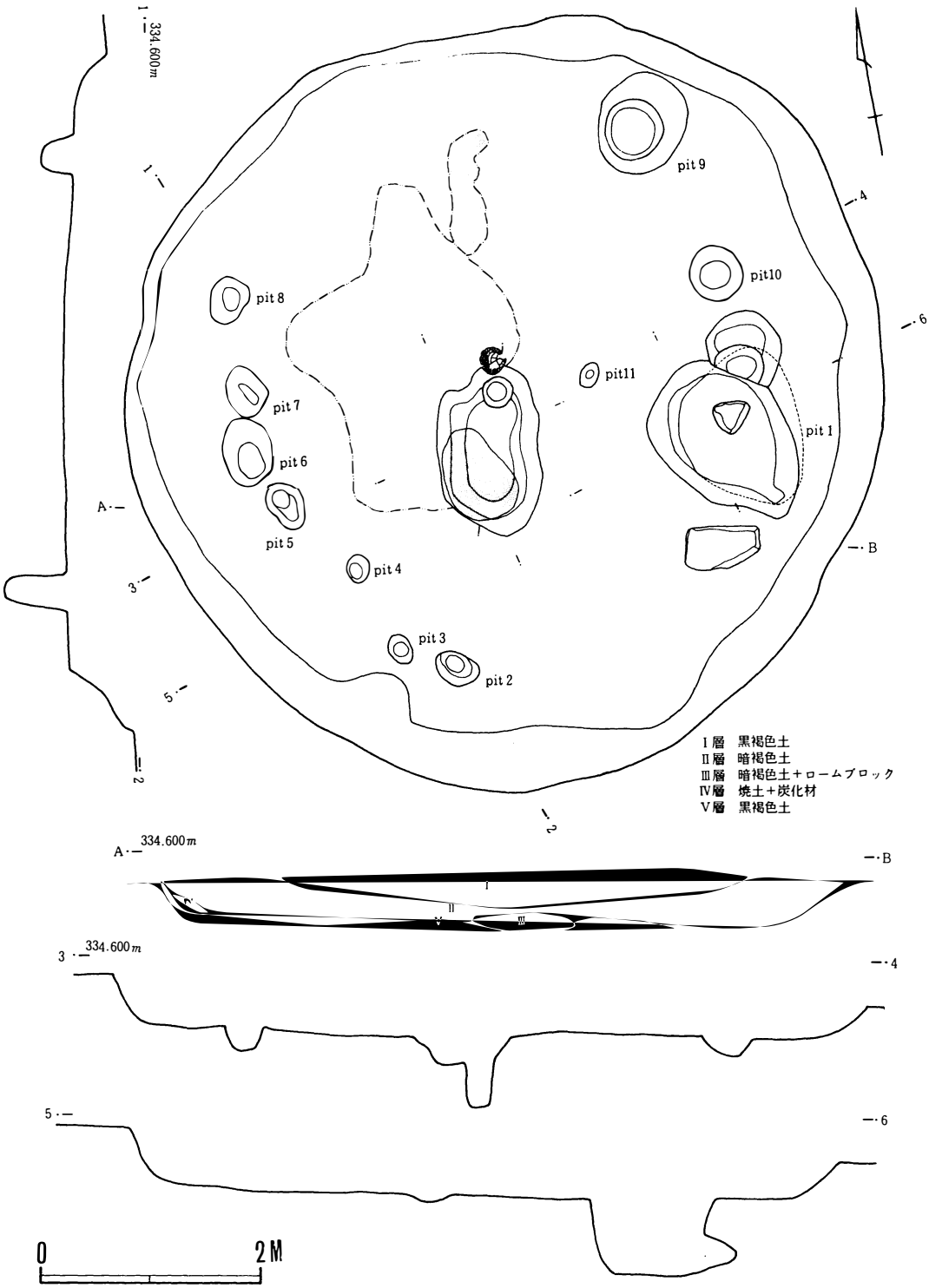
第82図　D区・E区遺構配置図



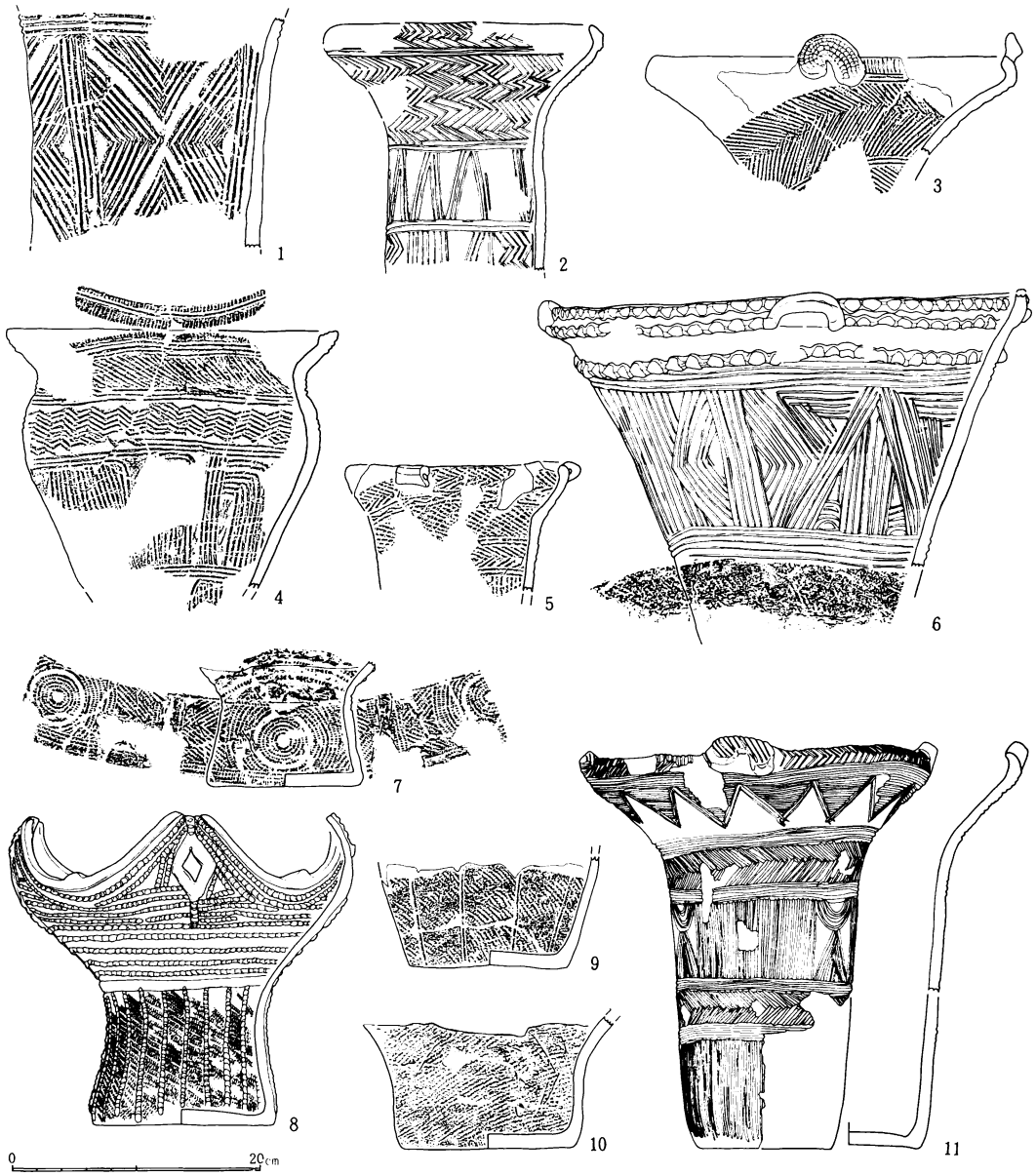
第83図　32号・35号住居址


7
334.600m
5
A
B
3
2
A
1
8
6
A.
334.700m
B
IV
II
III
I
V
1
2
3
334.600m
4
I層 暗褐色土
II層 暗褐色土
III層 黒褐色土
IV層 暗黄褐色土
V層 暗褐色土
5
6
0
2M

第84図　33号住居址

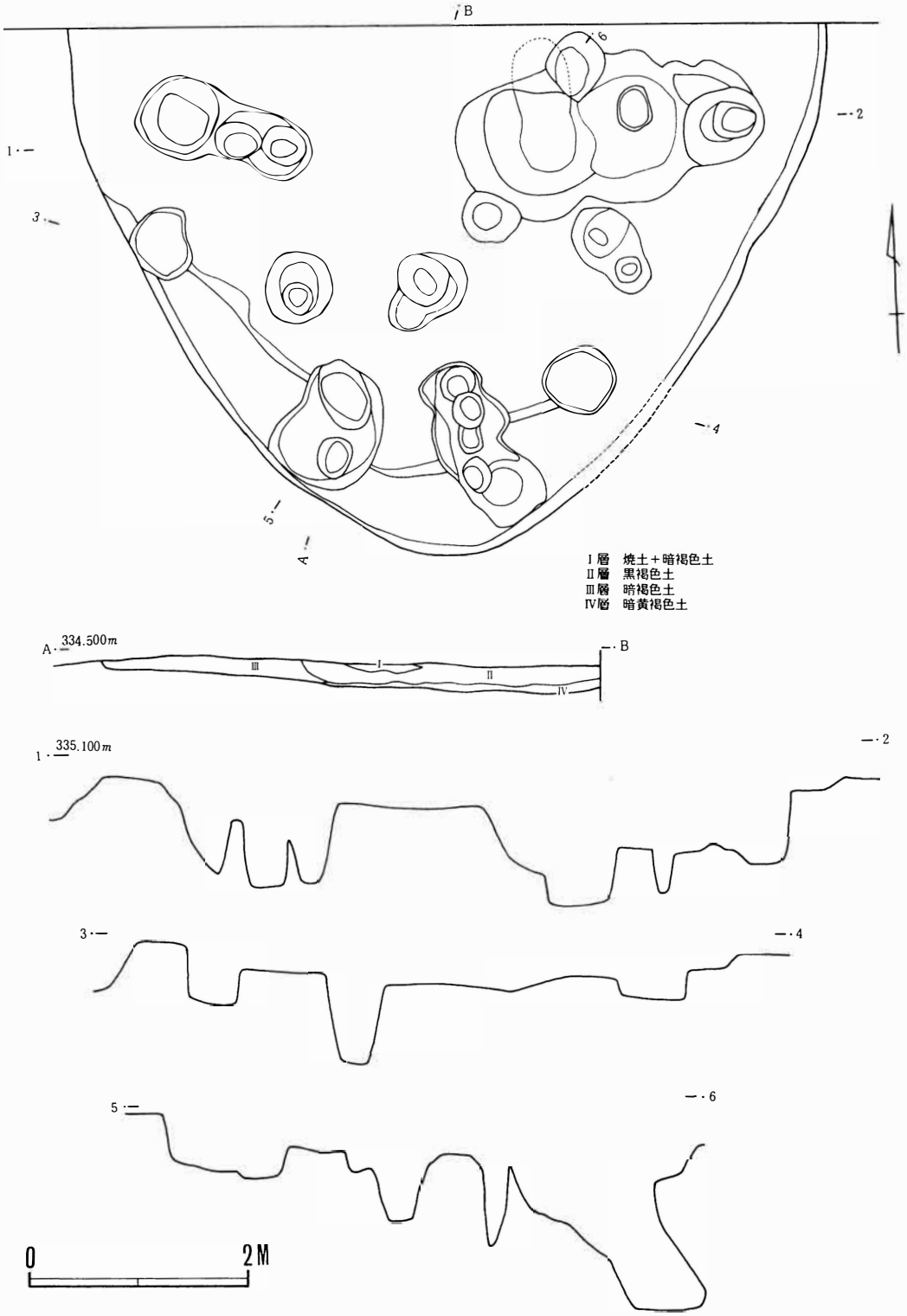

1
334.600m
pit 9
pit10
pit 8
pit11
pit 7
pit I
pit 6
pit 5
pit 4
pit 3
pit 2
A
B
2
3
4
5
6
I層 黒褐色土
II層 暗褐色土
III層 暗褐色土＋ロームブロック
IV層 焼土＋炭化材
V層 黒褐色土
334.600m
334.600m
0
2M

第85図　34号住居址

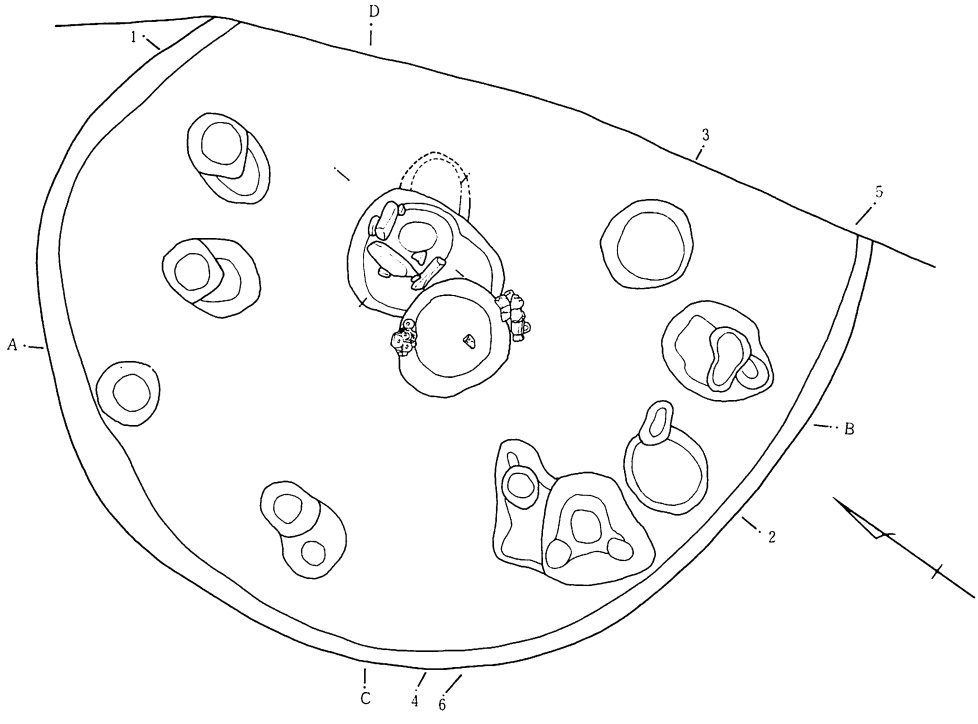


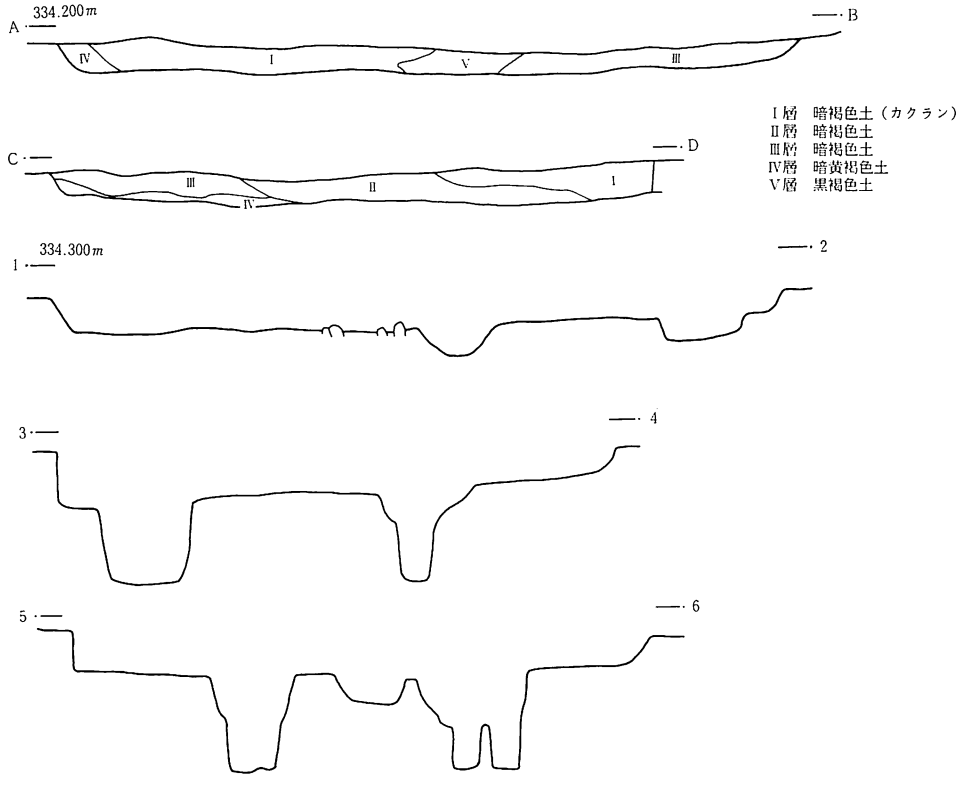
第86図　34号住居址出土土器

1・6　炉体土器。
7・10　床面直上出土。
8　貯蔵穴内出土。
2～5、9・10　覆土内出土。


B
A
1
2
3
4
5
6
Ⅰ層　焼土＋暗褐色土
Ⅱ層　黒褐色土
Ⅲ層　暗褐色土
Ⅳ層　暗黄褐色土
334.500m
335.100m
0
2M

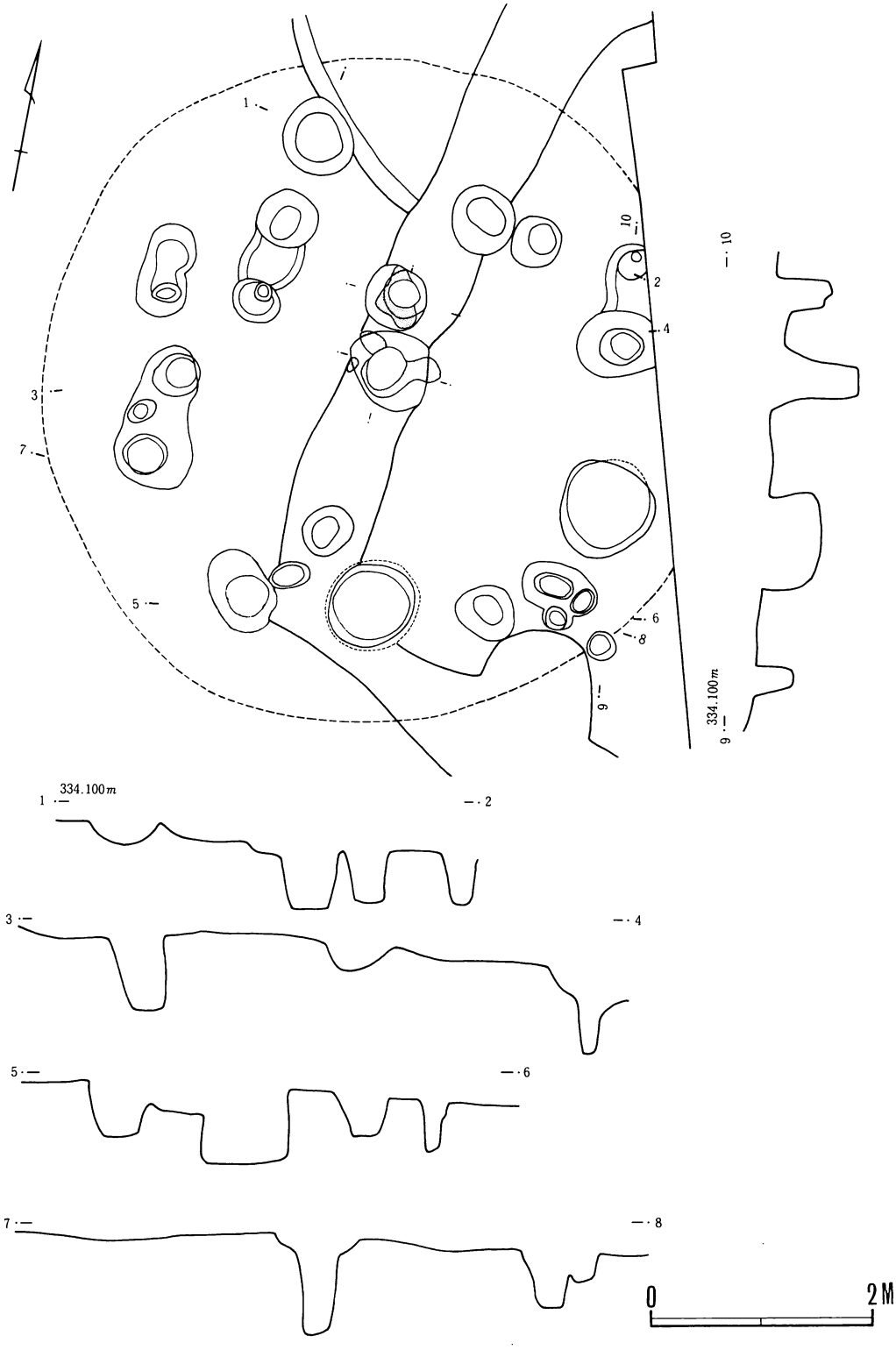
第87図　36号住居址



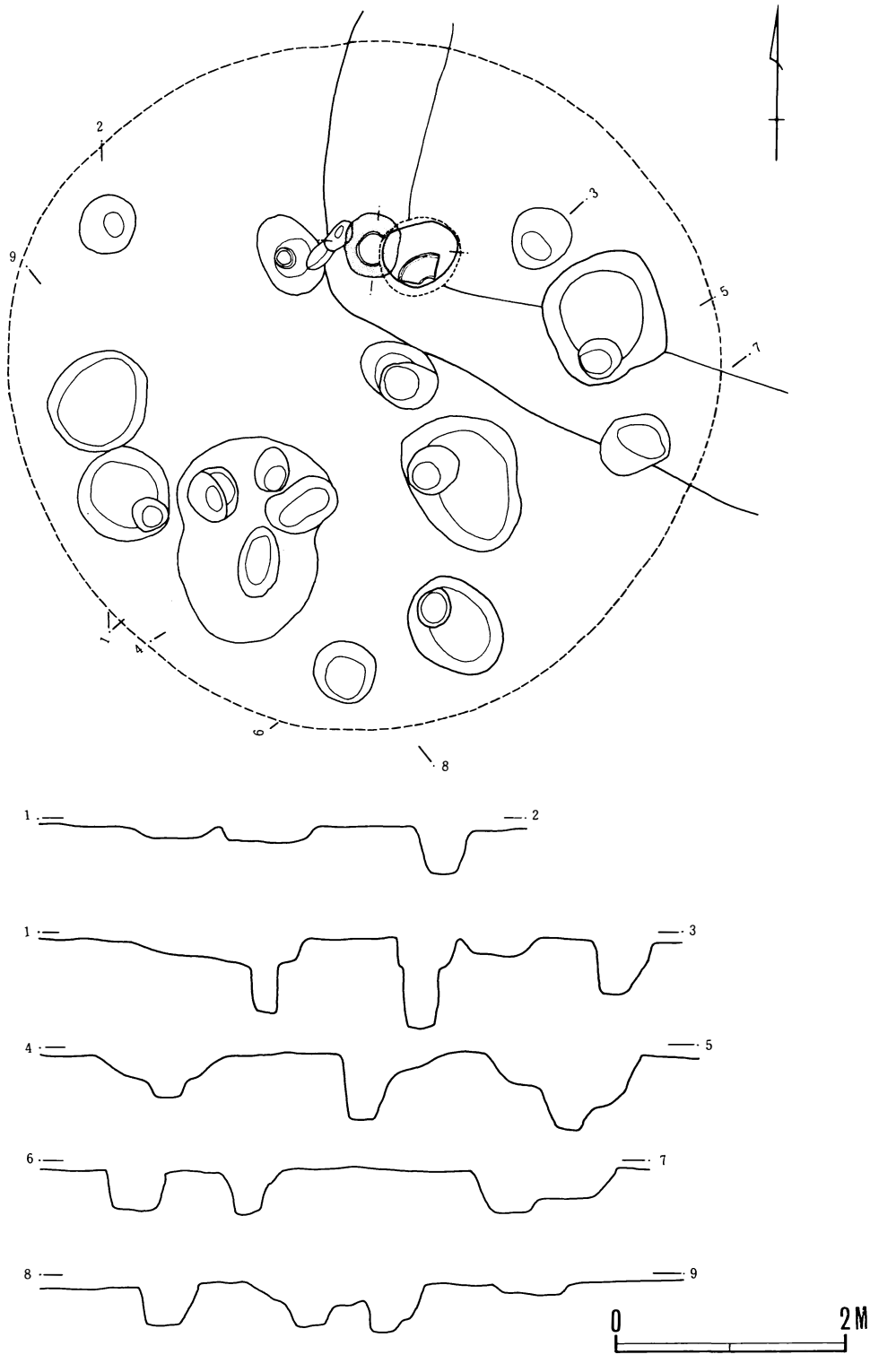


Ⅰ層　暗褐色土（カクラン）
Ⅱ層　暗褐色土
Ⅲ層　暗褐色土
Ⅳ層　暗黄褐色土
Ⅴ層　黒褐色土

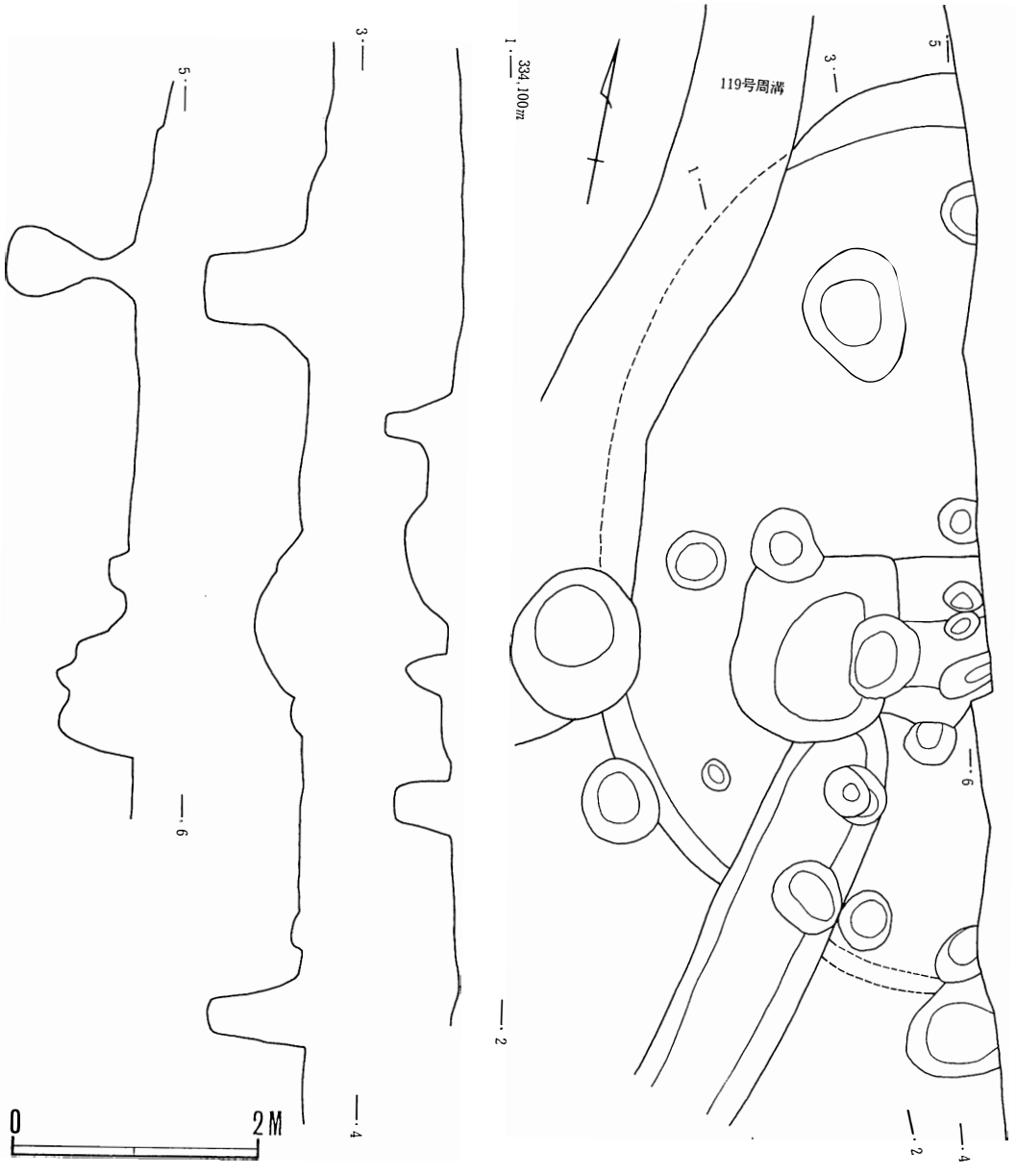
第88図　37号住居址



第89図　38号住居址



第90図　41号住居址



第91図　42号住居址

2. 土 坑

表5 土 坑 一 覧 表

番号	位置	形態		規模			坑底	時期	備考
		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ			
89	10※4	円形	フラスコ状	45	45	80	平坦	五領ヶ台式	33号住と重複
90	12※6	(不整円形)	すり鉢状	120	?	35	小穴1	曽利式	32号住と重複
91	6※5	楕円形	皿状	(130)	100	30	平坦	五領ヶ台式	
92	3※1	楕円形	皿状	125	95	27	平坦	曽利式	
93	3※1	不明	皿状	125	?	30	平坦	井戸尻式	
94	2※1	楕円形	鍋底状	105	90	60	テラス有	新道式	
95	2※1	(長方形)	不明	?	100	65	凹凸有	五領ヶ台式	
96	8※4	楕円形	皿状	70	50	?	平坦		
97	6※3	円形	鍋底状	115	103		平坦	新道式	
98	P※49	楕円形	袋状	150	130	105	テラス有	五領ヶ台式	99土と重複
99	P※49	不整形	皿状	?	120	60	テラス有 小穴1	五領ヶ台式	98土、100土と重複
100	P※49	楕円形	鍋底状	?	120	60	平坦	曽利式	
101	S※45	楕円形	鍋底状	105	80	60	平坦	井戸尻式	
102	S※45	楕円形	袋状	120	100	130	平坦	藤内式	
103	S※45	楕円形	皿状	160	110	45	平坦	五領ヶ台式	105土と重複
104	S※45.46	楕円形	鍋底状	(110)	80	40	平坦	十三菩提式	
105	S※45	楕円形	円筒状	130	110	90	テラス有 小穴2	五領ヶ台式	106、103土と重複
106	S※45	(楕円形)	皿状	130	80	55	小穴1	五領ヶ台式	105土と重複
107	S※44	円形	円筒状	60	60	70	平坦	五領ヶ台式	
108	S※44	不整形	不整形	130	80	66	テラス有 小穴1	五領ヶ台式	
109	S※44	楕円形	鍋底状	110	80	50	平坦	十三菩提式	
110	S※44	楕円形	鍋底状	90	80	40	平坦	十三菩提式	
111	S.T※44	楕円形	すり鉢状	170	100	44	平坦	五領ヶ台式	
112	T※44.45	楕円形	袋状	220	110	100	テラス有	藤内式	貯蔵穴か?
113	13※8	楕円形	鍋底状	160	?	100	平坦	十三菩提式	
114	13※8	不整形	すり鉢状	190	?	50	平坦		
115	13※8.9	楕円形	すり鉢状	160	135	50	平坦		
116	13.14※7	楕円形	皿状	115	95	40	テラス有	十三菩提式	

番号	位置	形態		規模			坑底	時期	備考
		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ			
117	11.12※6	楕円形	皿状	250	(150)	45	平坦	五領ケ台式	123土、32住と重複
118	12※7	不整円形	すり鉢状	125	110	50	小穴1	新道式	35住と重複
119	T※45	楕円形	すり鉢状	180	130	65	平坦	十三菩提式	
120	12※6.7	楕円形	袋状	100	80	70	テラス有		32住と重複
121	T※45	不整形	皿状	190	160	45	テラス有	五領ケ台式	120周溝墓と重複
122	11※6	不整形	皿状	180	130	35	テラス有		
123	12※6	(楕円形)	皿状	?	100	40	平坦		124土、117土と重複
124	12※6	不明	すり鉢状	?	?	20	平坦		
125	S※46	楕円形	すり鉢状	110	100	33	平坦	五領ケ台式	
126	P※49	不整形	皿状	?	130	40	テラス有 小穴1	五領ケ台式	
127	P※50	(円形)	皿状	65	?	30	平坦	五領ケ台式	
128	P※49.50	楕円形	皿状	120	100	35	平坦		
129	S※46	円形	円筒状	65	65	55	平坦	五領ケ台式	
130	6※1	不整楕円形	すり鉢状	150	115	30	平坦	五領ケ台式	
131	6※1	楕円形	円筒状	55	45	80	丸底	井戸尻式	
132	12※6	(円形)	皿状	80	?			曽利式	168土と重複
133	12※6	楕円形	皿状	180	105	30	平坦		32住と重複
134	6※5	楕円形	皿状	130	100	40	平坦		91土と重複
135	T※39	(楕円形)	すり鉢状	?	100	60	小穴3	井戸尻式	
136	S※39	円形	皿状	125	120	30	平坦	藤内式	
137	S※39	不整楕円形	皿状	(150)	120	15	平坦 小穴1		136土と重複
138	S※39	不整楕円形	皿状	120	95	45	小穴2 テラス有	井戸尻式	
139	R※39	楕円形	皿状	80	60	14	平坦	曽利式	
140	R※39.40	(楕円形)	皿状	?	80	12	小穴1	五領ケ台式	
141	7※2	(円形)	鍋底状	100	?	65	平坦	五領ケ台式	
142	7※2	(円形)	鍋底状	?	80	60	テラス有	十三菩提式	
143	T※45	楕円形	すり鉢状	105	80	40	平坦	五領ケ台式	
144	S※45	円形	フラスコ状	75	75	60	平坦	五領ケ台式	
145	T※41	楕円形	すり鉢状	145	115	40	テラス有		53周溝墓と重複
146	T※40	(楕円形)	すり鉢状	?	100	50	小穴1	藤内式	
147	R※40	円形	フラスコ状	60	60	80	平坦		

番号	位置	形態		規模			坑底	時期	備考
		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ			
148	S※39	円形	鍋底状	125	120	30	小穴 3		
149	T※40	楕円形	皿状	80	70	15	平坦		
150	S※42	楕円形	皿状	(100)	(70)	10	平坦		198土と重複
151	26※13	円形	皿状	80	80	20	平坦	五領ケ台式	
152	R※48	楕円形	円筒状	70	60	30	平坦	五領ケ台式	
153	S※48	楕円形	すり鉢状	155	125	50	平坦	曽利式	
154	R※48	楕円形	すり鉢状	160	130	50	小穴 1	五領ケ台式	
155	R※48	不明	皿状	?	?	22	平坦	五領ケ台式	154、156土と重複
156	R.S ※48	(楕円形)	皿状	180	120	32	平坦		
157	Q※48	不明	皿状	?	?	45	平坦		172土、202土と重複
158	R※47	円形	すり鉢状	110	110	60	平坦		
159	S※47	不整円形	鍋底状	115	110	50	小穴 1 平坦	五領ケ台式	
160	R※48	楕円形	鍋底状	125	110	60	平坦	五領ケ台式	
161	S※47	楕円形	円筒状	90	75	58	小穴 1		
162	S※47	不整楕円形	すり鉢状	150	110	50	テラス有 小穴 1		
163	Q※48	卵形	鍋底状	100	90	42	小穴 1	曽利式	
164	T※42	楕円形	鍋底状	120	100	50	小穴 1 平坦	五領ケ台式	41住、119周溝と重複
165	T※43	楕円形	鍋底状	120	110	60	テラス有	五領ケ台式	120周溝墓に切られる
166	Q※48	不明	皿状	125	?	40	平坦	藤内式	172土と重複
167	R※46	不整楕円形	皿状	180	130	40	テラス有	曽利式	
168	6※1	楕円形		?	60		テラス有 小穴 1		132土と重複
169	7※2	楕円形	鍋底状	50	40	60	平坦		79号周溝墓に切られる
170	7※2	(楕円形)	鍋底状	50	45	50	平坦		79号周溝墓に切られる
171	P※48	楕円形	皿状	55	50	40	平坦		
172	Q※48	不明	皿状	?	100	63	平坦	五領ケ台式	157土と重複
173	R※47	楕円形	皿状	200	(130)	68	小穴 1 平坦	藤内式	
174	R※47	不明	不明	?	?	40	平坦		184土に切られる
175	R※48	楕円形	鍋底状	120	75	37	小穴 2	五領ケ台式	
176	Q※48	不明	不明	?	?	10	平坦	藤内式	186土と重複
177	R※48	楕円形	皿状	125	100	20	平坦		
178	T※42	円形	フラスコ状	70	65	70	平坦	五領ケ台式	41住を切る

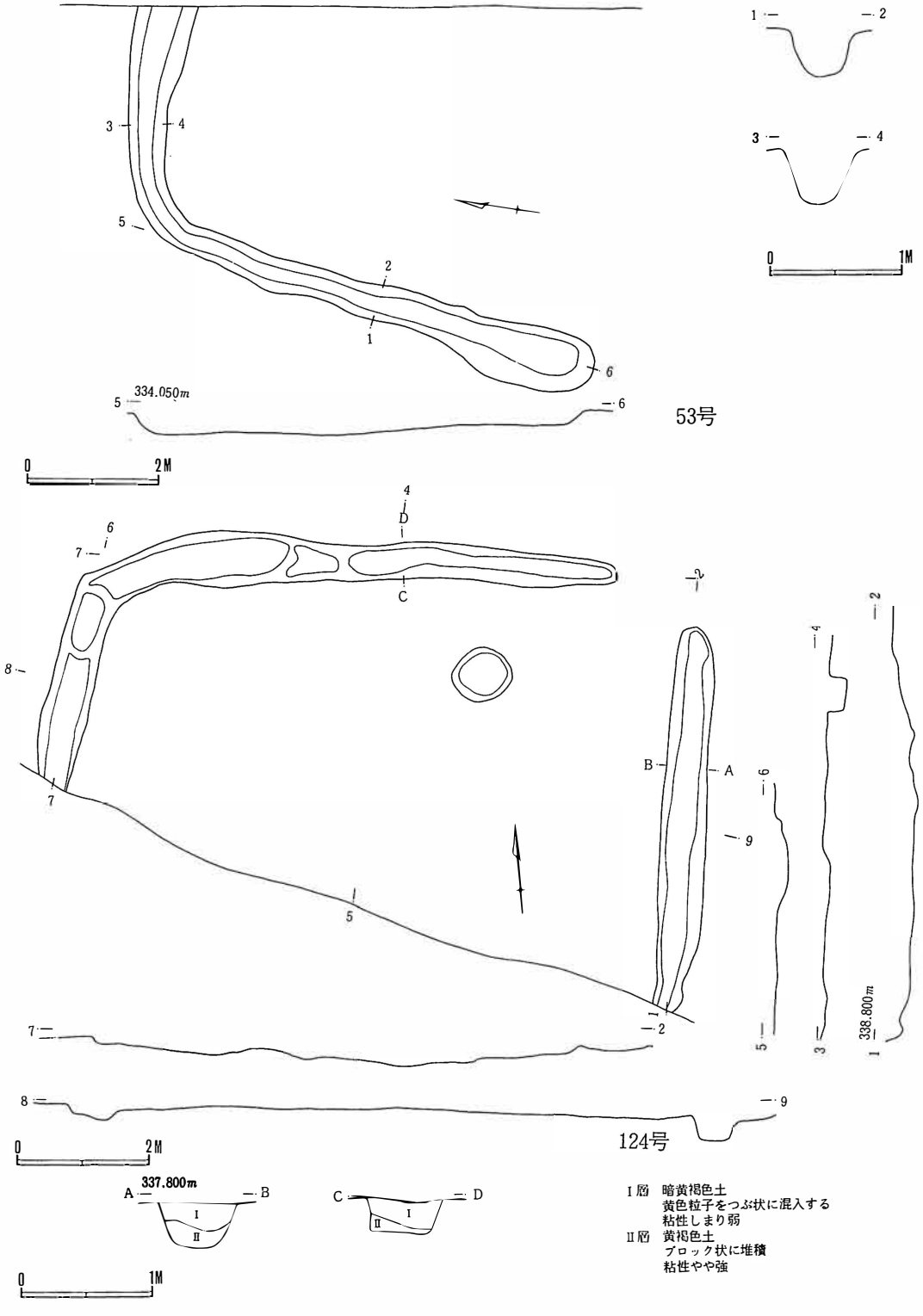
番号	位置	形態		規模			坑底	時期	備考
		平面形	断面形	長軸	短軸	深さ			
179	R※48	不明	すり鉢状	?	?	60	平坦	十三菩提式	181土と重複
180	Q※47	不明	不明	?	?	30	平坦	新道式	183、188土と重複
181	Q※47	不明	皿状	?	?	40	平坦	五領ケ台式	
182	Q※47	不明	皿状	?	?	40	小穴3	五領ケ台式	187土と重複
183	P※46	(楕円形)	鍋底状	130	?	55	平坦	藤内式	
184	R※47	楕円形	不明	185	125	60	平坦	五領ケ台式	174土と重複
185	Q※47	不明	皿状	150	?	35	平坦		
186	Q※48	不明	不明	?	?	35	平坦	藤内式	
187	R※47	隅丸四角形	袋状	55	55	87	平坦	五領ケ台式	182土と重複
188	Q※47	不明	皿状	?	?	38	平坦	井戸尻式	181土、182土と重複
189	R※47	円形	袋状	115	70	155	平坦	井戸尻式	
190	59※20	円形	皿状	80	80	12	平坦		
191	62※23	楕円形	皿状	95	80	10	平坦		
192	63※26	長方形	皿状	215	170	25	小穴1		
193	62※25	楕円形	袋状	110	85	60	平坦		
194	S※43	円形	鍋底状	110		56	テラス有	五領ケ台式	197土と重複
195	T※43	不整形	すり鉢状	?	140	45	凹凸有	五領ケ台式	
196	T※42	楕円形	鍋底状	90	80	50	平坦	狢沢式	28住と重複
197	S※42	楕円形	鍋底状	90	?	35	平坦		194土と重複
198	S※42	(円形)	鍋底状	100		35	小穴1		150土と重複
199	S※42	瓢形	皿状	110	80	10	平坦	新道式	
200	Q※48	楕円形	すり鉢状	?	70	100	平坦	藤内式	
201	Q※48	不明	すり鉢状	?	?	40	小穴3		
202	Q※48	(楕円形)	皿状	(180)	100	45	小穴2 平坦		157土、160土と重複
203	S※48.49	(楕円形)	皿状	130	?	10	平坦		

第３節　弥生時代の遺構

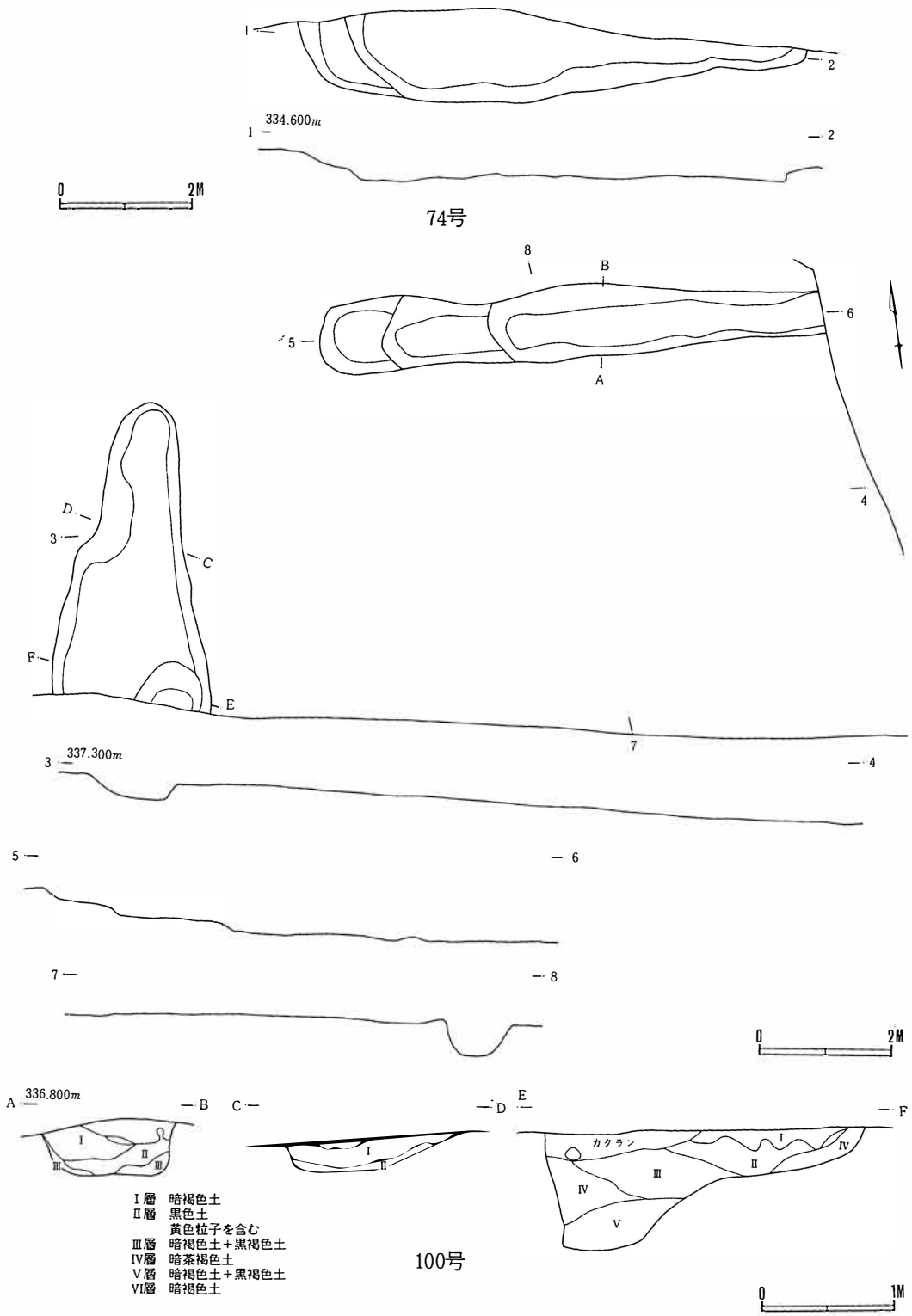
１．方形周溝墓

表６．方形周溝墓一覧

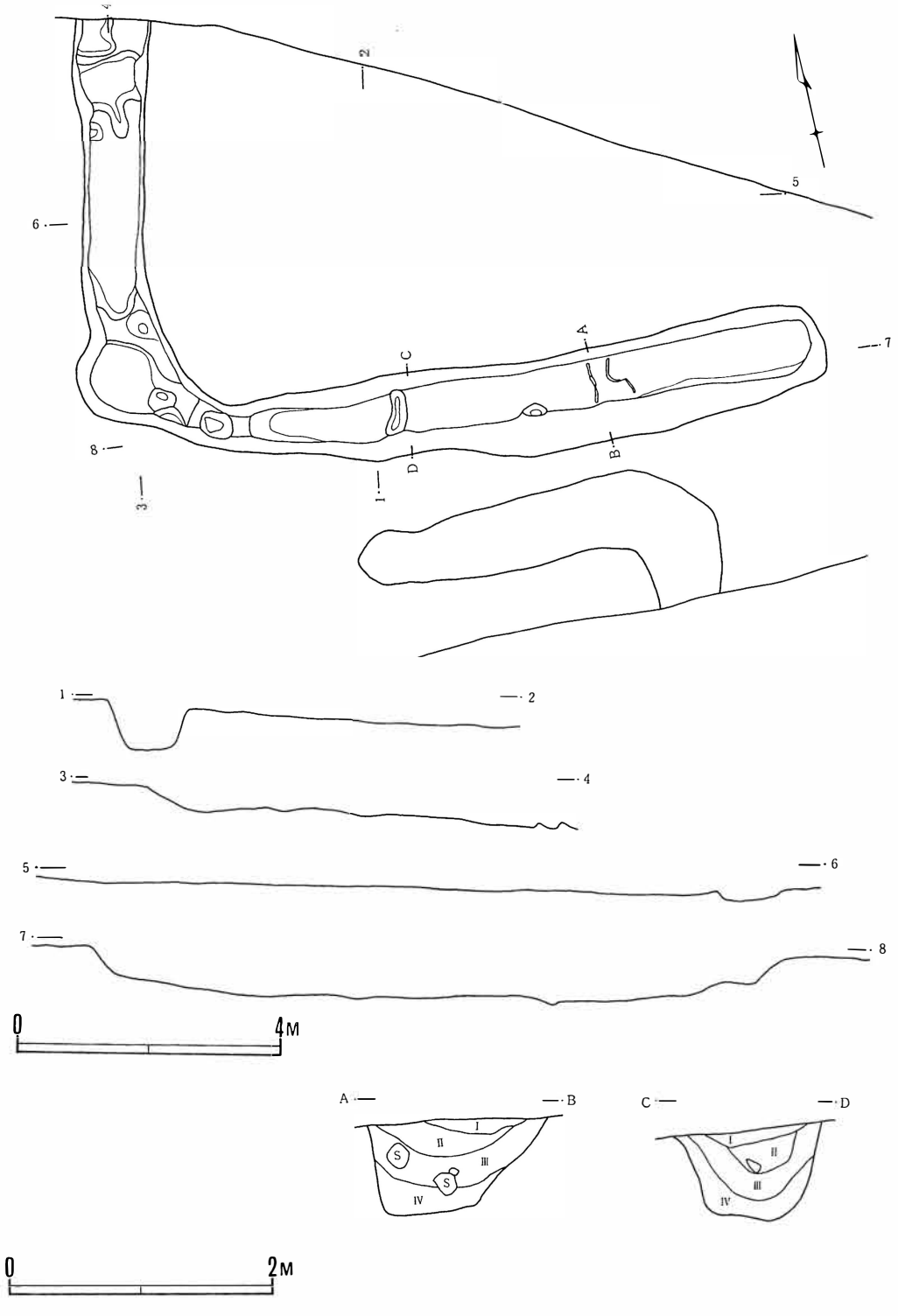
番号	位置	形状	規模（m）	ブリッジ数	溝内施設	主体部	出土遺物	備　考
53号	S.T※39～41	方形	南北 7.5 東西 不明	(1)南西コーナー		不 明		東半分が調査区外へのびる。
74号	13～15※10.11	方形	不　明	(1)南西コーナー		不 明		２次調査で確認済。
76号	15.16 ※11	不明	南北 約８ 東西 不明	(2)南東、 南西コーナー		不 明		南溝のみ確認。
78号	3～6※2～5	方形	南北 不明 東西 11	(1)南西コーナー		不 明	壺 破 片 1 点	西溝は浅く、撹乱部有。
79号	N～Q※48～50 4.5※2	方形	南北 不明 東西 12.2	(1)北西コーナー		不 明		
80号	21～24※13.14	方形	南北 不明 東西 13	(3)北東、北西 南東コーナー		不 明		２次調査時に発掘。
81号	24.28※13.16	方形	南北 不明 東西 17	(1)南西コーナー	南溝西側に合せ口壺棺	不 明	壺２点 小型壺１点	壺棺は溝の埋没途上で埋納されたもので、追葬例と考えられる。
82号	21～24※15.16	方形	南北 不明 東西 15	不　明		不 明	台付甕１点 壺１点、高坏１点	
100号	55～58※17～19	方形	不　明	(1)北西コーナー		不 明	壺 １点	
103号	58～60※20～21	方形	南北 不明 東西 11.5	(1)南西コーナー		不 明		
119号	S※42 T※41～43	方形	南北 7.5 東西 不明	不　明		不 明	壺 １点	東2／3が調査区外にのびる。
120号	S.T※43～46	方形	南北 10.5 東西 10.3	不　明	東溝内に２ヶ所土坑状の深い掘り込み有	不 明	小型台付甕１点	
121号	R.S※47.48	方形	南北 6.5 東西 5.8	(3)北西 南西、南東 コーナー		不 明	壺 １点	壺は南溝から出土。
122号	T※48	不明	不　明	不　明		不 明		121号周溝墓と切り合って溝１本のみ確認
123号	16～19※9～12	方形	南北 12 東西 12	(2)南西、南東 コーナー		不 明		76号周溝墓に切られる。
124号	62～63※22～24	方形	南北 不明 東西 10	(1)北東コーナー				



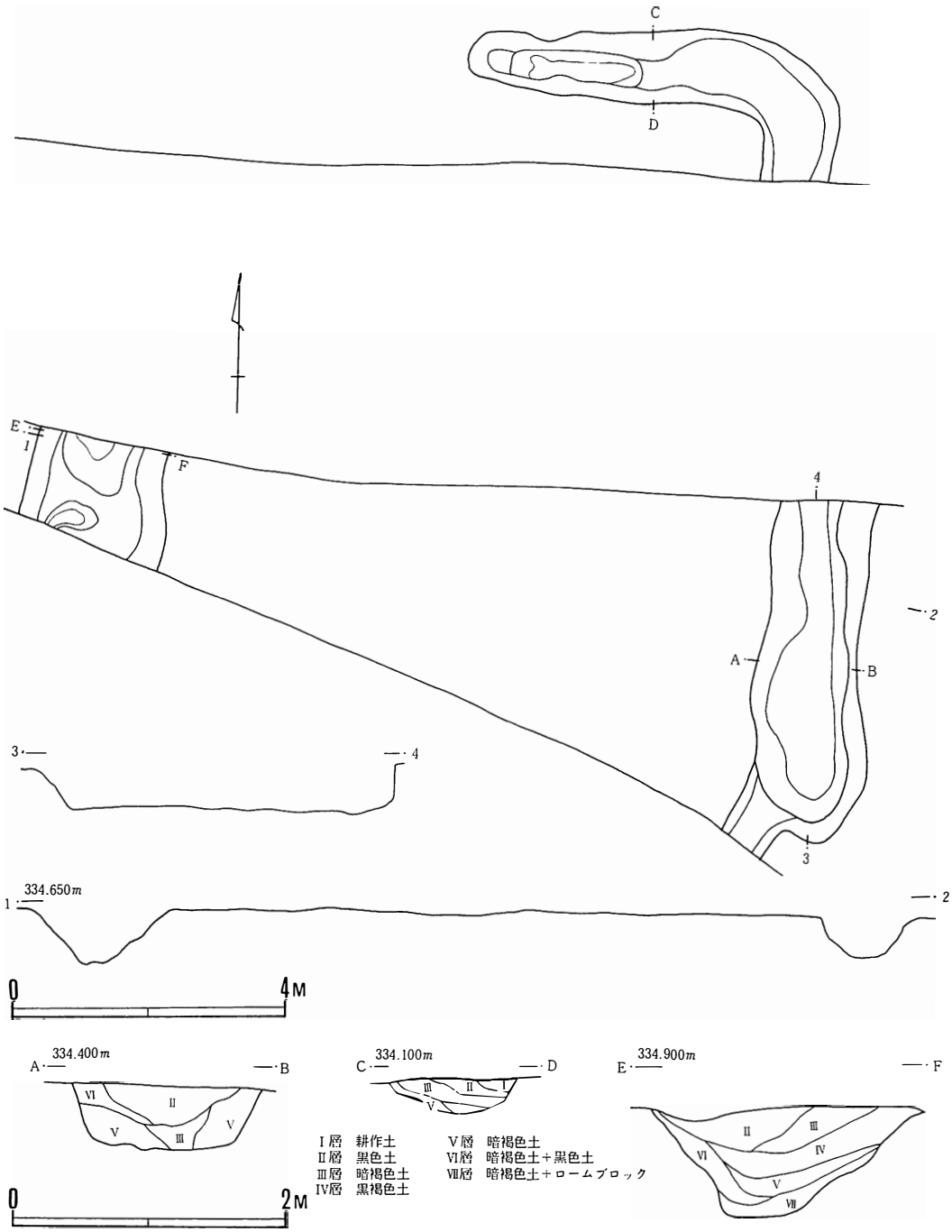
第92図　53号・124号方形周溝墓



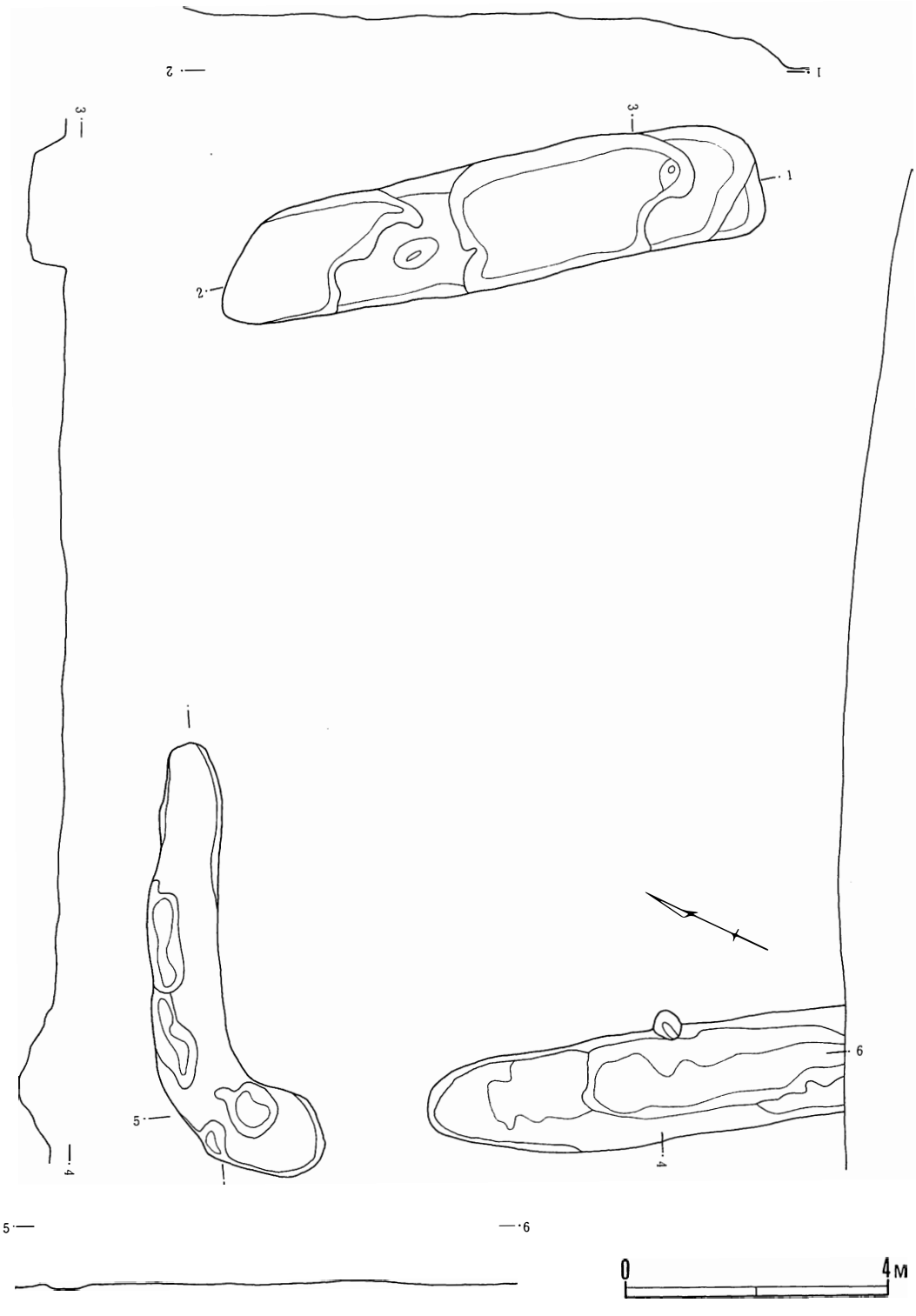
第93図　74号・100号方形周溝墓



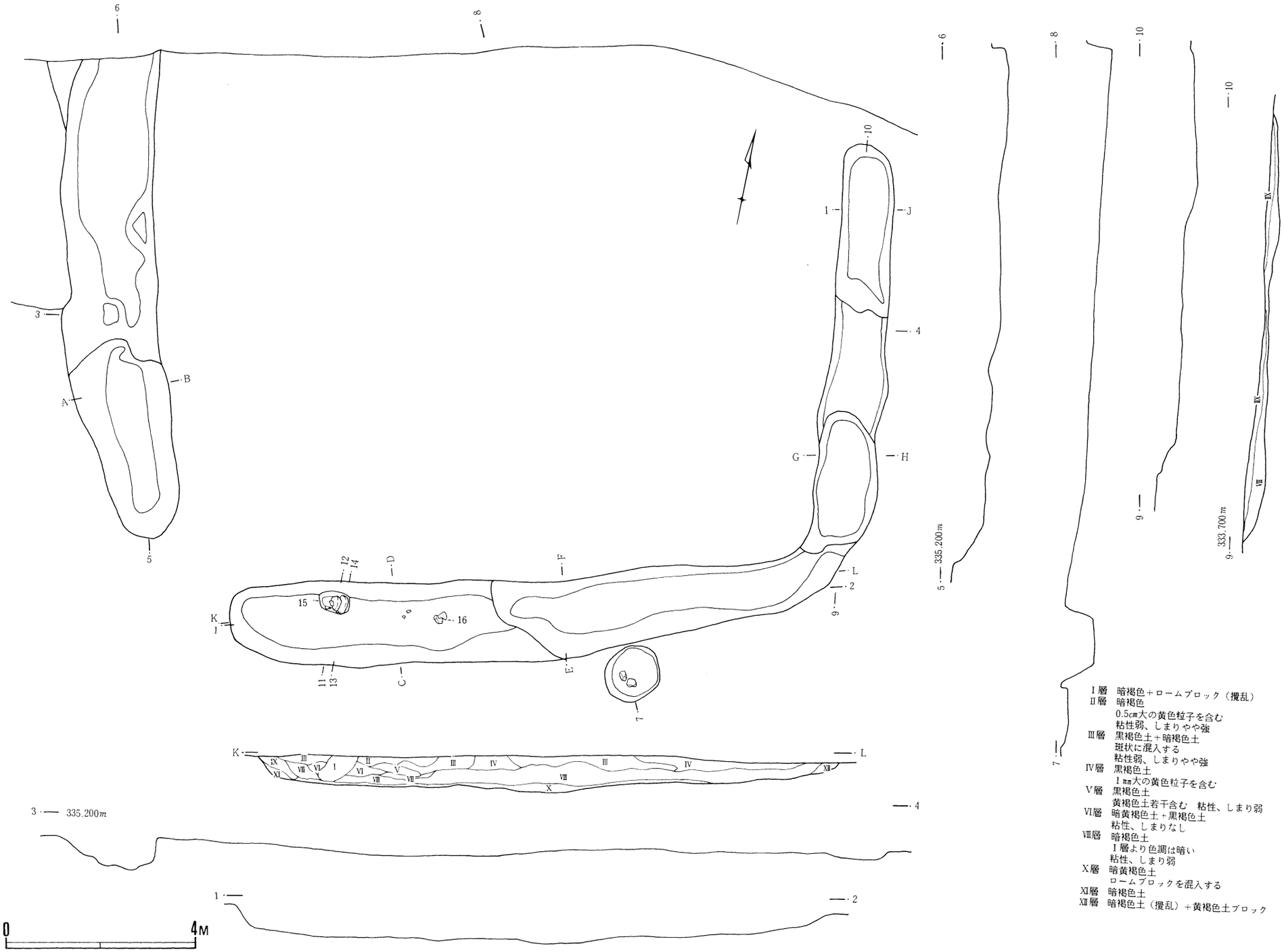
第94図　78号方形周溝墓



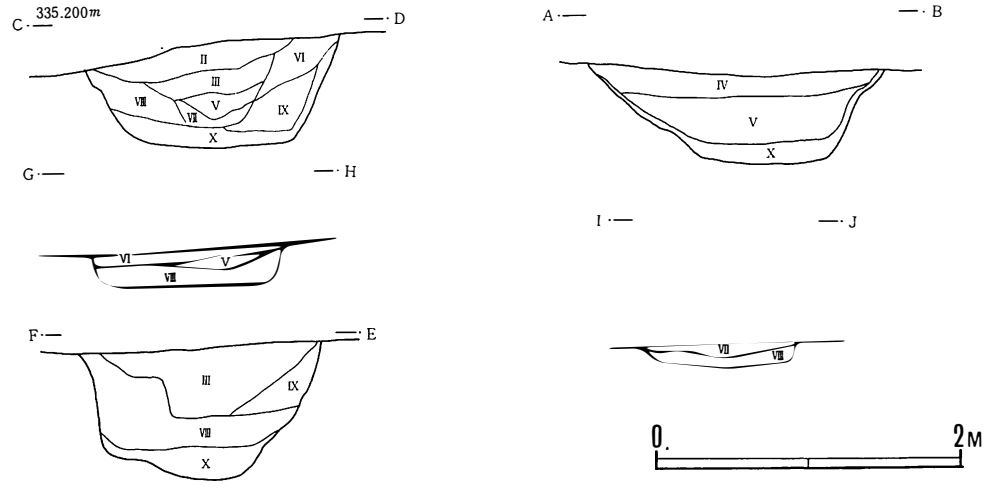
第95図　79号方形周溝墓



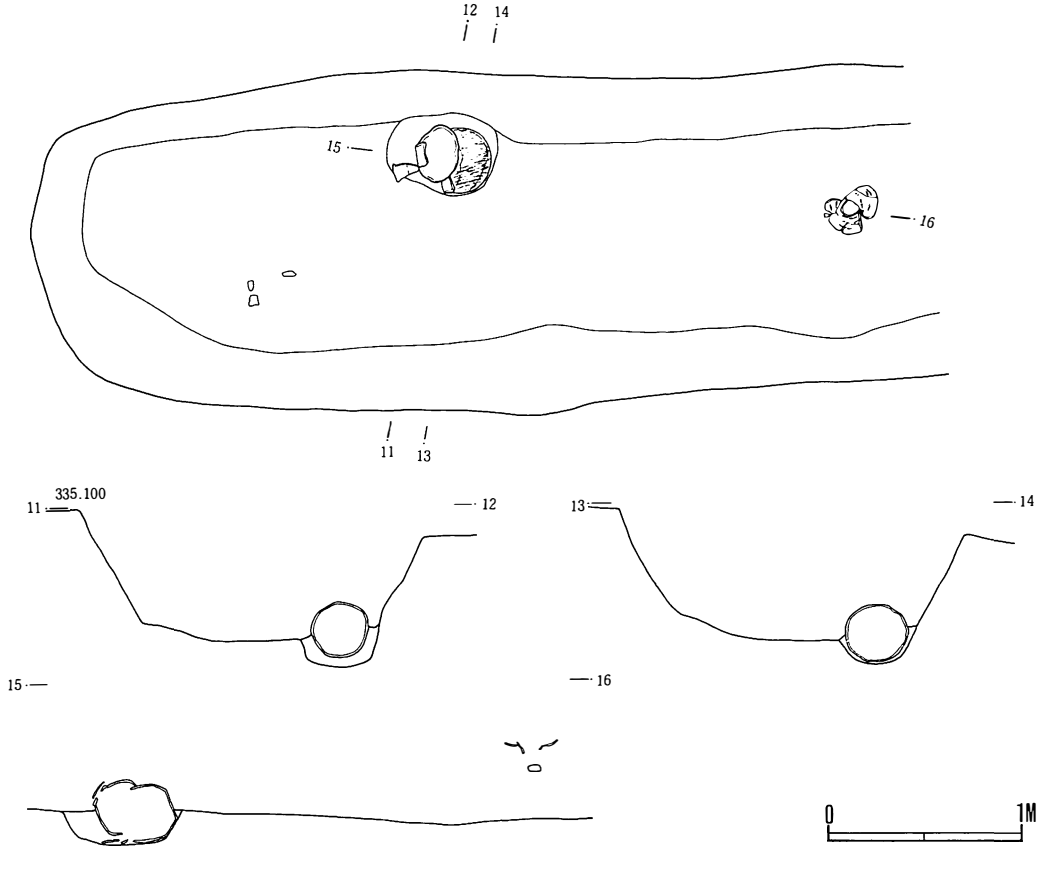
第96図　80号方形周溝墓



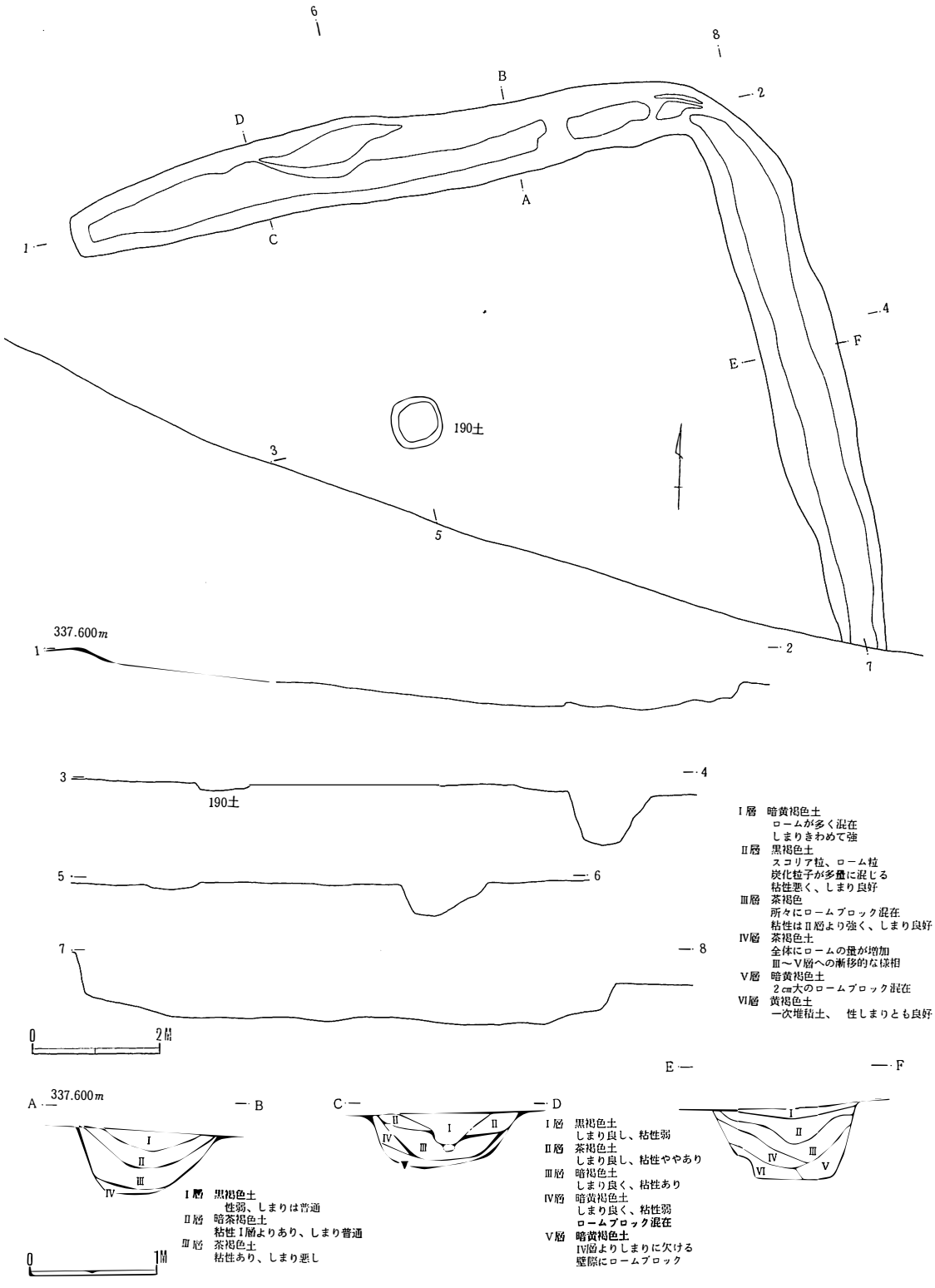
第97図　81号方形周溝墓



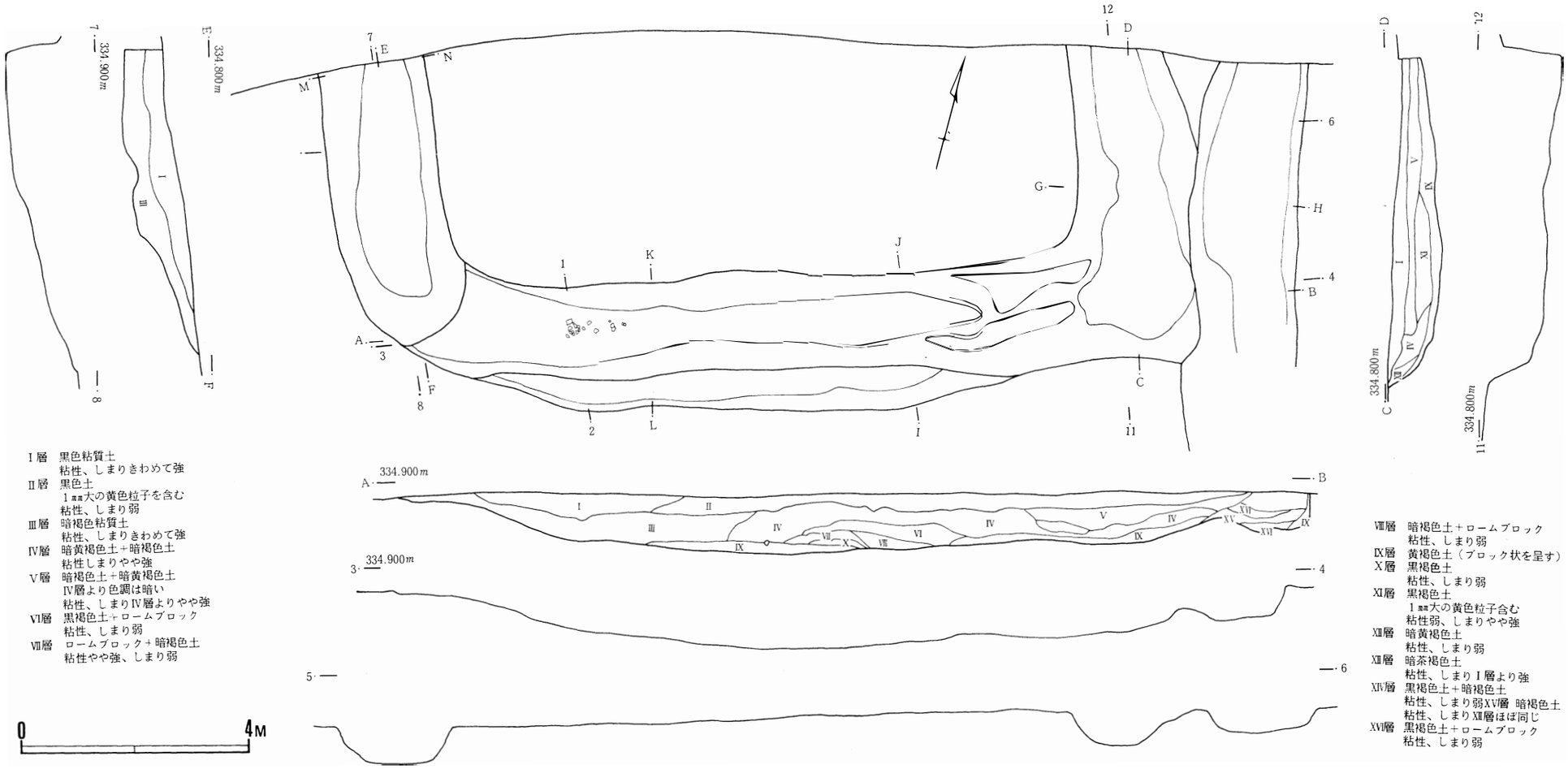
第98図　81号方形周溝墓溝セクション図



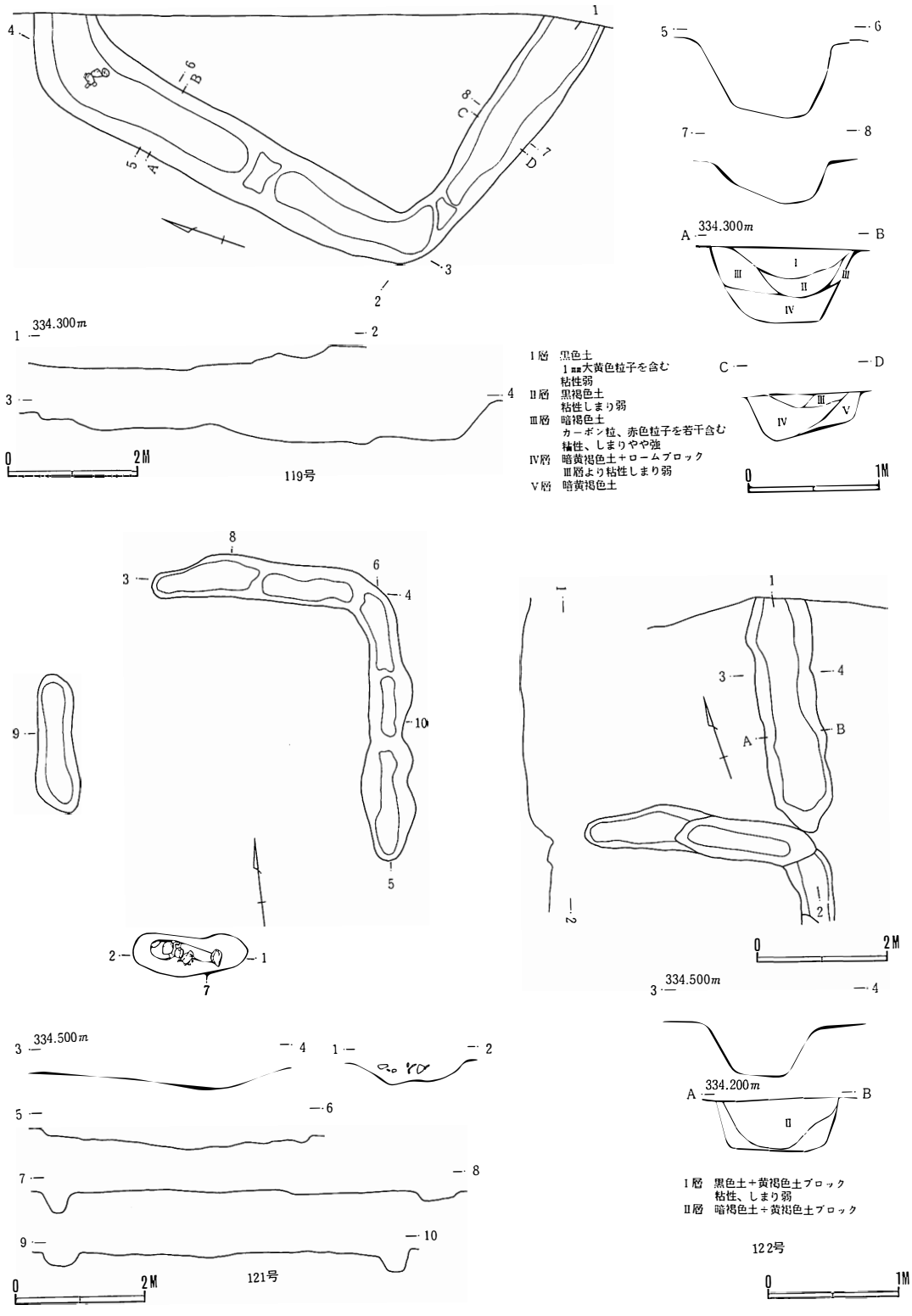
第99図　81号方形周溝墓合せ口壺棺出土状況



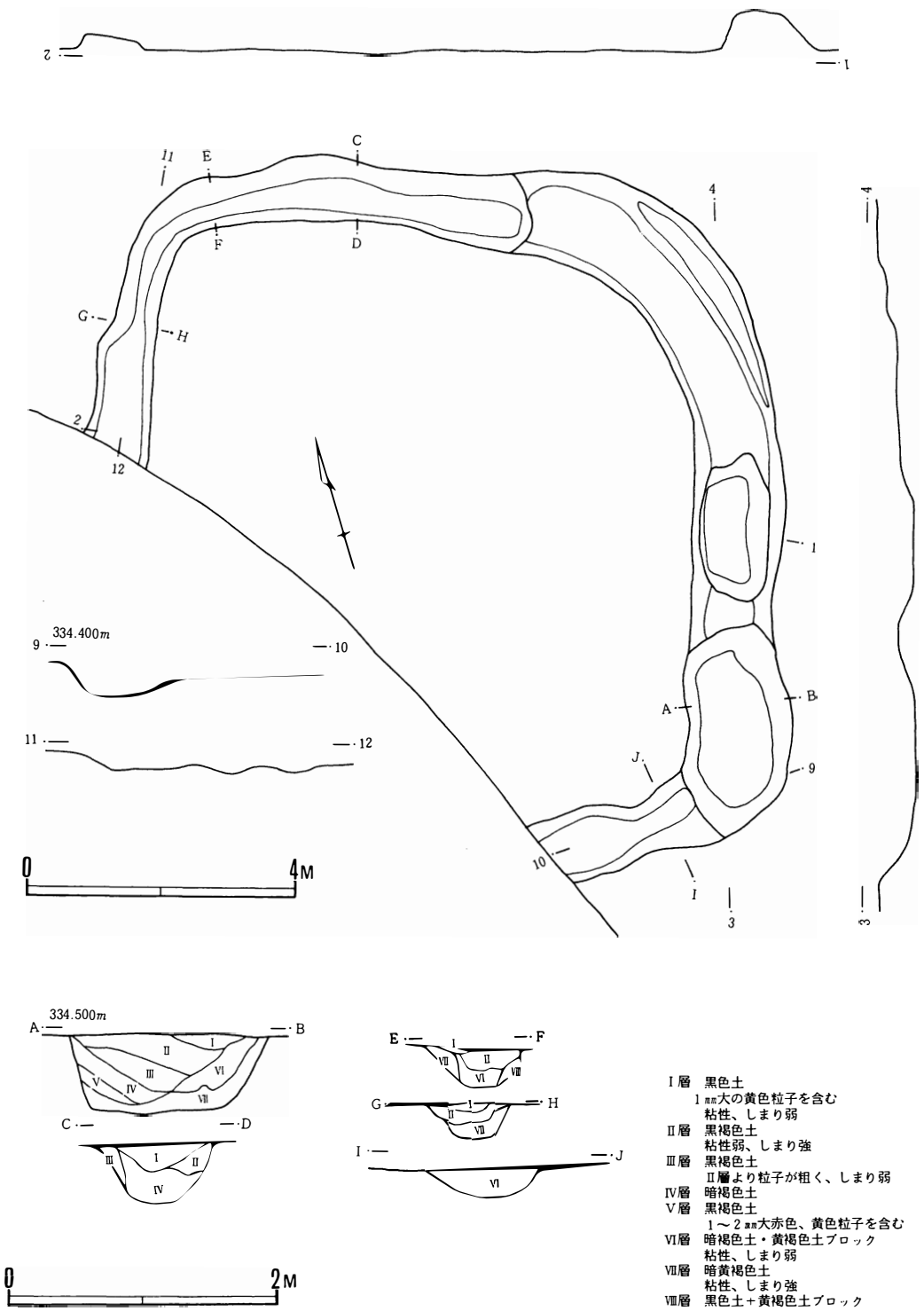
第100図　103号方形周溝墓



第101図　82号方形周溝墓

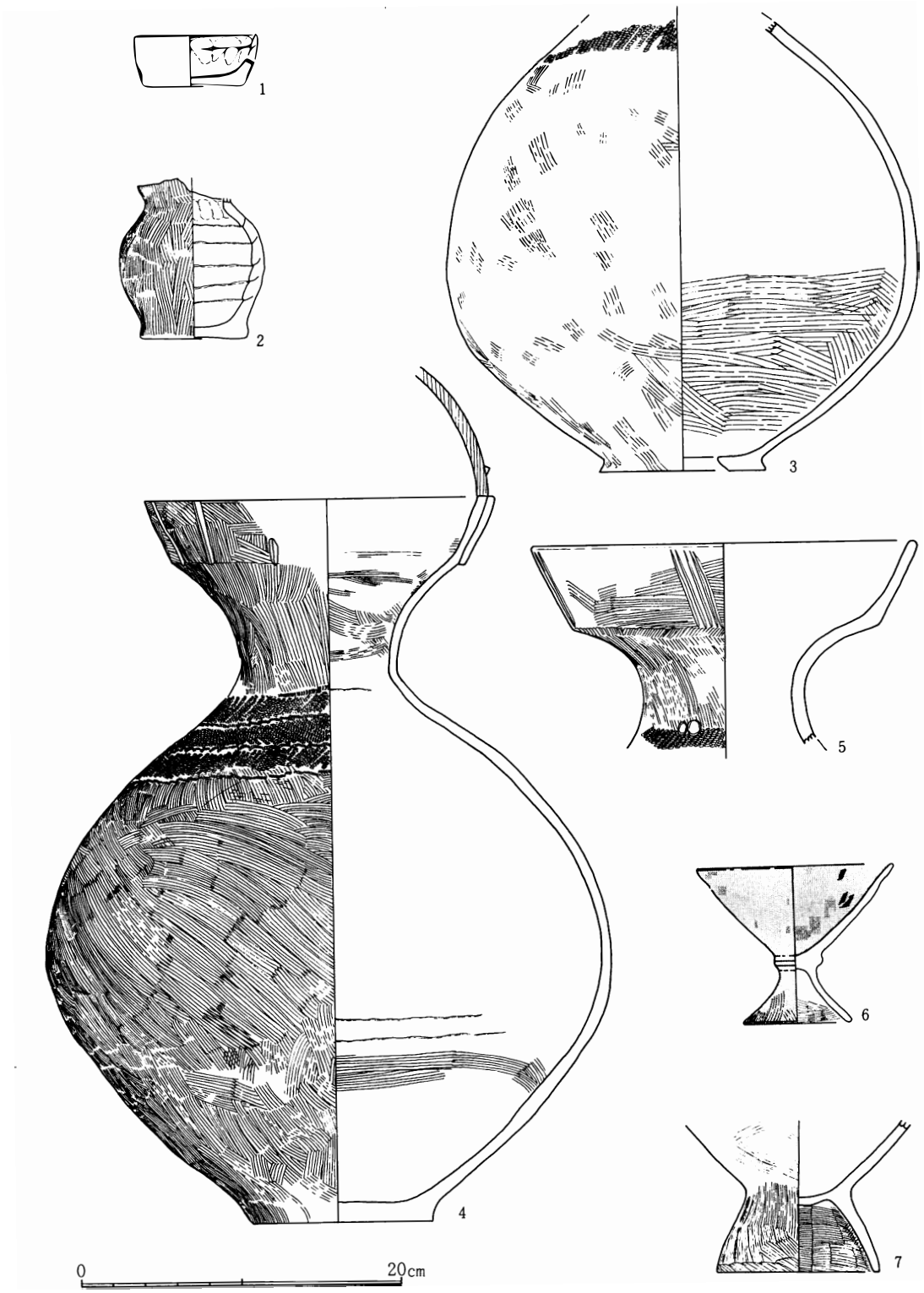


第102図　119号・121号・122号方形周溝墓

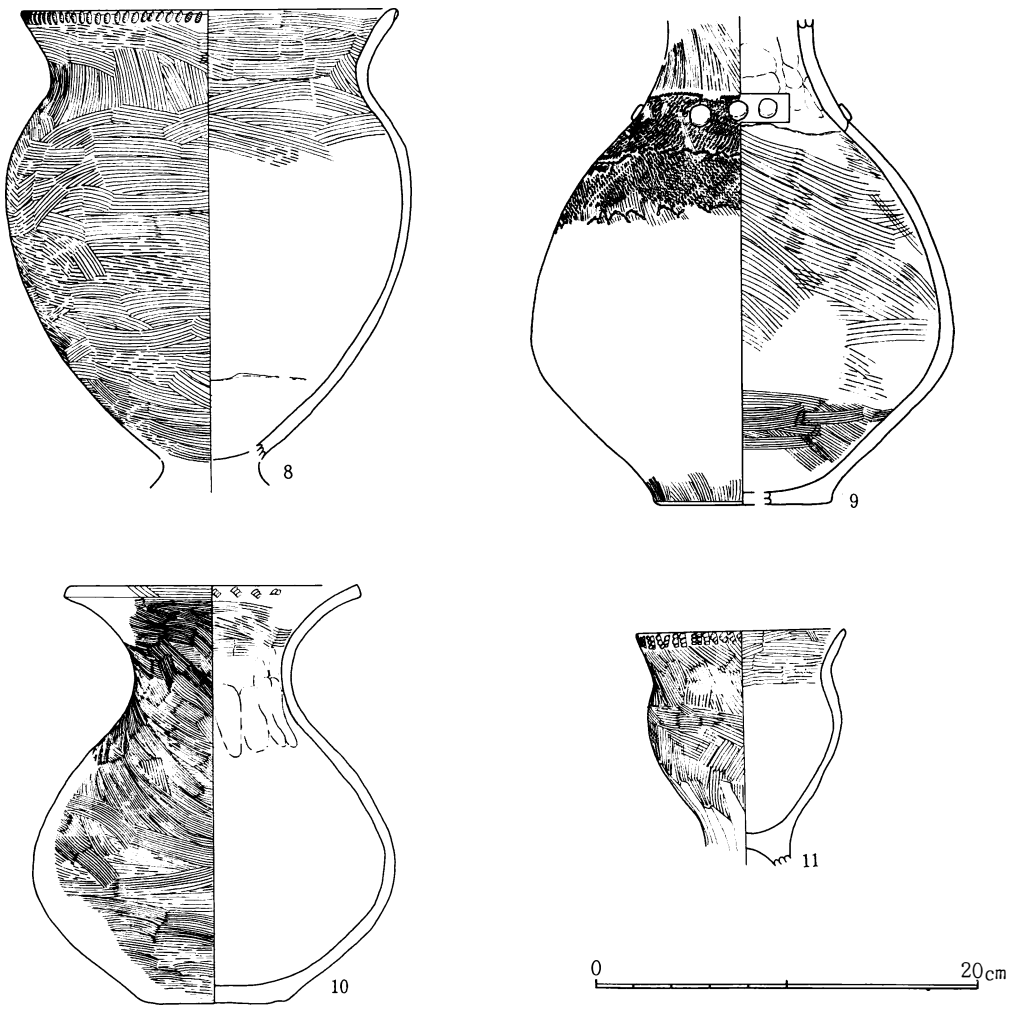


第103図　120号方形周溝墓

第104図　76号・123号方形周溝墓



第105図　方形周溝墓内出土土器 (1)



第106図　方形周溝墓内出土土器 (2)

（各土器出土位置）

1～4．81号方形周溝墓出土。この内3・4は南溝から検出された合せ口壺棺である。

5～8．82号方形周溝墓出土。

9．119号方形周溝墓出土。

10．121号方形周溝墓出土。

11．120号方形周溝墓出土。

第４節　平安時代の遺構

１．住居址と出土遺物

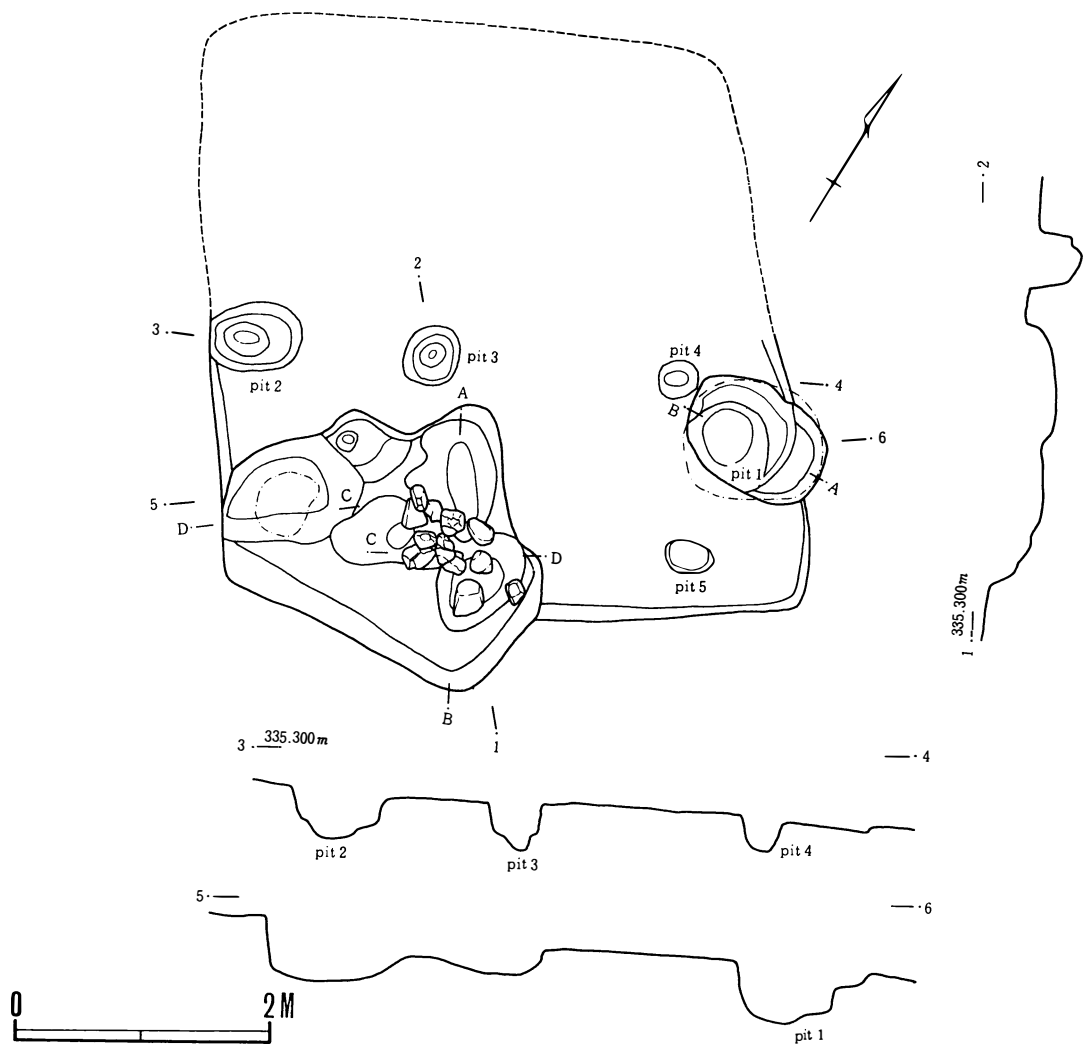
(1)　39号住居址（第107図、図版10）

（位置）　68・69※34グリッドに位置する。

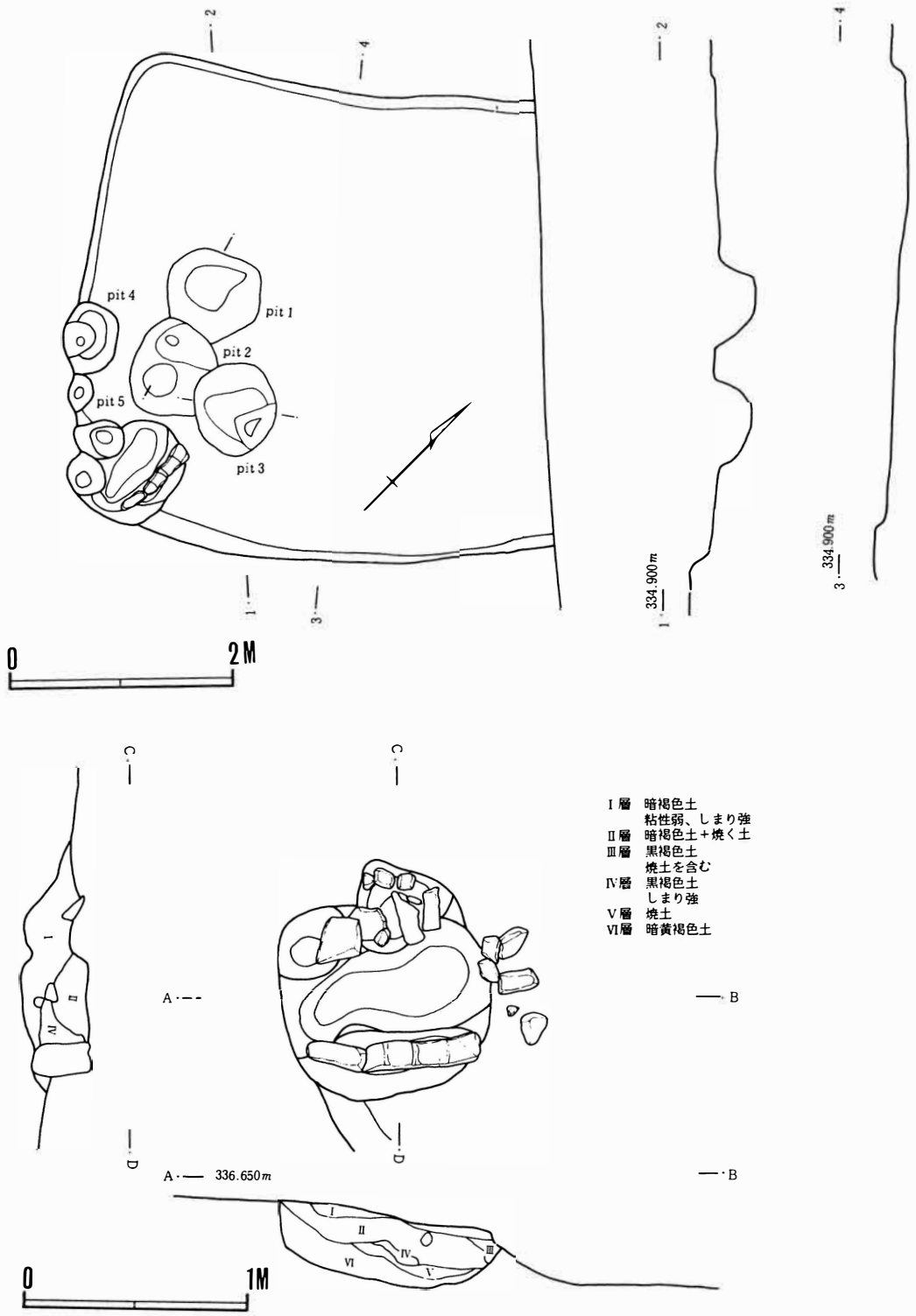
（形状・規模）　住居址北側半分が削平されているが残存部から隅丸方形を呈すると考えられる。東西４ｍ80㎝を測る。

（床面・壁）　床面は堅緻な貼床である。壁はほぼ直壁で、残存部で壁高20㎝を測る。

（カマド）　南壁西側に設置される。カマドの袖は石によって組まれていたと考えられるが、すでに破壊され原型をとどめない。カマドに関わる掘り込みは２ｍ50㎝×２ｍ20㎝の不整形で住居址南西コーナーには焼土が認められる。



第107図　３９号 住 居 址



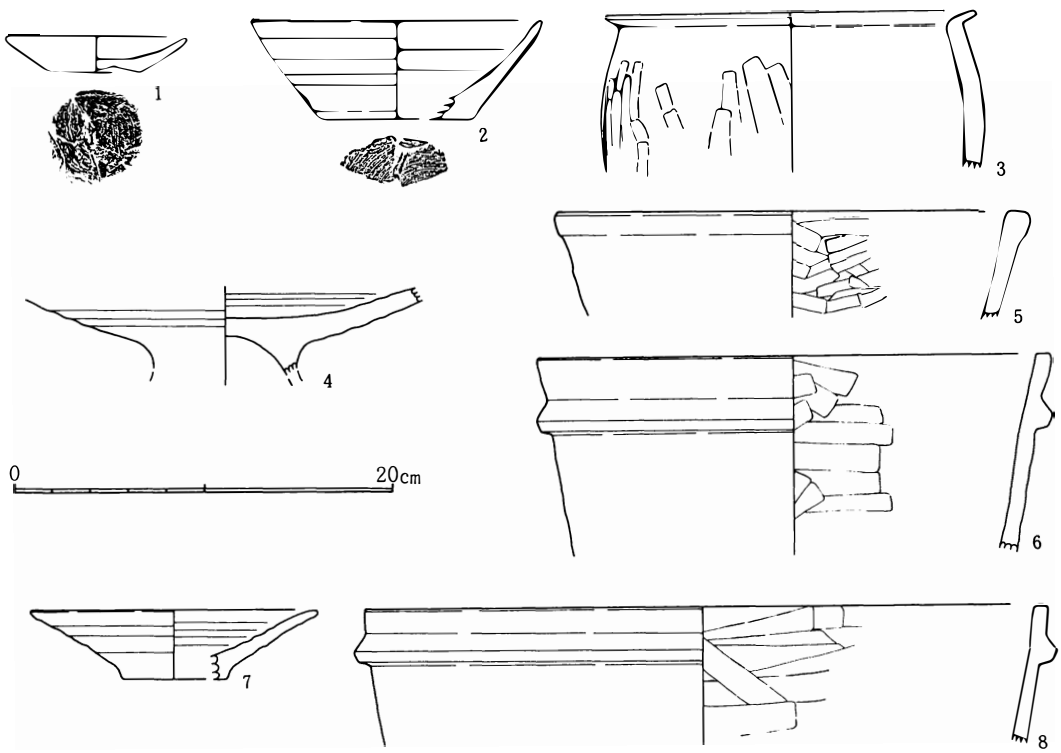
第108図　40号住居址

（**その他の施設**） カマド掘り込み部以外ではピットが５ケ所で検出された。ピット１のみは他のものと比べ大型で内部から炭化材が出土している。
（**出土遺物**） なし。

⑵ 40号住居址（第108・109図、図版10）

（**位置**） 68・69※35・36グリッドに位置する。
（**形状・規模**） 住居址東側が調査区外に伸びるが、一辺４ｍ20㎝程の隅丸方形と考えられる。
（**床面・壁**） 北に向かって僅かに傾斜するが床面はほぼ平坦である。壁高は南部で15㎝程を測る。
（**カマド**） 南西コーナーに設けられる。厚さ10㎝程の扁平な礫を立てて袖石としている。燃焼部の掘り込みは直径１ｍ程のプランで床面より僅かに掘り窪めている。たき口部に若干焼土が認められた。
（**その他の施設**） カマド周辺に直径80㎝程の円形ピットが３ケ所、西壁際に小ピットが２ケ所確認された。ピット１～３からは焼土が検出されている。
（**出土遺物**） 住居内から８点の土器が出土している。器種は、小型坏（１）、坏（２・７）、高台付坏（４）、甕（３）、鉢（５）、羽釜（６・８）に分類され種類に富む。坏ではいずれも器面にろくろ成形の痕が認められ、底部に糸切り痕をもつものも２点存在する。

以上の土器は11世紀後半代に位置づけされる。



第109図　40号住居址出土土器

第Ⅴ章　各　説

1．山梨県上の平遺跡の植物遺体

渡辺　誠

1. はじめに

山梨県東八代郡中道町上の平遺跡出土の植物遺体は、1985年６～12月に山梨県埋蔵文化財センターによって発掘された資料である。大部分は縄文時代中期に属するが、１件のみ弥生時代後期の資料が含まれている。

検出された植物遺体の種名は、次の４種である。

１．くるみ科オニグルミ　*Juglans mandschurica subsp. Sieboldina* (Maxim.) Kitam.
２．同　　ヒメグルミ　*J. mandschurica subsp. Sieboldiana var. cordiformis* Kitam.
３．ぶな科クリ　　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.
４．ぶな科コナラ属　　Quercus sp.

ただし４には複数の種が含まれている可能性がある。またこの他に不明小型堅果類１種、不明種子類１種、不明球根類１種がある。特に後者はその芯に相当する小部分のみであり、同定は困難である。

2．検討の結果

次に件別に、種・数量などの検討結果を記す。

1) 第２号住居址床面直上（弥生時代後期後半）
不明小型堅果類１点。

2) 第12号住居址覆土（縄文時代中期初頭・五領ヶ台式期）
オニグルミ核皮片少量（0.89ｇ）。写真１－１。
クリ種子片少量（0.26ｇ）。同２。
なお本住居址土器中より、不明球根類１点が出土している。

3) 第16号住居址覆土（縄文時代中期中葉・藤内式期）
１個体の半分とみられるヒメグルミ核皮片（0.89ｇ）。同３。
クリ種子片１（0.62ｇ）。
コナラ属の種子６片（0.62ｇ）。同４。
不明球根類１点。

4) 第17号住居址覆土（縄文時代中期中葉・井戸尻式期）
オニグルミ核皮片若干（4.23ｇ）。同５。
クリ種子片１（0.35ｇ）。同６下。

5) 第17号住居址ピット２（縄文時代中期中葉・井戸尻式期）
クリ種子片１（0.09ｇ）。同６上。

6) 第18号住居址覆土（縄文時代中期中葉・井戸尻式期）
オニグルミ核皮片少量（1.80ｇ）。同７。

クリ種子片２（0.33ｇ）。同８。

コナラ属の種子４片（0.46ｇ）。同９（大型の１点のみを掲げる）。

不明種子類１点。

7） 第20号住居址覆土（縄文時代中期中葉・井戸尻式期）

オニグルミ核皮片若干（5.95ｇ）。写真２－１。

8） 第20号住居址炉内（縄文時代中期中葉・井戸尻式期）

オニグルミ核皮片少量（1.34ｇ）。写真１－10。

9） 第23号住居址覆土（縄文時代中期中葉・藤内式期）

不明小型堅果類１点。

10）第42号土坑覆土Ⅴ層（縄文時代中期中葉・井戸尻式期）

オニグルミ核皮片若干（16.31ｇ）。写真２－２・３。

種子のついたままのクリ２点。写真３－２の左：0.34ｇ、右：0.36ｇ。他に破片少量（1.78ｇ）と、種皮片少量（1.78ｇ）がある。

不明種子１点。

11）第65号土坑覆土（縄文時代中期初頭・五領ヶ台式期）

コナラ属の種子48点（13.78ｇ）。写真３－１。

３．若干の考察

同定できた種は、いずれも堅果類に属する４種であり、縄文時代の代表的な食料であると同様に大事な食料であり、その存在の予想されたトチの実は、慎重に検討したが確認することはできなかった。

クルミにはオニグルミに混じってヒメグルミが１点みられた。これは植物学的にはオニグルミの亜種にすぎないが、脂肪分がやや少なく、味もやや落ちるので実際には区別して食されているのであるから、区別しておくべきである。核の表面は平滑であり、内の構造も単純である。

クリには種皮が残っている例が２点（写真３－２）あり、種皮片（№10）もみられることから、皮のついたままゆでて、カチグリのようにして保存していた可能性も考えられる。

コナラ属は、いわゆるドングリ類である。種子は種皮がとれ、子葉だけになると同定はきわめて困難である。しかしながら外形上、円形を呈する一群（写真１－９、３－２）と長楕円形を呈する一群（写真１－４）とがある。そしてそれぞれ筆者分類（第１表）のＡ類と、Ｂ群とに相当すると推定される。すなわちクヌギ・アベマキ・カシワなどの仲間とミズナラ・コナラなどの仲間である。これらはいずれも落葉広葉樹であり、先のクルミ類やクリも同じである。量的にはＡ類がきわめて多く、Ｂ類は少量である。

ドングリ類はクルミ類やクリと異なり、特にＡ・Ｂ類はアク抜きしないと食べることはできない。そのアク抜きの技術は、Ａ・Ｂ類とＣ類とでは違いがある。後者の場合は水さらしだけでアク抜きができる。これに対して前者は、製粉すれば後者と同様に水さらしだけでアク抜きができるが、粒のままの場合は加熱処理と水さらしとを何回も繰り返さなければならない。本遺跡の場合はＡ・Ｂ類のドングリであること、磨石・石皿などから製粉技術の発達しているこ

とも明らかであることから、食べ方によって両方のアク抜きが行われていたとみておくべきであろう。

謝辞

最後に調査の機会を与えられた山梨県埋蔵文化財センターの長沢宏昌・中山誠二氏、資料整理に協力してくれた名古屋大学文学部学生田中禎子嬢、および種々御教授を仰いだ大阪市立大学理学部の粉川昭平教授に対し、衷心より深謝の意を表する次第である。

第1表　ドングリ類の分類

民俗分類	属		種	森林帯	他の堅果類
A．クヌギ類 水さらし＋加熱処理	コナラ亜属	コナラ属	クヌギ アベマキ	落葉広樹樹林帯（東北日本）	オニグルミ クリ トチノキ
B．ナラ類 水さらし＋加熱処理			ミズナラ コナラ		
C．カシ類 水さらしのみ	アカガシ亜属		アカガシ・アラカシ シラカシなど	照葉樹林帯（西南日本）	
D．シイ類 アク抜き不用			イチイガシ		
	シイ属		ツブラジイ・スタジイ		
	マテバシイ属		マテバシイ		

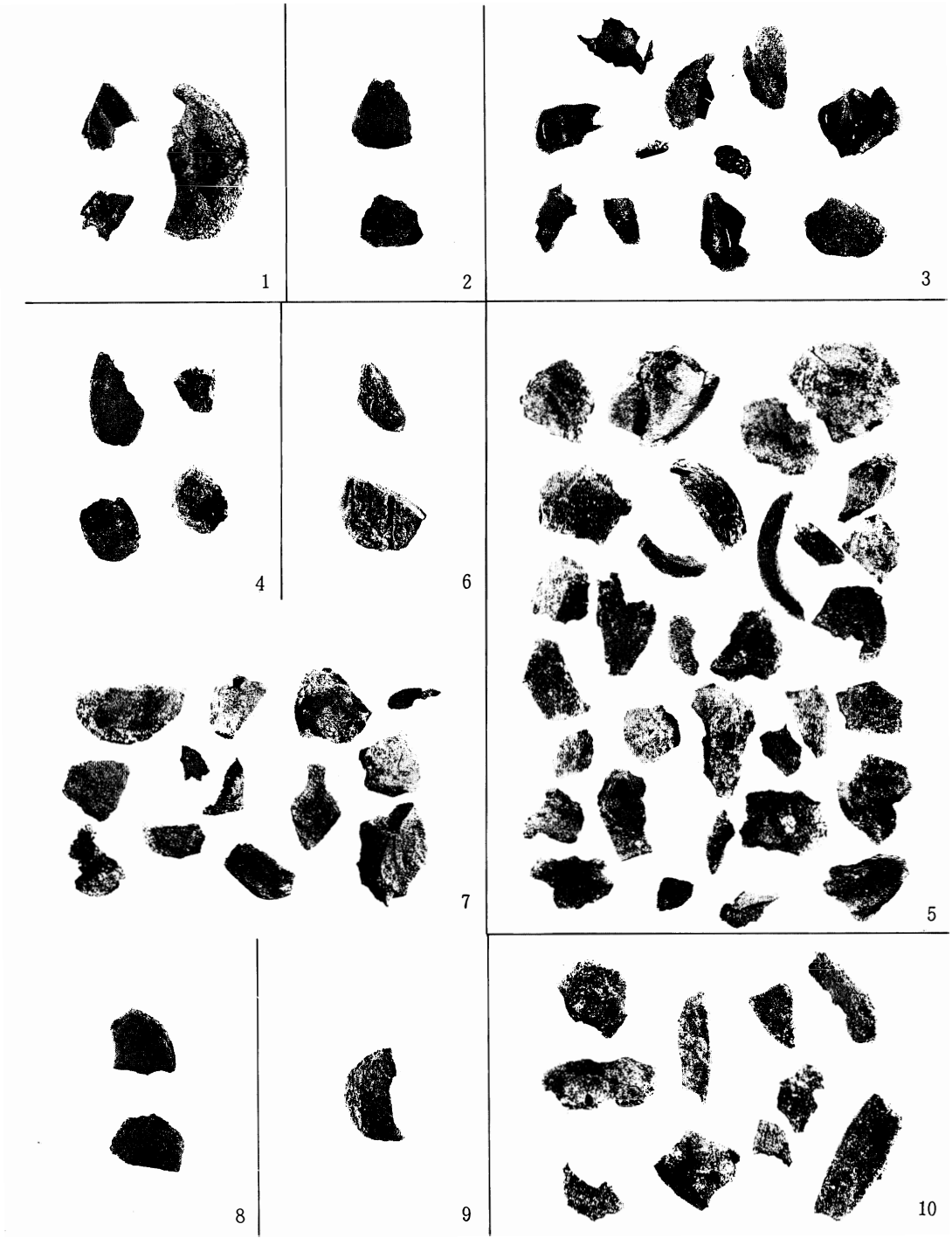


写真１．　植物遺体１

１・５・７・10：オニグルミ（１：第12号住居址、５：第17号住居址、７：第18号住居址、10：第20号住居址炉内）、３：ヒメグルミ（第16号住居址）、４・９：コナラ属（４：第16号住居址、９：第18号住居址）、２・６・８：クリ（２：第12号住居址、６：第17号住居址、８：第18号住居址）

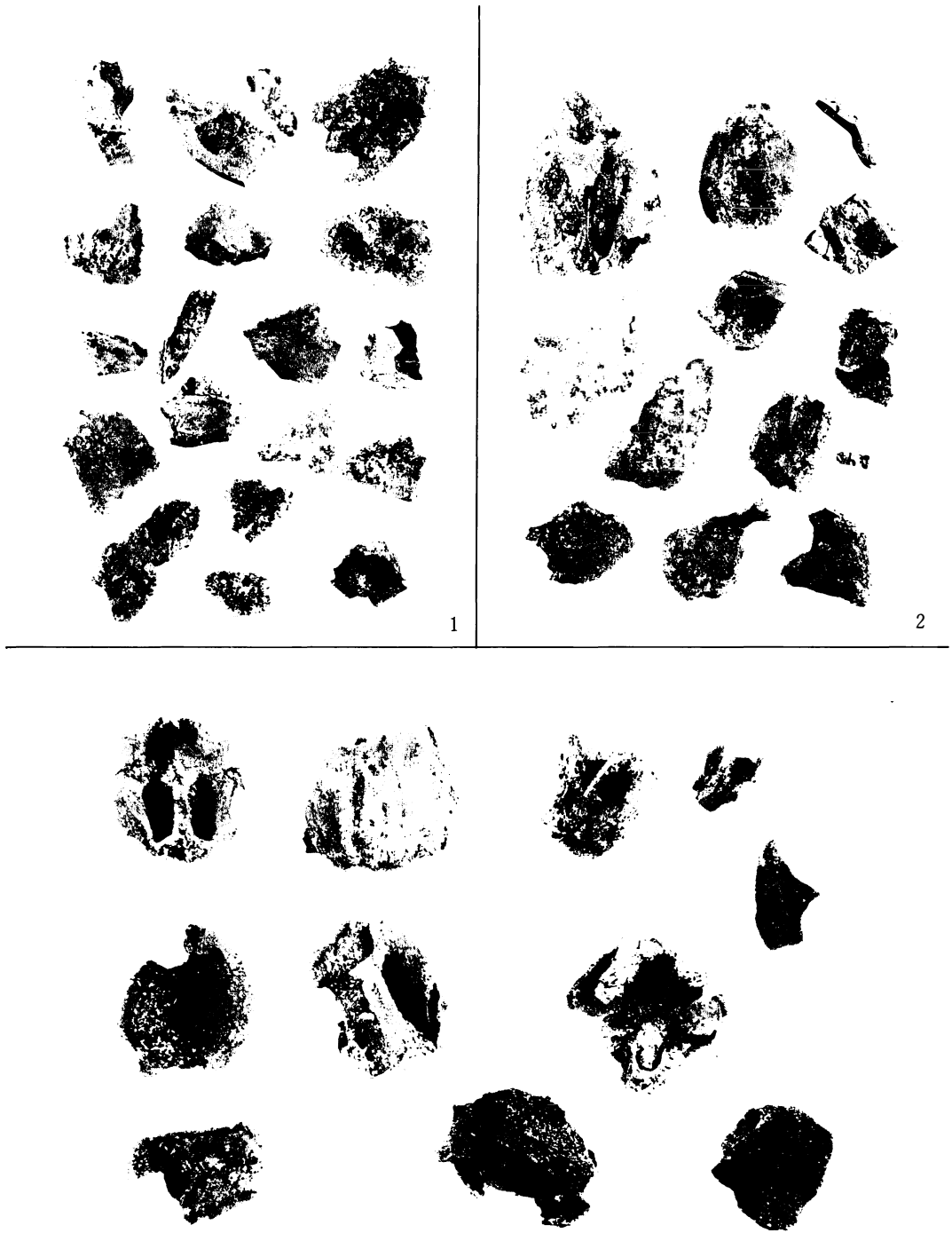
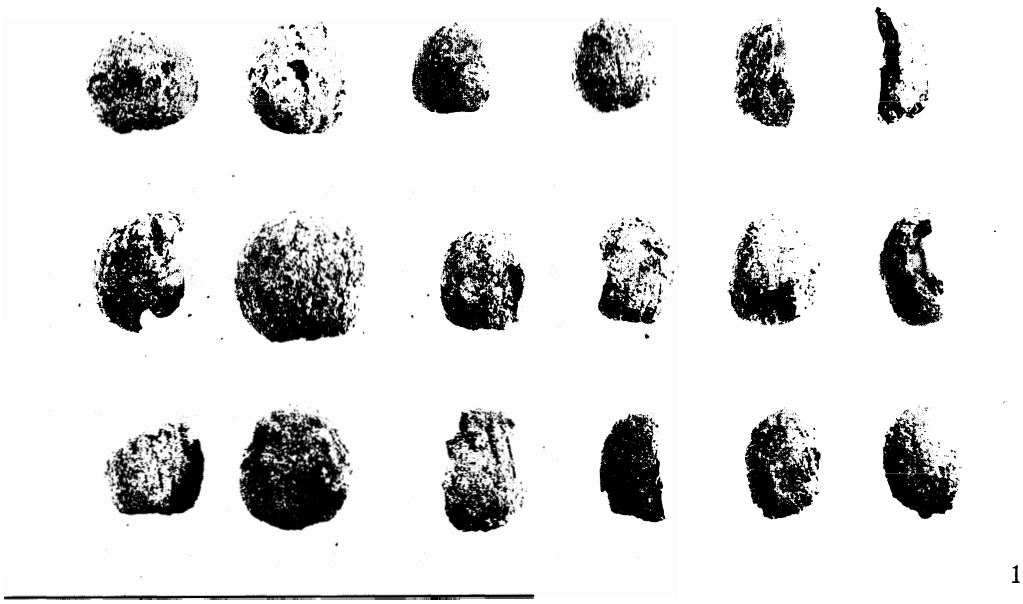
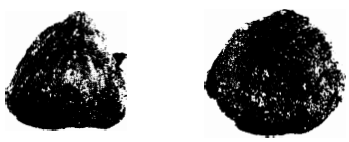


写真２．　植物遺体２

オニグルミ（１：17号住居址、２・３：第42号土坑）



1



2

写真３．　植物遺体３

１：コナラ属（第65号土坑）、２：クリ（第42号土坑）

2．上の平遺跡のテフラ

河西　　学

1．はじめに

曽根丘陵には段丘礫層上に御岳第一軽石Pm－Ⅰ（小林ほか、1967）を基底にして約2ｍ以上の厚さの褐色風化火山灰層が風成堆積している。この風化火山灰層について、同じ中道町の上野原遺跡で鉱物分析をおこなったところ、富士火山起源のテフラの降灰とＡＴ降灰層準とが明かとなった（河西，1987）。今回上の平遺跡Ｋ※13グリッドにおいてPm－Ⅰ以上のテフラ層断面が得られたのでＡＴの検出ばかりでなくPm－Ⅰ以降の富士テフラの降灰を明らかにするため、テフラの重・軽鉱物分析を行った。

2．試料と分析方法

分析試料はＫ※13グリッド西壁から採取したPm－Ⅰおよびその上位の褐色風化火山灰試料29点である。

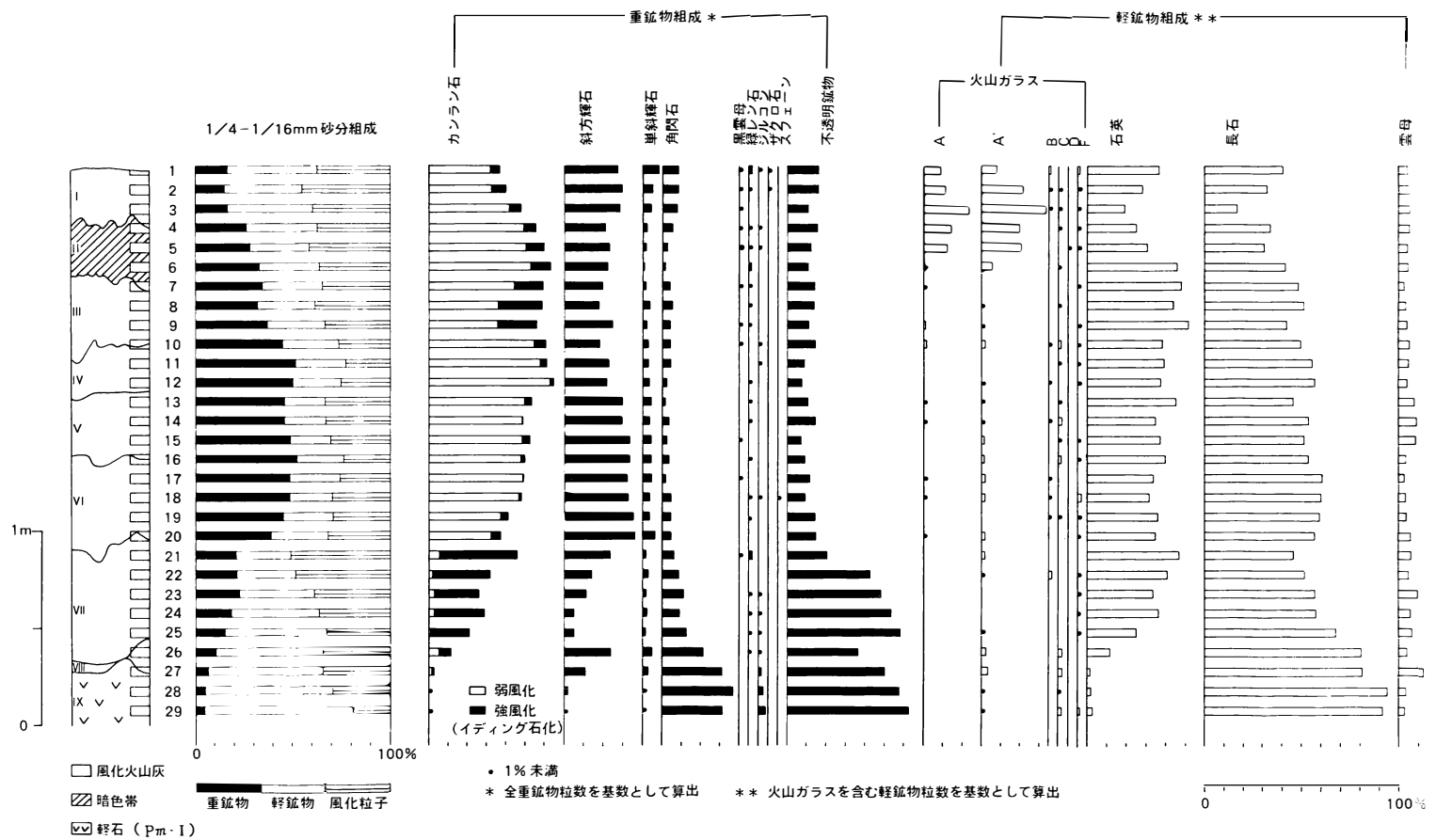
試料は適量をとり、必要に応じで超音波装置で泥分を分散し、0.063㎜の分折ふるい（＃250）で受けながら水洗いし泥分を除去した。分析ふるい（＃60）を用い0.25～0.063㎜粒径砂分を抽出し、秤量後テトラブロモエタン（比重約2.96）を用いて重・軽鉱物を分離し、秤量後プレパラートに封じ、偏光顕微鏡下で検鏡した。　重鉱物組成は重鉱物総数を基数とし、軽鉱物組成は風化粒子等を除いた火山ガラス・石英・長石・雲母の総数を基数にして各鉱物の産出割合を算出し粒数％で表示した。なお雲母類は重液と類似した比重を示すことから重・軽鉱物どちらの区分にも含まれている。火山ガラスの形態分類は遠藤・鈴木（1980）に従った。カンラン石は無色～オリーブ色の部分がなくなり全体に赤褐色を呈するものを強風化（イディングス石化）のカンラン石とし、一般的な褐色の弱風化カンラン石と区別した。

3．分析結果

分析結果は第110図に示す。

1／4～1／16㎜の砂分中の重鉱物量は、重鉱物組成中のカンラン石の割合と相関的な変化を示す。Pm－Ⅰ（Ⅸ層）は角閃石・不透明鉱物が多く、かつジルコンが産出することで特徴づけられる。小林ほか（1967）は、駒ケ根東中学において厚さ約3ｍにおよぶPm－Ⅰの重鉱物組成を示している。それによるとPm－Ⅰ最上部付近で、不透明鉱物が減少し、斜方輝石・単斜輝石が増加する傾向がみられる。本遺跡の分析結果においても同様の傾向がみられる。

№5～1においてバブルウォール型のＡ・Ａ′型火山ガラスが多産する。ガラス屈折率の測定値は、№5で1,498－1,501（モード1,500）、№3で1,497－1,501（モード1,4995）であった。従って形態・屈折率および層位から姶良Tn火山灰（ＡＴ；町田・新井　1976）に同定される。火山灰層の軟質化が本地点の場合Ⅰ・Ⅱ層ばかりでなくⅢ層にまで及んでいることから№4～5のガラスは二次的混入の可能性もあろう。ＡＴの降灰層準はバブルウォール型火山ガラスの最大頻度を示す№3付近を中心としたⅡ層最上部からⅠ層最下部にかけてと考えられる。



第110図　上の平遺跡K※13グリッドテフラ試料 1／4－ 1／16㎜粒砂分鉱物組成

4．考察

(1) 富士テフラの降灰

富士火山のテフラは一般にカンラン石を多く含む玄武岩質テフラで特徴づけられ、安山岩質～流紋岩質の木曽御岳火山あるいは両輝石安山岩の箱根火山のテフラとは区別される。富士火山の活動は下末吉ローム層上部の堆積期までさかのぼるとされ（町田・森山, 1968；町田, 1971）、関東地域において下末吉ローム層上部から上位でカンラン石の出現が従来から報告されている（関東ローム研究グループ, 1965；町田洋ほか, 1968；町田瑞男, 1973）。今回の分析結果は、重鉱物組成においてPm－Ⅰ直上からカンラン石が増加しⅣ～Ⅲ層で高率を保ち、暗色帯から上方に向かってカンラン石が減少するという傾向が顕著である。この傾向は従来の関東地域などからの報告とよく一致している。従って、富士火山が活発化する約8万年以降、富士火山から北北西約30*km*に位置する曽根丘陵にも富士テフラの降灰が連続的に及んでいたと考えられる。

本遺跡の暗色帯Ⅱ層においてカンランラ石が減少しはじめ、その直上付近に火山ガラス濃集層準がある。この関係は南関東の立川ローム層において一般的である（遠藤・鈴木, 1980；千葉・加藤, 1983；東京天文台構内遺跡調査団, 1983）ことから、本遺跡Ⅱ層暗色帯は上野原遺跡Ⅲ層暗色帯と同様立川ローム層第2暗色帯に対比されると考えられる。

(2) カンラン石風化層準

本遺跡Ⅶ層（№25～21）、およびⅢ層（№9～7）付近の2層準において、カンラン石のイディンス石化が進んでいる。特に前者ではカンラン石の大部分がイディングス石化しており、その上位のⅣ層とは風化程度ばかりではなく重・軽鉱物組成においてやや変化がみられる。本遺跡Ⅲ層中のカンラン石風化は、上野原遺跡Ⅳ層のそれに対比される可能性が強い。

風化カンラン石については従来からいくつかの報告がなされている（羽鳥・寿円, 1958；関東ローム研究グループ, 1965；羽鳥, 1971；町田瑞男, 1973；羽鳥ほか, 1983；町田瑞男ほか, 1983）。町田瑞男ほか（1983）は、カンラン石が完全にイディングス石化されているのはPm－Ⅰから東京軽石ＴＰ直下であると述べ、飯能市新町の立川礫層直上の砂質ローム層中において多量のイディングス石を報告している。上杉ほか（1983）は古期富士テフラ累層（OFT）上部のＹ103～113付近においてテフラの風化が激しいことを述べている。

以上のことから本遺跡Ⅶ層はPm－ⅠからＴＰ直下の間の風化層準に、またⅢ層は立川礫層直上付近の風化層準にそれぞれ対比されると考えられる。ＴＰの年代は約4.9万年前とされていることからⅦ層の上限は約5万年前以前と推定される。なお、立川礫層の年代は約3万年前とされている（遠藤ほか, 1983）。

カンラン石の風化層準は礫層直下や水つきローム層中に多く見られるが、本遺跡Ⅲ層のように礫層より少なくとも2*m*以上も上位の場合、地下水の影響は少ないものと考えられる。8～5万年前および3万年前は、基準面の上昇期に相当し、最終寒冷期にあっても比較的温暖な気候と考えられていることから、カンラン石の風化も気候的な要因と関連性をもって形成された可能性が暗示される。

引用文献

千葉達朗・加藤定男「多聞寺前遺跡におけるローム層の鉱物分析」『多聞寺前遺跡Ⅱ』 1983

遠藤邦彦・関本勝久・高野司・鈴木正章 「関東平野の≪沖積層≫」『アーバン・クボタ』 21 pp26－43 1983

遠藤邦彦・鈴木正章「立川・武蔵野ローム層中の火山ガラス濃集層」『考古学と自然科学』13 pp19－30 1980

羽鳥謙三 「標式地における立川ローム層の層位について－野川遺跡を中心にして－」『第四紀研究』10 pp244－250 1971

羽鳥謙三・寿円晋吾 「関東盆地西縁の第四紀地史」 『地質学雑誌』64 pp181－194 1958

羽鳥謙三・千葉達朗・加藤定男「多聞寺前遺跡のローム層と地形」『多聞寺前遺跡Ⅱ』 1983

関東ローム研究グループ 『関東ローム－その起原と性状－』 378pp 1965 築地書館

河西学 「上野原遺跡の火山灰層」『上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡』 1987

小林国男・清水英樹・北沢和男・小林武彦 「御嶽火山第一浮石層 －御嶽火山第一浮石層その1 －」『地質学雑誌』73 pp291－308 1967

町田洋 「南関東のテフロクロノロジー（Ⅰ）－下末吉期以降のテフラの起源および層序と年代について－」『第四紀研究』10 pp 1 －20 1971

町田洋・森山昭雄 「大磯丘陵の tephrochronology とそれにもとづく富士および箱根火山活動史」『地理学評論』41 pp241－257 1968

町田洋・新井房夫 「広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－」『科学』46 pp339－347 1972

町田瑞男 「武蔵野台地北部およびその周辺地域における火山灰層序学的研究」『地質学雑誌』79 pp169－180 1973

町田瑞男・村上雅博・斎藤幸治 「南関東の火山灰層中の変質鉱物“イディングスサイト”について」『第四紀研究』22 pp69－76 1983

東京天文台構内遺跡調査団 『東京天文台構内遺跡』 1983

上杉陽・米沢宏・千葉達朗・宮地直道・森慎一 「テフラからみた関東平野」 『アーバン・クボタ』 21 pp2－17 1983

第Ⅵ章　ま　と　め

1．先土器時代

今回の調査では、D※7、F※11、G※4、H※8、J※6・10・12、K※13、L※14、M※23・26の11グリッドにおいて先土器時代文化層と考えられるⅣ層付近まで掘り下げを行なったが、該期の遺構・遺物は確認されなかった。しかし、第4次・第5次調査でナイフ形石器2点、使用痕のある剥片1点が縄文時代の遺構内から出土している。

本遺跡周辺の曽根丘陵上には、米倉山遺跡、立石遺跡、後呂遺跡、下向山遺跡、横畑遺跡、弥二郎遺跡などの遺跡がこれまでの調査で明らかにされ、次第にその数も増加する傾向にある。これらの遺跡群の中で、石器が剥片と共にブロックとして存在するものは立石遺跡のみで、本遺跡を含めた他の遺跡では1点乃至数点の石器が散発的に発見されるという現象が目立つ。このことが、当時の居住と狩猟地や一次的な居留地点の比率を投影しているとは単純には言えないが、今後遺跡の内容がいくつかに類型化され、構造的に把握される可能性を示唆している。

ところで、第4次調査では先土器時代層の調査と併行して、遺跡を覆う火山灰層の分析を行なった。その結果は「第Ⅴ章　各説」に譲るが、Pm－Ⅰ直上からカンラン石が増加しⅣ層～Ⅲ層で高率を保ち、Ⅱ層からその上層に向かって減少するという傾向から、本遺跡周辺における富士火山のテフラの降灰が結論づけられたことは興味深い事実である。また、鍵層の1つとされるＡＴ層がⅡ層の黒色帯付近に比定されることは、今後の先土器時代の文化層を考える上にも一つの有力な手掛りとなるであろう。曽根丘陵の表面を覆う堆積土の中でもとりわけ人類の歴史とかかわりをもつ最上層部分の研究は未だ進展しているとは言い難く、上記の様な分析を蓄積し、遺跡と堆積土の関係を明確にしていくことが今後の課題といえる。

2．縄文時代

＜集落＞

縄文時代の集落は、縄文時代前期末～中期を通じて遺跡北東隅に営まれている。時期別に分析すると住居址は十三菩提式期3軒、五領ケ台式期6軒、藤内式期8軒、井戸尻式期5軒、曽利式期1軒で、その中心が縄文時代中期の前葉～中葉にあったことが窺われる。

十三菩提式併行期の住居址は、34号住、38号住、41号住の3軒であるが、この内38号住、41号住は埋甕炉と柱穴を除いてほとんどが削平された状態で検出されている。これに対し34号住は非常に良好な状態で確認され、竪穴の掘り込みは約60㎝を測る。この住居の覆土上層では五領ケ台式の土器、下層および床面直上では十三菩提式併行の土器が主体を占めることから、明らかに住居廃絶後に五領ケ台式期の遺物の投棄があったと判断される。34号住は床面に炭化材および焼土が薄く全体を覆うことから、火災住居と推定される。床面での出土遺物が多いことは、不慮の失火が原因であることを裏付けているものと考えられる。

五領ケ台式期の住居址は、12号住、13号住、19号住、22号住、29号住、42号住の6軒である。

縄文時代の時期別遺構件数

時期		住居址（軒）	土坑（基）
前期	十三菩提	3	8
中期	五領ケ台	6	54
	狢沢・新道	0	10
	藤内	8	17
	井戸尻	5	17
	曽利	1	11
合計		23	117（時期不明86）

住居配置は前時期と比べ相対的に南側に多くなる傾向を示す。この6軒の住居址は後述する様に3期に分類され、全てが同時期に存在するものではない。この中で他の住居址とは異なる住居内施設を有する12号住居址について若干記述しておきたい。

12号住は、長軸7m20cm、短軸5m50cmの楕円形を呈する比較的大型の住居址で、ピットどおしの切り合いから何回かの建て替えが想定できることは本文中にふれたとおりである。本住居址の特異性は、住居内の炉が1ケ所ではなく5ケ所認められることにある。この複数の炉は住居中央部から北側に点在するが、改築時あるいは住居の使用時期に「火処」をそのつど変更した結果とは捉え難く、同時に使用された可能性が強い。とすると、一般的な住居とは異なる何らかの役割があったのではないだろうか。複数の炉を同時に使用している例では、東北地方から北陸地方に分布する長方形大型住居址の存在が挙げられる。渡辺誠氏によれば、この様な大型住居址は、堅果類などを乾燥させ長期間保存するための屋根裏貯蔵を行なった建物である（渡辺，1980）とされ、一定の役割が論じられている。本住居址の場合、これらの大型住居址の様に一定間隔に炉が設置され、主軸方向に住居が大型化するものではないが、複数炉の同時使用という意味では同様の役割があったことも十分に考えられる。本県八ケ岳南麓にある天神遺跡では、本遺跡12号住と同じく住居址内に6ケ所の炉をもつ同時期の住居が存在するが、[1] 今後これらの特殊な竪穴が中部山岳地域に普遍的に存在するかどうか検討していきたいと思う。

縄文時代前期末～中期初頭の住居址群の新旧関係は、（旧）34住・38住・41住→19住→12住・13住→22住（新）の順となる。この内、住居の切り合い関係が明確なものは、12住と19住がある。19号住の集合沈線文系を主体とした土器は34号住上層に出土する土器群と類似し、34号住上層と19号住居使用時期はほぼ同時期に限定される。12号住・13号住と22号住との関係については土器型式的な差に依存せざるを得ない。

本県では縄文時代前期末～中期初頭の集落跡が、大泉村天神遺跡、一宮町釈迦堂遺跡、境川村寺平遺跡、中道町上野原遺跡、敷島町金の尾遺跡等で確認されているが、前期末の十三菩提

併行期の住居址検出例は、寺平遺跡１軒、上野原遺跡１軒と極めて発見例が少ない。前期末の馬蹄形乃至環状集落とされる天神遺跡でも、諸磯ｂ式期42軒、同ｃ式期７軒、五領ケ台式期８軒の住居址が発見されているが、十三菩提式併行期に限っては０軒と集落の非連続性を示している。釈迦堂遺跡においても、塚越北Ａ地点で諸磯ｂ式期４軒、五領ケ台式期10軒以上が知られるが、諸磯ｃ式、十三菩提式期の住居を欠く。これに対し、上の平遺跡では、諸磯期の居住は認められないものの、十三菩提式期から集落が営まれ、続く五領ケ台式期に集落規模も一層拡大した様相が遺構数から類推される。遺跡立地や集落の規模と継続性などの点では、非常に狭い尾根上に営まれた寺平遺跡等とは性格を異にした拠点的な集落様相を示すものとして捉えることができよう。

以上、縄文時代については前期末～中期初頭の集落を中心に、その問題点を挙げたが、中期中葉にも安定した集落が営まれていたと考えられる。狢沢式・新道式期の住居址軒数が０軒であることは居住の一次的な断絶あるいは集落規模の縮少を意味するものであろうが、集落の全貌は今回の調査では明らかにし得えない。

＜自然遺物＞

本調査では人為的遺構・遺物の他に花粉、炭化種子、植物遺体などの自然遺物に留意し一定の成果が出されたと考える。ただし、花粉については、遺構内の土壌サンプルを分析したが、酸性の強い土の中ではほとんど破壊され、検出されなかった。炭化種子は、笠原安夫・藤沢浅両氏の報告のとおり、疑問種を含め13種27粒の種子を同定することができた。(2) この内確実に栽培種と言えるものはないが、利用植物のサルナシ、ニワトコ、オヤマボクチ、イヌザンショウや畑雑草のエノキグサ、スベリヒユ、タデ類などが検出された。これらの植物が縄文時代に実際に食用として利用されていたかどうかは、今回の結果から即座に判断することはできないが、この様な資料が蓄積されれば、当時の植生を含めた環境復元が可能となるであろう。遺構内出土の植物遺体は渡辺誠氏の報告では、クリ、クルミ、コナラ属といった堅果類が主体を占める。特に42号土坑においては、坑底部に焼土層が堆積し、その直上にクルミ、クリの炭化層が存在しており、明らかに貯蔵施設と考えられる。本県で出土する土坑は、断面形が円筒形、すり鉢形、フラスコ形、Ｌ字形などに類型化され前二者が大半を占めるが、北関東地方や東北地方に多い袋状土坑はさほど発達しない。したがって、土坑形態からその機能を確定することは困難であるが、発掘時の自然遺物検出で土坑のもつ個々の役割をある程度明らかにできると考える。ともあれ、丘陵地形、酸性土という有機質のものが極めて残りにくい本遺跡において炭化種子や堅果類が出土したことは、今後の丘陵地域の発掘にとっては朗報と言えよう。

註

(1) 発掘時の判断では、３軒の切り合いとされているが、重複関係は明確でなく１軒の楕円形プランを呈する大型の住居址と考えられる。

(2) 笠原安夫・藤沢浅「上の平遺跡から出土した炭化種子の同定」『研究紀要』３、山梨県立

3．弥生時代

＜集落の立地＞

第4次調査で発見された弥生時代後期後半の住居群は、東山から連続した丘陵上でも最も幅が狭い、いわば台地のくびれ部に存在している。この住居址群より東側には南から北へと狭い谷が切り込み、湧水が湧き出して間門川方面へ流れ出している。一方、住居址群西側は、東西方向に扇形の谷が存在する。また、南側には上の平遺跡より若干標高が低い平坦面に宮の上遺跡が展開している。山梨県埋蔵文化財カードによれば、宮の上遺跡にも弥生時代後期後半から古墳時代初頭の遺物が多く、上の平遺跡と同時期の集落又は方形周溝墓の存在が予想され、さらに南へ展開する立石遺跡、熊久保遺跡などと連続した居住と墓域が想定される。それでは、これらの集落の生産基盤となる水田あるいは畑地はどこに存在したのであろうか。

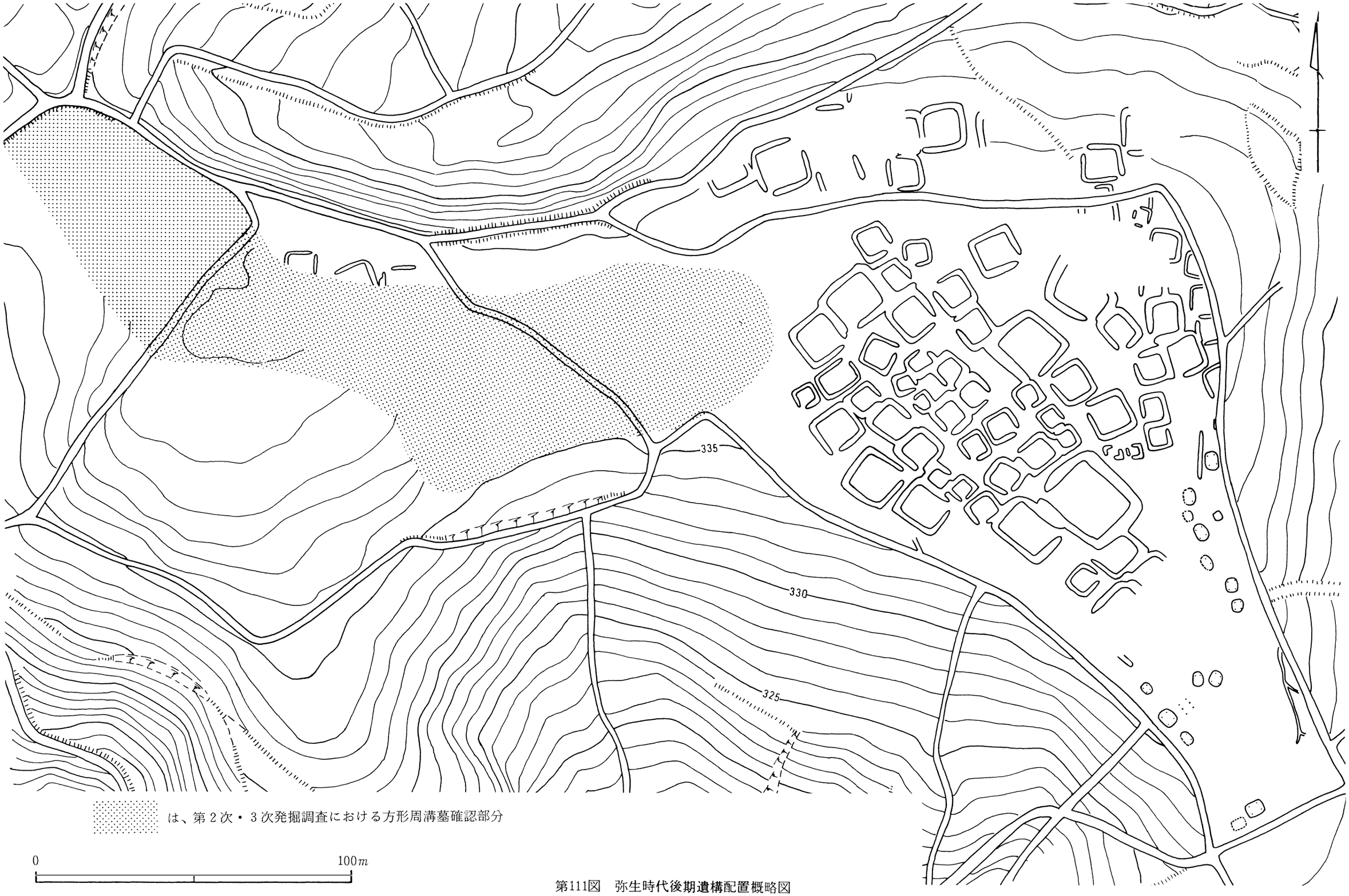
過去の調査においてこの連続する丘陵上には該期の畑作等の生産活動の痕跡は見い出し難く、周辺地域ではその両側の谷部に水田等の存在を考えざるを得ない。上の平遺跡第4次調査とほぼ同時期に行なわれた中道町による試掘調査では、台地東側の谷部に人為的な遺構は検出されず、食糧生産の場はその西側、すなわち竜戸川とそれに流れ込む稲川周辺の谷水田であった可能性が一層強くなったと言える。今回の住居址群が、台地上のくびれ部に位置し、比較的傾斜のゆるやかな地域を通って台地下との往来が可能な部分に立地していることは、生産活動の場に集落立地が規制された結果と捉えることができよう。生産活動の場については、今後谷部の調査を進める中で検討しなければならない。

＜住居址の配置＞

弥生時代後期の住居址は、方形周溝墓群の存在する地域の南側に位置し、15号住・28号住がその北端、1住が南端を占める。しかし、南限は昭和56年の宮の上遺跡調査で数軒の住居址が確認されていることから、更に南へ居住区が展開するものと思われる。第4次調査で発見された17軒の住居址は、標高330mのコンタを境に北と南でやや住居址間の距離が隔たることから、この南北で2つのグループを設定することができる。

北側の住居址群（以下Aグループとする）は、東西約50m、南北90mにわたって展開する。この中には2～3軒の住居址が互いに近接する場所に建てられていることから、更に幾つかの小グループが存在していたのかもしれない。[(1)] また、7号住と1号掘立柱状建物跡は主軸方向をあわせる様に隣合せに存在することから、両者が密接な関係にあったことがが窺える。掘立柱状建物跡を高倉式倉庫とすれば、7住の居住者がその内容物を管理していた可能性もあろう。

県内の同時代の集落である櫛形町六科丘遺跡では、住居址と掘立柱状建物跡の比率が8：1とされ、Ⅰ期に7軒の住居と1棟の掘立柱、Ⅱ期に11軒＋αの住居と1棟の掘立柱、Ⅲ期に10軒＋αの住居と1棟の掘立柱と若干の変化はあるものの各期に掘立柱状建物遺構が存在すること



は、第２次・３次発掘調査における方形周溝墓確認部分

0　　100m

第111図　弥生時代後期遺構配置概略図

が報告されている。本遺構の場合、1号掘立柱状建物跡以外に「倉庫」に比定されるものは確認されておらず13：1の比率となるが、集落全体の調査ではないため明確ではない。いずれにしろ、秋に収穫された食糧は数軒から多くても十数軒の住居単位で管理され、共同体内の規制に従って分配されていたと考えられる。

＜方形周溝墓＞

第4次・5次調査で検出された方形周溝墓は、20基（内13基は過去確認済）で、上の平遺跡全体では124基を数えるまでに至った。墓域全体の展開は、第1次から3次の報告に譲るが、ここでは今回の調査で気づいた2点について記述することにする。

まず1点は、方形周溝墓相互の切り合い関係である。方形周溝墓の築造は、隣接する溝どおしが切り合うことはあっても、相互の墳丘部分にそれが及ぶことは全くない。その点一定の原則に従って造墓が行なわれていたことが理解される。しかし、溝に関しては新しい墓が、ある程度埋没している古い溝を切って掘り返されているものが多数存在する。76号周溝墓と123号周溝墓の切り合いでは、76号墓が123号墓の北溝を掘り、さらに溝の壁を整形し、つき堅めた痕跡が認められている。したがって溝は墓の製作時には封台部に盛る土を供給する掘削溝としてばかりでなく、墓の一部として一定の役割を担っていた様である。しかも、埋没途上の溝内にも供献用と考えられる土器が出土したり、後述する様な埋葬施設を設けている事実は、溝の役割が時間とともに失われていく性格のものでないことを示している。とすれば、方形周溝墓間の溝が切り合う現象は、決して埋没溝の存在を無視した行為ではなく、溝の共有関係によって相互の墓の連結を強調せしめるといった別の意義も想定できるのではないであろうか。

次に、方形周溝墓に追葬例が存在することである。追葬とした埋葬施設は、82号方形周溝墓の南溝から出土した合せ口壺棺で、埋没途上の溝を再度掘り込み、埋納されていた。棺に使用された壺の口縁部が、同じ溝の上層で発見されていることから、2個体の壺及び埋葬された遺体は別々に運ばれ、墓の周辺で納棺されたものと推定される。溝内に追葬する例は、本遺跡ではこの一例のみであるが、本来は封台部の盛土部分に埋葬主体部の他にいくつかの追葬が存在していた可能性もある。

＜集落と方形周溝墓＞

本遺跡には集落と墓域の境界となる溝等の施設は存在しない。しかし、丘陵くびれ部に集中する居住区とその北側にのびる墓域の展開は、やはり意識的に分離されていたことは全体図からも理解できる。

集落の存在時期は、住居址内遺物が極めて少ないため不明なものもあるが、おおよそ弥生時代後期後半代の住吉式期～六科丘式期の2時期に限定される。[(2)] これに対し、方形周溝墓はこの2時期に中心をもちながらも古墳時代初頭段階まで造墓活動が続けられ、両者が同時存在した時期と墓域のみが展開する時期があったと判断される。集落の廃絶と移動が墓域の拡大に伴って行なわれたものか、または別な要因によって集落移動が余儀なくされたのかは現段階では結論し難いが、住居址群の南北に墓域が展開しているにもかかわらず、廃絶後の集落跡に造墓が行なわれなかったことは方形周溝墓造営の最後まで居住区と墓域を分離する意識が人々の間に

作用していたものと考えられる。

以上、第4次・第5次調査から得られた成果と問題点を大まかに列挙したが、紙数の制約で詳細な検討ができないままに残された問題が多く存在している。これらの課題については、後日機会を改めて検討を加えたいと思う。

註

(1) 5号住と6号住、11号住と27号住では住居間の距離が1 m50cm程で、上屋の存在を考慮すると同時存在し得ないものもあり、住居址群が2期に分けられる可能性がある。

(2) 中山誠二 「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古論集Ⅰ』、pp. 205～237. 1986

参考文献

石野博信 「考古学から見た古代日本の住居」『日本古代文化の探究 －家－』 1975.

石野博信 「古代火災住居の課題」『末永先生米寿記念獻呈論文集』 1985.

植松章八・馬飼野行雄・渡井一信 『月の輪遺跡群』 1981 富士宮市教育委員会

笠原安夫・藤沢浅 「上の平遺跡から出土した炭化種子の同定」『研究紀要』3 1987. 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

近藤義郎 「共同体と単位集団」『考古学研究』21 1960. 考古学研究会

小林広和他 『上の平』 1980. 山梨県教育委員会

小林広和他 「上の平遺跡発掘調査」『日本歴史』384号 1980.

小林広和他 「山梨県上の平遺跡」『日本考古学年報』32 1982.

坂上克弘・坂本彰 『歳勝土遺跡』 1975. 横浜市埋蔵文化財調査委員会

佐々木藤雄 『小黒坂南遺跡群』 1986. 境川村教育委員会

清水博 『六科丘遺跡』 1985. 櫛形町教育委員会・六科山遺跡調査団

田代孝・中山誠二 「熊久保遺跡出土の弥生式土器」『丘陵』11 1984. 甲斐丘陵考古学研究会

永瀬福男 「貯蔵穴」『季刊考古学』1 1982

中山誠二 「山梨県の方形周溝墓」『歴史手帖』13－1 1985.

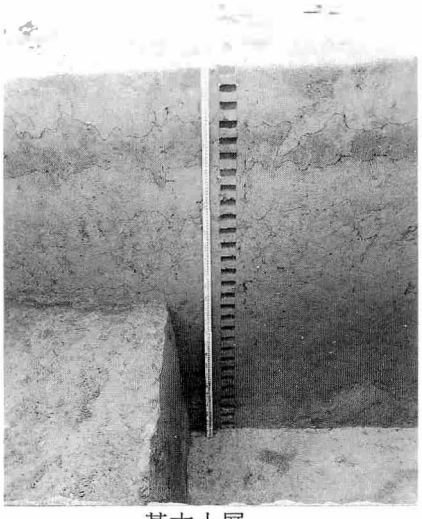
中山誠二 「甲府盆地における古墳出現期の土器様相」『山梨考古学論集』Ⅰ 1986. 山梨県考古学協会

中山誠二 『上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡』 1987. 山梨県教員委員会

渡辺誠 「雪国の縄文家屋」『増補縄文時代の植物食』 1984.

渡辺誠 「トチの実食用化の上限について」『古代学叢論』 1983

図　　版



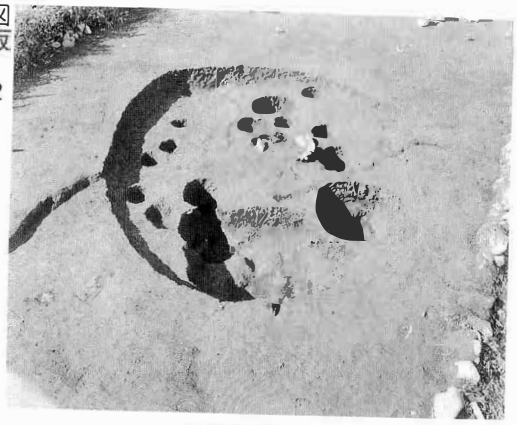
基本土層

作業風景

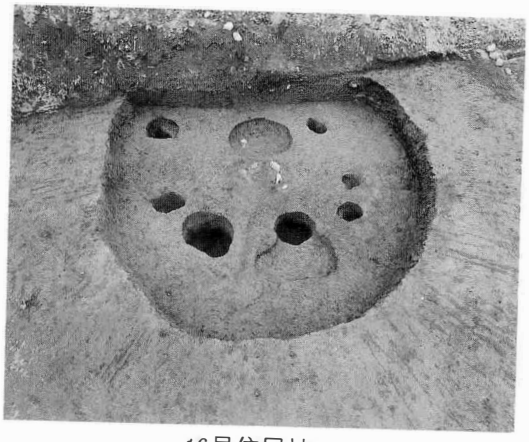
12号住居址及び遺物出土状況

13号住居址及び同址炉址

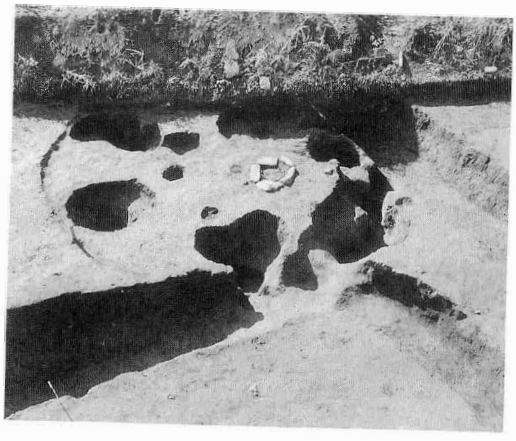
図版2



14号住居址

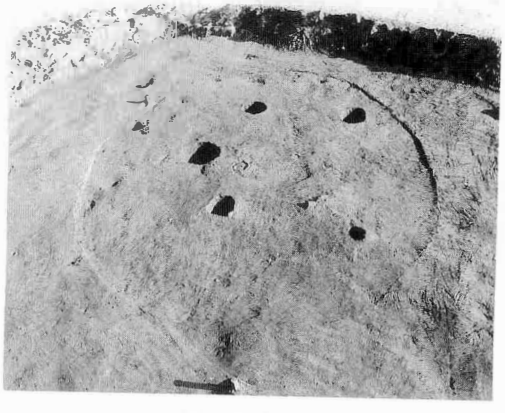


16号住居址

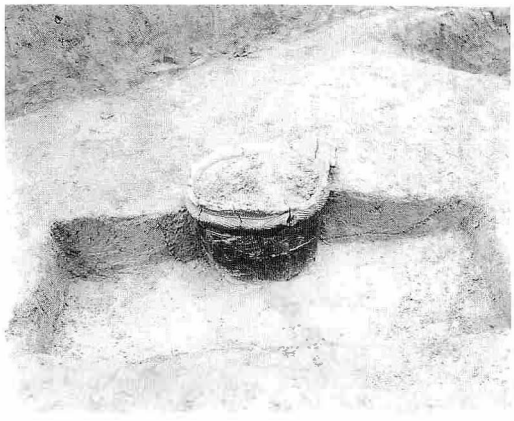


17号住居址及び同址炉址

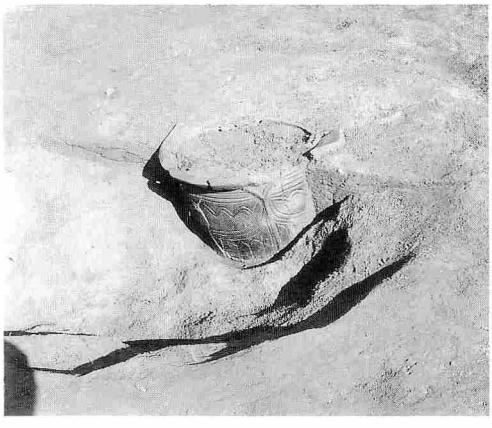
18号住居址



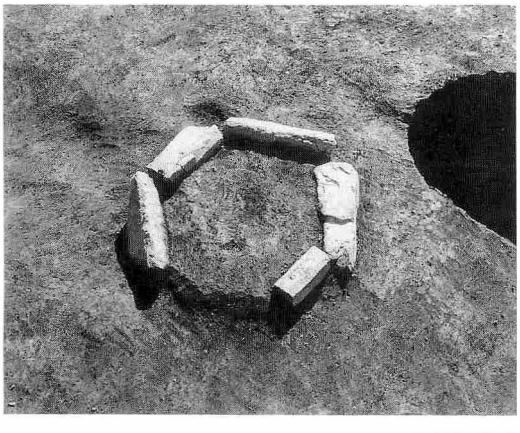
29号住居址



19号住居址及び同址炉址



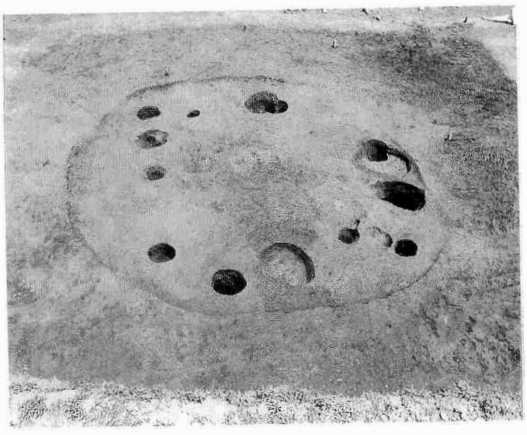
22号住居址及び同址炉址



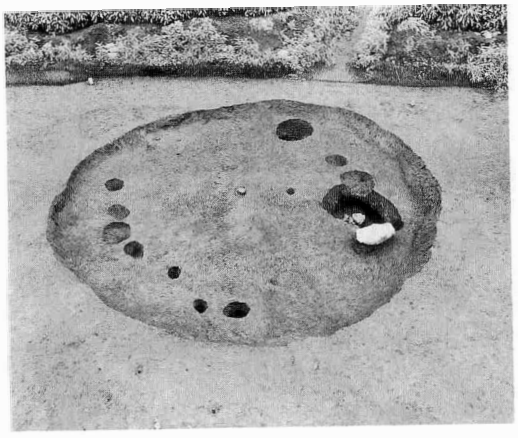
24号住居址及び同址炉址

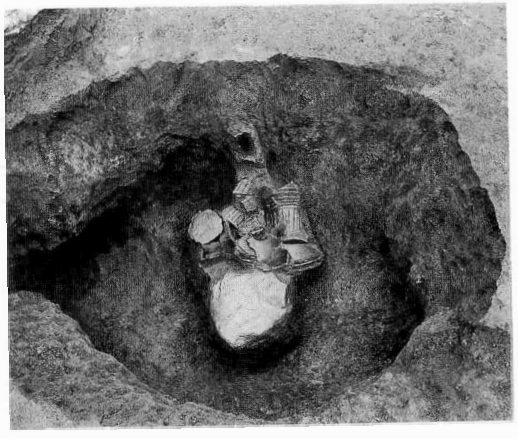
図版4

32号・35号住居址



33号住居址

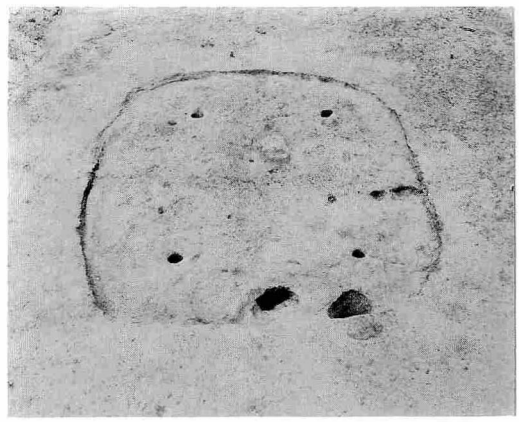




34号住居址及び同址貯蔵穴

36号住居址

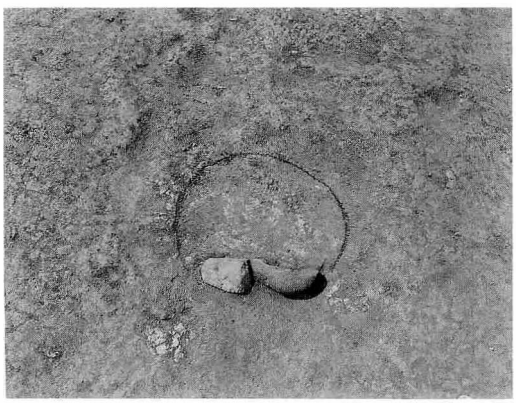
37号住居址



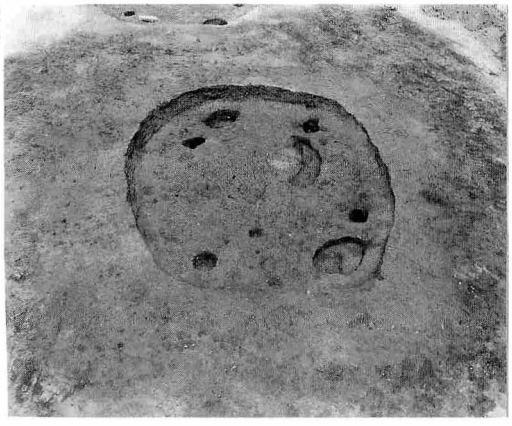
1 号住居址と同址炉址

3 号住居址

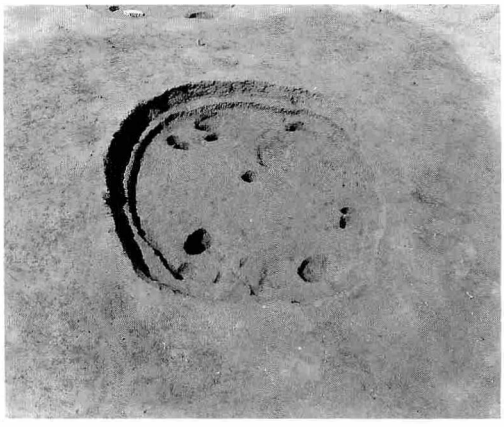
5 号住居址



7 号住居址及び同址炉址



8 号住居址



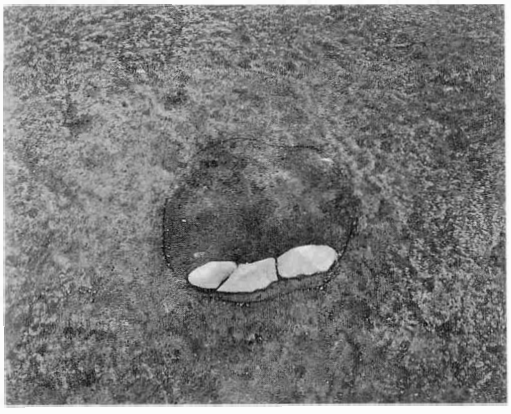
31号住居址

9 号住居址及び遺物出土状況

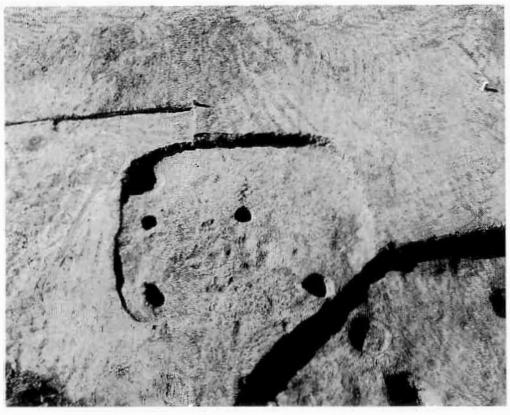
10号住居址

11号住居址

15号住居址及び同址貯蔵穴

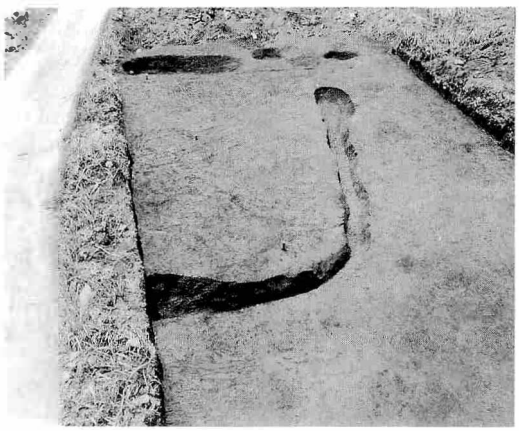


26号住居址及び同址炉址



30号住居址

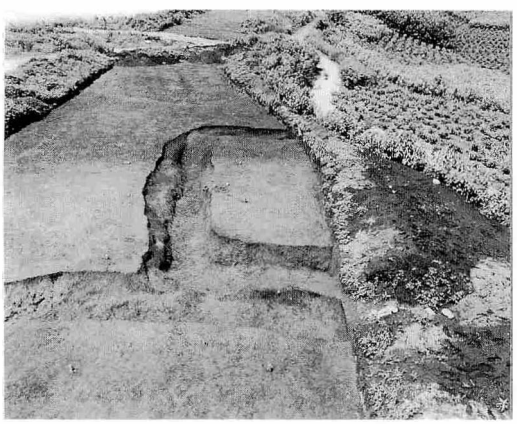
1号掘立柱建物跡



53号方形周溝墓

78号方形周溝墓

81号方形周溝墓及び同址合せ口壺棺出土状況



82号方形周溝墓

103号方形周溝墓

117号方形周溝墓及び同址壺出土状況

118号方形周溝墓及び同址壺出土状況

119号方形周溝墓

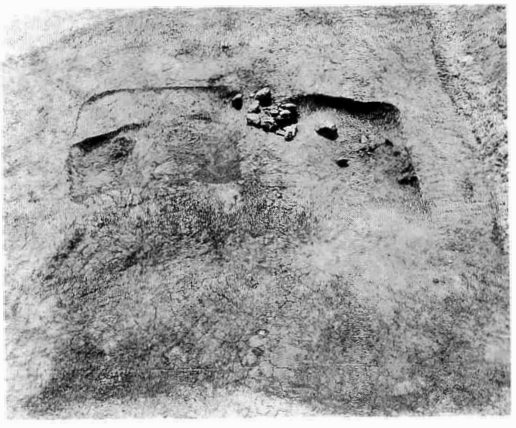
120号方形周溝墓

図版10

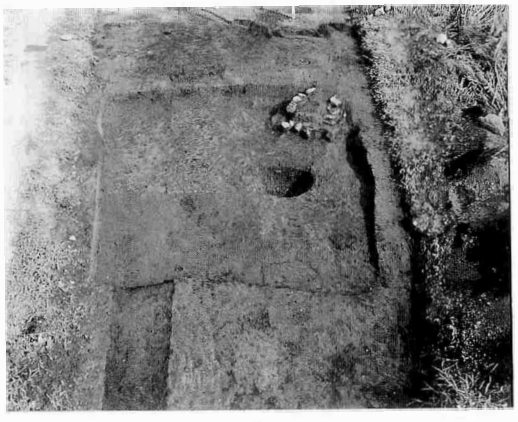
121号方形周溝墓

123号方形周溝墓

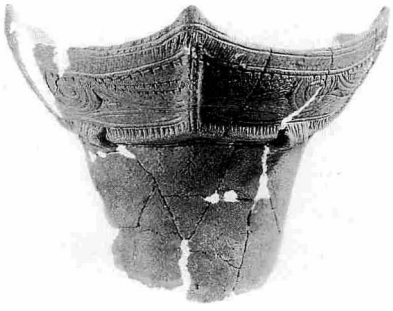
124号方形周溝墓



39号住居址



40号住居址及び同址カマド



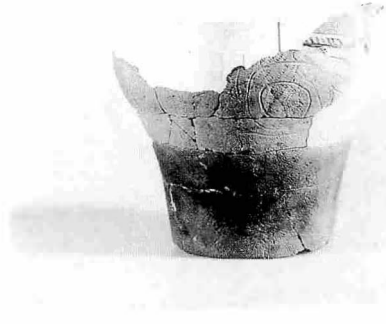
1

2

3

4

5

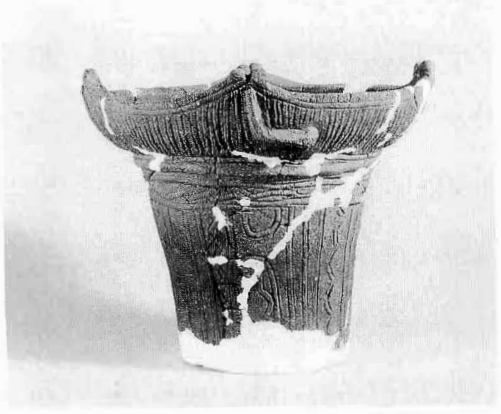


6

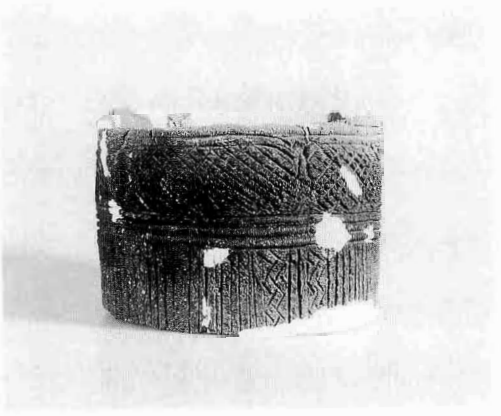
7

8

1～8－12号住居址


1

2


3

4

5

6

7

8

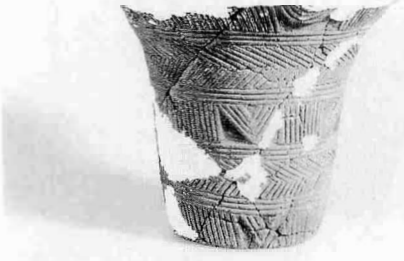
1～3－13号住居址　4・5－14号住居址　6～8－16号住居址

1

2

3

4



5

6

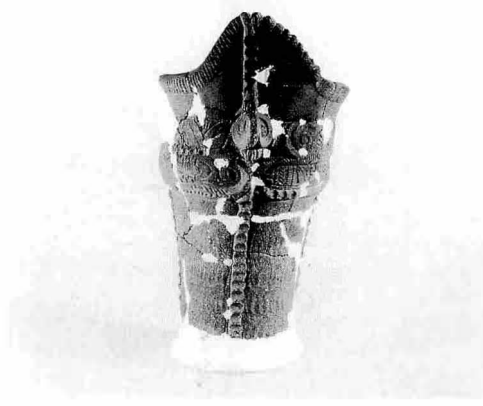
7

8

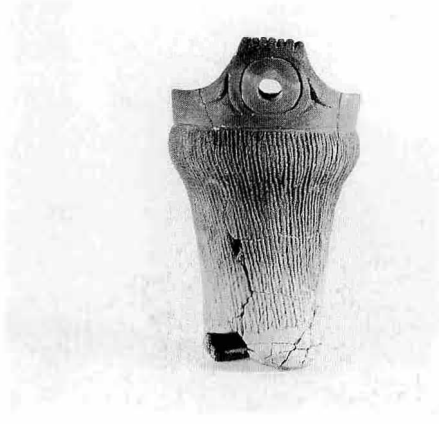
1・2－17号住居址　3　－18号住居址　4～6－19号住居址　7・8－21号住居址

図版14

1



2

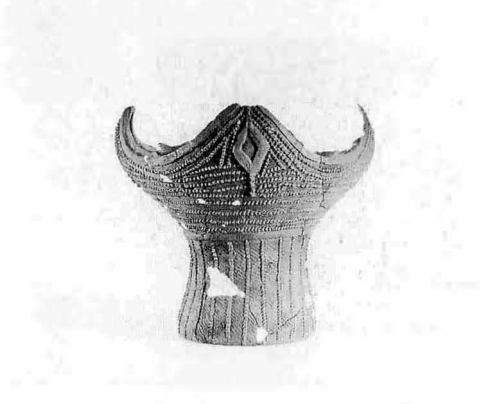


3

4

5

6



7

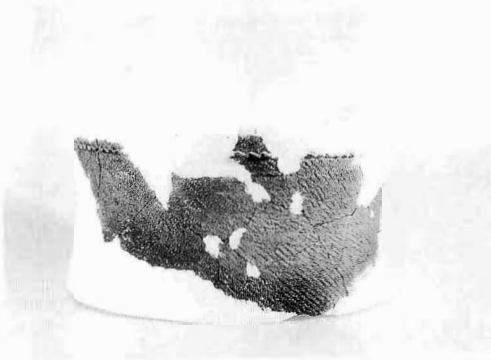
8

1～3 －20号住居址　4 －22号住居址　5 －29号住居址　6～8 －34号住居址

1

2

3



4

5

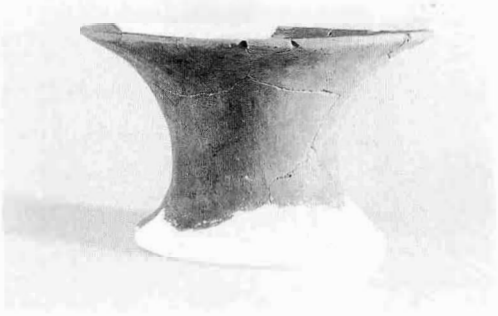
6

7

8

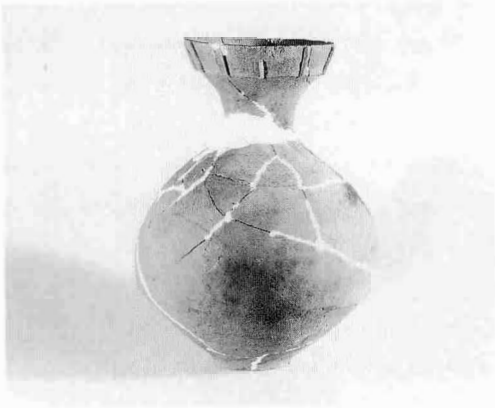
1・2 －34号住居址　3 －38号住居址　4 －41号住居址　5 －11号土坑
6 －49号土坑　7 －65号土坑　8 －73号土坑

図版16

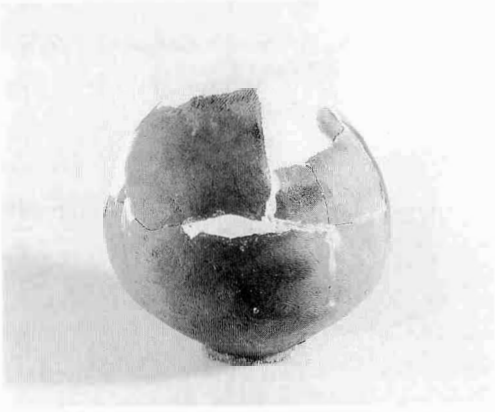


1

2

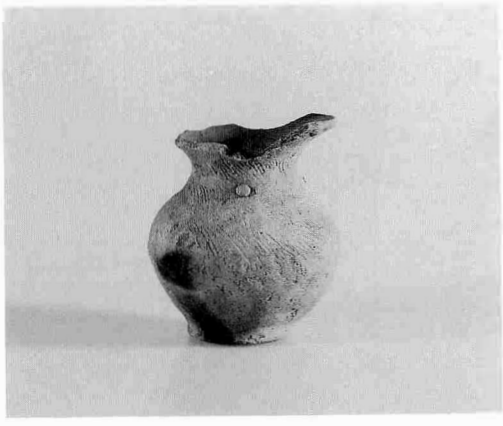


3

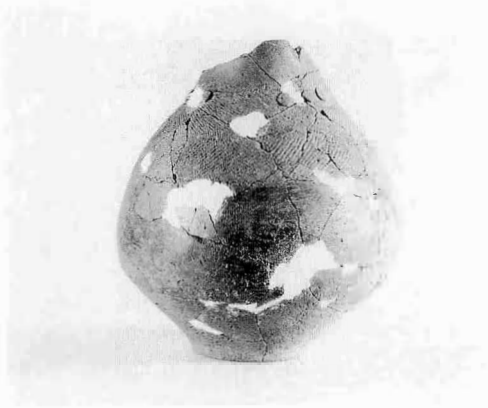


4

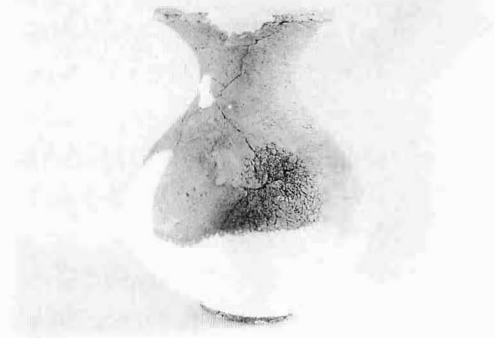
5



6

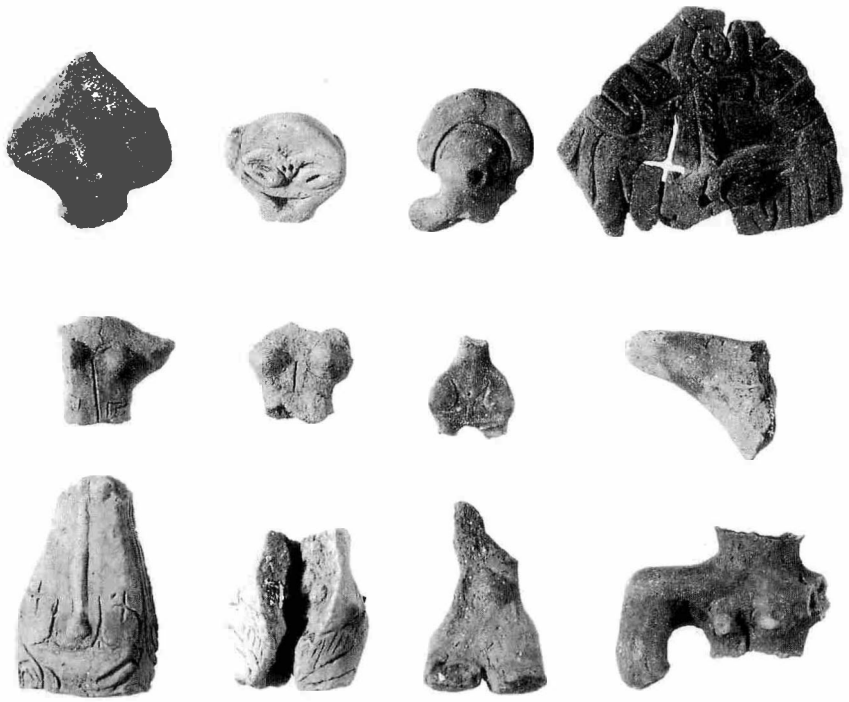


7

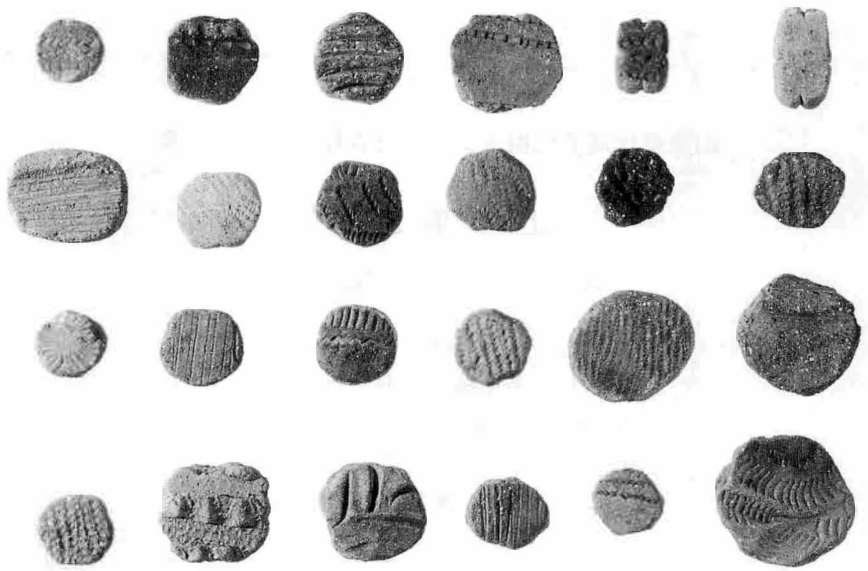


8

1　－ 9号住居址　2　－ 82号周溝墓　3・4－ 81号周溝墓　5　－117号周溝墓
6　－118号周溝墓　7　－119号周溝墓　8　－121号周溝墓



土偶・顔面把手



土製円盤・土錘

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書　第29集

上 の 平 遺 跡

第４次・第５次発掘調査報告書

印刷日　昭和62年３月25日
発行日　昭和62年３月31日
編　集　山梨県埋蔵文化財センター
発行所　山梨県教育委員会
印刷所　（株）峡南堂印刷所